

Blue Archive:Task Force

タクティカルおじさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある事態を契機に学園都市キヴオトスに派遣された、キヴオトス派遣隊。

彼らは先生と同じように外部の者であり、大人だ。そして兵士でもある。

兵士たちは戦う。先生のため、生徒のため、仲間のため。

銃器描写と自己満要素を付け足した小説です。

かなりのオリキャラ／設定があるので閲覧する際は注意。

目次

Blue Archive: Task Force	
1: プロログ／シャルレ奪還作戦(上)	1
2: プロログ／シャルレ奪還作戦(中)	4
3: プロログ／シャルレ奪還作戦(下)	14
4: 対策委員会編: list force recon in Abydos	24
5: 対策委員会編: Battle of the Abydos Desert	38
6: 対策委員会編: Into the Abydos Desert	49
7: 対策委員会編: Change is good	59
8: 閑話: Countermeasure	69
Blue Archive: Task Force The kiss of death	
9: エデン条約編: Turning point	80
10: エデン条約編: Contact	91
11: エデン条約編: So far so good	102
12: エデン条約編: A wolf in sheep's clothing	113
13: エデン条約編: A penny for your thoughts	124
14: エデン条約編: Swim suit party	131
15: エデン条約編: Eat or Combat	141
16: エデン条約編: Easy Does It	153

	17 : エデン条約編 : No Room for Civility	163
	Side Stories Ala	
	19 : 再会と決意	187
	20 : 後悔と夏の海	200
	21 : 殺人罪	210
	Bite The Dust	
	22 : エデン条約編 : Called Home to...	
230	23 : エデン条約編 : Heavy Combat	239
	24 : エデン条約編 : Ash to Ash	254
	25 : エデン条約編 : Down	266
	26 : エデン条約編 : To Be in Danger	274
	27 : エデン条約編 : BRIEFING	285
	28 : エデン条約編 : Tunnel Vision	293
	29 : エデン条約編 : Last Stand	305
	30 : エデン条約編 : Launch A Counteratta	317
ck	31 : エデン条約編 : Bill (ボーン)	329
	32 : エデン条約編 : Love from Above	340
	33 : エデン条約編 : Get Ready	347
	34 : エデン条約編 : Time to Decisive Bat	355
tle	35 : エデン条約編 : Goes On	368

	—	O p e r a t i o n	
		N e p t u n e	
		S p e a r	
		—	
36	: エデン条約編	: A r e y o u	R e a d y ?
			—
37	: エデン条約編	: W a t e r b o a r d i n g	
			—
			380 378

Blue Archive: Task Force 1:プロローグ／シャーレ奪還作戦（上）

—— 学園都市キヴオトス。それは、様々な生徒たちが生活している世界のことだ。彼女たちに必要なのはスマホと、お菓子と銃である。

そんなキヴオトスにおける一般常識によって常日頃から、まるでどこかのクソツタレな中東地域アフガニスタンのように銃撃戦が起きているのが特徴だ。なお、このキヴオトスにおける法執行機関K.S.P.Dは、もちろんそれらのような銃撃戦が発生した際もそれを解決するのが彼女たちの任務である。

しかし—— 最近のキヴオトスはどこかが狂ってしまったかのようなのだ。

この頃、キヴオトスでは犯罪や銃撃戦がかなりの頻度で発生している。ヴァルキューレ警察だけでは遂に対処しきれなくなってしまうたのに、違いない。

どうしてこのような事態に陥ってしまったのかわからないが、このキヴオトスの現地住民曰く『連邦生徒会長の失踪と同時に、サンクトウムタワーの制御権を失ってしまった。』ということらしい。

—— 俺たちは誇りU.S高き海兵隊員M.A.R.I.N.E.Sだ。このキヴオトスのことは一切知らない。知っていることは、どれだけ俺たちが迅速にありとあらゆる地域に派遣され、そこで戦うという事実だけだ。

そして、俺たちはキヴオトスに派遣された。派遣された最も大きな要因と言えることは、9. 11と同じかそれ以上の凄惨なテロ攻撃をロサンゼルスで再び受けたことがあったからだ。俺たちは、市民の多

大な犠牲を出してしまったものの侵略者を撤退させることに成功した。

侵略者たちは撤退する際、正体不明の大型の機械装置から生じた虚空の向こうへと消えていった。もちろん、その装置はそれらのテロ攻撃以降は一時的だが見ることは無かった。

しかし、その装置は三か月後に再びニューヨークに出現した。ただその時は一切、天使の輪に近い形状をしたヘイローを持ち、ガスマスクやら骸骨の刻印が入ったボディーマーを着用する忌まわしき侵略者たちは出てこなかった。ただし、それらの出現と同時に、各報道機関は『リメンバー・ロサンゼルス』という言葉と共に、いつぞの太平洋戦争のごとく世論を戦争へと動かしていった。

そうして国民は一気に戦争ムードへと踊らされ——ある程度の偵察を終えたところでこのキヴオトスにアメリカ軍が派遣されることとなり、海兵隊所属である俺たちは真っ先に派遣された。俺たちに与えられた任務はただ一つ。

『テロ攻撃の首謀者に対し報復を行うこと。』
戦争が再び引き起こされたのだ。

——それから現地の生徒や住民らと紆余曲折を経て、このD・U・と呼ばれるキヴオトスの首都ともいえる地区に大規模な基地を構えることができた。今まではとても順調だった。

しかし現在のキヴオトスは治安の悪化に歯止めがかかることはなく、ますます状況は酷くなるばかりだ。そうして状況が酷くなるの眺めていただけの俺たちは、ある要請と共に戦うこととなった。

連邦生徒会長代行と名乗る治安維持協力要請と添付された文書。

これが意味することは、誰でも理解できた。そして真っ先に派遣されるのも——俺たちだ。

——「こちらレッド1-1、作戦地域にていつでも展開可能。どうぞ。」

コールサイン、'レッド1-1'。栄のある第一武装偵察隊所属、第三小隊の隊長である俺たちのものだ。

俺の名前はアレックス。この名誉と伝統のある海兵隊が好きだ。

2：プロローグ／シャール奪還作戦（中）

<20??年春／9：00>

アレックス 第一武装偵察隊・第三小隊レッド分隊 中尉

D・U・外郭地区・シャールの部室から3km地点

——「こちらレッド1、作戦地域にていつでも展開可能。どうぞ。」

「レッド1、こちらブラボー2。了解、増援の部隊は一時間以内に到着する予定だ。終わり。」

第一武装偵察隊。通称『フォースリコン』と呼ばれる部隊に所属するアレックス中尉は、無線で司令部とのやり取りを行った。

彼らはキヴオトスという地域において、彼らのような屈強な海兵隊が出勤することになったのは、今回のシャール奪還作戦が史上初であった。

今回の作戦の目的はもちろんシャールの奪還。

アレックスたちは彼らの根城であるウトナピシユティム空軍基地から3台のM—ATVに乗り、こうしてシャールから3kmまでの地点まで到達したのだった。

アレックスが率いるレッド分隊は12人の隊員で構成されており、アレックスは分隊長としての役割を担っていた。そんな彼は、M—ATVで構成される車列の第一号車の助手席から外の様子を警戒していたところだった。

流れゆく高層ビルに囲まれながら、タンカラーの塗装が施された車両が道路を走行している様子はとても目立つ。敵味方問わずにだ。

不意に、どこからか飛翔してきた7.62ミリ弾は一号車の運転席

のフロントガラスに命中した。金属音とは違う独特な鈍い音が立つと同時に、フロントガラスに蜘蛛の巣状のひびが入る。

「うおっ!」

そのような心臓の悪い出来事に運転していた隊員が驚きの声を上げる。そして、車内は緊迫の空気に包まれる。

幸いにもM―ATVに採用されている防弾製のフロントガラスは、運転手である彼の命を救ったと言ってもいいだろう。しかし、これは攻撃を受けたことには変わりはない。

「ウエストン、撃ち返せ!!」

アレックスが大声でウエストンに向けて指示を出した。ウエストン伍長はアレックスと同じ車両に同乗しており、ブローニングM2重機関銃の銃座を担当する隊員であった。

M―ATVに取り付けられ装甲化された銃塔――OGPKは、銃声が聞こえた方へと旋回する。

「どこにいるんだ!」

ウエストンが捉えたのは摩天楼と言っても過言ではない高層ビル群とその景色であり、様々な一般車や茂みがある。射撃を加えてきたときに発生する銃口炎が手掛かりであるが、それが見えない。

銃座を担当する彼は射撃を加えようにも、撃つべき場所がないのだ。

「もう隠れられたんじや――」

やや緊張しながらも、彼は安全になったのだらうと思った瞬間から出たこの言葉は打ち砕かれることとなる。彼がそう言い終える前に、遠く的一般車の物陰からいくつもの銃口炎が見えたのだ。

そして、それと同時に至る所から銃弾の雨が防盾に襲い掛かった。

「っ!」

シャーレ周辺にいた不良たちの群衆は、道路上にある遮蔽物などに潜伏していたのだ。まるで格好の獲物を待ち構える野生の獣のように、攻撃を行う機会を伺っていたのだった。

「クソっ!!撃たれている!!撃ち返せ!!」

アレックスが、車両隊と通信を行うことが出来る無線に向かって怒

鳴りつけたところで、M—ATV三台の銃座から赤色の曳光弾が飛び交った。

ブローニングM2の銃声は腹部に響くような重低音であり、彼らに射撃を加える軽い銃声はあっけないほど弱々しく感じた。しかし、その数は多く銃座だけでは対処しきれないのが分かりきっている。

そのうち銃塔に向かって射撃が集中すれば、釘付けになってしまい射撃が困難となる。そうなってしまう前に、アレックスは次の行動に移すことを決めた。

「戦闘下車!!」

その声が聞こえると各分隊員は、車両から下車しそのままM—ATVか道路上にある使えそうな遮蔽物を盾として、反撃を開始した。もちろんアレックスも下車し、戦闘に参加する。

アレックスはM4A1のセレクターをセーフティーからセミオートに切り替えると、次はピカティニーレール上に取り付けられたACOGと呼ばれる光学照準器で、不良たちをレティクルに定めて引き金を絞る。

肩にはそれなりに強い衝撃が叩きつけられるが、正確に狙ったうえで射撃を加えていった。そうやって彼らは射撃を加えていくと、流石に正規軍の練度に劣る彼女たちはある程度被害が出始めたところで後退し始めた。

「う、うわあああっ?!」

「に、逃げろ——!!」

銃撃から逃れた彼女たちは倒れてしまった仲間たちのことを気にも留めずに、走り去っていく。しかし、このまま逃してしまえば再びゲリラ攻撃を受ける可能性は捨てきれない。

彼らはそのようなことを分かっていたので、分隊内の擲弾兵であるコプスはM203のリーフサイトを起こし、安全装置を解除する。

M203は40mm×46のグレネード弾を発射することが可能であり、コプスはいくつかの発煙弾のほか数十発の21世紀生まれの高性能炸薬弾を、腰のベルトに携帯していた。

発射までの準備を整えた彼はリーフサイト越しで彼女たちに狙い

を付けると、M203の引き金を絞った。

” ポンツ ”

ブローニングM2が奏でる重低音や、小銃の銃声よりもとても軽い音が聞こえたのち、逃げようとする彼女たちの足元の近くで爆発が生じた。

「ぐあああつつつ!!!」

ビル群にうるさいほど響く断末魔が聞こえると、爆発に巻き込まれてしまった彼女たちは道路に倒れこんだ。

「ナイスショットだ!!撃ち方やめ!!!」

アレックスはACOG越しに敵がいないことを確認すると、そう伝えてセレクターを右親指でセミオートからセーフティに戻す。これでたった今、一つの戦闘を終えたのだ。

アレックスたちは今まで、キヴオトスとは違う地域に派遣された経験もあり、その際に幾度も戦闘を経験したことがある。しかし、今回の戦闘はあっけなく終わったように感じた。

敵である不良の彼女たちは、先に奇襲を仕掛けてきたのにもかかわらずこちら側が反撃を開始すると、あつという間に瓦解した。そしてあちらの数はたった12人の正規軍よりも、10人ほど多かったというのも加えて。

そのような現状から、彼は増援の部隊が来るよりも先に自分たちが作戦目標を達成してしまうかもしれない——と、考えつつも次の指示を出す。

「分隊はこのまま前進、作戦目標を達成するぞ!!!」

アレックス率いるレッド分隊は、さらにシャールレに向けて歩を進めていく。

D・U・外郭地区・シャーレの部室から2km地点

「そ、側面から敵が展開してきています!!!」

「スズミが閃光弾を投げて、ユウカたちをカバー。その間にちよつと後退しよう!危険すぎる!!」

「はい!!」

シャーレから2kmほど離れた地点では、銃撃戦が発生していた。不良たちと戦っているのは先生が指揮する生徒たちであった。

——「閃光弾投擲します!!!」

透き通るようなストレートの白髪が特徴的であり、『セーフティ』と名付けられたSIG MCXを愛銃とするスズミは閃光弾の安全ピンを抜き、勢いよく指示された方向へと投げた。

すると、心臓に悪くしてしまうほどの轟音と閃光が発生しては近くにいた不良たちを、怯ませる。そうして怯ませた隙に、彼女はフルオートで正確に撃ち抜いていく。

「ありがとう、このまま下がるわ!!」

ユウカはスズミに向けてそう伝えると、ハズミと共に後退していく。その後退する間も、彼女たちは決して背を向けることなく懸命に射撃を加え続ける。

不良たちの数はユウカたちよりも、かなり多いため様々な方向から戦力を展開してくる。いつもの突発的な攻撃を行うことがある不良たちの性分には、合わない戦法であった。

そうして、数の有利を活かしてあらゆる方向から積極的な攻撃を仕掛けてくるため、彼女たちは防戦を強いられる一方でもあった。

「・・・あれは?」

ふとユウカはある、光、が遠くのビル窓からピカピカと輝いているのが見えた。それが狙撃銃の照準器による反射光であるとは彼女は気付かずに。

しばらくその光を見つめていたところ、光が突然消えたのかと思え

ば体に激痛が走った。

「いったくくく!!」

ユウカは悲鳴を上げていると、遅れて発砲音が耳に入る。その一部始終を見ていたハスミは反撃を行う。彼女は愛銃である『インペイルメント』ことM1917エンフィールドを構える。

「ユウカさん、念のために下がってチナツさんに診てもらってください。私になんとかします。」

彼女はそう告げた。

スコープを付けていないが、彼女は再び反射光が出るのを伺う。5秒ほど、待つていたところ遂に反射光を捉えることが出来た。彼女は銃がブレないように息を止める。そして、引き金を絞った。

一発の銃声が響くと、遠くに輝く忌々しいピカピカは消える。それからもう二度と、その反射光は目に映ることは無かった。彼女は狙撃手を倒したのだ。

「… 今回の不良たちは何か違いますね。何かがおかしい…。」
ハスミは僅かに感じた異変からそのように呟いて、ボルトをコツキングする。すると金色の空薬莖が排出されて、アルファルトに落ちると軽快な金属音を奏でる。

「… 敵、正面10。左右側面からどちらも15… 肉薄してきます。」

「… まずいね。」

指揮を執り行う先生はスズミからそのような報告を受けると、顔を曇らせた。ユウカは負傷してしままだチナツに診てもらっている上、スズミとハスミの二人だけでは三方向から展開してくる不良たちに対応することは、困難である。

あまりにも数が多すぎる。一体どうすればいいのか——
と、指揮を執り行う大人は苦悩する。

そんな風に考えつつも、敵は彼女たちに襲い掛かった。もちろん、ハスミやスズミたちはそれに反撃を行っていく。

「そのまま戦線を維持して…。」

先生はそう通信した。

たとえ少数精鋭だとしても、数で押されてしまったら蹂躪されるのみ。戦場で指揮する責任というものを彼は初めて味わった。そんな風に胃が胃酸で溶けてしまいそうなほどの、痛みを味わっているところだった。

左右に展開するそれぞれ15人の不良のうち、左側面の道路上にいる3人ほどの不良の足元で爆発が生じた。もちろん、爆発に巻き込まれた彼女たちはあっけなく地面に倒れこむ。

一体誰なのか――？

そう考える間もなく、次から次へと不良たちは倒れていった。時折、赤色の光弾が彼女たちに向かっていているのも確認できたうえ、射撃音が遠くから聞こえる。

――「こちらアメリカ海兵隊……現地では、キヴォトス派遣隊、所属のアレックス中尉だ。この無線を使っている指揮官は誰だ？すぐに応答せよ。どうぞ。」

不意に無線越しにそのような声が聞こえた。この無線通りであれば、おそらく相手は軍人だろう。一体、なぜ彼らがここにいるのかに戸惑いつつも応答する。

「えーと、こちら連邦捜査部シャーレの先生です……。どうぞ……？」

「あーつまり非戦闘員だな？まあいい……。そちらの左から攻撃しているのは俺たちだ。誤射に注意。」

とりあえず誤射はしないように伝えられた先生は、生徒に向かってそのことを再び告げた。そうしている間に、左側面から展開してきた敵は全滅してしまった。

「こちらは接近中。三台の装甲車がそちらのちょうど左側に見えるのが俺たちだ、注意。」

そう伝えられると段々と、重低音が響き渡る独特な銃声が聞こえてくるのが分かる。

「先生？」

チナツにある程度治療を施してもらったユウカは、一体何が起きているのか理解出来ていないようであった。そのため彼女は、先生に對

し尋ねた。

「どうやら味方みたい…。キヴオトス派遣隊って言われている人たちのことらしいけど…。」

「キヴオトス派遣隊ですか…。例の異世界の軍隊のことですね。」

先生は無線越しに初めて聞いた上で知るはずもない言葉について、首を傾げていたところハスミが答えた。そして彼女は続けて。

「噂ですが…。彼らはそれなりに強いということは私は耳にしております…。なので戦力としては…。」

「十分ということだね。」——…。

<同時刻>

「いいぞー！撃ちまくれ!!!」

車内に取り付けられた無線機で、指示を出しているのは分隊長のアレックスであった。もちろん彼はその指示を出した後には、助手席のドアを開いたうえでさらに、M4A1による射撃をM—ATVが進む方向に合わせて加えていた。

しかし、如何せん敵である不良たちの数は密集具合からかなり多い。そのため、そこに一発の40ミリグレネード弾が襲い掛かる。M203から発射された40ミリ高性能炸薬弾は、硬質なアスファルトに命中すると信管が作動し爆発。

近くにいた不良たちを瞬間的に無力化することに成功する。

「な、なんだあいつらっ?!見たことのない装甲車だぞ?!それに銃弾が…。」

遠くに位置する不良少女から発せられる感嘆と畏怖の言葉は、さらに他の不良たちを恐怖へと支配していった。なぜなら、M—ATVが採用している装甲板を全く貫通することが無かったからだ。

M—ATVよりもかつて前に、採用されていたのは一般的にはハンヴィーという名で知られる装甲車だ。ハンヴィーは確かに優秀であった。

しかし、彼らは戦争を重ねるにつれてIEDやら地雷といった待ち伏せ攻撃に対する脆弱性が露呈してきたことで、その弱点を克服した上さらなる走行強化がなされた車両であるMRAP系統の車両を、採用することに至ったのはここ数十年の話だ。

もし破壊するのであれば、流石に戦車相手とまでは言わないが一般的に言われる対戦車火器が必要だろう。そのため、彼女たちは。

「ク、クルセイダーはッ?！」

「もうすぐだ!!!あれなら...。」

そう、彼女たちはM—ATVという装甲車に対してはあまりにも豆鉄砲すぎる攻撃であり、効果が無いと判断したため、一台の不法に流通したものであるクルセイダーを要請した。

もちろんアレックスたちはその戦車を視界に捉えると、すぐさま対応する。

「戦車二両を北の200メートルに確認。重対戦車兵 HATを寄越せ!!!」

HATこと重対戦車兵はすぐにその声に反応すると、車両の荷台からM3 MAAWSことカールグスタフを抱えて、装甲目標である戦車の貫通に特化したうえで破壊が可能な弾薬筒を取っていく。

基本、カールグスタフの発射は二人掛かりで取り行われる。そのため、一人は発射機であるカールグスタフを構えて照準を定めると、もう一人の隊員が速やかに対戦車榴弾であるHEAT 551を装填する。

そして、装填を終えて射手の背中をボディーマー越しに左手で支え、後ろには誰も居ないということを確認し終えたところで。

「バックブラストエリア、クリア!!!」

と装填手が叫んだところ、すぐさま引き金が絞られた。カールグスタフは後方側に圧倒的な発射煙を発生させると共に、対戦車榴弾はクルセイダーに向かって飛翔して、正面装甲を貫く。

命中した弾頭は高圧のメタルジェットにより内部の装甲やらをズ

タズタに切り裂き、車内に達したところで爆発。爆圧はあっという間に砲塔まで達すると、クルセイダーの砲塔を炎と共にまるごと吹き飛ばした。

クルセイダーは一瞬にしてスクラップとなってしまうたのだった。

「ク、クルセイダーがッ!?!」

クルセイダーの正面装甲は50ミリ程度であるのに対し、発射された対戦車榴弾であるHEAT 551は400mmの装甲貫徹力を有する。そのため、クルセイダーの装甲は紙一枚であることに等しいのであった。

そうして、不良たちの唯一のまともな対抗手段であるクルセイダーは一瞬にして失われてしまったため、これ以上有効打となるような手を打つのは難しい。

なぜなら、残るのはただの歩兵だからだ。

「さあ、掃討の時間と行こうか。」

アレックスはにやりと不敵な笑みを浮かべながら、無線でそう伝えるのであった。

3：プロローグ／シャーレ奪還作戦（下）

<20??年春／9：27>

アレックス 第一武装偵察隊・第三小队レッド分隊 中尉

D・U・外郭地区・シャーレの部室から2km地点

「レッド分隊前進!!」

アレックスがM―ATVの車内に取り付けられた各車両との通信を可能にする無線でそう伝えると、M―ATV三両は横一列に組みさらに各分隊員が車両たちを盾として彼らは前進。進路上の敵はブローニングM2による圧倒的な威力を誇る制圧射撃によって、無残にも不良らの部隊を壊滅させていく。

撃ち漏らしたり、どこかに隠れていた不良は随伴している各分隊員によってあっさりとは各個撃破していったのだった。なお、シャーレに向けて快進撃を続けるレッド分隊の後方には、あまりにも速すぎる彼らの制圧速度にあっけにとられていた。

――M4A1による軽快な射撃音が数多のビル群に向かって響くと、それに応じて不良たちは地面に倒れていく。そして、運よく遮蔽物に隠れた彼女たちには真っ先にブローニングM2の制圧射撃が加わり、それでも倒しきれなかった場合は40ミリグレネード弾が彼女たちを襲う。

不良たちの逃げ場は無いに等しいと言っても過言ではない。その圧倒的優勢は誰が見ても、アレックスたちであると疑いの余地は一切ないほどであった。

そんな風に彼らは快進撃を続けていくと一際目立つ女子高校生を彼らは発見する。

「あれはなんだ？まるで巫女のような…？」

「いや、違うね。あれは化け狐だ。」

レッド分隊員内においてちょうど会話の対象となっていた彼女は、明らかに敵である不良たちの集団に紛れ込んでいた。しかし、こちらには発砲をしてくる様子が無いことから敵ではないだろうという推測に至ろうとしたときだった。

狐の仮面を付けた彼女は、こちら側に狙いを一瞬にして構えると彼女の持つ銃から銃口炎を明らかに捉えた。

——「っ!?被弾した!!」

真っ先に声を荒げた隊員はブローニングM2の銃座を担当していたウエストン伍長であった。彼は、そのように叫ぶと急いで射線が通らない車内に身を隠す。

被弾した箇所は頭部であった。彼は強烈な痛みを感じていたため、ヘルメットを外して被弾した状況を知ろうとする。そして硬く結ばれた顎紐を解くと、コンバットグローブ越しであるがどこから痛みが伴っているのかを探る。

もちろん車内にいた他の隊員も被弾箇所を探すが見つからなかった。そこで彼は悟ったからか、呟いた。

「嘘だろ…？」

ヘルメットをまじまじと観察し、どこに被弾したのかを探す。そうすると、彼自身の身体にあるかもしれない被弾箇所を探る時間よりは短く見つけることができた。

7.7ミリ弾という現代で言うところの大口徑弾を跳弾させたACHヘルメットには窪みと、弾痕がくつきりと残っていたのだった。ウエストンは目にしっかりとそれらの光景を焼き付けると、ヘルメットを再び被ってこう呟いた。

「ヤバかった。」

キヴォトスという初めての異世界で受けた攻撃に対し、彼は固唾を飲み込むのであった。

<同時刻>

「さすが厄災の狐!!! 大人を1人やっつけてしまった!!!」

「ふふっ。」

数多もの不良生徒に囲まれながら、仮面越しに笑みを浮かべたのは彼女がいた。彼女の名はワカモ。七囚人などと呼ばれたうちの1人であり、数日ほど前に暗くて狭い豚箱に等しい矯正局から脱走したのである。

そして流れに身を任せてシャーレ周辺で不良たちと意気投合をし、破壊活動などに加わっていたのだった。そんな彼女は先ほど数百メートルも離れた上で防楯に身を守られ、狙いをつけにくいであろう重機関銃手の頭部を撃ち抜いたばかりだった。

彼女自身、ヘイロー持っていないあの射手を殺してしまったのかも知れないという恐怖や焦燥感を抱いたのであったが、黄色い声援を送る不良たちによってあっさりと忘れてしまった。

「姐さん、次は誰を狙います?」

「いや、ここは一気に車両ごと破壊しようぜ!!」

「あははっ、それはいくらなんでも災厄の狐でも無理だっば〜。」
ワカモを取り囲む彼女たちは、虎の威を借る狐が如し調子に乗っていた。なお皮肉なことに、虎でもなく狐の威を借りているのである。

「そうだ!! 貫い物のクルセイダーを全部出そう。私はクルセイダーの砲声を聞いたことが無いのだよね。」

「いいね、そうしよう。」

ワカモは彼女たちの会話に加わることはなく、進軍を停止したレット分隊の様子を観察していた。大人たちは明らかに重武装であり、ボディーアーマーにヘルメットも身に付けているのがわかった。

「どなた様なのでしょうか...? 変な大人たちですこと。」

射撃を加えたあの大人たちの装甲車は数百メートルも先で停止しているだけではなく、銃声すら聞こえなかった。たった1人の大人が戦死又は負傷したというだけで、彼らは怖気付いてしまったのかだろ

うか。

「……あの狐部隊どころか、そこら辺の不良よりも脆弱ですわ。」
勝ち誇ったかのような表情を仮面越しでそう述べた彼女の近くに、突如として白色の煙幕が発生した。

「っ!? 一体何をしようとする?」

「なんだなんだ?!?!」

「敵の攻撃!?!」

不良達も同じように驚いているが、何発もの発煙弾が地面に命中し彼女の視界を遮っていく。濃密な白煙は彼女たちが目に捉えることが可能な周囲の視界をあつという間に奪う。

そして、何処に誰がいるのかすら把握できない状況の中、ワカモの彼女自身の本能が何かが迫ってきていると訴えていた。

「お手並を拝見させていただきましょう。」

彼女は凜々しくそう告げると、咄嗟に身体を宙に浮かせる。すると、彼女が先ほど立っていた場所にて爆発が生じた。もちろん、彼女の近くにいた不良たちはその爆発を避けることができず、巻き込まれてしまう。

それだけで攻撃は終わらなかった。次は赤色の曳光弾が彼女の身体を掠めた。赤色の曳光弾はかなり多くの軌道を描いており、あの大人たちの攻撃であると察することができた。

しかし、ある問題があった。

焚かれた煙幕の密度はかなり濃いだけではなく、範囲も広がったのだ。そのため、方向感覚を掴むことが難しいためどこから撃たれているのかを判別することは、流石に彼女でも不可能なことだった。

また唯一の手がかりは赤色の曳光弾であるがそれらの弾を回避することに集中をしているため、射撃を加えているあの大人たちがいるであろう方向の特定に更なる困難さを伴った。

「煩わしいことですわね。」

彼女は不満そうにそう呟きながら、銃弾を回避し続ける。そうすると、またもや爆発音が近くで聞こえた。しかし、被弾はしていないし寧ろ周囲の視界を奪っている白煙が軽減された。

そして彼女の目でも白煙越しに、向こう側を視認できるほどの視界を確保できた時だった。彼女はあの大人たちの姿を何人も捉えた。それだけではなく、大声が向こうから聞こえた。

「出て来い、災厄の狐!!!」

——再び、爆発が近くで生じるとちょうど、爆圧によって白煙が晴れたのであった。

<同時刻>

「出て来い、災厄の狐!!!」

怒号に等しい大声が、ビル群に反響するがもちろんそれを放った本人はアレックスであった。アレックス自身は、矯正局から脱走した生徒として作戦開始前に上官を通して知らされていた。

もちろん、彼女がそこら辺の不良とは全く異なる戦闘能力も知っていた故に、反撃をされた場合に部隊がかなりの危険に晒されると判断をしたために彼女の視界をM203の発煙弾で妨害した上で、攻撃したのだった。

「確認したぞ。間違いないな... 擲弾を撃て!!」

「了解。」

白煙が爆圧によって晴れたとき、アレックスはワカモのことを視認するとただちにコプスに向けてM203を発射するように命令を下す。命令を受けた擲弾兵のコプスはM203のリーフサイト越しに狙いを付けると、引き金を絞る。

,, ポンツ,,

「... 効果なし。」

「いや、あれは当たっていないぞ!」

ワカモの身体能力は素晴らしく、40ミリグレネード弾の炸裂範囲から一瞬にして逃れられてしまう。そこにブローニングM2、M27 IARによる制圧射撃が再び加わる。しかしながら、まったくもつ

て命中する様子は無かった。それどころか、彼女はこちらに正確に反撃を加えてきた。

彼女の銃口からオレンジ色の炎が一瞬見えると、M―ATVの防弾版に命中して金属音が擦れた音が聞こえる。アレックスは咄嗟の判断で、M―ATVの陰から顔を引つ込めたので被弾しなかったが本当に致命的な瞬間であった。

「リロードする。」

同じくM―ATVの裏陰に隠れているコプスはM203のリロードを行う。銃身をスライドさせると、空薬莖が自重によって排莖される。そして、ベルトから40ミリ高性能炸裂弾を取り出すと銃身に装填。そこからさらに、銃身を後進させると遂にリロードが完了する。

「あまり芳しくないな。」

アレックスは不意にそう呟いた。なぜなら、たった一人の女子高生相手に彼らは脅威に晒されているのだからだ。ワカモは七囚人の一人だとは聞いているが、たった一人でこのような脅威となるともし全員集まったらきつと更に酷い状況になるのだろうか。彼は確信した。

「アレックス、聞こえる？ 私たちの後ろから戦車が何

台も――」

先生の声が、彼の無線から漏れ出る。先生たちはアレックスたちよりもさらに後方に位置しているが、どうやら裏を取られたようだ。しかも、裏を取ってきたのは戦車。彼らには有効な対戦車火器であるカールグスタフがあるため対抗することが可能だが、先生らはそれらを持っていないため戦車はかなりの脅威である。

「先生、どうにか持ち堪えてくれ。こっちもかなりキツイんだ。」

「……わかった。」

「あれはクルセイダー!？」

「…… トリニティで採用しているのと同じ型!!」

ユウカとハスミは声を荒げる。さっきアレックスたちがクルセイ

ダーを破壊したため、もう既に不良たちの持つであろう戦力分を失ったかと思われた。しかしながら、彼女たちの目の前に現れたのは紛れもなくクルセイダーである。

クルセイダーの持つ装甲は40ミリ程度であり、部分的には50ミリの厚い箇所もある。これらは大抵の小銃を防ぐため、カールグスタフやRPG-7といった対戦車火器が必要である。なお、ユウカたちが所持している銃器は勿論ながらクルセイダーの装甲を貫通するとは到底不可能である。

ゆえに、彼女たちにとつてもクルセイダーは脅威であることには変わらない。

「閃光弾で目眩し……出来そうにもないですね。」

スズミは閃光弾の安全ピンを握り締めながら、そう呟いたときだった。彼女たちの真正面に位置する何両ものクルセイダーたちが、砲撃を加えてきた。

「吹っ飛ばせ——!!」

クルセイダー隊を指揮する不良はまるで害虫を駆除するかのような勢いで、砲撃がどんどん加えられる。いくつかの砲弾は、彼女たちの近くに着弾して破片を撒き散らし、彼女たちに危害を加える。

「どうにか出来ないの!?!」

砲撃音と着弾音がうるさく聞こえる中、ユウカはいつそう声を荒げる。

「後退するしかないですね。」

チナツはそう呟いた。しかし、後退してもワカモがいる。どのみちこのままだと、不良たちの包囲網から抜け出すことは不可能に等しいだろう。

「いいぞ!!このまま包囲して殲滅する——」

クルセイダー隊を指揮する不良は、俗に言う『勝ち確』を確信した。

——そんな不良らへのとどめは、空からやってきた。

鋼鉄の羽音が聞こえたと思いきや、いきなり一両のクルセイダーが爆発した。爆発したクルセイダーは砲塔が吹っ飛んでおり、明らかに

破壊されたと誰もが一目でわかる姿だった。

一両のクルセイダーを葬ったのはアレックスが無線で要請した、戦闘ヘリAH^ア64E^{バツ}によるAGM^{ヘル}114^{ファイヤ}だった。対空手段を持たないクルセイダーは一方的に空からの正確無比な遠距離攻撃によつて次々と破壊された。

敵戦車部隊を破壊したアパッチは次の攻撃目標を地上で包囲網を敷いている不良らの地上部隊に定めたのだった——……

〈20??年春（推定）／10：46〉

コールサイン，“ヴァイパー2—1”，・AH—64E
シャーレ周辺・上空

AH—64Eのコックピットはタンデム方式に配置されており、パイロットが広く視認できるようになっている。パイロットが友軍に距離を詰めてくる不良らを発見すると彼らの指揮官に無線を繋いだ。

「ブラボー2、こちらヴァイパー2—1。シャーレ周辺にいた敵戦車を全て破壊し、現在上空にて待機中。どうぞ。」

「ヴァイパー2—1、こちらブラボー2。下では大規模な敵歩兵部隊によつて友軍が釘付けにされているようだ。敵の包囲網から友軍を救出せよ、建造物に危害を加えない限りWeapon^{兵装}fre^{自中使}eだ。終わり。」

「ブラボー2、こちらヴァイパー2—1。これより交戦を開始する。」

パイロットが無線でやり取りを終えると次は、アレックスに無線を繋いだ。

「レッド1—1、こちらヴァイパー2—1。待たせて悪かったな兄弟、^{ブラザー}航空支援を行う。」

「ヴァイパー2—1、こちらレッド1—1。またお前の声が聞こえて嬉しいよ。」

アレックスとのやり取りをパイロットは終えるとヘリは急降下した。

「ビルにぶつけるなよ。せつかくの遊覧飛行が台無しになっちゃう。」

とやる気に満ち溢れたガンナーは軽口を叩く。実際、シャーレ周辺は高い建造物が多く飛行をするのは困難である。しかしパイロットは難なく飛行し、ホバリングに移行する。

そして機首下ターレットに装着されているM230は独特な音を発しながら不良らに襲い掛かった。M230が発射する30mm弾は戦車の装甲を貫通するほどの能力はないものの、対人に関しての威力はとてつもないくらい高いのだ。

30mm弾の雨が集団で行動している不良らを薙ぎ倒す。たったの1掃射だったが着弾したところに立っているものは誰一人もいなく、横に倒れているのがガンカメラ越しに確認できた。

運良く、一回目の掃射の範囲に入っていなかった不良たちは突然目の前に現れたアパッチに恐怖心を抱き一気に逃げ出した。

しかしガンナーはすぐに逃げようとする不良らを照準に捉え、ゲーム感覚で引き金を絞る。

M230の威力は凄まじく、たとえばほんの少しガンカメラの照準から外れたとしても地面に着弾した弾の破片が彼女らに襲い掛かかる。

それでも、複数回に渡る射撃でも数が多いためM230ですべての不良を処理するのは時間がかかると判断したパイロットはロケット弾をしこたま集団の中央にぶちまけた。

高性能爆薬を搭載するロケット弾は、今の戦場において最も比較にならないほどの威力を発揮し集団単位で不良らを壊滅していく。

アパッチがぶちまけたロケット弾の一斉射はかなり効果的であったように、一気に不良の数は減りつつあった。

そんなアパッチの援護を受けた友軍であるユウカたちはシャーレを奪還しようと動き始めるのだった。

<同時刻>

シャーレ周辺

「……流石にあれは勝てそうにありませんね。ではここで暇させさせていただきますわ。」

近接航空支援に駆けつけたアパッチの殲滅力を見た彼女は、そそくさに逃げ出した。もちろん、不良たちの一部は逃げようとするが遅かった。なぜなら、増援の地上部隊も到着していたからだ。

不良らを捉えた増援隊の先頭に位置するLAV-25は、25ミリ砲弾を発射し真つ先に殲滅する。そうすると、さらに後方から多数の海兵隊員と装甲車たちが進軍する。アフガニスタンやイラクで見たことのある光景だった。ただ、特殊作戦以外で陸軍のアパッチが参加しているというのが相違点であったが。

「アレックス、聞こえる?」

「先生どうした?」

無線で呼び掛けられた彼は続けて。

「既に不良たちは壊走中だ。早く来い、シャーレを奪還するために来たんだろ?」

「そうだけど……うん、ありがとう。」

「誇り高き海兵隊員だからな。」

アレックスは自身の所属が海兵隊であるということ強調するのであった。

4 : 対策委員会編 : list force recon
in Abydos

<20??年春>

アレックス 第一武装偵察分隊・中尉

キヴォトス・D・U・ / ウトナピシユティム空軍基地

——アレックス中尉は第一武装偵察分隊の隊長である。

彼が指揮する部隊は彼自身を含めて12人の隊員が所属している。

以前、彼は連邦生徒会による治安維持協力要請を受けシャーレ奪還作戦に従軍した兵士のうちの一人であり、当時の分隊長を務めていたことがあった。

そして現在、アレックスたちがいるのはキヴォトスのD・U・と呼ばれる地区に所在するウトナピシユティム空軍基地だ。

この基地は今のところキヴォトス派遣隊の最大の軍事基地であり、ほとんどの部隊や兵器が揃っている。

それに加えて、この基地が位置するD・U・にはたくさんの行政機関や飛行場が集中しておりいわばキヴォトスの首都だ。そのような都市の特徴から、シャーレにも比較的近いのである。

(実際はヘリで約10分近くかかり、直線距離で約30kmほどだが。)

さて、そんな立地にあるこの基地……いや派遣隊はある重要な任務を現在課せられている。

その任務は「シャーレの先生をアビドス高等学校へ輸送すること」

だ。

一見、簡単な任務かもしれないが実はそうとはいかない。陸路で行くとしたら、車両という手段を用いても半日以上はかかる。それに加えて広大な砂漠の悪路を突破しなければならぬ。

これはかなり難しく、もし途中で何らかのアクシデントが車両に発生した場合遭難となる恐れがある。ほとんど生きて帰ってくるのは難しいと考えたほうがいいだろう。

それに加えてアビドスでは不定期に砂嵐が発生するため空路の場合、航空機が巻き込まれたらとても危険である。

しかし、そんな重大な任務が与えられたのはアレックス率いる第一武装偵察分隊だった。

なぜ偵察隊がこの任務を背負うことになったのかをアレックスの上官に尋ねると。

「アビドス自体我々が把握していない地域であり、現地の政治情勢や環境及び資源を知ることにも兼ねてだ。」

と、答えられたのだ。とにかく命令された限り、アレックスたちは任務を遂行せねばならない。

上官から出発は24時間以内にせよと伝えられたためアレックスの部隊は大急ぎで、任務で使う装備や弾薬そして銃火器などの申請に追われる羽目になった。

しかしある程度すでに輸送手段として上官がL-ATVが2両、M1126は操縦士二名と車両本体の貸し出しで一両確保をしてくれたようであったことから、負担は少し軽減されたのが幸いであった。

それに加えてどうやって手に入れたのかは不明であるが、アビドスまでの最短ルートを通り方や地図を確保してくれたのもかなり助かったのである。

出発の準備を終えたのち、アレックスたちは輸送する対象である先生と合流し与えられた任務を開始するのだった――

|

<20??年春／出発から12時間以上>

アレックス 第一武装偵察分隊・中尉

アビドス／アビドス高等学校周辺

アレックスたちがアビドス高等学校に到着したのは出発した日から日付を跨いだ、翌日の9時あたりであった。

想定した時間よりも遅く着いた彼らであったが、何事もなく先生を輸送することができたので部隊は安堵した空気に包まれる。

「俺たち、こんな砂漠まで来るなんて…。」

「ああ。キヴォトスに派遣される前、俺が派遣された地域を思い出さず。」

「どんな地域だったんだ？」

「クソみたいな地域さ。遠くから奴らは俺たちのことを狙ってくるし、IED即席爆発装置や地雷やらが道路に埋めてあったり自爆特攻をしてくる奴らもいるような地獄さ。」

アレックスたちの部下は長い間車両に揺られていたただけではなく、緊張した空気に包まれていた反動なのか、安堵すると皆息抜きがてらに雑談をし始める。

車両隊は、校門前にて待機し先生は学校の中に入っていく。

(前方から、自転車に乗った女の子が待機中の車両隊に接近する。)

「車両隊前方より、民間人一名…いや銃とヘイローがあるから生徒と思われるのが接近中。注意せよ。」

アレックスと同じL-ATVに乗車していおり、部下の一人でもあるウエストーン伍長が報告する。

彼はブローニングM2の銃座を担当しており、射手を守るために取

り付けられている防盾の中から双眼鏡で周囲を監視中にその少女を捉えたのちに報告をしたのであった。

少女はかなりのスピードで自転車を漕いでいるようで、発見した地点よりもかなり車両隊の前まで接近していた。

アレックスはもしかしたら先日、戦ったときの不良のように攻撃をしてくる可能性があるかと判断し、部下2名に接触するよう指示する。

(部下2名は車両から降り、少女に接近する。)

「えーと、お嬢さん？一つ聞きたいことがあるんだけど、もしかして君はこの生徒？」

降車し接近した一人が、少女の自転車が目の前で止まると同時に話しかける。少女は少しの間が空いた後に質問に答える。

「うん、一応^{アビドス}この生徒なんだけど……。あなたたちは誰？」

「俺たちはシャーレの先生を連れてここまで来た。それだけさ。」

「ん、あの例の先生……。？とりあえず私は学校に行くからここら辺で……。」

「ん」という独特な口癖がある少女はシロコである。

シロコは再び自転車を漕ぎ出し、学校からそこまで離れている位置にいるわけではなかったがあつという間の速さ学校の中に入った。いった。

「めちやくちや早いな……。まるで狼だ。」

部下の目には鮮明に耳が人間のものではなく、明らかに獣のようなものであることを焼き付けていたからかあつという間に去っていった光景も加えて、そう口に出したのだった。

<数十分後>

「前方より、黒い制服を着た集団を発見。おそらく生徒だ。」
ウエストンが無線を通じて報告する。アレックスはその報告を聞いた時、直感的に嫌な気配が彼を襲う。

「集団は全員ヘルメットとガスマスクを着けているぞ。」
この報告を聞いたすぐ後にアレックスは無線で連絡する。

「もしかしたらあの集団は不良で、戦闘を仕掛けようとしているかもしれない。警戒しろ。」

アレックスは部隊全体に注意を飛ばす。彼は以前の戦闘で不良たちと戦闘したことがあるからだ。その戦訓を元に彼は注意したのである。

装甲化された銃塔には中からでも周囲の視界を確保できるように、防弾製の小さな窓がところどころついている。

ウエストンは銃塔を旋回させ、取り付けられている小窓から周囲を確認すると。

「車両隊の後方からも、同じ集団が接近中！」

その報告を聞いた瞬間、アレックスは無線に向かって話す。

「安全装置を外しておけ!!いつ、始まってもおかしくないぞ！」

部下たちは各々の銃の安全装置を外して、初弾が装填できているか確認する。そして各車両から下車し、いつ戦闘が起きても射撃が出来るように態勢を整えたときだった。

連続して乾いた銃声が鳴り響く。発射された弾丸はアレックスたちの背後にある校舎に着弾し、窓ガラスが割れる音が聞こえた。

——犠牲は出なくとも攻撃を受けた事に変わりはない。

「攻撃を確認!直ちに反撃しろ!!」

アレックスが無線で伝え終わると同時に、部隊のあらゆる火器が火を吹いた。

そして銃声はまるで大合唱のように周囲に響き渡る。

一斉に放たれた5・56mm弾、7・62mm弾を不良たちは真正面から受け止めることとなる。

「うわあ!?!」

「痛い!!痛い!!!狙われている!!!」

不良たちとの距離は100mほど離れていたが、それでも聞こえる悲鳴はアレックスたちの攻撃がすさまじいものだとわかるものだった。

最初の一斉射で撃たれた不良たちは地面に倒れ、その後ろにいた不良たちは遮蔽物に隠れたり一部は逃げ出す者もいた。

しかし、アレックスたちは攻撃の手を緩めなかった。

「コプス！ 擲弾であそこに隠れている敵を吹っ飛ばしてやれ!!!」

コプスは擲弾兵である。彼は使い慣れているM203の安全装置を解除し、リーフサイトを起こす。いつものようにリーフサイト越しに狙いを付けて、引き金を絞った。

引き金を絞ると独特な音が響き渡る。その数秒後に遮蔽物の内側で爆発が起きた。40mmグレネード弾が持つ高性能爆薬はしっかりと威力を解放したのだ。

なお爆発した際、隠れていた不良たちが身に着けているヘルメットやガスマスクが爆発と共に吹っ飛んでいった光景が見られた。

「ドカーン。」

コプスは綺麗に命中をしたため、喜びの声を上げる。

結局戦闘が始まって数秒で予想外の反撃を受けた不良たちだが、生き延びた数少ない者は逃げ去るかアレックスたちによって倒されることで戦闘を終えることとなる。

「敵が完全に撤退したぞ。俺たちはやったんだ！」

アレックスがそう口に出すと同時に、学校の玄関からシロコを含む三人の生徒が出てきた。

しかし、彼女らが出てきた時にはすでにアレックスたちによって戦闘を終えていたため、きよとんとした顔をしながら辺りを見渡す。

「うへへ、もう既に終わっていたみたいだね。おじさんはお昼寝したいから学校に戻ろうよ。」

「確かにもう周りにカタカタヘルメット団はいなさそうだけど……。」

「いえ、ちよつと待ってください。半径500m以内に敵のシグナルを多数検知しました。進行方向からおそらく敵は退却していま

す。」

「ん、今度こそ私たちがやる。」

そんな風にやり取りをしているのはアビドス廃校対策委員会である。

「どうやら、話を聞いている限り敵は敗走しているようであった。」

アレックスは対策委員会である彼女らに近づき、話しかける。

「君たちはアビドス廃校対策委員会だよな？第一武装偵察分隊所属のアレックス中尉だ。」

突然、先生以外の大人に話しかけられたため先ほど出会ったシロコ以外は困惑するが、予備弾薬やらでパンパンに膨らませたアレックスのリグにある無線機から返答が来る。

「はい。私はアビドス廃校対策委員会の奥空アヤネと申します。今あなたの無線に繋いでいるのですが分かりますか？」

「どうやら、アヤネはアレックスたちが使っている同じ周波数に合わせて通信してきたようであった。」

「ああ。聞こえているよ。それで、敵は後退しているんだろ？どうするつもりだ？」

「おじさんが今考えたことだけど一つ提案していいのかな？」

おじさんという主語を用いるのはこの場にいるホシノだけである。

ホシノは現在三年生であり、ショットガンであるベレッタ1301を愛銃としている。

普段は時間があれば寝ることに集中するが、いざというときはまるで別人のように振る舞うのが特徴的な生徒である。

そんなホシノが提案したことに他の対策委員会のメンバーは注目する。

「今からカタカタヘルメット団の前哨基地を襲撃しちゃうのはどうかなく？今なら、アイツらもきつと今の戦いで消耗しているでしょ？」

「いい、今ですか？」

「そう。今なら先生もいて補給も簡単に解決できるし、それにここには戦える大人もいるでしょ。」

「なるほど。ヘルメット団の前哨基地はここから30kmくらいだし、今から出発しよつか。」

「いいと思います。あちらも、まさか反撃されるだなんて夢にも思ってもいないでしょうし。」

彼女らはどうやらカタカタヘルメット団の前哨基地を襲撃するつもりのようなだ。再び、無線からアヤネの声が聞こえる。

「そ、それはそうですが……先生はいかがですか？」

(無線で先生が襲撃するのを許可する旨が聞こえる。)

「よっしゃ、先生のお墨付きももらったことだし、この勢いでいちよやりますかー。」

本当に彼女たちは襲撃をするようだった。アレックスは先ほどの戦闘で使用したマガジンを新しい方にリロードしながら、ホシノたちに問いかける。

「なあ？移動手段はどうするんだ？一応、俺たちの車両はちゃんと4人分空きがあるから乗れるぞ。」

そう言い終わると同時に、新しいマガジンにリロードができたアレックスは古い方のマガジンをポーチに戻し終えた。

「じゃあ、それに乗っていこー。」

「はい、それでは、しゅっぱーっ☆」

あつさりとアレックスたちの車両に乗ると決断した彼女たちは、平べったい車体の特徴なM1126通称、'ストライカー'の後部ハッチから乗車する。

「うへへ、とても狭いね。これじゃお昼寝出来なさそうだよ。」
それもそのはずである。ストライカーは兵員輸送を前提としており、限られた空間で大量の歩兵を運べるように設計されているのだ。対策委員会の皆が乗車したことを確認すると、アヤネから無線が入る。

「カタカタヘルメット団の前哨基地までの道はこの私がナビゲートしますー！」

「ああ。助かる。」

アヤネとのやり取りを終えるとアレックスは部隊全体に無線を入

れた。

「分隊長より、全分隊員へ。これから強襲作戦を行う。いくら敵が不良だといっても侮るなよ。」

そう無線で呼びかけると、M1126ストライカーは車両隊の先頭として出発する。ストライカーの後方に位置するアレックスが乗るL-A TVも続く。

目的地はここから30kmのカタカタヘルメット団の前哨基地だ。

<数十分後>

アヤネによるナビゲートを受けながら、前哨基地まであと1kmほどの位置にいた時彼女から無線が入る。

「カタカタヘルメット団の前哨基地があるとされるエリアに入りました。半径1km圏内に多数の敵シグナルを検知。おそらく、敵もこちらが来たことに気付いているでしょう。」

「分隊長より、全分隊員へ。ここからは聞いての通り、戦闘区域だ。気を引き締めろ。」

そう無線で呼びかけると、同乗しているウェストンからも報告が入る。

「方位110、距離300mほどか？敵影を確認。どうやら気付いてなさそうだ。」

その報告をアレックスが聞いた瞬間、無線で叫ぶ。

「戦闘下車！車両は盾になれ！」

そう叫ぶと運転手以外の分隊員は下車し、車両の後ろにつく。

対策委員会
「そっちはどうするんだ？」

アレックスは対策委員会を指揮している先生に無線で問いかける。

(無線から彼女らを先行させることが伝えられる。)

「ああ、わかった。こっちは援護をすればいいんだな？じゃあ決ま

りだ。」

アレックスには前進する対策委員会たちの背中が映るのだった――

……

<20??年春>

私 シャーレの先生

アビドス・アビドス高等学校／教室

私は今、対策委員会であるホシノたちがカタカタヘルメット団の前哨基地を破壊するため指揮を執っている。

そして彼女たちはアレックスの部隊よりも先の位置におり、正面にはカタカタヘルメット団に所属している不良たちが待ち受けているのだ。

距離はそこまで遠くなく50mほどのところにいる不良たちと戦闘をすることから始まる。

最初にホシノ一気に集団で行動している不良たちに接近した後、そのうち一人の胴体に一発撃ち込んだ。

「うぐっ!!」

近距離でショットガンに撃たれた不良は声にならない喘ぎ声を出したあと、地面に倒れこむ。

もちろん近くにいる不良たちはその銃声と声でホシノの奇襲に気づき、すぐさま銃を構えて撃とうとするが――

集団で固まっている彼女たちは不運だった。なぜなら、ノノミが持つミニガンことM134の掃射によって薙ぎ倒されたのだから。

その掃射の威力はすさまじく、地面には彼女たちが一帯に広がって倒れている光景が見られた。

「お仕置きです〜♪」

ノノミはそんな一見可愛らしく思える言葉と裏腹にすさまじい射撃をしていたものであるからある意味ホラーでもあった。

「おい!!対策委員会のやつらが来やがった!」

「学校をまともに守れない奴らがこっちに攻撃を仕掛けるなんて生意気な!」

そんな声が聞こえると同時に、数多の射撃音が空に響き渡った。

20人ほどの不良たちが一気に射撃を加えていたのである。

私は数が多いと判断し、シロコに手榴弾を投擲するように指示する。

彼女は手榴弾の安全ピンを抜いたあと3秒ほど待つ。これは起爆時間を短くすることで手榴弾が敵の足元に落ちたとき、拾われて投げ返されてしまうのを防ぐためだ。

そして3秒まったあと彼女は勢いよく投擲。

「おい!何か来——」

手榴弾はシロコの狙い通り不良たちの頭上で炸裂する。手榴弾が包み込んでいる破片と衝撃が不良たちに襲い掛かり、土埃が宙に舞った。

「ん、狙い通り。」

シロコは冷淡な口調で告げる。

「生意気な!まだこっちは生きているぞ!」

たまたま手榴弾の爆発に巻き込まれなかった一人の不良はそう叫んだあと、さっきのお返しと言わんばかりに撃ち返してきた。

しかし、その反撃はあっけなく終わることとなる。

不良の銃声とは別の銃声が聞こえると不良は悶絶する声を出し、地面に倒れこんでしまう。

「も〜、めんどくさいなあ。私が倒してあげたからねシロコ先輩。」

そんな風に言い放ったのはセリカであり、先ほどの不良を倒した張本人でもある。普段はツンとした口調が特徴的である生徒だ。

「やっぱり皆仲良いなあ〜おじさんも青春したかったよ。」

「先輩も仲良いでしょ!？」

「今はそんなやりとりをしている時間はありません!!不良たちがそっちに向かっています!!」

アヤネはホシノたちのやり取りを断ち切り、そう報告したのだ。私はアヤネにどれくらいの数が見えているのか尋ねたところ。

「40人近くいます!!それにシグナルから、おそらく前哨基地にいる戦力がすべてそっちに向かっていているようです!!」

「うへ〜いっぱいだね〜」

「たくさんお仕置きできるじゃないですか〜♪」

「普段の恨みを……。」

「あいつらのことを絶対に許さない!!!」

そんなやり取りをしていたところ地面に銃弾が当たり、聞こえる者に恐怖を与えかねない音が響き渡っていた。つまるところ攻撃されているのだ。

「こっちのほうが多いぞ!!やっちゃまえ!!」

そんな不良の声が聞こえるとさらに射撃を加えてきたのだ。

そんなさなか、アレックスたちから無線が入る。

「数が多いようだな。そっちにストライカーを向かわせた。援護するぞ。」

ホシノたちの後方からストライカーが接近していた。ストライカーがホシノたちより前で停車すると車体の上部に取り付けられているブローニングM2M 2と酷似した銃銃が、不良たちに射撃を加える。

独特な音を発しながら放たれたのは40mmグレネード弾である。この弾はコプスがM203で発射する擲弾と微妙に口径が違うのだが、空気抵抗が少ないため射程が長く威力がとても高いのが特徴的だ。

そんな弾が連続して発射されるのだから、地面では連鎖的な爆発が起きていた。

爆発によって煙が出る中、私はノノミにミニガンによる掃射を命令。ノノミはMk19の連続した爆発に負けじとド派手な射撃を披露した。

そんなまるで大合唱のような制圧射撃が終わると、私はホシノに盾を用いて戦闘をすることを命令。

ホシノがシロコヤセリカの援護を受けつつ前進。ホシノが掃射で生き残った不良たちとの距離が10mくらいになったとき、彼女は盾を展開しショットガンの連射を加えた。

「ひぐっ!!」

「うわあ!!!」

ショットガンの連射が加えられると不良たちは悲鳴を上げる。

「クソ!!クソ!!!」

ある不良はホシノに向かって銃を乱射するが、すべて盾に銃弾を防がれてしまい無意味と化す。

結局その不良もホシノのショットガンによって倒されてしまう。

「これで片付いたかな」

「ええそうみたいです。あとは補給のための弾薬庫などを破壊するだけです。」

ホシノとアヤネは不良を倒し終えたことを互いに確認すると今度はアレックスから連絡が入ってきた。

「これで戦闘は終了か？先生？」

「もう終わったよ。」

「了解した。撤退まで道はちゃんと確保しているからすぐに対策委員会をそつちに帰還させる。」

「弾薬庫などの破壊はどうするの？」

「あー、こっちで破壊するからしばらくの間は近付かないでくれ。」アレックスとのやり取りを終え、対策委員会は私という大人の先生による指揮は特別なものであると車内で会話しながら帰路についてのだった。

そしてカタカタヘルメット団の前哨基地はこの戦闘が終わってから数時間後にMQ-9と呼ばれる無人攻撃機による攻撃によって跡

形もなく爆破されたことをアレックスから後日告げられた。

5 : 対策委員会編 : Battle of the Abyss
byd os Desert

<20??年春／8時54分>

アレックス 第一武装偵察分隊・中尉

アビドス／アビドス砂漠・カイザーPMCの基地から20kmほどの位置

アレックスたちは現在ある任務が与えられている。その任務は航空支援の誘導である。そしてその航空支援の誘導先はカイザーPMCの基地だ

先日からアビドスではゲヘナ風紀委員会の行政官による独断専行の侵攻に対する衝突、対策委員会がカイザーローンへの襲撃、PMC基地への攻撃といった波乱万丈な出来事が多かった。

そのためアレックスたちのような職業軍人にとっては非合法的な内容ばかりであることから、それらに協力するのは控えていたのだ。

しかし、カイザーローンへ彼女たちが襲撃したことで重要な書類の回収に成功。これによってカイザーコーポレーションがカタカタヘルメット団に対し資金援助を行っていることが判明した。

彼らはそこら辺にいる不良に資金を与え、アビドス高校を攻撃させた上で廃校に追い込むことを目的としただけでなく、自分たちがアビドスの土地という土地をすべて奪うということを目論んで、立派な代理戦争を行わせていたのだ。

そしてホシノが先生曰く、”悪い大人”と借金返済の一部を援助してもらおう代わりに、彼らの研究に協力するという契約を結んでしまっ

たこと。

またカイザーPMCがアビドスの自治区へ侵略を開始し、地元住民に対して暴力を振るうようになった…。

対策委員会はこの侵略に対して激しい抵抗を行うが、このままだと根本的に解決しないのは明白であり時間の問題であった。これに先生はアレックスたちの上層部もとい司令部に治安維持協力を求めた。立派な戦争犯罪(キヴォトス派遣隊基準)が行われたことを確認し、その協力要請を受け入れた上司令部は攻撃を行うことを計画。その作戦に参加する者には対策委員会や他校の生徒。そしてアレックスなどのキヴォトス派遣隊に所属する部隊も含まれていた。

そして一度、深夜に無人機による偵察が行われたことよって敵戦力の把握が完了。あとは攻撃を実行するだけとなった。

その攻撃にあたって第一武装偵察分隊が航空支援の誘導。そして、それによる効果の観測も任せられているのだ。

「ストライカー3-1、こちらアルファ1-0。配置についた、既に目標にマーキング済みだ。どうぞ。」

アレックスが観測装置で目標であるPMC基地の航空機などが格納されている格納庫にマーキングする。

「アルファ1-0、こちらストライカー3-1。目標を確認。投下。」

無線から投下の報告が入る。その10秒後には格納庫が大きな爆発を起こしたのち、遅れて爆発音が耳に届く。

「ストライカー3-1、こちらアルファ1-0。目標に命中。まだ仕事は残っているからやるぞ。」

アレックスは格納庫とは別の建物…それは敵の司令部であり、彼はその建物にマーキングをした。

「目標をマーク。」

「了解。投下！」

精密な誘導によって敵の司令部に命中。格納庫ほどの爆発は起きなかったが、司令部としての機能を喪失させるには十分な威力だった。

「ヒュー、最高だな。」

アレックスの部下は煙が上がる格納庫の光景を見ながらそう呟く。

「オーバーロード、こちらアルファ1-0。全目標の破壊を確認。どうぞ。」

「アルファ1-0、こちらオーバーロード。了解、これより作戦を第二段階に移行する。」

アレックスは司令部に報告を入れ終わるとPMC基地がある方向の反対側を眺めた。

「そろそろ来るか……。」

今回の作戦ではPMC基地に存在する戦力全てを基地内に侵入しホシノを救出する対策委員会への集中を逸らすため、戦車中隊が陽動を担うことになっているのだ。

突然無線が入る。

「アンヴィル中隊前進！索敵を怠るな!!」

<20??年春／9時00分>

M1A2エイブラムス アンヴィル中隊 中隊長

アビドス／アビドス砂漠・カイザーPMCの基地から25kmほどの位置

「この光景が見られるなんて……。」

アンヴィル中隊を指揮する中隊長はカイザーPMC基地へ前進するM1A2エイブラムスのハッチから顔を出し、景色を眺めていた。周囲にはほとんど何もなく、なだらかな起伏が一面に広がっていた。そしてそんな砂漠をアンヴィル中隊の戦車^{エイブラムス}たちは走っているのだ。

中隊長は目の前に広がる砂漠の景色に圧巻しながら眺めていると

無線が入る。

「アンヴィル中隊長、こちらオーバーロード。作戦はさつきから聞いているように第二段階に入った。アンヴィル中隊長は敵戦力を陽動せよ。どうぞ。」

「オーバーロード、こちらアンヴィル中隊長。了解、敵戦力をこちらがひきつける。終わり。」

司令部であるオーバーロードとのやり取りを終えると中隊長はハッチから顔を出すのをやめ、車内に戻る。

「中隊長より、全車へ。これからいつ敵と交戦してもおかしくない。気を抜くなよ。」

アンヴィル中隊長はM1A2エイブラムスと呼ばれる主力戦車13両とM3A3ブラッドレーと呼ばれる騎兵戦闘車3両によって編成されている。M1A2エイブラムスはキヴォトスにおいては最もモダナイズされた戦車といえるだろう。

ただでさえ、各学園が採用しているのはエイブラムスより二回り小さい戦車でしかも彼らにとつては旧世代の戦車でしかない。

彼らと違い乗員が一名でも操作できる点は技術的に素晴らしいものだが、戦闘においては高度なFCSやFLIRといった装備がキヴォトスの戦車には搭載されていないのだ。

そんな現代の主力戦車が索敵を行うとすぐに敵の戦車を発見することができた。敵の戦車はFLIRを通すと白色で強調表示され、どこにいるのかやどのくらいの数がいるのかも容易に把握できる。

中隊長は無線で呼びかける。

「クソみたいな砂漠のパーティーを始めるぞ!!交戦開始だ!!!」

この合図を皮切りに中隊長のエイブラムスたちが主砲から轟音を発した。ついに、アビドスでの大規模な戦車戦が幕を開けたのだ。

しばらく時間が経つと狙いの先である戦車から炎が上がる。エイブラムスから放たれたのは徹甲弾であり、弾道は狙い通りに描き見事に砲塔に命中。弾薬庫までしっかりと貫き、誘爆し炎上したのだ。

突然攻撃をくらった敵戦車部隊は狙われていることに気付いたのか、反撃として撃ち返し始める。

しかし、敵の砲弾たちはどれもエイブラムスに到達する前に地面に落ちてしまった。そして何事もなく主砲を再装填できたため、二回目の斉射をエイブラムスから貰い、残った戦車は全てスクラップと化してしまった。

そんな感じで接敵から30秒ほどで敵の戦車部隊は壊滅。アンヴィル中隊の被害はなし。これはPMCが使っている戦車はエイブラムスの主砲よりも短い射程であるため、アンヴィル中隊を発見しても攻撃が届かないのだ。

「中隊長より、全車へ。まだ陽動は完全に終わっていない!!さらに接近して引き付けるぞ!」

そう無線で呼びかけると再びアンヴィル中隊は前進し始めた。

しばらく前進すると突然、一両のエイブラムスが火花を散らした。中隊長はどこからか攻撃されたのかを特定するため車長用の観測器で索敵をすると、800mほどの位置の砂丘から白く表示された煙が確認できた。

その煙を確認してまもなく音と共に、砂埃が火花を散らした方とは別のエイブラムスの周りを覆った。おそらく迫撃砲か何かで攻撃しているのだろう。

「中隊長より、アンヴィル6-4、6-5へ。10時の方向、800m先の砂丘の稜線の向こうに迫撃砲がいるはずだ。攻撃せよ。」

中隊長からの命令を受けた二両のエイブラムスたちは、傘型隊形を組んで砂漠を突き進んでいるアンヴィル中隊から離脱する。

離脱した二両はスピードを上げてさらに接近。あつという間に稜線を越えた。

そして大きな砲声が聞こえる。それに続いて乾いた銃声が連続して聞こえた。

「アンヴィル6-1、こちらアンヴィル6-4。大量の歩兵と装甲

車まみれだ!! 迫撃砲を破壊したが対処しきれない!!」

「指揮官より、アンヴィル5―1、5―2、5―3へ。6―4、6―5の援護をしろ。」

傘型隊形で突き進んでいるエイブラムスの後方にはM3A3ブラッドレーと呼ばれる騎兵戦闘車が随伴していた。

ブラッドレーはエイブラムスと違い、一回りほど小さく戦車ではない。この車両は偵察などを目的に作られた装甲車なのである。

そして搭載している主砲は25mmであるためにエイブラムスの120mmという大きなものに比べれば小さく、威力も戦車と戦うのであればそこまでない。一般的な戦車砲を防げる装甲も持たないのだ。

そのような事情から被害を無くすために、エイブラムスの盾に守られて随伴していたが遂に出番が回ってくる。

ブラッドレー達は中隊から離脱し、全速力で二両のエイブラムスの元へ救援に向かう。

駆けつけるとそこには迫撃砲、装甲車の残骸が至る所に点在した。しかし歩兵もといPMC兵達の数は多く、歩兵に対して戦車は苦戦していたということを物語っていた。

「6―4、6―5。こちら5―1。助けに来たぞ!!」

一両のブラッドレーがそう無線で伝えると同時にブラッドレー達はPMC達に向かって射撃を加える。

ブラッドレーは戦車などの重装甲の相手となると歯が立たないが、歩兵や軽装甲の目標に対しては十分な威力を発揮するのだ。

連続して発射される25mm弾がPMC兵達に炸裂し、多くの敵を薙ぎ倒す。中にはオートマタも混じっており、直撃をしたオートマタは身体をそのまま保つことはできず、文字通りにスクラップとなってしまった。

「6―4、RPGがそっちの10時の方向にいるぞ!!」

そう仲間が叫んだのと同時にエイブラムスに向かって煙が高速で飛来し、爆発音と共に黒煙をまき散らした。

エイブラムスに襲い掛かったのは対戦車用のロケット弾であった。

「やったぞおおおおおおお!!!」

命中させたP M C兵は喜びの声を上げる。しかし――

「いやまだ動いて――」

ちようどエイブラムスが黒煙から出てきたのと同じくらいに25 m m弾の掃射が再び襲い掛かる。これによつて完全に歩兵部隊は全滅。

残念ながらエイブラムスに命中したのは砲塔の前面部分でありしかも、貫通するにはそのロケット弾の貫徹力は不十分だった。そのよ
うなことから、命中したエイブラムスは装甲を窪ませただけだった。

「おい6―4無事か? 装甲が窪んでいるぞ。」

「ああ。多分大丈夫だ……。死ぬかと思つたぜ。」

味方とのやり取りを終えると彼らは離脱した中隊の元へ戻るの
だった……。

<一方…>

一方、カイザーP M C基地では初めに空爆を喰らい航空戦力が使え
なくなつてしまったこと。また周囲を警戒していた戦車部隊との連
絡が取れなくなり混乱が生じていた。

彼らは何が起きているのかがわかつたのは先ほどアンヴェイル中隊
が接敵した敵歩兵部隊との連絡だった。

「方位220より敵戦車部隊接近!!きつと基地を目指している!!援
護が必要だ!!!」

カイザーP M Cを統率しているカイザー理事は最初その報告に
疑つた。

「嘘だろうか?ただでさえ対策委員会は少数でそんな大量の戦車を扱
うことすらできない。それに借金を背負つてでも戦車を用意するほ
どのバカではない。」

「それに今朝、空爆を喰らいました！きつとアビドスじゃない奴らです!!」

理事はその報告を受けると唾然とした。空爆が出来るほどの組織力となるとこの攻撃を実行できる勢力は限られてくる。

それらの事情から何を目的でアビドスではない者がこの基地を攻撃しているのかが理解できなかった。だからある可能性に彼は至った。

「もしかしてだが……。例の奴らか？以前雇った出来損ないの不良たちが言い訳で『シャーレの先生と別の大人がいた。そしてそいつらは戦うことができる。』と言ってただろう？あれは本当なのか？」

「わかりませんが……。そうかもしれない。」

「ならば全戦力をその戦車部隊に向かわせろ。おそらく敵は戦車のみの戦力だ。あれから空爆もないだろう？きつとその部隊が主力のはずだ!!」

「全戦力をですか……。」

「ああそうだ。一応、一個歩兵小隊だけ基地の警備に残しとけ。」

「わかりました。直ちに実行します。」

<歩兵部隊からの戦闘から数十分後>

大規模な歩兵部隊との戦闘を終えたアンヴィル中隊は広大な砂漠を突き進んでいた。

「あともう少しでPMC基地から1kmほどの位置だ!!」

中隊長が無線でそう叫ぶと同時に部下から報告が入る。

「アンヴィル6―1、こちら6―7。熱源を確認した。距離1500m、真正面だ。」

その報告を受けてから数秒後にいきなり衝撃と轟音が襲いかかった。つまり敵の砲撃を受けたのだ。

「クソ!!隠れていたか?!全車撃ち返せ!!」

中隊長がそう命令すると轟音が空に響き渡る。発射された砲弾はそれぞれ敵の戦車に命中。どれも致命的な一撃であり、破壊に至った。

「アンヴェイル6―1、こちら5―1。敵が左右からも展開している模様。歩兵だ。」

どうやら敵は歩兵を側面から展開することで戦車の装甲が薄い部分を狙い、破壊するようだった。

「指揮官より、全車へ。ただちに後退せよ。」

流石に危険だと感じた中隊長は後退する命令を出す。しかしその後退の際、一両のエイブラムスが泥穴にはまってしまい中隊から落伍してしまった。

その泥穴にはまってしまったエイブラムスは残った敵戦車3両に狙われ始める。

一両目は砲塔正面を狙って射撃をした。しかし命中したが重大な損傷とはならずお返しにエイブラムスが撃ち返すと、敵戦車の装甲を貫通し内部の砲弾を誘爆させ砲塔を吹き飛ばした。

さらにもう一両が近づき、撃たれる。だが、これも装甲を貫通せず結局エイブラムスからの反撃を受け同様に倒されてしまう。

最後の一両は400m近くまで接近し、砲撃をエイブラムスに叩き込んだ。残念ながら結局カイザーPMCが採用している砲弾はエイブラムスの装甲を貫くことはできず、先に倒された二両と同じ結末を辿ることとなった。

「ああクソ!!こんな泥穴にはまった戦車の中で死ぬなんて最悪だったぞ……。」

「でも生きているだろう?」

「どっちにしろこの戦車に乗っている限り、俺たちは死ぬまで一緒だよ。」

そんな風にエイブラムスに乗車していた兵士はやり取りをする。

だが、戦車を倒したところで次は歩兵の波に圧倒されそうになっているのだ。危機的状況である。

そして少数ながらPMC兵たちは泥穴にはまってしまった不運なエイブラムスの後ろに気付かれることなく近づいていた。

「後ろのエンジンにC4を設置でいいんだよな…?」

「もたつくな!!早く設置——」

設置しようとしたPMC兵たちは甲高く、耳をふさぎたくなるような音が連続した銃声が響いたのち、薙ぎ倒される。

「おい!アレを見ろ!」

特徴的な銃声に気付いた他のPMCはその音を放った張本人に注目を向けるように呼び掛ける。しかしPMC兵たちは不幸にもその姿を見ることがなく倒されてしまった。

PMC兵たちを圧倒した小さい女の子は白い髪が特徴的で、背中にはコウモリのような翼が。触れることはできないにもかかわらず見た目から禍々しく、触るとケガがしそうなヘイロー。

そして彼女の愛銃である”終幕・テストロイヤール”ことMG42を持つのは誰か。それはゲヘナ学園風紀委員会の委員長である空崎ヒナである。

「はあ……。」

「間に合ったみたいですね。私達が戦った数が少なかったもので援護しに来たら、この有様ですよ。」

溜め息を吐く彼女に話しかけているのは甘雨アコである。彼女は風紀委員会の行政官であり、戦地には直接赴かずいつも風紀委員会のサポートをしているのだ。

「周辺には歩兵大隊一個。小規模ですが戦車や装甲車も確認されています。」

「分かった、準備して。」

「なんで私もここにいるんだ……。」

そんな風に愚痴を漏らすのは銀鏡イオリである。彼女は褐色の肌が特徴的であり、この作戦が発動する数日前、先生に足を舐められたこともある生徒だ。

まあ、そもそも彼女の足を舐めた理由は先生のやましい欲望とかではなくある生徒ホシノを救いたいという気持ちから至ったものだった
が……。

それはさておき、ヒナを筆頭とした風紀委員会が他校の自治区にいるのは紛れもない事実。しかし彼女にはやらなければいけないことがある。

「まだ、風紀委員会の仕事も残っているし早く終わらせよう。誰一人として先生には近づかせない。」

彼女たちの後方からは態勢を立て直したアンヴィル中隊が接近していた。

「こちらアンヴィル6―1、援護に感謝する!!」

突然、無線で呼びかけられるが彼女は動じない。そして余裕をもつて返す。

「本当の戦いはこれからでしょう? 行こう。」

——彼女は再び愛銃の引き金に指を掛ける。

——アンヴィル中隊は停車し射撃態勢に移る。

——皆は戦っていた。先生が願う、ただ大切な生徒のため、ホシノのため。

6：対策委員会編：Into the Abydos Desert

<20??年春9時40分>

アレックス 第一武装偵察分隊 中尉

アビドス／カイザーPMC基地周辺

「アルファ1ー0、こちらオーバーロード。アンヴィル中隊とゲヘナ風紀員会が敵の陽動に成功した。作戦を第三段階に移行、対策委員会と共に基地へ侵入し目標を救出せよ。どうぞ。」

「オーバーロード、こちらアルファ1ー0。了解、これより基地に突入する!!」

アンヴィル中隊及びゲヘナ風紀員会による陽動によってPMC基地に集結していた戦力は減少していた。この隙に対策委員会と共に基地に侵入しホシノを救出するのだ。

「なあ先生？準備は出来ているよな？この先は戦場だ。作戦通り、彼女たちが基本的に戦闘する。もし万が一、戦闘に巻き込まれそうになったら俺たちが対処する。その時は俺たちの命令に従うんだ。いいな？」

アレックスは先生に頭が痛くなるようなくらい注意をする。

なぜなら先生は武器を持たず、アレックスたちのように体を守るた

めのヘルメットやボディアーマーを着用していない。

これは戦場においてはかなり危険な行為であり、死につながりかねない行為だからだ。だからこそ、念には念を入れて注意したのだ。

そんな注意を終えようと対策委員会は基地に突入した。そしてアレックスたちも彼女たちが続く。

基地内は見事に閑散としており、ところどころ基地内の警備としてのPMC兵が巡回しているだけだった。

まず基地内の安全を確保するために、シロコの愛銃である、WHITTE FANG 465、ことSG550が乾いた銃声と共に、PMC兵に対して鉛玉で、警備のお礼、をすることから戦いは始まった。

警備していたオートマタたちは銃撃を受け、倒れこむ。また、その銃声に引き寄せられるかのように他のオートマタたちが接近していった。

オートマタたちが集まり、彼女たちと本格的に戦闘が始まると先生はアレックスたちの護衛を受けながら指揮し始める。

先生は集まってきたオートマタたちを掃討するため、ノノミにM134による掃射を指示。

指示を受けたノノミはノリノリで大量の7.62mm弾を轟音と共にオートマタたちにぶちまけた。

真正面からその弾を受け止めることとなったオートマタたちは、彼らの体を構成するいくつかの部品が欠損して倒されるのであった。

運良くノノミの掃射の範囲にいなかったオートマタたちはやられた味方なんて気にせず、彼女たちに射撃を加えていた。

そんなオートマタたちをセリカ、シロコが軽快な銃声と共に倒していく。

そのうち大型の盾を持ったオートマタが現れる。

そのオートマタの盾はシロコやセリカが使用する5.56mm弾、ノノミの7.62mm弾をもともせず攻撃を加えてきた。

「ちよつと!!ほとんどの弾が盾に防がれている!!」

セリカがそう叫んでもそのオートマタは攻撃をし続ける。

「コプス！擲弾だ！」

アレックスがコプスにそう向かって叫ぶと、彼はいつも通りに40mmグレネード弾をM203に装填し発射する準備を整える。

彼はリーフサイト越しに狙いをつけて、高性能爆薬が搭載された40mmグレネード弾を放つ。

放たれた40mmグレネード弾は大きな盾を持つオートマタの足元に着弾。強烈な衝撃と威力をオートマタに余すことなく与え、一瞬にしてスクラップにすることができた。

「グッドショットだ!!」

アレックスがコプスに褒め称えると同時に基地内での銃声を聞くこともなくなった。

「ん、制圧した。」

「ホシノ先輩はどこにいるの?」

「確か先生に教えていただいた座標はもう目の前なので、もう少しの辛抱です…!」

「まだまだいけますよ〜!」

そんな風に彼女たちの会話が終えると少し基地内を探索するのだった——……

<数十分後>

基地内を探索すると一つの大きな建物……いや、学校の校舎と言ったらしいのだろうか。

少なくとも学校だと考えられる建物がほとんどが砂に埋もれている状態で発見した。

砂に埋もれず、外から内側の様子を観察すると今は完全に廃墟と化しており、ところどころかつて学校として使われていたことを示す痕跡が残っていただけだった。

「この辺りに、ホシノ先輩が閉じ込められているはずですよ！この周囲のどこかにきつと……！」

「……。この痕跡……多分学校、だよな？」

「砂漠の真ん中に学校……もしかして。」

「ああ。ここは本来のアビドス高等学校本館だ。」

突然、彼女たちの会話に低い男性の声が割り込んでくる。

「……。」

「あなたは……。」

彼女たちはその声の主へ冷徹なまなざしを向ける。それもそのはず、その声の主はカイザーPMC理事である。

彼は複数の武装したPMC兵に護衛されながら彼女たちに再び話しかける。

「よくぞ、ここまで来たものだ、アビドス対策委員会。砂漠化が進行し、捨て去られたアビドスの廃墟……ここが、元々はアビドスの中心だった。」

理事は何歩か前にある砂が盛り上がっているところまで進む。

「……かつてキヴオトスで一番大きく、そして強大だった学校の残骸が、この砂の下に埋もれている。ゲマトリアは、ここに実験室を立てることを要求した。」

「実験室……!?!」

無線越しに聞こえるアヤネの声は完全に驚いているようだった。

「そんなことよりも、ホシノ先輩はどこですか！」

ノノミは声を荒げて理事に言い放った。それでも動じない理事はこう答える。

「あの副生徒会長なら、向こうの建物にいる。もしかしたら、すでに実験が始まっているかもしれないが……。」

「……。っ！」

「彼女の元に行きたいのであれば、私たちのことを振り切つていけば良い……。」

「本当にそうか？」

アレックスは理事に問いかける。

「もともとそつちは主戦力は使えない。なぜなら今、アンヴィル中隊とゲヘナ風紀委員会と戦闘をしている。そんな中、どうやって戦うつもりだ？まさか、その少数の護衛で？」

「どちらかというところ、問い」というよりは罵倒に近い雰囲気でもくし立てられたが、理事はその言葉に対して返事をする。

「お前たちは……。」

「ああ。自己紹介か？アレックス中尉だ。お前のこと、そしてアビドス自治区で何をしたのかを全て先生から聞いている。」

「先生……。」

理事はアレックスたちに護衛されている先生に視線を集中させる。少し睨むかのような視線を先生に送ったのち、アレックスの方へと視線を戻す。

「お前に選択肢を与える。ここで軍隊と傭兵の違いを教えてもらうか、大人しく自分の家に帰るんだな。」

突然、アレックスからそのような選択肢を与えられた理事は少しの間を空け、答える。

「ああ。わかったよ、兵隊さん。あとはそつちが好きにしているぞ。」

流石に少数の周りにいる護衛のオートマタで戦うのは難しいと判断した彼は、ここから撤退することに決めた。

しかし彼が去ろうとした際、大きな爆発が周囲の護衛に襲い掛かった。

その大きな爆発はかなりの砂埃をまき散らしたため、目の前の視界が失われる。

少し時間が経つとだんだん視界が明瞭になるとともに、その砂埃の中から4人のシルエットが見えた。

そして遂に視界は明瞭になると。

「やーっと、追いつけた!!けどなんかこれ皆集まっているし、もしかして大事なシーンに割り込んだんじゃないか？」

「……ふん、こつそり助太刀しようと思ったのに、そう上手くいかなかったわね。」

「あ、あんたたち……！」

セリカは驚きのあまりか、声を荒げて叫んだ。それもそのはずである。なぜなら、4人組の生徒たちは便利屋68であるからだ。

アレックスたちがカタカタヘルメット団のアジトを破壊したあと、彼女たちはカイザーPMCから傭兵として雇われていたことがあった。

しかし紆余曲折して、カイザーPMCと対立し傭兵を辞めることとなった彼女たちだったが……。

「あいつらは味方か……？」

アレックスたちは彼女たちを警戒しながら、先生に尋ねた。

「味方だよ。あの子たちは。」

そもそも今回の作戦を立案する段階において、便利屋68が従軍することは含まれていなかった。

それに加えて、時系列的にアレックスたちが彼女たちの存在を知ることすらなく今に至っているのである。

「なるほど……味方か。協力に感謝する！」

「……なるほど、そういうことだね。」

「……ん？何、この微妙な視線は？」

少し背が低く、小さな体格に見合わなさそうなほどの大きさがあるMG5を愛銃とし、先ほどから話しかけているのは浅黄ムツキである。

彼女たちは社長の陸八魔アルと共に、アビドス対策委員会を助けにやってきたのであるが、実際は、護衛の数の少なさから対策委員会とアレックスたちだけで倒せるはずであった。

それに加えて、アレックスとの交渉を経た上で理事が去ろうとしたところに彼女たちが現れ、しかも護衛を巻き込んで倒したものであったため、周囲から向けられている視線は微妙なものであった。

「ふふっ、勘だけは鈍っていないようね、対策委員会。私たちがここに来た理由なんて、決まっているでしょう？ここは私たちに任せて、先に行きなさい！」

しかし、そんな周囲から向けられている視線に気付かないアルは

堂々と言い放った。

「「!!!」」

もちろんその場にいた対策委員会だけではなく、便利屋に所属するムツキや常識人枠である鬼塚カヨコは、その集中している視線に気付いていたためアルの勢いに任せられた行動に対して、困惑を示していた。

「・・・はあ。」

と、カヨコはため息をつくほどであった。まあそんな中、実際はアルは心の中で後悔するのであったが・・・。

「うっわ———・・・それは惚れちゃうよ、アルちゃん・・・。」

「さ、流石ですーい、一生ついていきますーアル様!!」

ムツキが悪ノリで彼女を肯定したことにより、さらにアルを最も信頼しているハルカがそのノリに悪意はなくとも便乗したことで、現場はカオス極まりなかった。

「・・・もうっ。べ、別に、お礼は言わないからねっ!!でも、全部終わったら・・・その時は一緒に、ラーメンでも食べに行くわよ、便利屋!!」

「はい、この御恩は必ず!」

「ん、ありがとう。」

「なんか凄いことになっているが・・・もし理事が戦うつもりなら、アイツらに任せておくべきか・・・?」

とりあえずアレックスは生徒たちの友情・・・いや青春ともいえる瞬間を横目で見ながら、そう決めたのだった。

「対策委員会・・・ずっとお前たちが目障りだった。」

突然、理事は大きな声で喋り出す。それに加えて、開口一番に名指しされた対策委員会はもちろん、アレックスや便利屋も理事に注目する。

「これまで、ありとあらゆる手段を講じてきた・・・。それでもお前たちは、滅びかけの学校に最後まで残り、しつこく粘って、どうか

借金を返済しようとして！」

理事がこれまで、対策委員会に対して抱いていた憎しみともいえる思いをぶちまける。それはまだ続く。

「あれほど懲らしめたのに、徹底的に苦しめたのに、毎日毎日楽しんで!!お前たちのせいで、計画がっ!!!私の計画があああっ!!!」

理事は大人とは思えないほどの態度で喚き散らした。

そして理事の背後にいる便利屋の最初の爆発から逃れ、生き残ったオートマタたちは銃の安全装置を解除し、引き金に指を移動させていた。まだ構えてはいない。

もちろんその様子をアレックスたちは気付いていた。きっと理事はここで不意打ちを仕掛け、妨害するつもりだとアレックスは考えた。

そして……彼は自分のタクティカルリグに付けてある閃光弾を取り出し、安全ピンを外して勢いよく理事とその護衛たちがいるところに投げつけた。

「なにか飛——ぎゃああ!!」

閃光弾は集団の至近距離で炸裂。理事はその強烈な光と轟音に耐えられるはずもなく、悲鳴を上げる。

護衛のオートマタたちはというと、銃を構えるどころか銃を地面に落としてしまっていた。

「あいつらをやっちまえ!!便利屋!」

アレックスは便利屋に理事たちを攻撃するように伝える。

便利屋は一瞬困惑を見せたが、アレックスが話の最中に理事に対して閃光弾をいきなり投げつけたことは、‘‘ハードボイルド’’と感じたアルは上手く乗せられ、攻撃を開始した。

「便利屋が戦っているうちに、ホシノを……。」

アレックスがシロコたちに向かってそう伝えると、共に学校内部へ侵入するのだった——……

<数十分後>

内部に侵入した彼らはそこから更に地下へと向かい、ホシノがいるとされる部屋にたどり着いた。

そして扉を破壊し、救出することに成功した。彼女たちは既に建物の外に出ており、再会の喜びを分かち合っていた。

便利屋の姿はなく、大量の空薬莖と元はオートマタであつただろうスクラップが砂にぶちまけられていたが……。

とにかく彼女たちにとって感動とも言っても良い瞬間であり、大切な人である彼女を救い、再会を果たすことができたことは、彼女たちにとっては忘れられないものであろう。

しかし――

「アルファ1―0、こちらオーバーロード。そちらから方位260、800m先から熱源を感知。無人機から姿が確認できないことから、地中を移動していると考えられる。警戒されたし。どうぞ。」

無線からはどうやら正体不明の敵か味方が、それすら分からない存在がこちらに接近していることが伝えられる。

「オーバーロード、こちらアルファ1―0。それはカイザーPMCの兵器か何かか？情報を教えてくれ。どうぞ。」

「すまないがこちらからの情報は何も無い……。」

「了解した。終わり。」

無線とのやり取りを終えたアレックスは、対策委員会のやり取りを眺めている先生に話しかけた。

「こんなタイミングで申し訳ないな、どうやら敵か味方も分からない存在が、こつちに接近しているようだ。もしかしたら、また戦闘になる可能性がある。だから――」

突然、鼓膜が破れそうな程の鳴き声が響くと共に地面が大きく揺れた。

音が聞こえた方を見渡すと、大きな砂の柱が勢いよく空に向かって伸びているのが分かる。

そして、その柱の中に、白い金属が連続して移動している様子が見えた。

「おいおい、なんだあの蛇みたいなのやつは!？」

「こつちを見ているぞ!!!」

アレックスの部下は今までに見たことのない機械化された蛇に動揺していた。

「あれは……。あれはおそらくビナーです!」

<20??年春10時25分>

アレックス 第一武装偵察分隊 中尉

アビドス／カイザーPMC基地

「あれがビナー…。」

今までに見たことない機械化された蛇のような存在に、驚いているのはアレックスである。同様に彼の部下も驚いていること、そして。

「うへへ、皆と一緒に帰れるのかと思っただらめんどくさそうなおことが…。」

「ちよつと!!いったいあれは何なの!?!」

対策委員会も初めて見るビナーに驚いていた…。ただ、一人を除いて。

「ビナーはアビドス周辺の砂漠地帯を拠点とする敵です!!詳しい正体は私も分かりませんが…。とにかく、今すぐ逃げてください!!」

アヤネが逃げるように伝え終わる前に、ビナーは頭をこちら側に向けてくる。

そして口が開き、砲身を見せたかと思いきや大きな球を形成し始めた。

「とにかく逃げたほうが良さそうだな!!急げ!」

アレックスがそう言い終えると、皆は逃げ出した。

「あれはビームを撃つてきます!!回避してください!」

「!!!」

そして――

背後から轟音が聞こえると同時に、地面が揺れ出した。まるで回路が焼き切れるかのような、ジリジリ、と、いった感じの音が迫ってくる。

る。

このままではやられると思い、皆は逃げる方向を変える。

ホシノは逃げる最中、背後を見ると砂漠にわずかに生えていた草が焼けて焦げてしまっていることに気付いた。

「巻き込まれると火傷しちゃうよ〜」

「いや、先生とかだと絶対死んじゃうから!!」

ホシノの焦りの無い声にセリカは突っ込みを入れる。もし、さつき方向を変えていなかったらあのビームに巻き込まれて、数体もの人間の形をした炭が出来ていたのだろう。

「うつつ!!」

突然、アレックスの背後からうめき声と共に鈍い音が聞こえた。音を発生させたのは先生である。

先生は倒れており、立ちあがろうとする。それを援護するためにアレックスの部下は、逃げるために先生の腕を精一杯の力で引っ張り、立たせた。

立つことが出来た先生は歩こうとすると。

「足挫いたかも…。思ったよりも痛い…。」

先生の申し訳なさそうにしている声がぼつりと砂漠に響く。

「クソ！これじゃ走れないか!?!」

アレックスは悪態を突いた。ビナーに追われている中、一人負傷し、逃げる事が出来ないのはピンチである。

「ん、私が背負う。」

シロコは突然、そう告げると勢いよく先生を背負った。

「これから私は先生を安全なところに連れていく。それでもいい?」

負傷した先生を安全なところに連れて行くのは、賛成しているように皆は頷く。

「わかった。」

GOサインを貰ったシロコは猛スピードで、先生を背中に背負ったまま走り去った。

「ビナー！地中を移動しています!!」

アヤネからの報告が入ったときには、既に連続した砂の起伏がアレックスたちの周りに存在していた。

そしてその連なりが生成されるのが止まると、大きな砂柱を空に向かっていく。

砂柱の中から再び現れたビナーはアレックスたちと真正面の方向に対峙した。

「どうやら俺たちを逃さないつもりだな。」

「こうなったら……。実力行使です!!」

アヤネのその言葉と共に、その場にいるあらゆる銃が火を吹く。

放たれた銃弾はビナーに命中。もちろん的は大きいので、少し離れていたとしても外すわけではない。

アレックスもセミオートで射撃を加えるのだが、あつという間に弾が切れる。彼は自分の銃のマガジンを捨て、新しい方へと交換する。

そうしている間も、対策委員会なども攻撃していた。

その中で最も派手な射撃をしているノノミは大量の空薬莖を、連続した銃声と共に地面にぶち撒けていた。

「どンドン撃ちまくれ!!」

アレックスの部下であるM240やM249を操る機関銃手も、ノミの射撃に負けじと、派手な射撃を披露。

加えて、コプスの擲弾が加えられることで爆発が発生した。

しかしながら、大量の銃弾を浴びていたビナーは不穏なことに一つも様子を変えていない。

「ちよつと!?これ本当は全く効いていないでしょ!!!」

「もつとお仕置きをしてあげましょう♪」

「いえ!!敵の装甲が厚くて、貫通できないのです!!!」

ビナーの持つ装甲は5.56mm弾の銃弾をもともせず、更に強力な威力と貫徹力を持つ7.62mm弾を通用させないほどであった。

「榴弾を!!」

アレックスはコプスに向かって叫ぶと、腰に擲弾が巻き付けられているベルトから黄色の弾頭をM203に装填。

黄色の弾頭は多目的榴弾であり、戦車などの厚い装甲をもつ敵に対し威力を発揮するのだ。

コプスは狙いをつけて放つ。ビナーに命中するとHE弾ほどの派手な爆発は起きなかったが、貫通した弾はビナー内部で炸裂。

ビナーは怯む様子を見せる。

「いいぞ!!もつと撃てー!」

それからコプスは数発をビナーに叩き込むのだが、前屈みの姿勢から元の状態に戻ると大きな口を開ける。

そう再び、ビームを発射するつもりなのだ。禍々しい色をした球はどんどん大きく形成されていく。

アレックスたちは巻き込まれないように、攻撃範囲から逃げようとしたところ、顔に目掛けて小さな爆発が連続して起きた。

そしてビナーはその攻撃がたまらなかったのか、ビームを発射するのを中断。

「さっきのは一体誰が…?」

「ん、待たせたね。皆が戦っているから、私も逃げるわけにはいかない。」

特徴的な口癖と共に冷静な声を発した少女は誰か。

それは――

「シロコ先輩!」

そう砂狼シロコである。

「先生はちゃんと安全な場所に連れて行ったよ。それに援軍もいる。」

「援軍…?」

突如、空からアレックスのような兵士にとっては、嫌な音が聞こえたのち、ビナーに大きな爆発が連続して起こった。

その攻撃の直後、無線から聞いたことのない少女の声を聞く。

「あ、あう…わ、私です…。」

「この声はヒフ――」

「ち、違います!私はヒフミではなく、ファウストです!」

「ヒフミだね。」

自らを、”ファウスト”と名乗る阿慈谷ヒフミはトリニティ総合学園に所属する生徒である。

彼女はこの攻撃に参加するつもりだったが、学園との調整に時間がかかってしまい、キヴォトス派遣隊の作戦を立案する段階では、彼女は残念ながら含まれていなかった。

そのためアレックスは彼女のことを知らない。しかし、新しい戦力は頼りになる。

「わあ、ファウストさんお久しぶりです！ご自分で名前を言ってもらいましたが、ご愛敬ということ☆」

「挨拶をしている場合じゃないわよ!!確かにありがたいけども——」

「俺たちには支援が必要だ。そうだろう?」

「その、今からL118... トリニティの牽引式榴弾砲でし、支援します!!あ、あこの砲とトリニティ総合学園は関係が——」

「ヒフミ、ありがとう。私たちのために。」

シロコがヒフミに感謝を伝えると再び、ビナーに爆発が起こる。

「あはは... えっと、みなさん、が、頑張ってください!!」

そう伝えると彼女は通信を終了した。

「うへ〜おじさんも頑張っちゃおつかう。」

「にしても、すごい威力だな... さつきからあのデカイ蛇はまともに動いていないぞ!」

L118が発射する榴弾はビナーの装甲を貫き、十分なダメージを与えることに成功していた。

そして一度、砲弾の雨が止むとビナーは一面砂だらけである砂漠の下に、潜った。

「ビナー、地中を移動中です!!」

「ヒフ... じゃなくてファウストの攻撃があまりにも強すぎて、逃げたのですかね〜。」

「いいえ!!逃げてなんかいません!!すぐに出てくるはずです!!」

少しするとビナーが再び現れる。そして、いきなり背中から数発の煙の束が空に向かって伸びていく。

「あれはロケット弾!!どうしてあんなものまで…。とにかく、今すぐ逃げてください!!」

アレックスたちは自分たちが先ほどまで、射撃していた場所から離れる。

運良く、爆発に巻き込まれなかったものの、ロケット弾の威力は凄まじくアレックスたちの部隊は何回か衝撃波に殴られた。

「つつっ!!」

視界と意識が共に暗闇に落ちていくのだった。

「……………戦わないと……………」

アレックスは気絶から目覚める。彼は小声で、そう呟きながらゆっくりと体を起こす。

耳元には銃声が響いていた。対策委員会はアレックスたちが気絶している間も、先生の指揮の下で戦闘していたのだ。

アレックスは周りを見渡す。彼の部下のコプスを含め皆、地面に伏せていた。

動く様子はない。

その光景を見ると彼は内心、死んでいるかもしれない。と不安に思いながら、少し離れたところにあった彼の銃を取る。

「アレックスだ。まだ生きてるぞ。」

無線にて、戦っているであろう対策委員会に告げる。

「い、生きてたのですか!? てつきり死んだのかと……………」

アヤネは驚きの声を上げた。彼女は先ほどの爆発に巻き込まれて、死んだのかと思っていたのだ。

「もしかして、ヘイローを持ってたりして〜?」

「そんなことより状況は?」

銃声が響いているだけでなく、大きな爆発も聞こえてきたなか、彼はホシノに尋ねた。

「まだ戦っているよ。先生の指揮を受けていても、結構大変だけ

どろ。」

アレックスは彼女たちと200m前後しか離れていないため、ビナーと戦っている彼女たちを難なく発見することができた。

そしてビナーはアレックスたちに放ったように、ロケット弾をまたもや発射していた。

「とりあえず俺も戦う。あんなデカブツ相手に力になれるかが分からないが……。」

そう告げると、アレックスはコプスに近寄り、脈があるかを確かめた。

彼の脈に手を当てると確かにあった。少なくとも生きている。

「よかった……。」

彼は戦友がまだ生きていることを確認でき、安堵した。そして、彼は落ちていたM203付きのM4A1を取る。

拾うと彼は、M203に装填されている弾頭が榴弾であることを確認。

また予備の弾薬として、彼のグレネード弾が収められているベルトを拝借した。

「戦友、借りるぞ。」

アレックスは拝借したベルトを腰に巻き付け、戦う準備を整える。

「いくか……。」

彼は気合を入れると、戦っている対策委員会へ全速力で向かった。

<10時40分>

対策委員会は先生の指揮の下、ビナーと戦っていた。

ノノミのミニガンの射撃音や、ファウストことヒフミたちによる砲

撃が着弾したときの音。

それらが大合唱のように鳴り響いており、まさに混沌としている戦場を表していた。

「またロケット弾です!!」

「うへへ飽きないねえ。」

「いくら攻撃しても、この様子だと倒せそうじゃありませんね……。」

「もつと火力が必要。」

「このままだと、私たちもやられてしまうわ!!何とかしないと……。」

ビナーの装甲は厚いことに加え、貫通したとしても致命的な一撃を与えることが出来ず、埒が明かない状況になっていた。

「来たぞ!!」

そんな劣勢の中、アレックスは戦闘に加わる。

「先生!!俺には考えがある。それが成功するかはわからんが……。実行せずに、後悔をして死ぬよりはマシだと思う。」

アレックスは先生に案を持ち掛けた。もちろん、先生は話を聞いてくれるようで。

「ビナーがビームを出すときに、口から出てくる砲があるだろう? あれを破壊しよう。」

アレックスは無線で続ける。

「おそらく装甲は厚い。だが、今こっちに榴弾を装填したM203がある。そいつでクソみたいな砲を吹っ飛ばして、集中攻撃を仕掛けるんだ。どうだ?」

先生はアレックスの案を聞くと、実行してみようと伝えてくれた。

「ファウストへ、こちらアレックス。砲撃を要請!!目標はビナーだ!!」

「あ、あわわ。そ、装填中なので待ってください!!」

アレックスはファウストことヒフミに呼びかけた。彼は強力な砲撃によって、ビナーをわざと刺激させビームを撃たせようとしているのだ。

「た、たつたいま発射しました。もうすぐ着弾すると——」
聞き覚えのある音と共に、複数の大きな爆発がビナーに生じた。
ビナーは堪らなかつたのか怯む。そしてお返し of 攻撃をしようとしたばかりに、口を開けて球を形成し始めた。
アレックスはリーフサイトを起こし、狙いをつける。ゼロインは調整済み、引き金を絞った。

放たれた榴弾はビナーの球を生成する砲に命中。そして、球の生成も停止。

無線では先生がシロコに、ドローンの攻撃を指示するのが聞こえた。

「ドローン、展開。」

冷淡な口調で告げると、ドローンは上昇。

無数の小型ミサイルは砲に向かって飛翔。飛翔したミサイルはもちろん正確に着弾。

ビナーは初めて唸り声をあげた。

装甲が破壊された箇所から、深刻なダメージを与えることに成功したのだ。

「や、やりました!!完全に砲を無効化してます!」

その声のアレックスを含め、その場にいた対策委員会は喜びの声を上げる。

「やりましたね〜。」

「おじさんは後輩の活躍を見れて、うれしいよ〜。」

「ビナー地中に潜ります!!方向は反対側……それにここから離れているので、逃げています!!」

その報告にアレックスは安堵した。しかし、まだ生きている戦友たちの元へ戻らなければならぬことも感じていた。

「対策委員会、勝利を味わいたいところだが俺は、仲間の元に行かなければならない。今回の作戦は成功だ。あのクソみたいビナーを追い払うことにも、成功したんだ。」

そう伝えると、アレックスは仲間がいるであろう方向へと背を向ける。

「それと先生、もし何かあったら俺たちに連絡を。上の都合で動けないかもしれないが……善処する。」

そう伝えると彼は、地平線に向かって走っていった。

「さて、私たちも帰りますかね。」

「そうですね。」

「…… 本当に、無事でよかった。」

戦闘の緊迫感から解放された対策委員会は、安堵の空気に包まれた。

「ホシノ先輩、何ぼーっと突っ立っているの？」

「…… いや、何も無いよ。あと、ビナーとの戦いに巻き込まれちゃって、言いそびれていたけど——

ただいま」

彼女たちは母校であるアビドス高校へと帰還した。

大人に裏切られ続けた彼女たちは、大人によって助けられた。そして『ただいま』という言葉を言えたのだ。

先生と兵士たちのおかげで——

何気ない日常はアビドスへ、彼女たちの元にまたやってくる。

8：閑話：Countermeasure

<20??年春>

キヴォトス・D・U. / ウトナピシユタイム空軍基地
キヴォトス派遣隊作戦司令本部

キヴォトス派遣隊はこの基地に駐屯している。この基地は約300人ほどの兵士が駐留しておるほか、様々な強力な兵器が集結している。

そんな基地の中核となる本部では会議が行われていた。

「これより、第三回広域戦略会議を行う。」

「まず最初にだが先日、第一武装偵察分隊がアビドス砂漠において、ビナーと呼ばれる大型の蛇に遭遇。そして、その戦力評価と今後を話していく。」

キヴォトス派遣隊最高司令官である、ミリー、は重々しく、告げる。

「ではまず、大型の蛇であるビナーについてだが、小口径の弾丸は貫くことは不可能だったようだ。これは装甲が厚いだけではなく、材質も関係していると考えられる。」

「現在、本土……まあつまりここ^{キヴォトス}ではないところで、ビナーの装甲のサンプルを分析中です。しかし、現時点で判明した報告となりますが少なくとも、タングステン並みの強度を持つと考えられ——」

会議の一参加者が報告をする。

” タングステン並みの強度、ということはずなわち戦車の装甲に等しい。そんな報告に他の参加者は驚き、一斉に発言をした。

「戦車並みの装甲を持つのだと!? それに、そんな奴が砂漠の下に潜んでいるのだろうか? なんて脅威だ!!」

「やはり、守護天使、が必要では? いやこの場合、トマホークを発射できる駆逐艦や潜水艦が適任……。」

「それに部隊の報告によると、レーザーやロケット弾などを用いて攻撃をするとのこと。レーザー兵器については現在、こちらはいわゆる電子戦用装備としてしか実用化には達していませんが、敵は物体を直接焼き払うことが可能とのこと。」「

会議は騒然とするが、ミリー將軍の低い声が響くと皆は黙る。

「そうだ。皆が騒いでいるように、戦力不足の可能性が浮上した。そのため本土に現在、原子力潜水艦一隻とさらなる航空戦力の投入を打診しようかと考えている。」

「失礼しますが、接敵した部隊の被害は?」

ミリーの声とは対称的で若々しい声が、会議室に響く。

「重大な損害はなし。あるとすれば軽傷者が複数名ぐらいだ。」

「一体どうやってそこまで、被害を抑えられたのが気になります……。」

「部隊の指揮官によると、生徒と先生の協力によって撃退することに成功したそうだ……。」

「先生……? それは一体……?」

多くの参加者は先生の存在を知らず、首を傾げる。

「ああそうだ。先生だ。先生はシャーレという部活の顧問で、連邦生徒会の会長から直に任命されたのだとか。」

「もしかしてその先生ってこちら側外部の存在だったりします?」

「接触した部隊曰く、ヘイローが確認されないことから外部の存在だ。」

それからシャーレの先生についての正体の報告、新たに必要な戦力などの議論がなされた。

「では、結論として原子力潜水艦一隻とその他の航空戦力の追加を要請。ビナーなどに対する対処法を確立させること。でいいな？」
参加者は全員頷く。

「これにて会議を終了する。」——……

<数日後>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

アビドス某所 0100

「セクター、こちらブラボー6—1。これより作戦を開始する。どうぞ。」

「ブラボー6—1、こちらセクター。了解した。目標 シヤドウ、を確保せよ。抵抗するようであれば射殺を許可する。終わり。」

物騒な言葉のやり取りを無線で交わすのはフォードである。

フォード率いる“特殊戦開発グループ”はアビドス某所において、極秘任務に当たっていた。

もちろんこれが行われているのは誰も知らない。

Special Mission Unit という分類に属する。これは活動内容や部隊の存在そのものが秘匿される部隊のことを指す。

つまり、特殊部隊の中でも更なる機密性が高い任務の遂行が求められる部隊ということだ。そのような任務の特性から、特殊部隊の精鋭中の精鋭が集められている。

さて、そんな部隊に与えられた任務の目的は、先生が初めて遭遇したゲマトリアの捕縛。

先生からゲマトリアの存在を聞いた派遣隊は、今回の件の首謀者と
して直ちに追跡を開始。

開始から3日後には、居場所の特定に成功。そして今はまさに、そ
の対象がいるとされる建物に強襲し、捕縛する作戦を実行しているの
だ。

「目標の建物を確認。」

フォードはGPNVG-18と呼ばれる4眼式の暗視装置越しに、
捉えていた。

アビドスは夜になるとかなり暗く、ライトなどがなければ歩くこと
すら困難である。

最悪なことに月明かりのみしか、頼りにならないこともあるのだ。

そんな暗闇を暗視装置が光を増幅し、緑色に塗られた視界として明
瞭に確保する。

「ブラボー6、こちらブラボー6-7。周辺にPMC兵が複数。注
意されたし。どうぞ。」

インカム越しに、周囲を監視している隊員からの報告がフォードに
届く。

そしてちょうど、一人のPMC兵がフォードたちの前に現れる。す
るとフォードはレーザー装置を起動し、PMC兵の後頭部に当てた。

「3でいくぞ。3、2、1。」

炭酸水のペットボトルを開けたとき同じような音が響く。そして、
後頭部に数発もの銃弾が命中。

PMC兵はあっけなく倒れこんだ。いくらキヴォトスにいる生徒
でも、数発のヘッドショットを耐え、立つことは困難である。

「グッドショットだ。前へ進むぞ。」

フォード率いる強襲部隊は建物の入り口に近づく。入口の近くの
警備は薄く、4人程度しかいなかった。

「3で排除するぞ。3、2、1。」

再びサプレッサーの独特な銃声が響く。誰にも気づかれることな
く4人とも排除し、入口を確保することに成功した。

「扉はどうなっている？」

フォードが問いかけると、他の隊員が扉を調べる。

「破壊は可能です。どうしますか？」

「爆破しろ。」

「了解。」

爆発物の取り扱いに長けている隊員が近づくと、ドアにC4を設置した。

そして――

「爆破!!」

扉に仕掛けられたC4は爆発し、扉を吹き飛ばした。

吹き飛ばされるとすぐに隊員は突入していく、そして数名の隊員は入口を確保するために残る。

室内に入るとすぐに銃声が響いた。しかし、突入した隊員はすぐに撃ち返し数人のPMC兵を無力化。

「セクター、こちらブラボー6―1。エントリーポイントクリア。どうぞ。」

「ブラボー6―1、こちらセクター。了解、このまま任務を遂行せよ。」

フォードは本部に無線を通じて、報告。

「にしても、なぜこんなところをPMC兵が守つていやがるんだ？」

「もしかしたら、PMCと何か繋がっているかもしれないね。それを知るためにもまず、制圧を……。」

それから室内のクリアリングが徹底的に行われた。

もちろん中を警備しているPMC兵は全て、倒すことになった。

<数分後>

「セクター、こちらブラボー6―1。建物を確保、'シヤドウ'の姿は見られない。ミッション失敗だ。どうぞ。」

「ブラボー6―1、こちらセクター。了解、記録媒体などの証拠物品をすべて回収せよ。合流地点アルファにおいて、ナイトストーリーカーズ

が待機中。終わり。」

端的に言えば作戦は失敗したのだ。シャドウこと黒服の姿はなく、あるのはPMC兵たちだけであった。

「とりあえず、急いで証拠になりそうなものを集めろ！敵の応援が来るかもしれないから、急げ急げ!!」

フォード含む25名の隊員は、あらゆる証拠となりうる物品を確保する。

その中にはいくつもの奇妙な物品があり、それぞれの隊員の目を引かせた。

「これはいったいなんだ…？『神秘と恐怖についての適応実験』？こっちは『色彩と神秘について』？全くもって意味不明だな…。」

フォードは発見した訳のわからない証拠品を読み上げると、回収用のバックに放り込んだ。

「ブラボー6-1、こちらセクター。無人偵察機の報告によると敵増援部隊が、そちら側に移動していることが判明した。直ちに退却せよ。」

インカムに報告が突然入る。

「セクター、こちらブラボー6-1。了解、直ちに撤退する。」

フォードの報告が終わると、部隊は制圧した建物から撤退したのだった。

<数日後>

キヴォトス・D・U / ウトナピシユタイム空軍基地

キヴォトス統合特殊作戦コマンドセンター

この基地には、作戦司令本部が存在する。しかし、活動内容や存在

そのものが黙秘される部隊を指揮する司令部が、この基地には存在していた。

つまり裏の存在である。

さて、そんな機密性の高い司令部では先日行われた作戦の結果について、議論がなされていた。

「先日、DEVGRUを主戦力とした例の首謀者捕縛作戦、Operation shadow,が行われた……。しかし、結果は失敗。代わりに大量の通信記録などの証拠物品の確保に成功か……。」

「ええ、そうです。そして現在、その証拠物品の解析などに尽力しております。」

「ふむ。他には報告は？」

「それが……。これを。」

そう言って彼は解析した通信記録などを上官に公開する。

「これは……？」

「まだ途中までしか解析できておりませんが、どうやら我々が捕獲しようとした首謀者が所属するグループが、存在していたことが判明しました。」

「なんだと？まさか、テロ組織みたいなものか？」

「それがよくわかりません。少なくとも例の首謀者を含め4人いることが判明しています。」

「どうしたものか……。おそらく、連邦生徒会に報告しても我々の極秘作戦から得られた情報を、信用してくれないだろう。チャーレの先生には……。いや、報告はやめておこう。これに関しては我々が今後、追跡することにしよう。」

「正気ですか？ただでさえ、正体が不明ですよ。」

「あと、通信記録から送信位置は割り出せたのか？」

「ネガティブです。送信位置に関して綿密な調査を行ったところ、存在しない可能性があるかと判断されました。」

「厄介だな……。今後は、そのグループに関して徹底的に調査し、首謀者を捕縛するでしょう。」

「了解です。それと、『色彩』や『恐怖と神秘』について我々が調査する必要があります。」

「となると?。」

「トリニティ総合学園の古書館にはおそらく、それらに関する情報があると考えられます。」

「トリニティか…… たしかシャーレの先生がミレニアムで色々と活動した後、そっちでも活動をするつもりだったのだな……。」

「ええそうです。エデン条約の締結が間近となっている今、我々が迅速に動く必要があります。」——…

<20??年春>

私

トリニティ総合学園・テラス

——「こんにちは先生、こうしてお会いするのは初めまして、ですね。私はティーパーティーのホスト、桐藤ナギサです。」

私に語り掛けてくる少女は桐藤ナギサである。彼女はいかにもお嬢様といった格好をしているのが、特徴的であることだけではなく、うして私と接待している間も、紅茶を優雅に飲んでいる。

「そしてこちらは、同じくティーパーティーのメンバー、聖園ミカさんです。」

ナギサと同じく華やかな制服を着こなし、ピンク色の髪が特徴的なミカが紹介される。

「あらためて、お初にお目にかかります。私たちがトリニティの生徒会、ティーパーティーです。」

「へー、これが噂の先生かー。あんまり私たちと変わらない感じなんだね?。」

ミカはナギサと違い、カジュアルな言葉遣いで接してくるととも

に、私をまるで宇宙人を見るかのようにジロジロと見つめた。

「なるほどー、ふーん…… 私は結構良いと思う!!ナギちゃん的にはどう?」

「…… ミカさん、初対面でそういった話はあまり礼儀がなっていないよ。愛が溢れるのは結構ですが、時と場所を選びましょうね。」

「ううっ、それはまあ確かに……。先生、ごめんね?まあとりあえず、これからよろしくってことで!!」

ナギサはミカの私に対する言葉遣いとその話題について叱責すると、ミカは私に謝る。

(こちらこそ、よろしく。)

ついでに挨拶もされたので、私は挨拶をする。

「…… トリニティ外の方が、このティーパーティーの場に招待されたのは、私の記憶では先生が初めてです。普段は、トリニティの一般の生徒たちも簡単に招待されない席でして……。」

「あー、何それーナギちゃんちよつといやらしい!恩着せがましい感じー!」

どうやらナギサがわざわざトリニティ外の者である私を、ここに招待したのは深い訳がありそうな感じだった。

「…… 失礼しました、先生。そういった意図は無かったです…… それはさておき、ミカさん?」

ナギサは先ほどミカに叱責をした時と同じ声色に変えた。しかし、それが意外と効果があったようで。

「あ——ー…… ごめん、大人しくしてるね。できるだけ。」

——「こうして先生を招待したのは、少々お願いしたいことがあります。」

それからは私はナギサからなぜ、私がかここに呼ばれたのかを説明してもらったことになった。

彼女曰く、落第の危機に陥っている生徒たちを救ってほしいというものだった。

「どうやら、”エデン条約”と呼ばれる条約の締結が近づいていることで、人手が足りない。」

そんな時にシャーレという存在を新聞で知ったことで、今に至ることだった。なお、この補習授業部には私が見たことのある生徒、ヒフミ」が、含まれていたが……。

とにかく、私は困っている生徒を助けたがる性分なので、この依頼を快く引き受けることにした。

ところでティーパーティーは三人の生徒会長がいる、と私はアロナから聞いていたがこの場にはナギサとミカの二人しかいなかった。

そのため私はもう一人の生徒はどこにいるのか尋ねる。

「セイアちゃんは今、トリニティにいないの。入院中で……。」

ミカがもう一人の生徒会長について話し始めると、ナギサも補足の説明をしてきた。

「本来であれば、今のホストはセイアさんだったので…… そういった事情で不在のため、私がホストを務めているところです。」

「元々ティーパーティーのホストは、順番でやるものだからね。」

どうやら何か体にあつたのか、今はセイアは入院していることが私に知らされた。

（そっか、早く良くなると良いね…… 今聞きたいのはこれぐらいかな。）

私は知りたい情報を知ることが出来たので、その感謝とセイアが無事でいてほしいことを伝える。

「ではこれからよろしくお願いしますね、先生。」——……

こうしてナギサとミカとの会話を終え、私は正式に補習授業部の担任を務めることとなった。

そして、私はこれから担当する補習授業部の生徒たちを集めたのだが……。

「あらあら、コハルちゃん。この格好はちゃんとした制服ですよ♡」

「そ、そんなエッチな恰好で学校を徘徊するバカはいないでしょ!! この公共破廉恥罪!! 早く制服に着替えて!!!」

「一体ここで何が始まるんだ? 私は立てこもるのは得意だから……。」

「せ、先生いったいどうすれば？」

私が担当することとなる生徒たちは、それはとてもとても個性的なメンバーであり、これからの彼女たちとの関わりに期待を抱くとともに、胃を痛めることとなるのだが……。

Blue Archive: Task Force
| The kiss of death |
9: エデン条約編: Turning point

<20??年初夏>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉
トリニティ総合学園・校門

「ここがトリニティ総合学園か……。」

そう呟くのはフォードである。彼は統合特殊作戦コマンドJSOCの命令により、トリニティの古書館で情報収集を行う任務に就いている。

そして現在、彼はそのトリニティの敷地へと踏み入れる直前の位置で、足止めを喰らっていた。

「流石に先生以外の大人を学校に入れるのはちよつと……。」

「いや、調べたいことが——」

「すみません、規則なんです。」

フォードたちは校門を守備している正義実現委員会から、敷地へと進むことを拒まれていた。これでは、任務を遂行できない。

「大尉、どうします?。」

フォードに語り掛けるのはピアーズ中尉である。彼も同じく、DEVGRUの隊員でありフォードが指揮するブラボーチームに所属している。

「セクターと連絡を取るしかないか……?。」

拒まれた彼らは無線機を通じて、セクターと連絡を取った。

「セクターへ、現在トリニティの校門前において足止めを喰らっている。どうすれば?。」

「こちらセクター、しばらく待機せよ。」

「了解。」

彼らはセクターからの返事が来るまで、待つこととなった。待つている間は、くだらない雑談を交わした。主な話題として、シャーレの先生の良からぬ噂、というものだった。

ある生徒曰く、足を舐められたとか。また噂によると、色々な女子生徒を建物に連れ込んでいるとか。本当にどうでもいい話題について、話していたのであった。

そんな風にしばらく暇をつぶしていると、無線機から返答が来た。

「こちらセクター、ティーパーティーからトリニティへ入る許可を貰った。案内役がそちらに——」

「あれ、お客さんは先生みたいな感じなんだねー？」

セクターの通信が終わる前に、案内役がフォードたちへやってくると共に話しかけてきた。

「君は一体？」

「私は聖園ミカ。あなたたちを古書館まで連れていってとナギちゃんに頼まれたから、今ここに来たわけ。」

「ああ…俺はフォードだ。こっちはピアーズだ。」

フォードたちも名前を明かした。

「じゃあ今から行くから、ついてきてね。」

ミカはそう伝えると、フォードたちを古書館まで案内する。

道中、様々な建物が見えるとミカは丁寧に教えてくれた。

「こっちの建物は第一校舎で、向こうの方は第三校舎で…。あ！あれは——」

「にしても、とてつもなくデカいな…。。」

「全くですね。」

トリニティの広大な敷地にフォードたちは呆れ返るほどだった。

「ねえ、そういえばあなたたちは古書館で何をするつもりなの？」

急にミカがフォードたちの目的を訪ねる。もちろんフォードはその質問に答える。ただ本来の目的を偽って。

「キヴオトスの起源…。歴史だ。」

「歴史ねー……。そういえば、トリニティの歴史って知っている?」
「いや。何も。」

「トリニティの歴史はね、今から約——」
それからフォードたちはミカからトリニティの歴史を教えるも
らった。

大昔、つまりトリニティが出来る前は様々な組織が紛争していたらしい。しかし、ある時「その紛争をやめよう」という風潮が出てくることでパテル、フィリウス、サンクトウスといった主な三つの分派のほかも集まって、第一回公会議¹が開かれる。

これによって敵対していた組織は、争いをやめて一つの学園になった。そして現在に至るということだった。

「マジかよ……。」

フォードたちはこんな穏やかな学園が血塗られた歴史の上に立っているとは思っていないはずもなく、彼らは衝撃を受けた。

「まあ、一つの学園になれた²、とか言っているけど最後まで、一つになることに大反対した学園があつてね……。あ、着いたよー!」

そんな風にミカとやり取りをしていたフォードたちは古書館に着く。こんな長話でもしないと学園内を移動できないのか——と、フォードは思ったのだが。

「案内に感謝する。」

フォードが感謝すると、ミカからストラップ式のカードを一枚、それぞれ渡された。

「はい、これ入館証。一応、ティーパーティーの権限で急遽発行した
ものだけど……。中に入ったら、図書委員会の子に見せてね!!」

「ここまで用意してくれるとは……。」

「もし、何か困ったことあるならいつでも頼ってね!!あ、でも最近は
忙しいから……。じゃあ、またねー!」

そんな風にミカとのやり取りを終えると、彼らは古書館の入口へ近づく。そして中に入る。

古書館の中は一般的な図書館と比べると暗く、比べるとピアー
ズたちがいる入口の光が最も明るい光源だった。

「暗視装置かライトを持ってくればよかったな……。」

フォードはそんな風を持ってきた装備に後悔した。フォードたちが持ってきた装備は腰のベルトに巻き付けられている拳銃と数本のマガジン、もし戦闘に巻き込まれて被弾した際に止血するための包帯しかない。

「でも、これ入らないと調べられないですよ。」

「はあ……。入るかあ……。」

そんな風にやり取りをすると、彼らは中に入る。

かろうじて目の前が何も見えないほど真つ暗なわけではなく、物体の輪郭がうつすらとわかるような暗さであったので中を歩く。

「ひいいっ!?!」

しばらく探索をすると、少女の叫び声が聞こえる。

「なっ、だっ、だだだ誰ですか?!泥棒!?!」

「こここの入館証は貰っている。図書委員会の委員長に会わせてほしい。」

流石に泥棒呼びされた彼らは、任務を遂行する以前に面倒ごとに巻き込まれたくないので、委員長と会わせるように要求した。

「……ど、どうしてです?」

急にあっけにとられたような声色で訪ねてきた。

「ここで調べたいものがあるから来た。目的はそれだけだ。」

「そう、ですか……。ところで今更ですが、どちら様で……?二人ともヘイローがないようなので……。」

どうやら声の主である少女はこんな暗闇越しでも、誰かを識別できるくらいの良い目をお持ちのようだ。

「俺はフォードだ。こっちはピアーズ。」

「……所属は?」

所属を尋ねられた彼らは少し戸惑う。秘匿された部隊に所属する彼らは、素直に答えるわけにはいかない。そのため、ごまかして答える。

「キヴオトス派遣隊の隊員。」

「『キヴオトス派遣隊』?例の軍隊の……?」

声の主である少女は困惑した声色を示す。しばらくの間、静寂が貫かれる。

そして少しの静寂が続くと、少女は答える。

「と、とりあえず明るくしますね…。」

そう伝えられると古書館は暗闇が明るくなった。

そしてフォードたちの前には少女がいた。黒色の髪が特徴的で、右手には大きな本を抱きかかえている。

「初めまして、こんにちは。」

とりあえずフォードたちにとつて、彼女は初対面の相手なので、挨拶を交わす。すると、少女からも挨拶が返ってくる。

「こ、こんにちは…。えっと、私は古関ウイ…。この古書館を運営している、図書委員会の委員長、です…。」

ウイは人見知りな性格なのか顔の頬を赤く染めながら、自己紹介をする。

「それで、その…。どうして大人たちはここへ…。？」

「さっき言ったように調べたいことがあるんだ。」

「それは、いったい…。？教えてくださいませんか？」

「神秘と恐怖に関する文献と、色彩についてだ…。」

フォードが用件を述べると、ウイは戸惑いを見せた。

「え、えっと…。前者は聞いたことありますが…。後者は…。」

あ、あと、ここにはそれらの本はないと思います…。」

どうやら神秘と恐怖についての文献はあるようだ。しかし、ここにはないらしい。

「どこにあるのですか？教えてください。」

ピアーズは本の居場所を尋ねる。

「え、えっと場所はわかりませんが、シスターフードが知っていると思います…。」

「シスターフード？確か、トリニティの派閥…。いや組織だったか？」

フォードは道中でミカに伝えられた記憶を頼りに、思い出す。

「そうです。よ、よくご存じですね…。」

「いや、さっきのティーパーティーの子… 聖園ミカという子に教えてもらった情報ですよ。」

「あーだからあなたたちの入館証が…。なるほど、よくわかりました。」

ウイは何やら腑に落ちた様子だった。

「それでシスターフッドはどこに？」

フォードは尋ねる。

「え、えつと、確かここから——」

フォードたちはウイからシスターフッドがいるとされる場所への、行き方を教えてもらった。

シスターフッドはどうやらトリニティの大聖堂にいらしく、そこまで自力で辿り着く必要があること。敷地が広く、フォードたちは土地勘がないため簡易的な地図が渡された。

「ここまでしてくれて…。ありがとうございます。」

「い、いや私は当たり前のことを…。」

「本当に助かるさ。俺たちはここについてあまり知らないからな…。」

そんな風にやり取りをすると、フォードたちはシスターフッドがいるとされる大聖堂へ向かい始めた。

<数分後>

フォードたちはウイから渡された地図に従って、大聖堂へと向かっていた。

そんな道中、彼らは校舎を覗くと誰もが知っているであろう人物を見かけた。

「あれは…。シャーレの先生？」

そう言葉に出したのはピアーズである。

彼らが目にしたのはシャーレの先生だった。先生はどうやら、試験の監督をしているような様子が窓からわかった。

「おいおい、噂の先生だぜ?」

今日話題として出された先生に対し、フォードは窓越しに聞こえないように小声でそう呟く

「ええ、あれが……噂の変態ですか……」

少々、彼らは窓越しに先生を観察する。先生の容姿、服装、髪型とありとあらゆる観察できる情報を目に焼き付けた。

「まあ、大聖堂行く必要があるせいであつて今日、話題となつた先生とは話せなさそうなのが悔しいが……」

「同じくです。」

彼らは与えられている任務を思い出し、人間観察をやめる。

そして再び彼らは歩き出す。しばらく歩いていると何やら集まりが出来ているのが、遠くから分かった。

「なんだあの集まり?」

「何やら、騒いでいますね。」

彼らは遠くからその集団を眺めていると、彼女たちは何をしているのが次第に分かった。

「あれ……? 転んでどうされましたの……?」

「あはは!! まるで犬みたい!!」

「醜い姿ですね……」

「や、やめて……」

どうやらあの集団は一人の生徒をいじめているようだった。

その生徒は黒髪や、茶色といった色よりも少々目立つ白い髪が特徴的だった。その特徴的な色から、その場で何が起きているのかを示していた。

いじめの対象となっている生徒は殴る、蹴るといった暴行を加えられていた。それだけではなく罵詈雑言も浴びせられている。

「うわ、あの光景は……最悪だな……」

「近付いても、無視したほうが問題に巻き込まれなさそうです」

ね。。。」

彼らは現在、この任務に就いているあたりでできる限り他の問題に介入したり、巻き込まれたりするのは控えるようにJ S O Cから伝えられていた。

それに彼らの装備は拳銃であり、生徒たちが所持する小銃などと比べると真正面から戦おうとするのであれば、少々火力不足だと感じていたのであった。

それらの理由から彼らは無視するという結論を下し、通りかかるのだが。

「た、助けて。。。」

「ふふ!! 犬が何か言ってますわよ~~~~?」

「。。。お願い。。。誰か。。。」

嗚咽交じりの助けを求める声が入るたびに、彼らの足が遅くなる。いくら特殊部隊といえども、一人の人間であることは変わらない。

そんな風に良心を痛めながら間もなく通り抜けようとしたとき、いじめている集団の何人かに声を掛けられる。

「あら? あなたたち見ない人ですね。。。もしかして、大人?」

「これを見て、大人は何とも思わないのね~~~~」
そう言つて一人はいじめの対象となっている女子生徒を、彼らの前に蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた女子生徒は立とうとするが、頭の上に足を乗せられる。

そして、力いっぱい白色の髪に靴跡が残るのかというぐらい踏みつけられた。

「つつ!! 痛い、痛い、痛い!!!」

「ねえ、あなたたちはこんな姿を見て爽快だとは思わない?」

「この光景が最高であるのは、当然ですわよね~~~~???」

目の前の凄惨な光景に彼らは顔を合わせる。

「これどうします?」

「どうするって。。。」

フォードは迷う。助ければ女子生徒は今の状況から救われるかもしれない。

しかし、助けたらフォードたちは問題を起こしたとしてJSOCから、何らかの処分を受けるかもしれない。

ほんの少し考えると、彼は一つの結論に至った。

「やるぞ…俺は左の3人を。お前は、右の2人だ。」

「合図は？」

「今だ——」

フォードはそう伝えると、腰のベルトに収められている拳銃であるMP17を勢いよく取り出した。

取り出すとストックが展開されたのと同時に、ダットサイト越しに狙いを定める。

そして目の前に立っている一人に3発。胴体に撃ち込んだ。

「うっっ!!」

至近距離で喰らった弾丸は効果的であったようで、地面に倒れこむ。そして、同時にピアーズもM17で応戦。

ピアーズは数発ほど発砲するとあつという間にして、右にいた女子生徒2人を倒す。

「い、いきなり撃ってくるなんて——」

フォードが担当する残りの2人の生徒のうちの一人が、不意打ちを仕掛けられたことに対して何か不満を伝えようとする。

しかし、言い切る前に彼女たちはフォードの射撃によって無力化。結果的にリンチした集団を完全に倒してしまった。

「あ、あ、ありがとう…。大人の人が戦って助けてくれるなんて…。」

女子生徒はフォードたちに礼を告げる。

「まあ…。な…。」

しかし、先程の発砲はサプレッサーを装着していなかった。これにより空に盛大な発砲音を響き渡らせ、その発砲音を聞きつけた野次馬による人だかりが出来ていた。

そして、発砲を聞いたのは学園の治安維持を担当している正義実現

委員会も例外ではなかった。

「あなたたち!!そこで何をしているのですか!?学園内で発砲は禁止ですよ!」

彼らは正義実現委員に怒鳴りつけられた。その後彼らは、その場にした生徒達と共に連行された。

<数分後>

「では、あなた達はあの生徒を救うために戦ったというのですか?」

「それだけだ。」

「そうです。」

彼らは連行された後、正義実現委員会が管理する教室にて取り調べを受けていた。

そして彼女たちはフォードたちに質問したのだ。質問は至って単純で「なぜ、発砲し生徒を傷つけたのか?」、「あそこで何をしていたのか?」といったものだった。

もちろん彼らにはありのまま起こった事実を説明した。

「……わかりました。でもいくら来賓の方とはいえ、うちの生徒に手を出すのはちよつと……。発行元のティーパーティーに処分として学園内に入る許可証を停止させるように、伝えます。」

「!!」

その言葉にフォード達は焦った。任務の目的を達成するためにはトリニティに入る許可証が必要であるため、許可の取り消しは非常にまずいのだ。

最悪、侵入して情報を入手する方法もあるが軍事衝突した時の損害が分からない。それらの理由から、わざわざ許可証までも貰ってここに彼らは来ているのだ。

「助けなければ良かったかもしれないですね……。」

不意にピアーズが不満を口にした。

「このままだと上からかなり重い処分下されちゃいますよ……。や

はり、あの時助けなければ……。」

「いや…… そんなことはない。」

フォードは応える。

「俺たちはあの時、あの子のために戦った。任務としてではなく、己の信念としてだ。」

「でも……。」

「言いたいこと分かるさ。でも、あの時助けなければあの子はどうなっていたと思う？ その後ずっといじめられ続けて、退学したかもしれない。あるいは……。」

その言葉にピアーズは黙った。彼も学生生活を過ごしことがあるため、そのいじめられた子の末路はよくわかっていた。退学するか、自ら命を断つか。

「…… 大尉の言いたいことはよくわかりました。でも、このままだと処分下されちゃいますよ?」

「どのみち、あの行動は最終的に俺が判断したことだ。俺の処分は相当重だろう、だけどお前は——」

「許可証の取り消しは行いません。」

不意に少女の声が彼らの会話を遮る。

「君は……。」

「ええ、さっき伝えたように取り消しません。ただある要求を呑んでからです。」

10：エデン条約編：Contact

<20??年初夏>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園・正義実現委員会教室

「ある条件だと…?」

「ええ、そうです。今ここで詳しく伝えるのは避けませんが。」

フォードは話しかけてきた少女と会話する。それに、許可証の取り消しを避けられるのなら興味があったから。

「ところで、あなたのお名前は?」

ピアーズは少女に名を尋ねる。少女は、他の生徒よりも明らかに華やかな制服を着用している上、この学園の生徒会であるティーパーティーが発行した許可証の取り消しを止めることが可能であるかのような発言をしていた。

そのため、その少女の所属などが気になったのだ。

「ああ失礼、私の自己紹介が遅れましたね。私はティーパーティーのホスト、桐藤ナギサです。」

「!!」

彼らは驚いた。なぜなら、彼らの前には学園を統率することが出来る権力の持ち主であるナギサが目の前にいるからだ。

「それで、私の話には興味がありますか?」

「… 一応、興味はある…。」

「大事な話なので、ここではないどこかでお話しましょうか。ついてきてください。」

ナギサはそう伝えると、フォードたちと共に移動した。

<数分後>

トリニティ総合学園・テラス

「さて、ではお話ししましょうか。」

ナギサは椅子に座りながら、語る。

「あなたたちは知つての通り、先ほど問題を起こしましたよね？ 本来なら、来賓の方が持つ許可証を取り上げになるのですが、特別に取り上げをしないという結論に至りました。」

「でも、それって条件付きですよ？」

ピアーズは尋ねる。

「ええ、その通りです。では、その条件についてお話ししましょう。端的に言えば、私たち内部の問題に介入して欲しいのです。」

「内部の問題……？」

「お恥ずかしながら、現在のトリニティは複雑な状況に置かれております。エデン条約の締結が間近となつている今、そのような問題に対処しなければ私自身が不安なのです。」

「エデン条約……確か、ゲヘナとトリニティの平和条約か……。」

フォードはミカに教えてもらったエデン条約を思い出し、呟く。

「そうですね、よくご存知ですね。あれは私たちにとって必要なものです。そして、実現のためにあなたたちは私に協力してほしいのです。」

「なるほど、概要は掴めたが具体的に俺たちは何をすることになるんだ？」

「……裏切り者を探して欲しいのです。」

「裏切り者……？なぜ、俺たちが裏切り者を探す必要が？」

「……。」

ナギサは少しの間を置いてから、答える。

「裏切り者の狙いはエデン条約締結の阻止。先ほど、軽くエデン条約について説明致しましたがその重要性はお分かりでしょうか？」

「少しはな……ゲヘナとトリニティとの全面戦争を止めたいのだから？」

「ええ、そうです。私はそのためにわざわざ一度は空中分解仕掛けたものを、ここまで立て直しました。しかし、その条約の締結を阻止しようとするものがあることを耳にしまいました。」

ナギサは眉間にしわを寄せた表情で、語る。

「そして、それを企む人物は誰かわからず特定には至りませんでした。そこで次第の策として……可能性のある容疑者を一か所に集めました。裏切者はそこにいます、誰かはわかりませんが。」

フォードは話の流れから嫌な方向へと向かっていることに気付いた。そして、若干不愉快な気分を襲われた。

「……まあつまり、その裏切り者を一か所に集めたのが補習授業部と呼ばれるいわば豚箱です。そしてその豚箱の作成には、シャーレの先生の権限を少しお借りしていただきましたがね。」

「!!」

彼らは驚く。なぜなら、シャーレの先生がこんな血生臭いことと関わっているなんて想像できなかったからだ。

「さて、あなたたちは補習授業部にいる裏切り者を探していただけですか？」

「少し時間をくれ。」

フォードがそう伝えると、ピアーズと二人で話し合い始めた。

「これ、面倒ごとに巻き込まれていませんか？」

「全くだ。でも、この要求を呑めば情報入手できる。そうだろうか？」

「……上と相談するべきだと思います。」

「……今からでも連絡するか……。」

フォードは無線を手に取り、通信を開始する。

「セクター、こちらブラボー6-1。どうぞ。」

「ブラボー6-1、こちらセクター。何があった？どうぞ。」

「問題が発生。これから概要を……。」

フォードは彼らの指揮を行っているセクターことJ S O Cに、今彼らが置かれている状況や起きたことを全て説明した。

「……情報を入手することを目的として行動せよ。終わり。」

説明を受けたセクターは無線でそう伝え、通信を終了した。

「結局のところ現場の判断に任せるといふことか。」

「……少なくとも情報の入手を優先するとなるとやはり……。」

「わかったぞピアーズ。もう何も言わなくても良い。同じ結論に至ったのだからな。」

彼らは互いに顔を向けて話し合うのをやめ、ナギサの方へと向ける。

「どうですか？」

冷淡な声が彼らを突き抜ける。

「協力する。」

「交渉成立ですね。あなた達が欲しい情報はミカさんから伺っております。あと明日お越しく下さい、早速頼みたいことがあります。私からの頼み事を全てこなせば情報を差し上げましょう。では。」

彼らはテラスから移動した。

<数十分後>

トリニティ総合学園・校門

交渉を終えた彼らは校門を出たところに待機していた。

「セクター、こちらブラボー6―1。回収地点アルファにおいて待機中、どうぞ。」

「ブラボー6―1、こちらセクター。了解、黒のSUVが回収に向かっている。合流せよ。終わり。」

フォードは無線で回収の要請をし終わると、空を見上げた。少し焦げたようなオレンジ色の雲が、交互に重なっていた。つまり、夕方である。

「なあピアーズ。お前はあの交渉についてどう思う？」

不意にフォードはピアーズに尋ねた。

「どうって……今は致し方ない判断だと思っっています。ただなぜ部外者であるこっちが探すことに？」

「それは俺も同じだ。絶対に何か裏があるに違いない。」

「とにかく、明日またここに来るんですよ。装備とかどうします？」

「……。」

フォードは沈黙する。今日、何人かの生徒を相手にしたがあれはあくまで相手が警戒していたわけではないからだ。だから、あの時の奇襲攻撃は通用した。

ただ逆に仕掛けられた場合はどうなる？おそらく、一人や二人程度ならまだ反撃の機会があるかもしれないがそれ以上となると、流石に火力不足だろう。

それらを踏まえてフォードは答える。

「今日みたいな私服で行くとしよう、ただ愛銃と共にね……。」

「わかりました。」

ピアーズが返事を返すと彼らの目の前に、黒塗りのSUVが停車する。

「来たみたいだな。」

フォードはそう告げると、後部座席に彼らは乗車。帰還したのだった。

<翌日>

トリニティ総合学園・テラス

「あら、おはようございます。今日は昨日と比べて随分物騒な格好ですね。」

ナギサはテラスに集まったフォード達をジロジロと見つめる。そ

れもそのはず、彼らは一般的な私服の上に数本のマガジンが入っているタクティカルベストを着用。

そして、彼らの手によってカスタムされた上、スリング付きのMk.18を装備。加えて、ヘルメットを片手で持っている。昨日の様子と比べ、この完全に武装した姿に口を出さずにはいられないだろう。

「これが俺たちの仕事着だ。で、何をすればいい？」

「ああ、わざわざあなた達と交渉したものですからね。昨日の伝えたと通り、裏切り者を探していただきたいと思います。」

ナギサは紅茶を少し口にしたあと、純白のテーブルクロスの上に置く。

「そしてその裏切り者ですが……補習授業部には4人の生徒がいます。きつとその4人のうちの誰かでしょう。あるいは————」

「全員とでも言いたいのか？何を言っているんだ……。」

フォードは蔑むかのような目線でナギサを見つめる。いくらなんでも全員が裏切り者の可能性があるというナギサの持論は、流石に馬鹿げていると考えたからだ。

「……可能性としてなら十分だと私は思いますけどね。さて、改めてあなた達がこれから行ってもらうことを説明させていただきます。」

ナギサはそう伝えると、彼らに説明を始める。

「まず、トリニティの別館……すなわち合宿所へ向かっていたいただきます。そこで補習授業部と接触してください。そうそう、表向きはこれから合宿所を管理ないし警備することを、私たちに依頼されたというのでお願いします。」

ナギサは彼らに合宿所の位置を記した地図を二枚差し出す。もちろん差し出された地図をフォードたちは受け取り、地図を眺めた。

「あなた達は裏切り者を見つけることが出来たら、直ちに私に教えるようお願いします。ではこれにて説明は完了です。何か質問はございますか？」

「……無しだ。」

フォード達はナギサとの会話を終えると、合宿所へ向かったのだった。

<数十分後>

トリニティ総合学園・別館／合宿所

ナギサから渡された地図をもとに、彼らは広大な敷地内にある別館へ数十分かけて、徒歩で移動。彼らが目的地に着くと、別館の様子を眺めた。

「所々、外壁の塗装が剥がれてたり道に草が伸びきっていますね。」

「ああ、そうだな。どうやらそこまで整備されてなさそうだな。」

合宿所の建物は全体的に古びた感じが伝わるほど、劣化した箇所が存在していた。そんな建物の中へ、フォードたちは足を踏み入れた。足を踏み入れると、外観と比べ室内はかなり整備されているようだった。……ただ埃が少々、舞っているが。

「外とはえらく様子が違うな。てっきり、虫やらがかなり住み着いているゴミ屋敷かとも思っていたのだが。」

室内は確かにやたらと綺麗であり、しかも別館とはいえ装飾も華やかであった。

「いくら別館でもお嬢様学校の名の通りですね。」

彼らは煌びやかに施された内装に驚きつつ、補習授業部との接触を図るため内部を探索をし始める。しばらく、彼らは探索を続けると階段を発見した。そこから彼らは上の階へ移動。

二階に上り、廊下へと出る。そこには他あまりと変わらない窓があった。フォードはそこから景色を眺めた。

「……あれはプールか？もう水泳の授業がある夏だつていうのにこんなに汚いとは……。」

フォードが目にしたのは水が入っていないプールである。プールは一年に数回、水泳の授業で使われるぐらいの頻度であり、それ以外

全く使われない。そのため、どこから来たのか分からないたくさんの葉や枝、側面にこびりついた濃い緑色の汚れが遠くからでも視認できた。

「もしかしたら、ここ自体あまり使われていないかもしれないですね。あるいは水泳の授業がないとか。」

「にしても懐かしいな、ただ俺の高校時代はプールなんて授業はなかったがね。クソガキ時代以来だ。」

「自分の高校はありましたね。確かこの光景は何度も見ましたし、掃除をさせられましたよ。」

彼らはそんな風にかつてあった学生時代、青春の記憶を懐かしんでいると、突然横からか少女に声を掛けられた。

「きゃっ!!だ、誰!?もしかして、不審者!?!」

フォードたちはその声の元へと、体を向け少女を目にした。少女は、体操服を着ておりピンク色の髪の毛だがミカのピンク髪とは少し違う色であった。

すなわち、下江コハルである。

「俺たちは不審者じゃない、これを見てくれ。」

そうフォードが伝えると、敷地に入ることを許可した証明書を彼女に見せる。

「え?…この建物の警備を任されているの?..?」

「数日前にティーパーティーに依頼されたものでね...。」

「あ!…そうなの!?!でもなんで大人が?..?」

「俺たちはキヴオトス派遣隊の隊員さ。」

「ま、まあ。大人といってもちゃんと正式な証明書を持っているなら、不審者じゃなさそうね!」

こうしてあっさりとした誤魔化すことが出来てしまった。コハルは良い子であるが、そこまで物事を深く考えない。そして政治や社会情勢について疎く、彼らの存在をあまり知らなかったのだ。

「ところで名前は?」

「わ、私の名前は——」

それから軽く、互いに名前を教え合うと次にフォードは補習授業部

の顧問こと先生に会いたいと伝えた。その要望を聞き入れた彼女は、あつさりと承諾し先生の居場所まで連れて行ってくれた。

その間彼らは「ああ、なんて良い子なんだろう。」と思いつながら、ナギサの裏切り者を探す云々の言葉を頭の隅に追いやったのだった。

そして、コハルの案内があつたおかげで先生を発見した彼らは以前、先生と接触したことがあるアレックスのように挨拶を交わす。大人同士の社交を済ますと、コハルではない少女の声を耳にする。

「先生く、掃除終わりましたよ。」

声の主である彼女はそう言いながら、先生の元に向かってくる。彼女はコハルと同じように体操服を着ており、かなり明るめの茶髪であつた。そして実は公にはされていないが、アレックスと接点がある阿慈谷ヒフミである。

「あーヒフミ！お帰りなさい。」

「いや〜アズサちゃんと一緒に掃除しましたが、大変でしたよ。」ヒフミの隣には白髪の少女がおり、同じく体操服を着ている。そして今、体操服を着てまで愛銃である、E t O m n i a V a n i t a s, ことM4A1を肌から離さず、所持しているのは白洲アズサである。

「確かに、埃が多くて掃除をするのが大変だったがヒフミが考えた掃討作戦で、あつという間に終わった。」

「あはは…… たまたま役に立つ方法を知っていただけですよ……。」
「どうやら、ここにいる補習授業部の生徒たちはこの校舎内を掃除をしていたようだった。そして、ヒフミとアズサは先生以外の見知らぬ大人がいたことにももちろん疑問を持ったようで。」

「あ、あのここにいる大人の方々は……？」

ヒフミは少し、彼らに何かを恐れているような口調で述べたところ、フォードが応じる。

「俺はフォードだ。こっちはピアーズ。俺たちはティーパーティーにこの施設の警備などを依頼されて、来たただけだ。君たちの名前は一応、知っている。」

そう返すと、先生がフォードたちのことを心配しないようにと伝え

てくれたのだ。その援護もあつてか、少しは彼女たちの緊張か不安といったものが和らげられた。

「えっと、よ、よろしくお願いしますね。」

「よろしくだ。警備といったが私も何か役に立てることがあれば、手伝う。」

そんな感じにやり取りを交わすと、次に先生に向かってヒフミが話し始める。

「あと改めて……先生！これで掃除完了です！」

ヒフミは元気よく、掃除を終えたことを先生に報告するが、先生はハナコが居ないと伝える。その本人である浦和ハナコは、突然現れるのだが。

「あら、まだ一か所だけ残っていますよ？屋外プールです♡……あれ？この方々は？」

フォードたちの前に現れた浦和ハナコは、他の補習授業部の生徒たちのようにフォードたちに関心を向ける。なお、先生がヒフミとアズサ達と同じように彼らの説明をしてくれた。

そしてその説明が終わると、残った掃除の場所であるプールについての話題となる。

「本題に戻りますけど、プールなんてありましたっけ？」

「ええ、ありましたよ。こつちですね。」

それから彼女たちはハナコを先頭に、プールがあるであろう方向へと向かった。もちろんフォードたちは追うべきかと考えたが、遠くから観察するべきという結論に至り、合宿所から観察することにした。

合宿所に戻ると、彼らはプールが見えるであろう部屋に入る。部屋の中に入ると、いくつかベッドがあったため彼らは観察という状況下においては必要ではないMk. 18やヘルメットをベッドに置く。ただし、ボディーマーは身に着けている。

「さて、どうやって裏切り者を探し出せばいいのやら……。」

「そもそも裏切り者という情報があるといっても、それを区別する方法がないのが痛いですね。」

「ああ。もしかしたら、今のプール掃除で怪しい行動をするやつが

いるかもな。」

「それって…何も意味が…。」

「今のは無しだ。」

フォードたちはそんな風にやり取りをしながら、補習授業部の生徒たちの様子を観察する。彼女たちを観察すると特に怪しい動きはないどころか、楽しそうな様子であった。

その後彼らは彼女たちの掃除が終わるまで、見守ることとなった。

<20??年初夏>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園・別館／合宿所の一室

「まさか^{キサオトス}ここでこんなものが見られるとはな……。」

空はすっかり暗くなっていた。しかし、そんな暗い中まるでネオン街のように美しく、水面が輝くプールにフォードたちは注目していた。

「ええ、そうですね。すっかりもう日が落ちていますが、あのプールは美しいですね。」

「でも残念ながら俺たちは、観光目的でここに来たわけではない。とても残念だ。」

そんな風にフォードは落胆する。どこかのリゾートにあつてもおかしくはないような、夜闇の月明かりに照らされるプールを見て、嘆くのは当然だった。

「まあいい。どつちにしろこのクソツタレな依頼を解決しなければならぬことには、変わらないからな。」

そんな風に呟くと、窓越しに見える補習授業部の生徒たちはフォートたちがいる合宿所へと向かっていくのを捉える。

「…… どうやら掃除はこれで終わりみたいですね。」

「みたいだな。とりあえずもういい時間だから飯でも食ってだな、内部の把握を兼ねての彼女たちの監視といこうか。」——……

<数時間後>

窓から合宿所周辺を見渡すと完全に暗くなっており、それどころか他の建物の明かりがつかいでいるところも少ない時間帯となってきた。つまり深夜である。

「さて、そろそろ頃合いだな。」

フォードがそう呟くと、GPNVG—18がマウントに取り付けられたヘルメットを被る。GPNVG—18はいわゆる暗視装置であり、わずかな光を増幅させることで明確な視界を確保することが出来る代物だ。

「いやー、持ってきてよかったですね。」

彼らはこうなる事態を予測してなのか、ある程度様々な装備を持ってきていたのだ。そうして、彼らは必要な装備を身に着けると準備が完了する。

「準備は出来たか？いくぞ。」

フォードたちはほとんど暗闇の状態になっている廊下に出る。そして、暗視装置を使用。

暗視装置はいつも通りにしっかりと暗闇で見えないはずの視界を、緑色の映像として映し出す。

「なんでこの建物は明かりが少ないんだ……。」

フォードは暗視装置を使わなければならないほど暗い状況に呆れながらも、歩き始める。しばらく歩くと、別の階へと移動するために使える階段を発見。彼らは上の階へと向かう。

上の階に到達すると再び探索を再開する。先ほど彼らが居た階と同じように、ほとんど内部の構造は変わっていないさそうな感じであった。

「にしても、この建物って意外と新しいのですかね？」

「外観からはとても綺麗とは思えなかったが、内部は全く違う。おそらく、かなり前に建てられたがあまり使われなかったんだろうな。」

「お嬢様学校特有の贅沢ってやつですか……。」

彼らはそういったやり取りをしていると、長く続く廊下に一つだけ明かりがついている部屋を見つける。

「あそこまで移動するか……。」

フォードはピアーズにそう伝えると、大きな音を出さないようにその部屋の手前まで移動。近づくと声が聞こえてきた。

「……先生、万が一……裏切……。」

察知されないように彼らはドアから少し離れたところで、盗み聞きをしていたため声はかなり聞きづらかったのであった。

どうやら、ドアの向こうには先生ともう一人の生徒がいるようだ。声からして、おそらくヒフミだろう。

「みんな……学校……生徒……じゃないですか……一緒に……。」

フォードはこんな途切れた声の盗み聞きしていても得られる情報は少ないと判断したのか、盗み聞きをやめる。

そして、気付かれないようにそつとその場から離れたのだった。それから彼らは上がってきた階段まで引き返した。

階段まで引き返すと彼らは次に一階の探索をしようと考え、一階へと向かう。一階に着くと、フォードは人影を捉えた。

「誰かいるぞ……。」

フォードはピアーズに聞こえるように小さめの音量で呟くと、足音を出さないようにゆっくりと人影を見つけた部屋に向かう。

部屋にはいくつかの机と椅子。そして、壁にはいくつか外を眺めることが可能な窓が取り付けられていた。窓からは月明かりが部屋に向かつて注ぎ込まれている。

そんな部屋からは二人ほどの女子生徒が会話している声が聞こえる。

「見張り……？いえ、それよりアズサちゃん……。」

「…… 気にしないで大丈夫。」

どうやら声から二人の人物について推測すると、会話に参加しているのはアズサとハナコのようなようであった。

アズサとハナコたちは暗闇に溶け込んでいるフォードたちが居るとは知らずに、それから会話を続けた。

彼女たちが話していたのは、なぜこんな夜中に徘徊しているのか？といったものだった。

そしてこんな皆が起きている状況に対して、彼女たちが結論付けたのは慣れない環境だから落ち着けないというものだった。

そんな風に結論付けた彼女たちはしばらく会話をすると、解散しようという流れになる。フォードたちは見つかるのを避けるために彼らが居た部屋まで引き返す。

部屋に引き返した彼らは暗視装置の使用をやめた。

「…… なあ？いくら合宿初日とはいえ、徘徊しすぎじゃないか？」

「全くです。あれだと全員裏切り者じゃ……。」

「疑う気持ちはわかる。だが、その根拠となる材料がないから判断できないのだがね。」

「そうですか……。」

「俺はもう寝るぞ。」

フォードは突然、就寝することを宣言。

それからまたしばらく、彼らやり取りをすると、ボディアーミーやヘルメットなどの装備を外してそのまま部屋にあるベッドで就寝したのだった。

<翌日>

朝になると彼らは起床し、軍隊式の身支度を整え始めた。私服の上

にいつも使っているボディーマー、ヘルメットを身に着ける。そして愛銃であるMk. 18とMP17にそれぞれマガジンを挿す。

マガジンを挿すと、次は安全装置をしっかりと掛けMP17はホルスターに収め、Mk. 18をスリング越しに肩にかける。これで彼らの身支度が整ったのだ。いつでも交戦が可能な状態である。……幸いなことに合宿所に来てからは、彼らが交戦することになる事態が起きていないが。

「先生に俺たちのことをもつと詳しく説明したいのだが、どうだ？」
「賛成です。ある程度、こちら側を知ってもらって信用を得たりするべきですよ？」

「そのつもりさ。」

ピアーズがフォードの案に乗ると、それから合宿所内のあらゆる部屋を搜索するのだった。まずは初めに、昨夜ヒフミが先生と話していたであろう部屋へと向かう。

そこに向かうと残念ながらそこには先生がいるのではなく、そこには先生が居たとされる痕跡のみであった。

「違うようですね。もしかしたら教室とかにいてもいられないかもしれませんね。」

「マジかよ……ここはかなりの教室があるんだぞ……探すのは相当辛いな……。」

フォードはそんな風に少し愚痴を漏らしたが、先生の搜索を再び始めるのであった。

しばらく彼らにとっては合宿所という名を被った迷宮に迷いながらも、懸命に搜索していたところ遂に見つける。

そこには先生と補習授業部の生徒たちが居た。

「あれは何をしているんだ……？」

見つけたものはいいものの、生徒たちは何をしているのか分からない。少し遠目から見ると、試験をしている様子であった。

「もしかしたら、あれは試験を受けているのかもしれないね。」

そう彼女たちはまさに試験を受けている真っ最中だったのだ。もちろん彼らは補習授業部という性質上、ある程度勉学に励む必要がある

る子たちのために作られら部活動だとは理解していた。

だが、いくら頭に入れていたとしても今の時間に試験をおこなっているとは予想外だったからだ。

「さすがに試験中となると教室に近づかない方が、あの子たちのためになるのか……？」

「そうかもしれませんね。試験に集中させてあげましょう。」

フォードは左腕に身に着けている腕時計に目をやる。時刻は9時ごろを指していた。

「一時間ぐらいは別のことでもしているか……。」

「というと？」

「楽しいおしゃべりでどうだ？」

「いいですね。そうしましょう。」

彼らはそんな風にやり取りをすると、合宿所から出ていく。そして彼らが向かった先はプールであった。

「やっぱりこのプールは綺麗だな。」

「ええ、昨日まで汚かったのがこんな綺麗な光景に変わっていてとても不思議な気分ですけどね。」

彼らはプールを眺めながらそうやり取りをする。ピアーズが言ったように、昨日まで綺麗とは言い難いほどの汚れで満たされていたプールが、今となってはその正反対の状態になっているのだ。

感嘆の声を漏らすのは致し方ないだろう。

「なあ？……ここに来てから思ったのだが、この世界はほぼ皆が銃を携帯しているんだな。」

「隊長が言う通りに、この世界の人たちはほとんど銃を持っていますね。」

「それに俺たちが採用している銃、弾丸までも一致している。それだけではなく、かつて俺たちの世界で作られた兵器たちもあるような世界だ。」

フォードの指摘通り、この世界は彼らにとっては不思議であった。同じ銃や弾丸、そして今となっては使われない兵器から現代兵器までがあるのだ。

興味や疑問を持って当然だろう。

「でも報告によると、この世界において確認されている戦車がどうやら俺たちの世界で過去に一度作られたものらしい。」

「それって確かフォースリーコンが入手した情報ですよね？」

「その通りだ。そういえば、その部隊の報告が面白くてな。どうやらアビドスという方面で、ビナーという機械化された大型の蛇を発見したらしいな。」

「なんですかそれ？」

フォードは以前、アビドス砂漠に派遣されたフォースリーコンこと第一武装偵察分隊から報告された内容について話す。もちろん、ピアーズはフォードが語ろうとするビナーについて興味を示した。

「ビナーというやつは大型……いや市街地にある高層ビルに匹敵するほどの大きさだ。それに現代戦車並みの装甲を持つらしい。」

「戦車並みで高層ビルに匹敵する大きさって……いわゆる怪獣じゃないですか……。」

「それだけじゃないぞ、どうやらビームを発射するとまで言われている。正確な威力は不明だが、当たれば炭が出来るほどらしい。」

「そんな奴がこの世界にいるとは……。とんでもないですね。」
ピアーズはフォードが話す報告について目を疑ったのだった。

「あとその対抗手段として、原子力潜水艦と複数の対地攻撃機が追加派遣されるらしいな。」

「対地攻撃機……、もしかして、AC-130とかA-10のことですか？」

「その通りだ。」

AC-130とは重火器を搭載した航空機のことである。様々な仕様が存在するが、主に105mm榴弾砲や40mm機関砲を搭載。それだけではなく、対地用のミサイルが搭載されていたりする型もある。

そんな近接航空支援に特化した機体は「空飛ぶトーチカ」や「ドラゴン」と称されるぐらいの攻撃力を持っているのだ。

そしてAC-130だけではなく、A-10も追加派遣されるよう

であった。A―10も同様にAC―130には劣るものの強力な対地攻撃能力を保有しているのだ。

「いくらなんでも過剰戦力じゃないですか……？」

ピアーズの指摘したように、これらの機体をただビナーという単体に対して使われるのであれば過剰戦力だと疑うのは当然である。

そのピアーズの疑問を解消するためにフォードは答える。

「どうやら、各地の情報収集を本格的に行うことで分かったことがある。それはビナーのような巨大かつ不可解な敵が存在するらしい。それらのことから上が判断したに違いない。」

「どこの情報です？」

「ミレニアムという学園を知っているか？あそこに存在する特異現象捜査部という部活動の情報らしいのだが……。」

そうデカグラマトンの預言者を調査する部活動による情報だったのだ。

「はあ……そんな部活動があるのですね……。」

ピアーズは困惑しながらも、それらの情報を入手したことに驚いていたのであった。

「どうやって入手したのかは俺も分からないのだが……噂ではそうだ。」

フォードはどこからその情報を知ったのかは定かではないが、ある程度知らされていたのだ。

「そうだったのですね……自分は知りませんでしたよ。」

「そうか。ところで話題が変わるのだが――」

それからもまた、彼らの楽しいおしゃべり談義が続くのであった。兵士は噂と冗談が好きなのだ。

<数十分後>

彼らがしばらく冗談や皮肉を飛ばしていると、あっという間に時間が過ぎた。

そう、フォードがそれまで待機すると決めていた時間になったのだ。

「もういい時間だな。そろそろ戻ろうか……。」

腕時計を見ながらピアーズにそう伝えると、彼らは先生がいた合宿所へと向かったのであった。

合宿所に着くと、彼らは一時間ほど前に見かけた場所である教室へと向かう。そこで再び、先生と補習授業部の生徒たちを目にすることとなる。

「試験の次は……何をしているんだ……?」

フォードは教室に視線を向けながら喋る。視線の先に映るのはもちろん補習授業部の生徒たちである。

しかし、何やら騒がしい様子である。

「あれはぬいぐるみですかね?」

「アズサとヒフミだったか?あの子たちはプレゼント交換でもしているのか?」

アズサとヒフミたちは正確にはプレゼント交換をしていたわけではないが、彼女たちに課せられた試験に合格するための一つのご褒美として、やる気を出すためにヒフミがアズサに見せていたのだ。

「楽しそうだな……。」

フォードは彼女たちの楽しそうにしている様子を見て、そう口に出す。

「……先生の所へ……。」

「……ああ、そうだな。行くか。」

ピアーズに促されると彼らは教室内に入る。教室内に入ると、その場にいる彼女たちと先生が視線を彼らに向けた。

そしてフォードたちに視線を向けたうちの一人のヒフミは少し、怖気づいた目で彼らを見ていたことに気付く。

しかし、フォードは彼女が不安や恐怖心を持っているとは思っても

いなかったのでそれを無視するが。

「どうも。：俺たちは先生と話したいのだが、大丈夫そうか…：？」

フオードがそう伝えると、先生はどういった要件と訪ねてきたので彼は答える。

「改めて、俺たちの任された仕事の説明を、と思つてね。」

それから彼らは任された仕事である警備という建前の事情を、前日より詳しく説明。確実な信頼を得たかは不明だが、ある程度は信用してもらえらるだろう。

こうして彼らの要件が終わると、先生は彼女たちの勉強に付き合うのだった。

要件を終えた彼らは教室から退出。廊下にて話し合っていた。

「やるべきことが終わりましたね。」

「何を言っているんだ？まだ裏切り者を探す必要が——」

そう、まだ彼らの一番の任務である裏切り者の特定には至っていないのだ。

「とりあえず、警備するふりをして彼女たちの観察をするしか…。」

「ああ…。」

ピアーズは落胆する声を出しながら廊下にて、教室内にいる彼女たちの観察をするのだった。

<数時間後>

教室の窓はオレンジ色となっていた。時刻は夕方である。彼らは数時間も観察を続けたものの、特に得られるものはなかった。

「はあ…このままじゃ見つからないな。」

フオードがそう不満を漏らすと同時に、教室は騒がしくなってい

た。どうやら、彼女たちは何やらある物に視線を集中していた。そこで、廊下に立っている彼らも教室のある物に注目する。

「あれは……。」

「……………マジかよ……………」

彼らを微妙なコメントにさせたある物とは、コハルが所持する成人向けの雑誌であった。コハルはもちろん、咄嗟に隠すのだがハナコにはどうやらバレていたようであった。

「あらあら、コハルちゃんそういう趣味をお持ちで？」

「ち、違う！み、見間違いだから!!!私はそういうのなんか持っていないの!!!!」

それからコハルとハナコによる口論じみた、いじりが発生する。それも、廊下にいる彼らにも声が聞こえるほどの大きさで。

「……この世界にも先生以外の変態がいるんだな。」

フォードがそう述べながら、彼らは彼女たちのいじりを見ていたのであった。

数分ほど彼女たちのやり取りが交わされる中、コハルが泣き始めたことでこのエロ本を必死に隠すための戦いは終了する。

その後、先生が泣き声をあげるコハルを慰めながら合宿所へと出て行った。

「後を追うぞ。」

「了解。」

何か情報を得られるかもしれない。その思いから彼らは先生とコハルを追跡するのであった。

12：エデン条約編：A wolf in sheep's clothing

<20??年初夏／17時10分>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

正義実現委員会・押収品管理室の近く

「先生とコハルはあの建物の中に入って行ったぞ。」

そう呟くのはフォードである。フォードたちは先生たちが何をしているのが気になるため、追跡していた。

そして追跡し続け、辿り着いた場所は現在フォードたちの近くにある、正義実現委員会が管理する押収品管理室だった。

「あの制服は……。」

「あれは正義実現委員会だ。」

黒を基調とし、所々に赤のラインが入っている制服は正義実現委員会に所属することを示す目印である。そして、彼らは一度ある生徒をいじめている集団から助けるために交戦したとき、一時的にだが戦闘後にお世話にもなったことがある。

「確か正義実現委員会は、トリニティの治安維持組織でしたっけ。」

「だな。いくらなんでも俺たちの許可されている範囲じゃ、あの今まで流石に入れないな。」

ティーパーティーのホストであるナギサが許可したのはあくまで

学園内の発砲と、いくつかの施設の出入り。その許可されている施設のうち、学園内の治安維持を担当する正義実現委員会は残念ながら含まれていなかったのだ。

「外で盗み聞きするか……。」

「……この学園来てからほとんど似たようなことしていませんか？」

「知っているか？俺たちの仕事は盗聴と、ストーキングさ。」

フォードはふぎけてピアーズにそう返すと、彼らは中に入った先生たちの話が聞こえるような場所へ移動。

そして偶然にも、その声が聞こえるであろう場所に彼らは移動する。

「ここで待機するぞ。」

彼らは先生たちと正義実現委員会の副委員長であるハスミとの会話を、こっそりと聞くのであった。

<数時間後>

空は既に暗くなっていた。そんな中、アレックスたちは先生たちが行った会話を盗み聞くことに成功し、次に合宿所に戻り、これまで得た情報から話し合っていた。裏切者を探し出すために――

「やっぱり確固たる根拠が掴めないのが現状だな。」

「そうですねよ、そもそもあのティーパーティーのホスト……ナギサの発言が曖昧な気がします。」

「と、いうと？」

フォードはピアーズが抱く疑問点を引き出そうとする。

「彼女はどこから裏切り者がいる情報を手にしたのでしょうかね。」

「…… 確かに、恐らくだが彼女に信用されている人物からか？」

「その可能性もありますが…… 万が一、彼女のことを貶めようとする人物から得ているかもしれないかもしれません。」

「ふむ……。」

フォードは考える。なぜ第一に部外者であり、しかも大人である彼らに依頼したのか。そして、次にナギサが依頼してきた、トリニテイの裏切り者、とは一体どういった意味なのか。

そして微かに感じるただならぬ事情。そんなことをフォードは頭の中に巡らせた。

「…… そういえば自分たちの活動をナギサに報告してませんね。」
ピアーズがそう呟くと、フォードは少し遅れて反応する。

「ああ、やはりしておく方がいいのか？」

「仕事をしていない、と思われちゃって情報を入手できないかもしれないかもしれませんよ？」

「面倒なことだ……。分かった、明日行くことにしよう。」

フォードは若干、ナギサに対して報告することを躊躇しながらそう伝える。これで明日の予定はある程度決まった。

しかし、彼らが明日の朝を迎えるのはまだ早い。

「あと、もう少ししたら自分たち生徒たちを監視する時間ですね。」

そう、彼女たちの監視が残っているのだ。実際のところ、無理にそれを達成する必要がないが裏切り者の情報収集といった点から、それを遂行しなければ彼らはベッドで睡眠を確保することはできない。

「昨日と同じ経路でいいか……。」

そんな風にフォードは喋ると、彼らは予定の時刻まで待機することとなる。

<数時間後>

彼らは昨日の探索と同じように、暗視装置と完全に武装した格好で宿舎内を徘徊した。

「たく、いくらなんでもこの校舎は明かりが少なすぎるぞ。」

「全くです、夜トイレに行くとしたら母親と暗視装置が必要ですよ。」

「いやオムツだ。真っ先にこんな暗闇に怖がって漏らしちゃうよ。」
彼らはそういったジョークを交えながら探索する。二回目の徘徊ということもあつてか、少し心に余裕といったものが生まれていた。

「さて、そろそろ先生の部屋だ。」

先生の部屋から20mほど離れたところに彼らは辿り着く。扉の隙間から光が漏れている。つまり、先生一人だけか生徒のどちらか。彼らは音で誰かが近づいていることがバレないように、慎重に近づく。それもまた、前と同じ盗み聞きした距離まで。

盗み聞きが可能な距離に近付くと、会話が聞こえる。そして声から明らかに二人がいるのが確定した。

「この声は……ヒフミだな。どうしてまたここに？」

「さあ？もしかしたら先生と——」

「噂のようにあり得るかもしれないから、聞きたくない。」

彼らは小声でそうやり取りをする。しかし、扉の向こうから聞こえる会話はそういった会話ではなさそうだ。

「こりゃあ、成績関係か？」

「……まじめですね。」

「恐らく、何も得られない気がするから別のところへ行くぞ。」

フオードたちはあまり裏切り者に関する情報とは繋がらないと判断したからなのか、別の場所へ移動する。

移動先は先日見た、アズサとハナコが会話を交えていたところ。

「今夜は誰もいなさそうか……？」
彼らは部屋から少し、離れた位置から観察するが何も見当たらない。

「もう少し別の場所を探索するか。」

それから再び、探索が再開した。彼らは合宿所内のあらゆる部屋を探索する。しかし、どこも徘徊している人物は見当たらなかった。

「あーあ、時間を無駄にした気分だ。」

「結構、なんやかんや時間たっていますし何も成果は得られませんでしたね。」

「最悪だ。おっと、あれは……。」

フォードは自分が現在扱っている Mk. 18 に搭載されたレーザーを使用。レーザーは直接肉眼で確認可能なものもあるが、今回は暗視装置越しにしか見えない方を使用している。

そして出力されたレーザーをある人物に向ける。

「どうしたんですか？……あの生徒は、アズサでしたっけ。」

彼らはアズサを合宿所のロビーにて発見。何をしているのかはわからないが、様子から徘徊をしているようであった。

「あー外に行きましたよー！」

彼女はロビーから何かから逃げるように抜け出す。そして、抜け出した先は外である。

「追うぞー！」

彼らも後を追う。抜け出すと、月明かりのせい暗視装置越しに若干視界が明るくなる。しかし、彼女の姿は見当たらない。

「どこに行った?!」

「クソ！見失ったか。」

フォードは悪態を突く。せっかく何か情報を入手出来そうな手がかりかと思いい、追いかけたのだが結果として何も得られなかった。そのような状況に彼は呆れたのだ。

「はあ、クソみたいな気分だ。戻るぞ。」

彼らは部屋に戻り、朝に備えるのであった。

<翌日>

トリニティ総合学園・テラス

「あら、おはようございます。わざわざ自らここにお越しになるとは…… 何かわかりましたか？」

テラスにはナギサがいつものように椅子に座っている。そして、テラスに訪れたフォードたちに彼女は進捗を尋ねる。

「二応、2日ぐらい前から彼女たちの様子を観察しているが特に注意すべき様子は見られない。」

「そうですか。他には何かありますか？」

ナギサはこれといった情報が無いと彼に告げられると少し、不満そうな顔を見せた。

「そうだな、一つ。君の言う裏切り者はいないかもしれない。」

その言葉を放ったフォードはナギサから冷酷な視線が向けられているのが微かに感じ取った。おそらく、彼女はあると信用していたのだがそれを覆すような発言を受け入れられないのだろう。

「たった二日、補習授業部の生徒たちをできる限り個別に監視したが、君の言う、エデン条約を阻止する、様子は一切見られなかった。」

「……でもそれって短期間の監視ですよ？一週間、一か月と監視をしなければ分からないこともあると思うのですが？」

ナギサは短期間であることを指摘するが、フォードはそれにすぐさま応じる。

「条約を締結するまであと残り一か月と数週間。もし計画的に阻止するのであれば、恐らくティーパーティーにいる者を殺害するだろ

う。」

フォードが話す内容はほとんど推測であるが語り続ける。

「そしてティーパーティーには主要な人物が三名。ナギサとミカとセイア、だがそのうち一人のセイアは入院中。残るは二人だが、恐らくどっちも殺害するだろうな。」

「……。」

ナギサは沈黙している。

「先に、ナギサを。次にミカをと殺害すれば主要なメンバーの派閥は混乱に陥る。エデン条約に関してはそっちのけで、内部の権力争いに発展するだろうな。」

「……。でもそれは憶測の域を出ないのでは？」

「ああ、そうさ。でも一つ自信を持って言えることがある。あの補習授業部の生徒たちは決して、裏切り者ではないことだ。普段の様子から見ると、良くも悪くもただの青春を謳歌している学生たちにしか見えない。」

「だから何ですか？　そういった演技をしているかもしれないよ？」

ナギサはフォードの言葉に噛みついてくる。

「そういう君は裏切り者という情報はどこから入手したんだ？　以前から、凄く疑問を持っている。」

「質問の答えになっていません。」

「そうか、こっちの勝手な推測だが君が信用できる人物から入手したんだろう？」

フォードは続けて。

「君の話を聞いているとかなり疑い深い性格をしている。しかし、その裏切り者という情報は信頼している。その違いはなんだ？」

「……。」

ナギサは再び沈黙を保つ。

「きつと君の信頼できる人物だろう？……そう、君と同じティーパーティーに所属するミカから得たのでは？　まあ、俺たちの勝手な推測からこの結論に辿り着いただけに過ぎないが。」

「…… あなた達は鋭いですね。これが大人の力とでも言うのでしようかね、あなた達の予測通り私はミカさんからの情報です。」

ナギサは沈黙を保っていたが、ついにそれを破り彼らに語り始めた。

「数週間前でした。彼女は私に突然、‘トリニティに裏切り者がいる’と伝えてきたのが発端です。そして、その裏切り者はご存知の通りエデン条約の阻止を目的にしているということも、教えてくださりました。」

ナギサは続ける。

「前にもお話しましたが、私はそのようなことに不安を覚えて彼女の情報を基に補習授業部を設置しました。」

「なるほど……。」

「それ以上、私からお話することはございません。わざわざお越しになりましたが、お引き取りいただければ幸いです。」

「待て、最後に一つ聞きたいことがある。俺たちをこのクソツタレな人狼ゲームに参加させた本当の意図は？」

「……。」

ナギサはそれ以上、彼らに答えようという様子が見られなかった。

「ピアーズ、戻るぞ。」

彼らはテラスから移動したのであった。

そして彼らは合宿所への帰路へと着くと、テラスで話し合ったことについて語っていた。

「やはり、彼女は疑い深いな。それでもなぜ、外部の俺たちなんかこんな政治闘争の延長に過ぎないものを依頼してきたのが、不明だ。」

「昨夜、寝る前に少々無理やりにも結論を出しただけの粗末な推測が当たるとは……。」

そう、彼らは就寝前にこれまで目にしてきた補習授業部の生徒たちの様子、そして彼らが抱いた疑念について考え合っていたのだった。

「まさか、ミカから知らされたなんて思いもよらなかった。」

「あと謎なのが、どうしてミカはナギサに教えたのでしょうか？」

「と、いうと?」
ピアーズは続けて。

「二つ考えられることがあります。一つ目は、ミカ自身が入手した情報が不正確なものであること。二つ目は、彼女自身が作り出した嘘に過ぎないものであるという可能性です。」

「可能性ならそうだが、どうやってそれを確かめるんだ? 見当がつかない。」

フォードたちはミカと何度か出会ったことがあるが、彼らは彼女の居場所を知らない。たとえば、ナギサと話し合ったテラスですら彼女を目にしたことは滅多にない。

「どんだん事態が大きくなっているような気もするが…… それと個人的にアズサが気になる。」

「さつき、確実に裏切り者じゃないとか断言していましたけど、その根拠が……。」

「ああ、そうさ。深夜に、彼女は二日とも合宿所を抜け出しているからな。どこへ行ったのが一番気になる。」

「色々と調べないとわからないことが山積みですね、本当に。」

「とっと、終わらせ——、あれは…… ミカ?」

フォードはここから少し離れたところにいるピンク髪の少女、ミカであろう人物に注目する。

「もしかして、合宿所についてさつきまで居たとか……?」

そんな風に彼らはやり取りをしているとミカもこちら側に気付いたのか、近付いてくる。

「こっちに來てるぞ。」

「何か嫌な予感がありますね。」

「奇遇だな、俺もだ。」

彼らはそんなやりとりを交わしていると、ミカはさらに接近。あつという間に、距離を詰められた。そして彼女は前に出会ったときと同じ明るさで振る舞う。

「あれ? 久しぶりだね!! また何か用事があつて、ここに來たの?」

「あー…… 一応、用事とは言わないがしばらくの間、合宿所の警備

要員として配置されているのだが……。」

フォードは本当の目的を隠しながら伝えていると、ミカは不思議そうな顔で話を聞く。もしかしたら、彼女はあの発砲した時以来、フォードたちに何が起こったのかということを知らないかもしれない。

「……それってナギちゃんが頼んだのかなあ？もしかして、警備云々の話って嘘？」

「いや、本当さ。」

「ふーん。」

ミカはフォードを舐めまわすような目線で見つめてくる。完全に疑っているに違いないと、その視線を向けられている彼は感じた。

「ねえ、もしかしてあなた達はナギちゃんにトリニテイの裏切り者を探してって頼まれた？」

「さあ、どうだかね。」

「そつかりり、でも先生も頼まれたらしいんだよね。どうやら、ナギちゃんはいろんな大人を頼っている感じよ。」

「それは大変だな。」

フォードは他人事であるかのように誤魔化すが、既にミカにバレており意味はない。

「実はね、ナギちゃんは先生に頼み込んでいたけど断られちゃったらしいね。だけど、あなた達はどうかやら引き受けちゃった。」

「で、何が用だ？簡潔に伝えてくれ。」

フォードは明らかに感じ取っていた。ミカが彼らに話しかけていることに、何か裏があることを。実際、何かあるようでミカはそれを口に出す。

「あなた達は第三者でしょ？まあ、今となつてはその立場じゃないかもしれないけどね。わざわざ、ナギちゃんの取引を受け入れるってことはナギちゃんの味方なの？」

「どういう意味だ？」

フォードは尋ねる。

「あなた達は、キヴオトス外部から来た軍隊。最近、アビドスの方で

活躍していたのは話題になっていたから、私もそれを知っている。」
ミカは続けて。

「どうして、ナギちゃんの依頼を引き受けちゃうのかなって私は疑問に思っているの。それについて教えてほしいな。」

「いや、俺たちは彼女の味方をしたわけじゃない。それに、俺たちは彼女に半分騙されたと思っっているよ。」

「ふーん、そうなんだ。騙されたってことは、ナギちゃんに納得してないってことよね？あと、もう一つ聞いていい？」

「なんだ？」

「あなた達は誰の味方なの？」

味方、その言葉に彼は悩んだ。もちろん、その言葉に対する答えが見つからないためピアーズと少し話し合い、結論を出した。

そして、彼らが導き出した言葉を彼女に伝える。

「俺たちは、戦う仲間・戦友の味方というのが一つ。そして、守られるべき者への味方に過ぎない。」

「兵隊さんって、そう思っているんだね。その守られるべき者には誰が入っているのかな？もちろん、私たち生徒も？」

「それは自分で決めてくれ。俺たちは戦うべき時、相手に対して戦うだけだ。」

「・・・わーお。少し言い方が違うけど、まるで先生みたいなことを言っているね。」

「先生・・・？」

どうやら、ミカは合宿所でフォードたちが今、話しかけられているような内容を先生と交わしたようだった。

「先生は生徒の味方でもあるけど、誰かの味方でもないみたいだな感じだったよ。」

「先生と俺たちが同じ考えだとは到底、思えないけどな。」

フォードはそう口に漏らすけど、どうやらミカはまだ話したいことがあるようで続ける。

「ねえ、どうせ裏切り者は見つからないんでしょ？私からその情報を教えてあげる。」

13：エデン条約編：A penny for your thoughts

<20??年初夏>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉
トリニティ総合学園・合宿所への帰路にて

「何か知っているのか？」

ミカにそう問いかけるのはフォードである。しかし、その言葉の一方彼は疑っている。なぜなら、ナギサのように何か裏があつてわざわざそのような話を持ち込んでいるのかと考えたからだ。

「どうして俺たちにその情報を教えよう？」

「…… まあ私の方にも色々あつてね。それと、外部のあなた達が先生命たいにこんな問題に巻き込まれちゃっているのが、申し訳ないと思つたからだよ。」

あつさりと出てくる先生という言葉。先生と自分たちが置かれている状況は同じだろうか、と考えながらフォードは情報を聞き出す。

「なるほどな。それで、その情報は？」

「…… 白洲アズサ。彼女がトリニティの裏切り者なの。」

「アズサ……。」

フォードは裏切り者と呼ばれた彼女の名を呟く。

「あの子は実はトリニティから最初にいたわけじゃないんだ。ずいぶん前に分かれた、分派……『アリウス分校』出身の生徒なの。」

「そうか。でもその情報を教えて結局、俺たちは裏切り者である彼女をどうすればいいんだ？ 殺害？ ナギサに報告？」

フォードたちは依頼もとい任務に何度か参加したことがある。しかし、それらの目的はターゲットの殺害や捕縛が目的であり、ミカのアズサが裏切り者であるという報告をそのように捉えていたのだ。

「いやいや、殺害とかそんな物騒なことをしてほしいわけじゃないんだよ？ 私はあの子を守ってほしいの。」

「守れ？ 一体どういうつもりだ？」

フォードはミカの発言の意図がわからない。裏切り者であるという情報を伝えながら、守るように伝えるのは彼にとっては理解出来なかったのだ。

「少し話が長くなっちゃうけど、前あなた達にこの学校の軽い歴史を説明したよね？ その時に、私は『最後まで、一つになることに大反対した学園』なんて言っていたと思うのだけど、その学園がアリウス。」

ミカは続ける。

「元々は私たちとあんまり変わっていないくて、ちよつとした經典の解釈違い以外は同じだったんだって、それでいてゲヘナを心底嫌っていた。でも、そのアリウスは連合を作ることと猛烈に反対して……最終的に争いに発展しちゃったの。」

「新しい体制を作ろうとした結果、たった一つの学園との紛争が始まった。ということだな？ つまり最終的に、強力な連合によってその学園は消滅したのでは？」

フォードはミカの話から推測でありながら、そう述べる。

「ふふっ、よくわかったね。あなたの言う通り、アリウスは消滅してしまっただよ。そのアリウスはトリニティの自治区から追放されて、キヴォトスのどこかに隠れているみたい……。とまあ、そんな感じの学校なの。」

「なるほどな…。」

「それと、あなた達はナギちゃんが推進しているエデン条約について知っているよね？前に私が説明したはずだけど…。」

「トリニティとゲヘナの平和条約ですよ？しつかり覚えていますよ。」

ピアーズは初日に、ミカから教えられたエデン条約を覚えており、そう発言した。

「…なんだか良い話に聞こえるよね？でも本当のところはどうだろ。だってその核心はゲヘナとトリニティの武力を合わせたエデン条約機構、通称、ETO、と呼ばれる全く新しい武装集団を作ることなのに。」

「ほう…。」

「つまり、エデン条約っていうのは、言ってみればある種の武力同盟。トリニティとゲヘナの戦力を合わせた、一つの大きな武力集団の誕生が目的…。そんな、武力集団を用いてナギちゃんは何を果たそうとしているのかな？」

「…アズサを守ることで、その武力同盟を破棄させたい。ということになるが、武力同盟を破棄して何かメリットでもあるのか？」

フォードはミカの言葉にそう返す。彼は彼女の話を知っている限り、わざわざ武力同盟を破棄して何を得られるのか。すなわち、メリットを理解できなかったからだ。

「わからない。いや、正確にはナギちゃんが気に入らない存在を排除しようとするんじゃないのかな…。昔、トリニティがアリウスにしたみたいだね。もしかしたらセイアちゃんみたいに…。」

「セイア…？あの子は入院中だったとは聞いている。」

百合園セイア。彼女の名前を、彼らは聞いたことがあった。以前、先生と出会ったときティーパーティーの内情について教えてもらえるよう頼んだところ、教えてもらったことがあったのだ。

そして、先生から告げられたのはセイアは入院中であること。彼らはそれ以来、セイアという人物がなぜ入院しているのかが分からず、そのまま疑問を抱えたまま日々を過ごしていた。

「え!?ど、どうして知っているの!?あなた達は知らないはず…。」
しかし、ミカやナギサたちはフォードたちにセイアが入院中であることを伝えていない。そのため、どうやってセイアが入院中であると知っているのかということに、ミカは動揺した。

「大人の人脉さ。」

「ふーん……………」

フォードはミカにそう告げたところ、彼女はその情報を伝えた者が先生であるということに気付いたようだった。

「それで、セイアをなんでわざわざこの話し合いの場に持ち出すんだ?」

「そ、それは……………」

「もしかしたら、何か隠さないといけないような事情があった?」

フォードは一気に畳み掛ける。セイアがどうして入院しているのか、という情報を彼らは引き出したからだ。そのため、彼はどうにかして引き出そうとする。

「居場所はどこだ?」

その一言は少々刺々しいだけでなく、その言葉を放った本人である彼の表情は変化していた。眉根を寄せており、表情を僅かに険しく。そして、鋭利な眼光で彼女を正確に射貫く。

「わあ!!そ、そんな、怖い顔をするんだね……………。いいよ、本当のことを話してあげる。」

ミカはそんな表情に驚いたのか誤魔化そうとするのを観念し、本当のことについて述べ始める。

「セイアちゃんは入院なんかじゃない。ヒーローを、壊されたの。」

「ヒーローが壊された…………?おいおい、死んだってことか?」

フォードはキヴォトスに派遣される前、キヴォトスの文明や存在する勢力といった事前情報を教えられた。それにはヒーローというキヴォトスに存在する生徒にしかなく、破壊されると彼女たちの生死に関わるということも知らされていたのだ。

そして、ミカはフォードたちにセイアに何が起こったのかを説明し始めた。

「……冗談じゃないよ、本当のこと。去年、セイアちゃんは何者かによって唐突に襲撃された。対外的には「入院」ってことになっていくけど……そっちの方が真実。」

ミカは続ける。

「私たちティーパーティーを除けば、このことはまだトリニティの誰も知らない。もしかしたら、'シスターフッド'には知られているかもだけど……あそこの情報網は半端じゃないからね。とにかく、それくらい秘密事項なの。」

「シスターフッド……今頃、自分たちはそこから情報を入手出来ていたはずなんですけどね……。」

ピアーズはふとシスターフッドから情報を入手する目的があったことを思い出し、そう呟く。

「それもそうだが……。ところでその襲撃した人物は何か分かっているのか?」

「……わかっていない。捜査中っていうか、何もわかっていないっていうか……。もともとセイアちゃんは秘密の多い子だったこともあってね……。うん、まあそういうことなんだ。」

ミカはまだもつとそのことについて知っていきそうな雰囲気、フォードは感じ取った。しかし、彼はこれ以上追及しない。

「……とはいっても、目星が付いていないわけではないんだけど……。今の段階でただの推測をするのもね……。それで話に戻るけど――」

「ああ、アズサを守れって話だろ?」

「うん、そしてあの子を学園に転校させたのは、私なの。」

「転校?なぜだ?」

フォードはミカの言う、転校について尋ねる。

「実は……。ナギちゃんに内緒でね。生徒名簿とかそういうのを全部偽造して、あの子を入学させた。」

「……。」

フォードは少し怪訝な顔をする。

「……そんな怖い表情をして、どうしてかって知りたそうな顔して

るね。アリウス分校は今まだ、私たちのことを憎んでいる。私たちはこうして豊かな環境を謳歌しているのに、彼女たちは劣悪な環境の中で『学ぶ』ということが何なのか分からないままにいる……。」

ミカは熱心に話を続けた。

「私たちから差し伸べた手も、連邦生徒会からの助けも拒絶し続けているの。過去の憎しみのせいで。」

「過去の憎しみか……。俺たちの世界でも似たようなことがある話だな。」

「…… 私はアリウス分校と和解がしたかった。でもその憎しみは、簡単には拭えないほど大きくて……。これまで積み上がった誤解と疑念はあまりにも多い。私の手には負えないくらいに……。」

ミカは同情の眼差しを見せる。きつと彼女はアリウス分校と仲良くなれると思っているのだろう、しかしそれが今になっても実現しないあたり、憎しみという溝はかなり深いものであるということをつおードは考えた。

「…… なあ、捏造までをもしてそんなにそのアリウス分校とやらと、仲良くしたいのか？」

つおードはミカに問うと、少し沈黙をした後に返答した。

「ナギちゃんやセイアちゃんは政治的な理由で仲良くなることに反対しているの。でも私は……。お互いの誤解を解いて、前みたいにお茶会をしたいという気持ちがあるの。たったそれだけ、と言われればそうだけど……。」

ミカの話はまだ続く。

「私はあの子……。『白洲アズサ』という存在に、和解の象徴になつてほしかったの。あの子についてはそれほど詳しいわけではないんだけど、アリウスでもかなり優秀な生徒とは聞いているし、その可能性に賭けたかった。ナギちゃんを説得して、ちゃんと正式に進める――」

それから彼女から様々なことを聞いた。ミカから見たナギサの印象、なぜナギサは必死になつてトリニティの裏切り者を探し出そうとするのか、そしてミカはナギサの言う「裏切り者」にあたる存在であ

るといったことであつた。

それらの話を聞いたフォードはこう返す。

「ああ、わかつたよ。君はとにかく、アリウスと和解がしたいんだな？で、そのためにアズサを守る必要があると。彼女を守るかどうかは俺たちの判断で決める。これでいいな？」

フォードがやや強引にまとめるとミカは何か伝えようとする。

「……最後に、ナギちゃんは補習授業部の中に裏切り者がいるという確定路線になっているから……気を付けてね。」

「……どうせ俺たちに話していることは、全て先生にも伝えられているのだろうか？」

「そうだけど……一応、先生とあなた達のような大人にしかあの子を守れないと思うから……。」

「わかつたよ。過度な期待はよしてくれ。」

フォードはそう伝えるとミカとの話しを打ち切り、彼らはすぐに合宿所に帰るのであつた。

<20??年初夏>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園・別館／合宿所の一室

ミカとの折衝から数時間後、フォードたちは合宿所に戻ると昨日のように補習授業部の生徒たちの監視。また、ハナコの知り合いである『伊落マリー』との接触。といった、特に危惧するような出来事が起らない日中を彼らは過ごした。

そして、現在は深夜。いつもなら生徒を監視するために宿舎内の巡回をしていたが、日中のミカの話を踏まえて彼らは話し合っていた。

「・・・少なくとも、ミカが本当の裏切り者なんだろうな。」

「そしてアズサを守れ・・・ですか。彼女は暗殺されるとまではいかないものの、退学させられそうになっているのは事実ですからそういうことなのでしょうね。」

「いや、わからない。もし退学することが出来なかったら、暗殺をするかもしれない。」

フォードはピアーズが話しているように彼女が退学させられそうになっている状況は事実だが、暗殺されるという状況についても想定をしていた。最悪の想定である。

「でも暗殺するなんて彼女には出来ませんか？」

「この学園の治安維持組織である正義実現委員会が、暗殺するとは考えにくいが……彼女の権力を使えば、ああいった組織ぐらいは動かせそうじゃないか？」

「彼女直轄の実働部隊……もしかしたらティーパーティー直轄の部隊がいるかもですね。」

「もし存在するとしたら、俺たちは戦う羽目になるのかね……最悪だよ。」

フォードは戦うことに嫌気が差していた。いくら彼らは特殊な訓練や実戦といった経験を積んでいたとしても、先生のような普通の人間と変わらず一発で死ぬこともある。それに比べて、ヒーローを持つ生徒たちは1、2発程度じゃ死ぬことなんてなく、せいぜい運と当たり所によつて一時的に気絶させることしかできない。

それに数がいくらいいるのかもわからない。もしかしたら、フォードたちと同じ二人かもしれないしフォードたちよりも多いかもしれない。数で押されるとなると彼らは厳しいと考えている。どちらにしろ、今いる彼らのみで戦うのは不利でありフォードがそれらの理由から、戦うことを避けようとするのは当然だった。

「それと戦うとしたらこの校舎内におびき寄せるしかなさそうな気がします。」

「ああ、ゲリラ戦に持ち込んでしまおうってことか？それならアズサでもなんとかなりそうだが……」

ゲリラ戦、それはアズサが得意とする戦術だ。一般的にゲリラ戦は待ち伏せ攻撃や奇襲攻撃といった相手の不意を突く戦法であり、上手くいけば一度にかなりの損害を与えることができる。彼らはもし戦うのであれば、この宿舎に引き寄せてゲリラ戦に持ち込もうという考えに至っているのであった。

「そういえば、日中たしかシスターフッドの生徒が誰かが仕掛けたブービートラップに巻き込まれていましたね。」

「あれか……ただ訪問しに來ただけなのにあれは不憫すぎるな。」

彼らは日中、ハナコに会うために訪れたシスターフッド所属の生徒であるマリーと接触した時のことを思い出す。彼女は何者かが出入

り口やドアに仕掛けているブービートラップの存在を知るわけでもないので、まんまと引つ掛かるという不運な出来事に見舞われた。それも一回だけでもなく、数回も。

当時、彼らは巻き込まれた彼女を見て同情してしまうほどの出来事だったのだ。

「俺たちは幸運にも引つ掛かることはなかったな……怖いものだ。」

フォードがそう呟いていると、ピアーズは就寝するときに着ている黒色の短パンからスマホを取り出す。そしてスマホを操作すると、フォードに写真を見せた。

「これは…… 宿舎内の地図だな。」

「そうです。あと、あの後マリーの訪問に自分たちが調べたブービートラップの場所もちやんと記してあります。」

「助かる。」

ピアーズは右にスマホの画面をスワイプすると、地図に赤色の印で記された画像が出てくる。これがブービートラップが仕掛けられた箇所である。

「ええと、本当に至る所にあるな……。」

「一体誰が何の為にしたのでしょいかね？」

「……これって利用できそうじゃないか？」

「何にですか？ ティーパーティとの戦いですか？」

「その通りさ、もし誘い込むとしたら——」

それから彼らは敵が襲撃するであろう場所を予測、そしてどのように戦うのかを議論した。宿舎内に存在する数多のトラップ、弾薬の保管場所、侵入可能な入り口、医療品の在処といった戦闘時において役に立つであろう情報なども整理した。

それらの情報の整理や、戦闘時の対応について議論しているとあつという間に時間は過ぎていった。

「いや、やっぱりこの入り口を封鎖してだな。」

「いえ、封鎖するだけではだめです。バリケード

の設置を……。」

そして、彼らの議論をしている最中に一つの叫び声が聞こえたことで議論が中断させられた。

「さ、3人……!!バカ、ヘンタイ!淫乱族っ!!」

その声を耳にした兵士たちであるフォードとピアーズは一体何が起こったのか、ということを理解出来なかったが万が一に備えて、彼らのサイドアームを携帯し声が聞こえてきた場所へと全速力で向かった。

なお彼らは黒色の短パンを履き、タンカラーのインナーの上にボディーアーマーを着用している。そんな姿で全速力で駆け付けると、声の主であるコハルは夜の密会を開いていた三先生、ヒラミ、ハナコ人たちを叱っているようだった。

もちろん、すぐに現場に到着したフォードはその状況が理解できず何が起きたのか尋ねる。

「どうしたんだ!?何があった!?!」

フォードがMP17に取り付けているライトを照らしながら、そう叫ぶとコハルは振り向く。そして彼女はフォードたちの姿を目にしたところ、こう言い放った。

「い、淫乱族が5人も!?こ、このヘンタイ——!!」

彼らは普段よりも露出があまりにも多い姿で駆け付けたためか、コハルに叱られる羽目になった。もちろん、その場にいた5人全員はコハルからのお叱りを受けてから就寝するのであった。

<翌日>

空から低く大きな音が耳に鳴り響くとフォードは目を覚ます。

「……なんだ……?」

重たい瞼を開けながら、仰向けになっていると再びその音が聞こえ

た。

その音は砲撃が地面に着弾する時そのものであり、耳にしたフォードは宿舎は現在攻撃され、ただちに戦う必要があると考え起き上がる。

「クソ！砲撃だ！起きろ！」

フォードはぐっすり寝ている、ピアーズを叩き起こす。

「……ほ、砲撃……？……っ!!」

フォードに言われるがままに起き上がると、すぐさま個人装備であるボディーアーマーとヘルメットを身に着ける。そして、Mk. 18を手取る。これで反撃の準備ができた。

再び音が聞こえる。まだ合宿所に着弾しているわけではないが、敵は宿舎を狙おうとしているのは明白だ。

「ピアーズ、急げ!!」

フォードがそう叫ぶが、ピアーズは動かない。そして、ピアーズは身に着けている装備を解除し始めた。

「何やっているんだ!俺たちは攻撃を受けているんだぞ!!」

フォードはピアーズに叱責する。しかし、そんな叱責は次の言葉で無意味となる。

「……え?何を言っているのですか、これって雷ですよ?」

「え?そんなはずは——」

「いやいや、さっきの音は雷ですって……。」

そう、フォードは雷が空に鳴り響く音を砲撃と勘違いしていたのである。そのため、攻撃を受けていないため損害も何もない。しかし、フォードはそのような真実を信じることはできずまだ攻撃を受けていると勘違いしているのだ。

「本当か?」

「本当です。10ドルを賭けられるくらいにはです。」

「そうか、俺は雷じゃないにビールを2杯賭け——」

そうやって賭けた直後、雷鳴が響く。そうすると視界が突然に暗転した。暗転した原因はフォードが気絶をしたわけでもなく、落雷による停電だった。

そして信じられないと賭けたフォードは目の前で起きた停電が落雷によるものだど認識し、賭けに負けるのであった。

「だから雷だと……それはそうとビール奢ってくださいね。」

「あ、ああ……。」

<一時間後>

トリニティ総合学園・合宿所 体育館

「まあ、こうなるのは仕方ないような気もする……。」

そう告げるのは先生である。補習授業部の生徒たちとフォードたちは、かなりの広さがある体育館にて集結していた。

そして集まる彼女たちはいつもの制服を着用しているのではなく、水着を着ている。そもそも彼女たちが水着を着る機会は本来はなかったが、朝からの悪天候により着替えがないこと。そしてそれらを洗濯したが不幸にも、宿舎に襲い掛かった雷が電源等をノックアウトしてしまったことにより、洗濯も不可能な状態に陥ってしまった。すなわち八方塞がりである。

そして、いくらなんでも下着のままではいるわけにもいかない。そして彼女たちは水着を着用するという選択肢しか残されていなかった、というのが事の経緯だった。

「そうですね。こうなつては、パジャマパーティーならぬ水着パーティーくらいしかすることがありません♡」

ハナコがそう口に出すと、ヒフミは返す。

「あうう……な、何か他にもありそうな気がしますが……。」

「なるほど、下着パーティーとかもありそうですね♡確かに昨晚は、フォードさんたちは下着で私たちのところまで駆け付けたものですが、意外と賛成する方はいるかもしれませんよ？本当に良いんです

か……？ふふっ。」

「二応、あれは戦闘用のインナーでもありますから……。」

ハナコの誤解を生むような発言にピアーズはそう返すが、ハナコはニツコリとした顔でいる。きつと彼女はこういった話においては、無敵の存在なのだろう。

「こうなると授業もやりにくいし……こんな落雷くらいで全部の建物が機能不全だなんて、酷いセキュリティだ。」

アズサはM4A1を携帯しながら、そう不満を漏らす。それどころか、この建物は酷いことに廊下の照明の数が圧倒的に皆無であり、夜中は他の明かりが無ければまともに出歩くことすら出来ないも不満の一つでもあるのだが……。

それはさておき
閑話休題。

この突発的に開かれた水着パーティーは誰かが考案したのかは分からないが、ある変態……という噂が密かに広まっている人物から考案されたものでもあった。

そんなこともあつてか、コハルは若干反発していた。

「水着パーティーって何なの!!卑猥!!どうして水着を着てこうやって、皆で集まるのよ!!」

昨晚と変わらない調子で叫ぶコハルは今日も元気である。そんな頭の中がピンクに染められている彼女にハナコが話しかける。

「みんな寄り添って、お互いの深い部分をさらけ出し合う……雨も降っている上に停電で何も見えませんし、雰囲気は最高です!」

ハナコは続けて。

「うふふふ……♡せつかくの休み時間なんですし、有意義に過ぎません?」

「あはは……確かにこういったのは合宿の定番という感じはしますね。」

ヒフミの言う通り、こういったことは合宿の定番でありとても楽しいものだ。ただ水着を着てまではしないが……。もちろんこのことは再び、コハルに突っ込まれる。

「いやいやいや、納得するか!!水着と掛け合わせる意味は!」

「まあまあ、せっかくなんですし楽しむことにしましょう。」
ハナコは元気そうに喋る。おそらく、彼女はこういった学生らしいことをあまりしたことがないのだろう。

「あーあと、せっかくフォードさんたちとも関わられるのですし互いを知る良い機会だとも思いますよ。」

先生と補習授業部の生徒たちは密接な関りがあるが、彼らはほとんど彼女たちと関わる機会がなかった。しかし、この機会を有効に利用すれば彼女たちについてさらに知れるほか、信頼関係の構築が可能といったメリットがある。それらの理由から、彼らはこの水着パーティーに参加していた。

「俺たちもこうやってゆっくりと話せる機会なんて無くてな、嬉しい限りさ。」

「自分たちはほとんど警備の業務とかで、関われなかったのですからね。」

フォードたちは話す。実際は警備という業務は大嘘であり、監視といったものであったが……。

「まあ、ただのおしゃべりですし話題は何でもありということですね。それから、楽しいおしゃべりの時間が幕を開けるのであった。一同は他愛のない話を交わした。時にはキヴォトスにまつわる噂であったり、彼女たちや彼らのユニークかつ貴重な経験についての話。そして、ジョークなどといったものであった。

「そういえば、今トリニティのアクアリウムにはゴールドマグロというのが展示され……。」

「……。水着で街や学園を歩き回るやつがいるか!!公然淫猥罪だよ!?!」

「海か……。とても楽しいのはわかる。ただ地獄週間は勘弁だな。」

「アズサちゃんはもつと、夜はきちんと寝たほうが良いと思いますよ。」

「…… うん。今朝は寝坊をして迷惑をかけてしまった。慣れない場所で寝坊なんて、ほとんどなかったのに……。」

話題が転々と変わっていくと、今度はアズサの睡眠についての話となった。皆はアズサがあまり寝れていないことに、心配しているのだ。

「…… とにかく、もっと寝たほうがいいです。深夜の見張りは減らしていただいて。」

「見張りは俺たちで十分さ。こういったことは俺たちの仕事さ。」
フォードたちはアズサに助言を伝える中、先生も加わる。

「ハナコ、アズサのことを心配していたよ。」

その言葉を聞いたアズサは少し目線を逸らして答える。

「…… そうなのか？ 実は、見張りは言い訳で…… ブービートラップとかを設置していたんだ。」

「…… どうして設置したんだ？ もしかしたら引っ掛かって、俺たちや先生が巻き込まれたら死んでいたかもしれない危険な行為だ。」
フォードは問いかける。なぜアズサがブービートラップを仕掛けたのが、理解出来なかったからだ。

「それはそうだけど…… ここに悪意を持って侵入しようとするルートだけに設置してあるから。普通の生活をする上では、問題ない。」

「なるほど…… ですが、それなら教えてくれると嬉しいです。どうしても、心配しちゃうので……。」

ハナコはそう伝えると、アズサは申し訳なさそうな顔を見せる。

「ごめん、これからは気を付ける。私のせいで、先生たちとみんなが被害を受けるのは私の望むことじゃないから……。」

「アズサは優しいんだね。」

「なっ…… 子供扱いしないで、先生。」

先生が放った言葉はアズサの顔を赤面にさせた。おそらく、アズサ自身も褒められるようなことが嬉しいのだろう。そして、顔の赤面が収まるとアズサは続ける。

「私は別にそんなのじゃない。だってこの世界は全てが無意味で、

虚しいものだ。だから、もしかしたら……。私はいつか裏切ってしまうのかもしれない……。みんなのことを、その信頼を、心を。」

「「「「「……。」」」」」

一同はなんと返せばいいのかわからず、固まってしまった。その沈黙から数秒後、薄暗い体育館は明るくなる。

「あ、電気が……。」

「直ったみたいですね。」

「あ、雨もいつの間にな！」

どうやら、朝の悪天候とは打って変わって快晴となったようだった。

「そうですね。では、もう一度あらためて洗濯をしましょうか。」

「うん、じゃあ第一回水着パーティーは閉幕か。二回目も楽しみにしてる。」

「ああ、俺もだ。今度は俺も着ることにしよう。」

「自分もです。」

アズサに続いて、少し冗談交じりにフォードたちは伝えたところコハルは声を荒げて。

「二回戦とか無いから！こんなの最初で最後だから!!!」

とにかく、こうして楽しい第一回水着パーティーは閉幕するのだった。

<20??年初夏>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園／合宿所の一室

「……で、朝の賭けのビールはいつ奢ってもらえるんですか？」
まるで子供のおねだりのようにビールを要求しているのはピアーズである。そして、今朝の賭けに負けてしまった張本人であるフォードはというと。

「ええ……今？確かに、もう夜だが……。」

「何か問題でもあるんですか？ないなら奢ってくださいよろしく。」

「問題だらけすぎるぞ？」

そう今回、賭けたビールを奢るには実はいくつかの問題がある。まず、学園都市キヴオトスにビールなどの酒類を販売している店はあるのかという点。ここ、キヴオトスでは未成年の煙草の喫煙や飲酒が生徒たちには禁止されている上、酒が購入できたとしてもまともにキヴオトスの店を巡ったことすらない彼らは、購入できる場所すら分からないのだ。

余談だが生徒は酒類の入手を禁じられているため、どこかの美食研究会という名の実質テロリスト集団のリーダーがエタノールとぶどうジュースを混ぜて、ワインの代用品にしたこともある。

「……つまりだな、ビールを奢るにはここを抜け出すか早く任務を終えるかの二択しかない。」

「うーん…… 抜け出しません？もしかしたら、美味しい物も食べられるかもしれませんよ？」

「言われてみれば、そうだが……。」

ピアーズの言葉に惑われそうになるフード。さらに、彼は誘おうとしてくる。

「あのクソツタレなMREよりはマシでしょう？それとも、MREの味が好きになってしまったのですか？」

MREは不味い。これはフードも納得するどころか事実である。MREは近年においては改良され続けているものの、一般的な家庭料理の味や通常のレトルト食品と比べた場合は不味いと評価される食べ物だ。

あまりの不味さに、MREの略はこう言われている。

Meal, Ready to Eat
Materials Resembling Edibles
や、

Meal, Ready to Eat
Meals Rejected by Everyone
兵士の間では皮肉にされているほどだ。

そのように言われているほどMREは不味い、不味過ぎるのだ。ただ、ゲヘナの給食部に所属するとある部員が作る生物兵器にやや近い料理よりは幾分かはマシかもしれないが……。

とにかく、彼らは合宿所に来てからMREしか食べておらず我慢の限界とでも言うべき時が来ていた。ピアーズの言う通り、他にも美味しいものを食べたいという欲求がフードも出ていた。

「…… そうだな、今日ぐらいどこかに行くか。金は…… 経費で…… いや、俺たちで払おうか。」

「じゃあ早速、行く準備をしましょう！」

「ああ。今日ぐらいは楽しむか。」

彼らはそうやり取りをすると、外出時に銃撃戦に巻き込まれても大丈夫なように装備を整え出発するのであった。

行き先はここから少し離れたトリニティの繁華街である。

<1時間後>

トリニティ自治区／繁華街・大通り

「おしやれな街並みだな。」

「ええ、中世の街並み……ほどではありませんが綺麗ですね。」

彼らは繁華街の大通りを歩きながら会話していた。通りには様々な店……煌びやかな衣服を取り揃えた店、たくさんの可愛らしいぬいぐるみが棚に並べられている玩具店、女子高生を虜にしてしまう焼き菓子売る店などが活気づいていた。

「……絶対こんなところにビールなんかないぞ。」

「いいえ、子供ビールならありますよ。多分。」

「じゃあ、それがいいのか?」

「嫌です。」

見た感じから大人向けの嗜好品を販売している店は、この美しい雰囲気と漂う繁華街にはないだろう。

「とりあえず、見て回リませんか?」

「了解だ。」

彼らは石造りの通りを歩く。時々、店に目をやるとガラス越しからトリニティの制服を着た生徒たちが、楽しそうに会話をしている様子が目に入る。

「楽しんでいるなあ……羨ましい限りだ。」

「何か高校時代に悔やんだことでも?」

「いや、そんなことはないさ。」

そんな風に彼らはやり取りをしながら、街中を探索していると一つ

の店が目に入る。そして、その店の中には見たことのある姿の5人組がいた。

「ピアーズ、あのスイーツ店を見ろ。先生たちがいるぞ。」

「んん…？ほんとですね。何をしていますのでしょか？」

先生たち御一行は体格がかなりデカい正義実現委員と会話をしていようだった。そして、体格がデカい少女はどうやらパフェを三個食べているようであり、そのうち二個は既に空の器である。

「そういえば、先生は酒飲めるよな…。この辺にあるいい店を教えてくださいか。」

「じゃあ、教えてもらいに行きましょう。」

彼らは店に近づく。そして、ガラス張りのドアを押しして中に入った。中に入ると、彼女たちがいる席に向かう。

「よう先生、何をしていますんだ？」

フォードが先生に話しかけると一同は彼に視線を集中させ、先生は答える。

「あれ？奇遇だね。そつちこそ何をしていますの？私たちは限定パフェを食べに来たつもりなんだけど。」

「なるほどな。お楽しみ中だったところすまないな、こちら辺に美味いビールが飲める店を探しているんだが…。何か知らないか？」

「うーん、特には…。」

「無いのですね…。」

ピアーズは少し声のトーンを落とし、がっかりした。きつと、上官から奢られるビールを楽しみにしていた分その反動でこうなったのだろう。

「あら？あなた達は…キヴォトス派遣隊の兵士ですよね…しかも、ティーパーティー直々に合宿所の警備を依頼された方たち…。」

正義実現委員の制服を着た彼女がフォードたちに問いかける。彼女は羽川ハスミ、正義実現委員会の副委員長である。

「なぜ、俺たちのことを知っている？」

「噂…とまではいきませんがそういった情報を耳にしたことがあ

りますし、以前にあったシャーレ奪還作戦に私も参加していましたので。」

「噂ですか?どういったものが?」

ピアーズが尋ねる。

「はい。シャーレの奪還作戦の話も有名ですが、アビドスでカイザーPMCに攻撃を仕掛け、基地の兵力をほとんど壊滅状態に追い込んだことがシャーレの活躍に併せて広まっていますね。」

「ああ……あれか。」

「それと、去年の冬ぐらいにゲヘナ自治区で暴れていた多くの不良集団を叩きのめした、正体不明の武装勢力がキヴオトス派遣隊ではないか?とも最近になって噂されていました。」

そのハスミの話にハナコが割って入ってきた。もちろん、ハスミはそれを知っているようで二人はやり取りをする。

「ああ。あの話ですか、その噂の武装勢力はよく風紀委員会と衝突する集団や自分たちに攻撃する集団のみに攻撃をしていたらしいですね。」

「当時の生徒たちの間では遂に、反社と風紀委員会が手を組んだ——というのが憶測で、広まっていたようですね。」

「ゲヘナ学園は大変だね。」

先生はその噂話にそう反応する中、フォードたちは黙っていた。そして、ハスミは再び話を始める。

「ああそうそう、まだトリニティの中でしか広まっていませんがあなた達二人は学園に入って、銃撃戦を起こして捕まったというもの。」

「学園内の規定を破ったのは申し訳なかった。ここで改めて、隊長として謝罪する。」

フォードは頭を下げて、ハスミに謝罪する。

「全然気にしなくていいですよ、あなた達は彼女を救おうとして破っただけのしょうし。」

実際、あの時戦わなければ彼女はどうなっていたのかは分からない。でももし、あの時助けずに放置していたらどうなっていたか、彼女の身に何が起こるのか。それ以上はフォードは想像したくなかつ

た。

” ヲヅヅ ”

突然、着信音が店内に響き渡る。

「……？こんな時間に、連絡？」

ハスミは不思議そうな雰囲気醸し出しながら、スマホを取り出す。そして通話を始める。

「はい…… イチカ？どうかしましたか？」

「ハスミ先輩、ちよつと問題が発生しちゃいまして。今どちらに？」

「問題……？詳しく聞かせていただけますか？」

イチカと呼ばれる少女は何が起きているのかをスマホ越しに説明する。彼女曰く、どうやら学園の近郊にゲヘナ側の生徒4名が侵入し、様々な施設に対しての破壊活動のほか無差別な銃撃戦を行っているとのこと。そして、その生徒たちの狙いはゴールドマグロと呼ばれる希少種の強奪だとか。

どうやら正義実現委員会が交戦しようとしているのはテロリスト相当の集団だろう、とフォードは判断する。

「えーつと…… どうやら正体はゲヘナのテロリスト集団、美食研究会、らしいっす。」

訂正、どうやら相手はテロリストのようだ。テロリスト相手なら、フォードが所属する部隊のDEVRUが出番となる。つまり、フォードたちが協力すればこの銃撃戦は容易に解決できるに違いない。

そう判断した彼は、ピアーズと顔を見合わせる。見合わせた彼は小さく頷いた。彼も同じ考えのようだ。

イチカとの通話を終了した後ハスミにこう伝える。ただ彼らの部隊は秘匿されるべき存在、そのため言い換えて彼女に申し入れする。

「テロリスト相手なら、何回か戦ったことがある。協力させてくれないか？」

「……。」

突然、彼らから申し入れされた彼女は困惑する。しかし、少し思案する顔を見せた後話始める。

「……じゃあ、お願いします。あと皆さん、突然ですみませんが皆さんの力が必要です。お願いできますでしょうか？」

彼女は補習授業部一同に呼びかける。

「今はエデン条約を目前に控えて、色々と過敏な時期です。この問題が傍から見て『トリニテイの正義実現委員会とゲヘナ間の衝突』と捉えられてしまうと、状況が不利になることは想像に難くありません。」

彼女は続けて。

「つまり、ここにいらっしゃる皆さん……補習授業部とシャーレ……そしてキヴオトス派遣隊と一緒に解決してください。……そういう構図が望ましいのです。」

つまりとところ政治的な理由を付けられたくないという理由から、このお願いを要求しているようだ。そして、皆は嫌がる様子もないため先生はこう言った。

「よし、じゃあ補習授業部一同出発。」

「久しぶりの戦闘だ。腕が鈍ってしまう前に戦えて嬉しいぜ。」
フォードがそう呟きながら店の外へ出るのであった。

<数十分後>

トリニテイ自治区／学園・近郊

空に響き渡る爆発音や銃声を頼りに追跡。しばらく追跡していると遠くに光り輝く大きめの魚を抱えながら、話し合っている集団を発見することが出来た。

もしかしたらあの光り輝く魚はゴールドマグロで、集団は例の美食研究会だろう。

「先生、交戦の準備は出来ているか？あまり遮蔽物から出るなよ。」
フォードはそう伝えると、ピアーズと共に放置された車へと移動し盾代わりにする。車道に放置された車は数多く、銃撃戦の影響によるものだと察しが着いた。

距離は大体150m。気付かれていない。さらに接近する。そして彼らの後続からは補習授業部の生徒たちが近付いていた。

「君たちは俺たちから見て、左側の道路に展開。俺たちはこの真正面の道路を担当する。二方向からの射撃を仕掛けるぞ。相手は反撃できずに、あつという間にやられるだろうな。」

そう伝えると、彼女たちは律儀に移動した。配置が完了すると、フォードは先生と連絡を取る。

「先生、準備ができた。あとはそっちの合図で任せる。」

フォードはインカム越しにそう伝えると、ピアーズが話しかけてきた。

「さつきと終わらせて、ビール奢ってくださいね。」

「…… 私語は禁止だぜ？」

そして合図がやってくる。

「それじゃあ、戦闘開始！」

その先生の合図を皮切りに戦闘が始まった。最初に彼らの左手の道路にいる補習授業部から、発せられる連続した射撃音が聞こえる。そして、彼らもセミオートによる射撃を加え始める。

サプレッサーによる銃声と共に、肩に強い衝撃が叩きつけられると、マグニファイア越しから、狙いが定まっている先のターゲットに5.56mm弾は飛翔。

その弾丸は美食研の会長こと黒館ハルナの胴体に向かい命中した。しかし、たった一発では無力化が出来ないのは分かりきっていたので、再び撃ち込む。同様に、補習授業部からの射撃も加えられていた。射撃を加えられている美食研はというと、二方向からの射撃により完全に混乱しているようだった。

しかし――

「おい！あいつら、俺たちの射線が通らないところに隠れてしまっ

たぞ！」

たまたま美食研が集合していた場所にはコンクリートブロックが複数あり、それはフォードたちの射線を完璧に遮る遮蔽物としては最適であった。そのため隠れられてしまい、射撃を加えるのが不可能と化した。

その出来事と同時にインカム越しにヒフミとアズサの声が聞こえてきた。

「あわわ……こつち側にたくさんの銃弾が飛んできますー！」

「問題ない。撃ち返すだけだ。」

彼女らはそう言っているが、連続した銃声が美食研がいる方向からも聞こえ始めた。フォードたちがいる方向からの射撃は不可能な状態であったため、美食研は熾烈な射撃を加えられているのは間違いないさそうだ。

「ねえ、あのマシンガン^ズ使いのせいでもとにも狙撃出来ないのだけど!!きやつー！」

コハルの声が、地面に銃弾が命中した時に発生する甲高い音と共に聞こえる。どうやら、相手の機関銃手を先に倒す必要があるみたいだ。

「先生、スモークを補習授業部の前方に炊いてくれるようにハナコに指示を。俺たちは背後から攻め込む。」

フォードがそう伝えると、ピアーズと共に前進。しばらく20メートルほど進むと、スモークが着弾。次第にスモークの発生規模が拡大し、あつという間に補習授業部の姿を隠した。

「補習授業部、聞こえるか？気を逸らしているうちに下がれ。あとは俺たちに任せろ。」

そう伝えるとピアーズは美食研がいるであろう方向に銃口を向け、フォードはハイレディと呼ばれる銃口を上に向ける待機姿勢に移行。そしてピアーズを先頭に、フォードはその待機姿勢のまま前に位置する彼の右肩を左手で掴みながら前進し始める。

しばらく前に進むと美食研との背後を取り、距離は50メートルほどまで距離を詰めることができた。

「先にガンナーをやれ。」

フォードがピアーズに伝えると先ほどまで、彼女らに射撃を加えていたイズミに彼は狙いを定める。そして、引き金を何回か絞った。

「うわっ!?!」

数発にわたるセミオートによる射撃は正確に命中し、機関銃手であるイズミを無力化した。もちろん、突然イズミがあっけない声を出して倒れたことに他の美食研のメンバーは動揺し始める。

そして倒れこんだ彼女を除いた面子は行動不能となった彼女を置いてその場から離れようとする。

しかし、彼らは攻撃の手を緩めなかった。ピアーズは立射から二リングによる射撃に切り替えると、フォードは彼の右肩から左手を離しての射撃をし始めた。逃げようとする彼女たちに数発もの銃弾が襲いかかる。

「どこから攻撃されているのか分かりませんが、逃げるしかありませんね。」

「んんんんーっ!?!」

サプレッサーの音は意外と大きいのだが、彼女たちは逃げようと必死になっているのであろうか、しこたま撃ち込んでいるこちら側に全く気付かない。

肩に強い衝撃が何回か叩くと、美食研の擲弾兵らしき生徒アカリを無力化。

あとは首謀者のハルナと、赤髪で低身長の生徒であるジュンコ。それとどこかに隠れていたのかエプロンを着用し、まるで人質かの扱いを受けているように口がガムテープで抑えられている生徒のみとなった。

そしてフォードは残弾がいくらあるのか知る為に、マガジンに取り付けられている透明な窓を覗く。窓を覗くと、バネが伸びておりそれは残弾が残り僅かであることを示していた。

「リロードする。」

確認し終えたフォードはピアーズにそう伝え、予備弾倉が収められているポーチから新しいマガジンを取り出し、古いマガジンと素早く

交換。

古いマガジンは空となったポーチへと収められた。

こうしてリロードを行なっている間はしっかりとピアーズは射撃をしていたが、命中しても無力化させることはできずに、二人の距離がだんだん遠くなる。

そしてフォードと入れ替わりでピアーズがリロードを行おうとしたところ、不運にも逃走中の彼女たちが彼らの視界から消えてしまった。

「ああ、クソ！見失った!!」

フォードが悪態を突くが、すぐさま彼は先生へと連絡する。

「こちらフォード。先生！あの二人に逃げられてしまった！方位は……。」

インカム越しに少々、声を荒げながらフォードは報告すると先生からの返答が来る。

「今、追っているところ。」

「え？」

「さっき、後退させたでしょ？あの時に、実は美食研が逃げるかもしれない方向へと先回りさせたの。」

「…… 了解、俺たちは無力化した二人を確保する。あとは頼んだ。」

先生から突然、逃げられた方向へと先回りさせたという報告はフォードは驚いた。彼はこのまま取り逃してしまうことを恐れていたが、先生のおかげでなんとかなりそうだ。

彼はこの作戦の後、ピアーズと先生の2人にビールを奢ってやろうかと想像したが、今のやるべきことを思い出して目的を達成しようとする。

彼らは倒れたイズミとアカリに銃を向けながら近付く。そして、腰のベルトに取り付けられたポーチから白いプラスチック製のハンドカフを取り出すと、もし意識が復活した時に逃走されるのを防ぐために彼女たちの両手と両足それぞれに掛けた。

そして確保したことを報告する。

「フオードだ、二人確保。そつちは？」

「こつちもちょうど二人捕まえたところ。あとゲヘナの給食部の子と一緒連れ回されていたみたいだから、これで三人。」

「……給食部？とにかく、合流して彼女たちを正義実現委員会に引き渡すぞ。」

彼はそう伝えて、通信を終了したのだった。

「それでこの魚どうします？」

ピアーズは地面に放置されているゴールドマグロを見つめながら、尋ねる。

「……そうだ。肴にして食べてしまうのはどうだ？」

フオードがそう提案するとピアーズはこう返した。

「魚を肴にですか？」

<20??年初夏／21：30>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ自治区／大通りの一角

「これで全員を確保したんだな？」

フォードはハンドカフによって拘束された美食研一味と無理矢理連行された給食部のフウカを眺めながらそう呟く。

彼らは先の戦場で、トリニティ自治区内で暴れまわっていたテロリスト紛いの集団を全員拘束。そして今は、情報整理を兼ねて先生や補習授業部、トリニティの治安を守る正義実現委員会が集合していた。

「お疲れ様です、皆さん。お陰様で事態を無事に収拾することができました。」

ハスミは労いの言葉を皆に向ける。労いの言葉を向けられたヒフミとコハルは嬉しそうな顔をしながら。

「あ、あはは… 途中は大変でしたけど…。」

「や、役に立てたどうかは分かりませんが…！」

そんな風に嬉しそうな顔をする二人とは少し変わって、瞳を輝かせるアズサがいた。

「あの二人の戦闘を少し見れたが、物凄く勉強になった。それと正義実現委員会の戦術も今度見てみたい。」

「褒めてくれてありがとうな、お嬢さん。」

フォードは少しにやけた顔をしながら、アズサに向かって感謝し

た。

「ところで、この方々はどうなるのですか？」

ハナコがハスミに対し質問すると彼女は答える。

「本来ならば私たちの方でこの後の処遇を決めるのですが……今回は時期が時期ですので、ゲヘナの風紀委員会に託そうかと。そこで、先生もう一つお願いがあるのですが……。」

「うん、どういったもの？」

それから彼女はお願いとその理由について説明した。お願いは至って単純、拘束した生徒たちを風紀委員会に引き渡すこと。そしてその理由は彼女曰く、シャーレという第三者の機関が引き渡すことでゲヘナとトリニテイの両者に政治的な憂慮が減ること。余程彼女たちはエデン条約に対して気にかけているのであろう。

軍隊においても政治的な理由及び圧力から行動が制限されることがあるが、それと似たようなものだトフォードは感じ取った。

「……うん、任せてね。」

先生はハスミのお願いを承諾したところ、フォードは先生に申し入れます。

「俺たちもエスコートしていいか？また彼女たちが暴れたときは俺たちなら対処できるぞ。」

「じゃあ、エスコートよろしくね。」

「ああ……。」

それからフォードたちはゲヘナ風紀委員会と集合する地点へと向かった。

<同日23:15>

トリニテイ自治区・外郭の大橋

「ここが集合地点だ。風紀委員会はどこにいる？」

「車両で来るとのことですが……。どこでしょうね。」

ピアーズとフォードはそんな風にやり取りをして、到着を待っていると緊急車両が発するサイレンだろうか？そのような音が彼らの真正面から聞こえてくる。そして、そのうち橋の向こう側から車両が現れた。どうやら、あの車両が風紀委員会を載せているのだろうか。

やがてその車両がフォードたちのいる前で停車すると運転席から、看護師を彷彿とさせる姿をした少女が降り立つ。

「…… お待たせしました、死体はどこですか？」

「「え？」」

3人は死体がどこにあるのか尋ねられてあっけらかんとしていて、少女は言葉を改めて。

「…… 失礼。死体ではなく負傷者でしたね。たまに混同してしまつて。えー……。納品リストには新鮮な負傷者4名と人質1名と書かれていました。」

彼女は車内から紙を取り出し、眺めながらそう呟く。そして確認を終えたのか、彼女は目線をこちら側に向けると不思議そうな顔をして。

「…… ところであなた達は？正義実現委員会ではなさそうですね……。？」

「俺たちは……。」

フォードが説明をしようとしたとき、車両の後部にあるドアから開閉する音が聞こえらるともう一人、別の少女がこちらに向かってきた。その少女に彼は見覚えがあった。

「スーツを着ているのはシャールレの先生。」

「ヒナ!!」

先生が再開を分かち合うように名前を呼ぶ。

「久しぶりだね先生。ところで、この銃を持った大人たちは……。」
そしてヒナはフォードたちの前に歩んでくると、ジロジロと彼らに

目線を向けてきた。そんな風に視線を向けられる中、フォードは口を開く。

「久しぶりだな、ゲヘナの風紀委員長さん。いつ以来だ？半年以上前に一緒に戦ったのが最後か？」

フォードは突然、ヒナに声を掛けると彼女はそれに反応した。

「…… ええ、そうね。久しぶりだわ…… フォード大尉……。」

「ここにいる方々は知り合いでしたか。委員長。」

「うん、そうね……。」

ヒナはセナにそう答えると、先生がなぜこの場所に来たのかということをごつくりと説明する。トリニティで起きた美食研による一連の事件、それに対応した事実、そして政治的な問題を避けるために第三者であるシャーレや派遣隊の隊員がここに来たといったものだった。

——「なるほど。このタイミングでお互い政治的な問題にしないために、先生が。そして護衛としてあの二人も……。」

「そつちだつて同じだろう？例えば、公的には救急医学部が来たことになっていて君は付き添い…… という感じだろうか？」

「よくわかったわね……。その通りよ。」

ヒナがそんな風にフォードに対して返答すると、救急医学部という単語が出てきたからかセナが先生たちに自己紹介する。

「…… 救急医学部の部長、氷室セナです。以後よろしくお願ひします、先生。それと……。」

「ああ、俺はフォードだ。こっちはピアーズ。」

「…… はい。死—— いえ、負傷者がいたらいつでもお呼びください。配送料はいただきますので。」

「面白いサービスだな。でも配送中に死体になっちゃったら、料金取られてしまうのか？」

フォードが冗談交じりにそんなことを伝えるとヒナが突っ込みを入れる。

「よく負傷者を死体って言うけど…… 本物の死体を見たことないでしょうに。」

「はい。そのことについては委員長はないでしょう?」

ヒナは彼女からそう言われると少し、怪訝な表情を見せる。だが、そんな表情は2、3秒見せた後にいつもの冷静な顔に戻った。

「とにかく…… 美食研究会をこっち移してもらえる?」

ヒナは車両の後部のドアを開けて、移送するよう頼んだのでフードたちは拘束された状態の彼女たちを運び込む。運び込む途中、彼女たちはヒナにそれぞれ何か一言伝えたとヒナはめんどくさそうな表情を見せた。

学園の風紀を取り締まる彼女にとっては、問題児たちが引き起こす出来事に頭を抱えている。それだけではなくゲヘナの問題児たちは数多く、日頃から事件が起きる中それらを取り締まるためヒナを委員長とする風紀委員会は奔走しているのだ。

フードはそのような背景から、ゲヘナはいつまでたっても変わらないのだな。と若干哀れみを思いながらピアーズと共に移送の作業に励む。しばらくの間、彼女たちの手に取り付けたハンドカフを解除してから、後部の座席に乗り込ませるといった作業に集中すると、移送の準備が完了したのだった。

「…… 積載完了。出発の準備もできています。」

セナが後部のドアを内側から開けないように、鍵を掛けてから運転席に乗り込むとヒナにそう伝えた。

「…… いや、少し待って。」

伝えられた彼女はセナにそう告げると、先生とフードたちがいるところへ歩み寄ってくる。彼らの数歩手前で停止すると彼女は質問をしてきた。

「先生…… トリニティで何をしているの?」

「補習授業部ってところの担任を……。」

「それはもう知っている。色々と情報は入ってきているから……。それと、なぜキヴオトス派遣隊の隊員もいるのかしら? いや、正確には…… いわゆる特殊部隊の一員が?」

「と、特殊部隊!?!」

先生がやや食いつき気味に驚いた反応をする。

「……あなた達は他の部隊が使用していないような武器や、装備品を持っているでしょう？それにゲヘナで活動していた時に、あなた達は特殊部隊であるということも明かされたのを、今も覚えているわ。」

「……つまるどころ、何を言いたいんだ？」

「どうして中立であるはずのシャーレや、あなた達はトリニティにいるのかしら？この時期にトリニティにいるとまるで……。」

「「……。」」

彼ら三人は沈黙する。彼女は彼らのような中立的な組織が、トリニティという学園に加担しているのではないかと疑っているのだ。

「……やっぱり今の無し、気にしないで先生……。でもあなた達は……？」

「俺たちは軍人さ。それに俺たちの部隊がどういうものかということ、分かっているのだろう？それなら、察しが着くはずだ。」

「それは分かっているつもりだけど……。」

ヒナは普通ならば信頼できないはずの大人たちの一人である、先生のことを信頼している。それに対してフォードたちはある程度、信頼されていたが今は違う。

いくら過去に共闘したことがあったとしても彼らの部隊の特性、そしてトリニティにいるという事実があることから、彼女の目線から言えば様々な疑念が浮かび上がるため信頼できないのだ。

「まあいい……。ところでこっちから一つ聞きたいことがあるのだが、エデン条約についてどう思っている？」

フォードが話題をエデン条約について転換すると、彼女は困惑した表情を見せる。

「俺たちはこの条約と全く関係のない任務でトリニティに派遣された。だが三流の中古車のセールスマンの押し売りのような形で、俺たちは面倒ごとに巻き込まれた。その原因がある意味、エデン条約だよ。」

「あなた達はどこにいても大変なのね……。」

ヒナは他人事のような反応を見せるが、次の言葉で一変した。

「俺たち？いや、先生もだ。俺たちは、トリニティの裏切り者、を

探す羽目になったんだ。」

「……先生も!?……それに私にこんな大事そうなこと話していいの?」

「どうして、私のことも知っているの?」

先生はなぜそのことについて知っているか尋ねてきたが、それは後にした。

「君が俺たちのことをどう思っているかは分からないが、俺たちは君を信頼しているつもりだ。なにせ、戦友なのだから——。」

戦友であるがゆえに信頼していると伝えられた彼女は、少し思案する顔を見せたのちに。

「……。あなたらしい、兵士らしい考えね、あの時から変わらな
い……。」

「大尉の信条であり、自分たち兵士の信条でもありますからね。戦場で出来た絆は深いのですよ。」

ピアーズがどうして自分たちがヒナのことを信頼しているのか、したり顔で伝える。

「その通りだ、戦場で結びついた友情は深いんだ。さて、エデン条約について話して欲しいのだが……。」

フォードがそう説得すると彼女はエデン条約についての考えを述べ始める。

「エデン条約が軍事同盟という見方もあるけど、私は平和条約だと考えている。条約によって生み出されるエデン^E条約^T機^Q……あれを

武力集団と捉えたところで、誰かが単独で統制することは出来ない。」

「なるほど……。いくつかの権力が互いに抑制し、均衡を保とうとするから単独で統制出来ないというわけか?」

「それもそうだけど……権力を持つ全員が協力する事態となれば少しは変わるけどね。でも、最初からそんなことをするならこの条約を締結する意義もないし……それにマコトは他人と協力できない質だし。」

「マコトですか……万魔殿の方でしたね。いろいろと面倒だった印象しかありませんけど。」

マコトはゲヘナ学園のトップであり、彼らも一度は出会ったことがあった。ピアーズが言うように面倒な存在であると言われている原因は、彼女による勘違いや思い込みにうんざりさせられたことから来ている。

「ははっ、そうだったな……。ところで、マコトはこの条約に賛同しているのか？」

フォードは苦笑しながら尋ねる。

「……賛同したのは私だったから、彼女は何も考えてないんじゃないかなにかしら。私はこの仕事が色々面倒だし、引退するのもいいのになって。」

「引退？ 冗談だろ？」

「本当よ。ETOが出来たら今よりも遥かにゲヘナの秩序はマシになるはず。そうなれば私が風紀委員長である必要もないから。」

「でも、ここに一人悲しむ奴がいるぜ？」

フォードは先生を見つめる。先生はやや暗い表情をしている。彼女が風紀委員長をやめてしまうということに、物寂しさを感じているのだろう。

「……。」

ヒナはそんな風な表情をした先生を見て、何とも言えない雰囲気か漂ったところでセナから声が掛かる。

「風紀委員長、まだですか？」

「……ええ、今行く。じゃあお疲れ様、先生たち。また……。」

彼女はそう告げると助手席の方へと歩を進めた。ドアに手を伸ばし、あとは開いて乗るだけとなったとき彼女はこちら側に振り向いた。

「……補習授業部のことは先生いや、あなた達大人で守るのよね？」

唐突にそのようなことを聞かれ、フォードは不思議に思ったが先生が答える。

「うん。」

「……じゃあ、またね。」

彼女はそう言い残すと、助手席の扉を開けて乗り込む。そして閉めると、彼女たちと負傷者、人質を乗せた救急車は走り去っていった。その様子を見た、彼らはというと。

「じゃあ、俺たちも戻るとするか…。」

「ビルは…?」

「またいつかだ。この任務が終わった時でいいな? 先生も奢ってやるからな。」

ピアーズは少々、不満そうな顔を見せながら大人三人組は合宿所への帰路に着くのであった。

<同日23:40>

氷室セナ 救急医学部 部長

緊急車両11号・車内

「はあ、まさかあそこで先生だけではなくフォード大尉まで居たなんて。」

私が運転する隣でヒナ委員長はため息を吐きながら、そうおっしゃいました。横目で見ると、委員長は走行する車内から見える夜景を眺めて、物思いに耽っているようでした。

「…結局あの迷彩柄の二人はどういう方々でしたか?」

私はスーツ姿の大人の方は先生であると先ほど知ることが出来ましたが、あの方々はどのような人物であるかよく分からないため尋ねました。

「本物の兵士よ。それに特殊部隊に所属するエリートたち。」

「特殊部隊…ですか。」

特殊部隊という言葉は私も聞いたことがあります。SRT特殊学園にいる生徒は特殊部隊であり、精鋭の集団であること。そして最新鋭の銃器が集まっているとも聞いたことがありましたから。

「彼らとはいっつ出会いましたか？」

私はフォードと名乗る大人が「半年以上前」云々言ってたのと、私自身が興味があったので尋ねた次第です。

「去年の冬だったかしら……。まだ先生とも出会ったいない頃ね。」

「どういう関わりだったのですか？」

私はさらに聞き出そうとします。

「彼は戦友とか言ってたけど、本当に一緒に戦ったことがあるのは事実。最初は突然現れた上、正体の分からない大人で信用することもなかった。」

委員長は淡々と語ります。

「…… だけどある日のこと。私含む風紀委員会が不良たちの罠にハマってね、圧倒されたことがあったのよ。その時、彼率いる部隊は私たちを助けようとしてくれた以来、信頼するようになったわ。」

「なるほど…… そういうことがありましたか。」

私はヒナ委員長の話を聞いて、彼らについて少しでも知ることができて満足だったので、そう返しました。

「ただ今となっては、あまり信用できないわ。」

「……。先生は信用できるのですか？」

「信用できるわ。」

即答。委員長は彼ら二人は無理でも、先生なら信用できるようです。

「でも……。」

「……？」

「…… 彼らから信用されているから、私も信用できるようになれたらいいと思う。」

「…… 信用できる関係になれるといいですね。」

私はヒナ委員長に当たり障りのない返答をした後から、私たちは言葉を交わすことはないままゲヘナ学園に到着したのでした。

17:エデン条約編:No Room for Ci
villity

<20??年初夏>

空崎ヒナ ゲヘナ風紀委員会 風紀委員長

ゲヘナ学園／とある一室

「委員長、何かお探しですか？」

「…… キヴオトス派遣隊に関する情報。」

「わかりました。えっと確かこっちに……。」

彼女の衣服から胸の一部が横にはみ出ている。そのような姿は傍から見れば、痴女と思われるもおおかしくない少女……いや、ゲヘナ学園の行政官であるアコは私が何か探しているのかを察し、私が求めているものを探し出そうとする。

昨夜のフォード大尉たちと先生との接触が経ってから数時間が経ち、日付が変わった。私は彼らが所属する軍である、キヴオトス派遣隊の情報について、再び確認しようと考えて今に至るのだった。

「はい、この資料です。」

アコは私に、しっかりとファイリングされたやや分厚い紙束を渡す。

「アコ、ありがとう。」

私は差し出された資料を受け取り、本屋での立ち読みのように立つ

たまま内容を確認し始める。中身は基本的な情報……例えば、彼ら
がいつキヴオトスに派遣されたのかや、彼らが使用している装備品に
ついての私たちなりの考察が事細かに、記されている。

「そういえば、こんな戦車があったわね。」

私は独り言でそう呟きながら、真正面から撮影された戦車M1A2エイブラムスの写
真を見つめるのだった。

「こんな戦車はキヴオトスにはありませんね。トリニティ学園が採
用しているクルセイダーや、私たちのティーガーIよりも砲が大きい
ですよ。」

アコは私が見ているページを見ながら、そう伝える。確かに、私は
あのアビドス砂漠での戦いの時この目で見たことがあった。その時、
私は確かに大きいと感じたがまさか、全ての学園が保有している戦車
砲を上回るとは思ってもいなかった。

「推定で120mm……。この砲の威力はとてつもないでしょう
ね。」

トリニティが採用しているクルセイダーの口径は40mm。そし
て私たちが採用しているティーガーIの口径は88mmだ。120
mmという口径の砲を搭載した戦車は今のところ、キヴオトスにはな
い。最大で100mmの砲を搭載しているレッドウィンター学園の
戦車ぐらいしかない。

これが意味することは彼らの世界ではおそらく、根底的な戦術や技
術力などがキヴオトスとは違うのだ。その差異が勝敗を決定したの
か、カイザーPMCの一個大隊をあっさりと彼らは打ち破ってしまった。
恐ろしいものだ。

「……それにチナツはよくこんな写真を撮れたわね。」

そして私は資料に添付されている、さまざまな角度から撮られた戦
車の写真を眺めた。中にはカイザーPMCからの攻撃を受けたから
なのか、砲塔の装甲がへこんでいる写真や、泥沼にスタックしてし
まった写真などと豊富な写真が貼られている。

私はそれらの写真を見たのち、ページをめくり続けると遂にお目当
てのページとなる。

“特殊戦開発グループ”と太字で書かれた目次。それをめくると、彼らが使用している銃や装備の写真。そして、部隊の編制や戦術についての考察及び研究されている情報が載せられている。

私は写真に載せられているDEVGURUの隊員の写真たちに着目する。

「改めて見ると、彼らはやっぱり他の兵士たちの装備と違うわね。戦闘服にアーマーから銃、そしてヘルメットまで……。」

「そうですね。それに最初は不良にすら勝てない役立たずの大人かと、思いましたが変わりましたね。」

アコの言う通り、私たちは彼らが不良を倒すことすら出来ない大人の集団だと思っていたが違った。実際は、私たち風紀委員会には勝るとも劣らないほどの強さを誇るどころか、ある時は彼らの拠点に攻め込んできた大量の集団をあっさりと返り討ちにしてしまうほどの強さ。

それほどの強さを持つ部隊がなぜゲヘナに来たのかは不明だったが、確かに強いのは事実であった。

「それに……あの時、私たちが救援を拒んだにも関わらず助けに来てくれましたよね。まさか、あそこまでするとは……。」

「ええ、そうね……。大人ってあんな存在だったかしら？」

私たちが不良の罠に引つかかった時は、拒んだにもかからず助けに来てくれるほどの優しさ。大人とはこういうものだろうか？私は大人といえば、子供を騙し、自らの欲を満たすためだけに行動する薄汚い存在とは思っていた。

しかし、彼らは違った。あの時、フォード大尉は「仕事の一部」だと言っていたが、わざわざ私たちのために戦ったのが今でも理解が出来なかった。

先生は謎の信頼感がある。温かく、私が努力や苦勞しながら頑張ったことは先生が褒めてくれる。だけど、彼は違う。

先生のような温かい包容力があるわけでもないし、褒めてくれるわけでもない。以前がそうだったように。でもあの時は、なぜか信頼できた。それはなぜだろうか？

私は昨日のピアーズ中尉の言葉が気がかりであった。「戦場で結びついた絆は深い。」私は軍人でもないし、ただの生徒、子供であるからその意味は分からない。

でも、その言葉の意味が分かる日はいつか来るのだろうか？大人になつたら？軍人になつたら？私にとつては謎だらけすぎるから、今考えていることはやめにした。

——「そういえば、突然その資料を探し始めたことについて聞きたいのですが、何かあったのですか？」

資料を読み漁り、熱心に考え込んでいる私に尋ねてきたので、数秒の沈黙の後に答えた。

「いや、知りたいことがあったの。ただそれだけよ。」

私が知りたいこと。それはフォード大尉が所属する特殊部隊はもちろんのこと、彼に関する情報でもあった。しかし本当のお目当ては、彼らと私たちが去年の冬に共闘したときの戦闘記録であり、それを入手できたので十分だった。

「さて、これからもまだ書類仕事が残っているから、ちゃんとこなさないとね。」

私はそう言つて書類仕事に励むのであった。

<翌日>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園／合宿所の教室

「……ゲヘナまで行かされて、試験を受けようとしたが爆発に巻き込まれた？正気か？」

「本当だよ。」

「よく生きて帰ってこれたな……。」

そのように言葉を放つのはフォードである。彼は補習授業部が第二次特別学力試験を受けにゲヘナまで行ったが、結果は無駄足であったことを先生から先ほど伝えられた。

なお今回の試験は突然、試験範囲の拡大やら実施時間が変更されたとのこと。

もちろん、フォードたちはそのことを知る由もなかったため合宿所で深夜の与太話やら、ゲロを固めてレンガにしたような見た目であるMREの野菜オムレツを吐き戻さないように食べたり。と、彼女らがゲヘナに向かっている間はそうやって時間を過ごしたのだ。

そして彼らが就寝してから、6時間ほど経ったところに彼女らはようやく合宿所に戻ることができた。なお、彼女たちが戻ってきたときは皮肉なことに既に朝だったのだが。

それはさておき、どうやら第三次特別学力試験なるものが一週間後に控えているらしく、合格点は今回の試験と同じの9割以上。それに対して彼女たちの学力は今のままだと4人仲良く、退学なんてことになっってしまう。

非常に由々しき事態だ。

——「とりあえず、退学を避けるためには必ず次の試験で合格しないとイケないのか……。」

「「「……。」」」

退学を免れる最後のチャンス。それを逃してはいけないという重荷を彼女たちは背負っており、四人ともそれを分かっているのか彼女たちの目つきは真剣になっていた。

「……ちよつと悪いが、抜けさせてもらおう。ピアーズ、ついてこい。」

「了解です。」

彼らはそんな風にやり取りをすると教室から抜け出し、廊下に出る。

「ナギサを探すぞ。あいつがやっていることは間違っている。いく

らなんでもこんなやり方は……。」

フォードはナギサに対する不満を口にした。それもそのはず、彼女は彼女が試験範囲の拡大や合格ラインの引き上げといった明らかに、汚いやり方をしていることを知ったためだ。

「ええ、そうです。自分もこんなやり方を見ては黙っていられませんよ、どうにかして止めないと……。」

彼らの考えは一致していた。少なくともナギサのこのやり方に対して不満があり、どうにかしたいという考えがあった。例えば、これが彼らの与えられた仕事・任務でないにせよ少々、心底から悪く思ってしまうている。

そのため彼らは彼女を探し出すという行動に出るのであった。

「早く探すぞ。」

<数時間後>

トリニティ総合学園／合宿所の一室

搜索から数時間経ったが、彼女を見つけることはできなかった。しかも、彼女をよく見かけるテラスまで行ったがそこには何も姿がなく、誰も腰を掛けていない椅子や清潔なテーブルしかなかった。

そしてもう一つ。彼らにもう一つの取引を持ち掛けたミカにも会うことすら出来なかった。

「まさかいなくなるとは……。」

「こういうことは既に想定済みだったかもしれませんがね。」

「いくらなんでもあアズサ、ヒフミ、コハル、ハナコいっつアズサ、ヒフミ、コハル、ハナコらが可哀そうだ。このままだと、あ

つらは理不尽な退学を受ける。」

フォードたちは短い期間でしか、彼女たちと過ごしたことが無かったが初めて出会った時よりかは信頼できるようになった。

そのためか、彼らは彼女たちの力になれることをしようと思っっているのだ。

「ナギサを見つけて、説得させるなりしたほうが今の状況から脱することが出来るのでしょうけど……。」

「ああ、その通りだと思う。でも結局のところ失敗した。それに……。」

「変な刺激を与えたくない。ということですか？」

4人全員をわざわざ裏切り者だとみなして、退学にさせるという荒業をしようとしているあたり彼女は相当な自信を持っているに違いない。そんな自分が正しいと思いついている彼女に反対の意見などを口に出せば、何が起るのか分からない。

それゆえに彼らは彼女と接触すべきではないのだ。

「……まさかここまで事態が捻じれてくるとは困ったものだ。」

フォードは呆れの声を上げる。本来の任務から目的が失われつつあるなか、この複雑なトリニティ内部の問題をどうにかさせなければならぬ。

「今これ以上自分たちがやれることはありません。ただ、違う方法ならあるかと。」

「違う方法？ 気になるな。」

「はい。彼女たちが合格出来るように勉強を教えるしかありません。ん。」

それから怒涛の一週間を彼らは過ごすこととなった。最初は彼女たちになぜフォードたちが教えるのか？ などと問われたが、彼らにとってはその質問はどうでもよかった。彼らが考えていることは彼女たちのためにどうにか力になれるかどうかであったからだ。

そんな風に朝から夜まで勉強漬けの日々を送ることになる。しかし、その日々の成果として模擬試験の点数も順調に伸びていき……

試験残りの一日前となった模擬試験ではほとんど合格点に達することが出来ていた。

そして試験一日前の夜。フォードたちはいつの間にか彼らの拠点と化した部屋で明日の試験について話し合っていた。

「またナギサが変なことをしないといいですね……。」

ピアーズは自身のMk. 18の清掃を行いながらそう述べる。

「俺もそう思う。ハナコにさつき聞いたが予定は午前9時ほどらしいな。」

「何かあった時のために自分たちも、早く寝たほうが良さそうですね……。この掃除が終わってからですけど。」

「ああ。」

ピアーズだけではなく、フォードも自身のMk. 18の清掃に勤しんでいた。Mk. 18は基本的に清掃をしなければ動作不良や命中精度にも関わるほどデリケートな銃だ。

これは同様にMk. 18と機関部が同じであるアズサが使用するM4も、前述のとおりこまめに清掃する必要がある。そして、彼らは銃を清掃が出来るような装備を持ってきていなかったが幸運にも姉妹といっても過言ではない、M4A1の使い手のアズサが清掃用の道具やらを持っていたため、彼らはそれを貸してもらおうことで今の状況に至った。

「……。」

「……。」

清掃中は終始無言の時間が続いた。それから、しばらく彼らは集中して銃身にこびりついた汚れであるカーボンなどを取り除くのが終わると、銃の組み立てを行おうとした。その時、ピアーズから声が掛かる。

「……. そういえば、結局自分たちは彼女たちをある程度信用していますよね。」

「……. どういう意味だ?。」

フォードはまだ分解されたままのMk. 18からピアーズに視線を移す。

「最初、彼女たちが裏切り者だとか疑っていたじゃないですか？でも、あの夜に必死で考えた推察がまるで奇跡のように当たっていたじゃないですか。」

「そうだな。あの夜が原因なのか分からないが一方的でも、彼女たちのことを信頼するようになったな。」

ピアーズは銃の組み立てを行いながら、再び話す。

「そうですね。あと水着パーティーでしたっけ？多分、あの時自分たちは決定的な信頼感をいつの間にか抱くようになったような気がします。」

水着パーティー。最初はただの暇つぶしのための雑談会かと思っていたが、今となっては違う。彼らにとっては最も彼女たちと交流することができ、そして信頼を強固にするためのきっかけとなった。

「……そう言われてみれば確かにだな。あいつらはゲヘナの風紀委員長のようにならぬ俺たちを思っているのか分らんが……。」

「自分たちこそ怪しい大人として疑われているかも……ですね。」
補習授業部には圧倒的な信頼感を置かれている先生がいる。先生と彼らを比べれば信頼の差は大きいとピアーズは考えたのだ。

「……冗談きついで。でも俺たちがやったことは傍から見ればストーカーと変わらないから、そう思われても仕方ないな。」

フォードは苦笑いしながら返す。実際、彼女たちが裏切り者であると判断するために盗み聞きしたり、ストーキングをしたのだ。これは事実であり、言い訳の仕様がな。

「……さて、もうそろそろ自分は組み立て終わってしまいますよ。」
ピアーズはほとんど部品を取り付けることができ、あと2〜3パーツほど付ければ動作確認をするだけだ。対してフォードはというと。
「遅いな、俺はもう付け終わっているぞ。」

フォードは彼よりも早く、取り付けることが出来ていたため動作確認を行っている最中だった。もちろん、その光景をみたピアーズは悔しがっていた。

「ちくしょう！ビール二杯目の賭けをしたかったのに……。」

「おいおい、そんなに上官に奢ってもらいたいのか？」

彼らはそんなやり取りをしながら、自身の作業を勤しむと次はAN／PEQ―16と呼ばれるレーザー装置やら、マグニファイアの取り付けも行う。

それらが終わると同時に突然、彼らの部屋の扉が勢いよく開かれた。扉の方を見やるとそこには先生と後ろには補習授業部一同の姿が。そして先生は口を開き。

「君たちの力が必要だから協力して。」

「一体なんだ…？」

そんな風に返すと後ろにいたハナコは先生よりも前に出てきて、啞然としているフォードたちに告げた。

「これからトリニティを転覆させるのですよ♡」

「…!?!」

「うふふ…。」などと笑いながら笑みを浮かべるハナコがいた。

18：エデン条約編：The End？

<20??年初夏／02：00>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園／第78セーフハウス・屋上

「こちらフォード。ラペリングの準備は完了した、いつでも突入可能だ。」

「了解です♡ たった今、警備の方々を排除しましたので私の合図に合わせて突入してくださいね。」

静寂が支配するトリニティの深夜。そんな闇夜に紛れて屋上でインカム越しにやり取りをする軍人たちがいた。

「まさか、ここでできてラペリングで突入だなんて……。」

と、やや困惑しながら口に漏らすピアーズ。

「ああ、驚きだ……。」

彼らはわざわざトリニティという学園に来てまで、ラペリング降下をするとは微塵にも思っていなかったからだ。

しかし彼らはそう思いながらも、ラペリングの準備は完了している。彼らはちゃんと衝撃を吸収するためのハーネスを身に着けることはもちろんのこと、ロープが体重によつて勝手に解けたり動かないように固定。

そうやってしっかりと準備した彼らは合図さえあれば、いつでも突入する準備が出来ているのだ。

「さて、そろそろ合図が来る頃ですかね？」

「さあ？」

そんなやり取りをしている彼らは屋上の出っ張りの上に立ち上がりながら、顔を見合わせる。一步でも動かせば本来なら、大怪我を負うかもしれない高さだ。

突然、彼らのインカムに声が入る。

「——今です、突入してください。」

突入を合図するハナコの声が聞こえると、即座に彼らのヘルメットマウントに取り付けられているGPNVG-18を起動。視界が緑色の映像として表示された。

それから彼らは建物の壁を蔭って、屋上から急降下。窓まで近づくとフォードはMP17で数発ほど発砲し、ガラスを撃ち抜いた。派手にガラスが割れる音が響くが、周囲には警備や野次馬などがいないため聞かれることはない。

そして撃ち抜くとM84スタングレネードを割れたガラス越しに、投げつける。手榴弾よりも短い間隔で起爆するように設計されているため、すぐに大きな音と猛烈な光が外にいる彼らにも伝わる。

「つ!!!」

ナギサのあられもない声が聞こえたが彼らはそんなことはお構いなしに、割れた窓から突入。真つ先に突入したフォードは開口一番に。

「両手を挙げて、地面に跪け!!」

彼はMP17をホルスターに戻して、Mk. 18をホロサイト越しに構えながらそうやって大きく怒鳴りつけると、ピアーズも侵入してきたので彼からもこう告げた。

「動いても無駄ですよ。大人しくしてください。」

彼らは至近距離で閃光弾を喰らった彼女にそのような言葉を浴びせると、遂にハナコとアズサがやってくる。

「ふっっ♡、紅茶をお飲みになっても眠れないらしいので閃光弾と銃弾をお届けに参りに来ましたよ。」

「なっ!?!」

「……………」

アズサがナギサの頭にM4A1の銃口を向ける。そして状況を悟ったのか、彼女は急に震えた声で喋り出した。

「あ、あなたたちが……裏切り者……!?!」

「ふふつ、単純な思考回路ですねえ♡ 私たちは駒に過ぎませんよ。」

ハナコは不敵な笑みを浮かべながらナギサを尋問する。

「……それとは別に。ナギサさん、ここまでやる必要はありましたか?」

ナギサはその言葉に対し沈黙するがハナコは続ける。

「いくらなんでも彼先生とフォードたちらを利用してまでやる必要は無かったのでしょうか。そして私たちを疑って……。」

「そ、それは……。」

「——特にヒフミちゃん。あなたと仲が良かったそうじゃないですか?こんなことをしては彼女が傷付いてしまうんじゃないのですか?」

「……そう、ですね。ヒフミさんには悪いことをしたかもしれませんが……ですが……後悔はしていませんすべては大義のため——」

「大義のためか……一つ。軍人として、大人としての教えだ。親しい人のことを裏切るな。」

フォードはそんなことを告げると再び変わってハナコからこう告げる。

「あなたの親しい人であり、私たちの指揮官からのメッセージです。」

『あはは…… えつと、それなりに楽しかったですよ。ナギサ様とのお友達♡♡』だそうです♡」

ナギサはその言葉を聞いた瞬間、痙攣するような動作を見せたがそんなことは構わずアズサに発砲するように命令。室内に耳を塞ぎたくなるような、けたたましいM4の射撃音が鳴り響いた。

<同日02:28>

トリニティ総合学園／合宿所の周辺

「こちらフォード、目標を確保した。現在移送中、そつちは？」

「バリケードや弾薬の準備は出来ている。」

「了解。」

フォードはインカムで先生とそのやり取りをしながら、気絶しているナギサをピアーズと二人がかりで合宿所へと運んでいる最中だった。

彼女の頭部には5・56mm弾が一弾倉分撃ち込まれたため、一時間ほどは気絶状態だ。

「……もうすぐ敵が来るはずですよ？アズサちゃん。」

「既に、偽の情報は流しているから急いで襲撃してくるはず。」

ハナコたちはそのやり取りを交わすとフォードが、その会話に割って入る。

「これから、俺たちはどうするんだ？ナギサを合宿所に連れていくが、そつちは？」

「私は時間稼ぎをするためにゲリラ戦を仕掛ける。トラップや塹壕があるから、かなり長く戦えるはず。」

「!?!」

フォードたちはアズサが塹壕戦をすることに驚く。それもそのはず、彼女が学園のいたるところに塹壕やらトラップを仕掛けていると今知ったからだ。

「ふっ♡じゃあ、アズサちゃん敵の誘導を頼みますね。」

「わかった。また。」

彼女たちはそうやり取り取りすると、アズサはナギサが隠れ家として利

用していたセーフハウスへと向かっていった。

「……さて俺たちも戻って備えなければ。」

……………

<同日02:36>

トリニティ総合学園／合宿所・廊下

合宿所の廊下には至る所に外の景色を眺めることが出来るように窓が取り付けられている。そんな外の様子を伺うことが出来る場所にフォードは立っており、合宿所の周囲をそこから監視していた。

「あともう少ししたら籠城戦か……。」

不意に彼はそんなことを呟く。実際、ハナコが立てたこの作戦はアズサが敵であるアリウスを誘導し、合宿所に正義実現委員会が救援に来るまでの間持ち堪えるというものだった。

突然、インカムからアズサの声が聞こえる。

「敵が来た!!!今、そっちに向かってる最中!」

どうやら遂にアリウスのお出ましのようだ。フォードはそれに返答する。

「了解、作戦通りに合宿所にてこちらは待機中。」

彼女にそう伝えると、遠くから連続して乾いた銃声や爆発音などが耳に聞こえてきた。そしてその音たちはだんだんとこちら側に近付いてくるのが聞こえると、アズサの姿が目に入る。

少し彼女から目を逸らすと、後方にはアリウスの生徒だろうか。頭にはガスマスクを身に着け、防弾ベストを着用している少女たちが後

退するアズサに対して射撃を加えていた。

フォードはそれを暗視装置越しに確認すると、アズサを援護するために射撃を加えている彼女たちに肉眼では確認できない赤外線レーザーを合わせ、数回にわたって引き金を絞る。すると、あっけない声を出して倒れこんだ。

しかし、数は多い。ざっと50人近くいるのだろうか。まるで合宿所は地面に落ちているゴミを吸い取る掃除機のように作用しているのか、アリウスの生徒たちを一気に引き寄せつつあった。

そのためフォードが射撃を加えていると、いつの間に撃ち込まれている方向に気付いたのか、狙われ始めた。

『ピシピシピシピシピシッ』

銃弾が壁に当たり跳弾する音が聞こえる。

「クソッ!!」

彼は狙われ始めたことに気付くと、悪態を突きながら制圧射撃を加えられている窓から遠ざかった。それと同時に。

「今、中に入った。あとは敵を待つだけ。」

インカム越しにアズサが合宿所に退避することが出来たという報告が入ると、彼は。

「了解、外は完全に包囲されているみたいだ。窓から顔を出さないほうがいいぞ。」

フォードはそう先ほどの出来事からそう報告すると、ハナコが立てた作戦に従って集合場所である体育館へと向かい始める。

途中、合宿所内に仕掛けられたIEDやクレイモアの数々が作動し爆発する轟音と共に、アリウスの生徒たちの悲鳴が聞こえた。

「うわあああああ!!」

「ぐああっ!?!」

もちろん、フォードはそのような叫び声を耳に入るところで眩いた。「……まさか、俺たちがトラップやらバリケードの設置位置を記した地図がここで使えるとはな。」

以前、彼らは宿舎内のブービートラップや宿舎内の弾薬及び医療品を把握し、それぞれの場所について記したことがあった。

その成果は本来なら、今回とは違う相手に対して使われるはずだったが、今となつてはアリウスの襲撃に対する反撃の手段として使われているのだ。

そのような事実にはフォードは複雑な心境を抱くのであった。

そんなことを彼は頭の中で考えながら、走り続けると遂に集合場所の体育館に到着することができた。中に入って、見渡すと先生含む補習授業部一同が待機していた。

「こつちですー！」

ハナコが合流しようとするフォードに気付いたのか、手を振ってこちら側であると示す。もちろんフォードはそれに応える。

「ああ!!」

彼は彼女たちの元に着く。彼女たち4人の後方には先生がいた。先生は今のようないきめな状況でも相変わらず、フォードのようなヘルメットやボディーマーを身に付けていない。そのような姿を見て、フォードは。

「相変わらずだな、先生。こんな世界でよく丸腰で生きていられるなんて奇跡だ。」

「…まあ、ね。」

先生はフォードにそのようなことを言われたので返す。その時だった。体育館の扉が勢いよく開かれ、たくさんのフル装備の生徒たちが中に入ってきた。

そしてそんな集団のリーダーであろう人物が体育館という、退路が一切ない場所に追い込んだことに好都合だと思つたのか、フォードたちに向かつて話しかける。

「こんな退路の無い場所でどうやって戦うつもりだ!? 大人しくターゲットを引き渡せ!!!」

「あうう……。」

ヒフミはそのようなやや強気の言葉に弱いのか、怯える。しかし、フォードたちがやる手段は一つしかない。戦うのみだ。

「お前たちの退路はもうない。」

「さて、仕上げと行きましようか♡」

「うー、こんなたくさんの敵を相手にするなんて…。」

「じゃあ、皆いこう。」

先生がそう呟いたところで、本格的な戦闘が始まった。

フォードは被弾しないようにするため、先生を連れて体育館倉庫から顔を出しては射撃を加えるという手段を取る。標的を定め、セミオートで数発ほど射撃を加えるとあっけなく敵は倒れこむ。そしてまた、狙いを定め――

あの四人はというと、被弾しながらも戦っているようだった。フォードと違い、ヘイローがあるものは簡単には死ぬことはない。弾丸が撃ち込まれてもただ痛覚があるのみ、出血や骨折といったことも起きることはないのだ。

アズサはフォードのようにセミオートによる精密な単発射撃を加えて、確実に一人ずつ倒す。

「コハル！グレネード！」

先生からグレネードを使うようにコハルが指示されると、彼女は間違えて成人向けの本を取り出してしまふ。

その様子を見たフォードは戦闘中だというのに何をやっているのだと、思ったのだが。そのあとは彼女はちゃんとグレネードを取り出し、固まって射撃を加え続けている集団に投げつけた。

「まずいぞ！グレネードだ!!!」

「はっ、早く逃げ――」

地面に投げつけられると、グレネードはボーリング玉のように転がり…数秒後には逃げ遅れた数人を爆発に巻き込んだ。

「ぎゃあああつ!!!」

断末魔が体育館に反響して響く。

「ナイス！」

先生がそのような言葉を投げかけると、コハルは褒められて嬉しくなったのか顔をニヤニヤとしながら戦闘に戻る。

しかしながら、敵の数は減らしているつもりであるがそれでも多い。

「敵はたった5人だというのに何をやっているんだ!!突撃用意！」

アリウス側のリーダー格の人物がそう告げると、その命令を受けて彼女たちは突撃準備をしてくる。

「おいおい、白兵戦が始まっちゃうぞ!!」

現代戦という比較的100m〜300m前後の交戦距離がよく発生するものの、突撃からの白兵戦といったことは滅多にない。そのような事実から銃剣突撃を訓練で習ったとしても、実戦で使用する機会はないのだ。

しかし、敵はどうして突撃するという判断を下したのかは分からないが、数で押し切るつもりのようなようだ。

「クソツタレ。」

彼はそう悪態を突きながら、アリウス側の指揮官に照準を定める。そして、引き金を数回絞った。肩に強い衝撃が何回か叩くと、敵の指揮官は倒れこんだ。

「もう深夜だ、悪い子は鉛玉でも喰らって眠ってろ。」

彼は小声でそう呟いたのと同時に、敵の部隊には混乱が生じたようだった。

「まーまずい！小隊長を失った!!」

「ど、どうすれば!?!」

現場指揮官を失ったアリウス側にさらなる攻撃が襲い掛かった。彼女たちが集団で固まっているところに、大きな爆発が生じた。

「うわっ!?!」

不運にも爆発に巻き込まれた彼女たちはそのような悲鳴を上げると、倒れこんだ。彼女たちに襲い掛かったのは、ハナコのL86のアンダーバレルに装着してあるAG36から発射された40mmグレネード弾だった。

「うふふっ♡、そんなに固まっていたらダメですよ♡」

ハナコはそう口に出しながら使い終わった弾を排莖し、新たな弾を装填するのだった。そして装填が完了し、狙いを付けようとしたところ。彼女たちが戦っていた近くの体育館の壁が爆発した。

もちろん、近くにいた4人は巻き込まれてしまい吹き飛ばされるのだった。

「あいたた……。」

吹き飛ばされたヒフミは立ち上がろうとすると、爆発した壁に視線を向けた。壁は穴が開いておりそこからさらに、数人も敵が突入してくる。

「増援がこんなにも早く!？」

「大隊一個単位が……ここに集まって来ている。」

「まだ、正義実現委員会は来ないの……?？」

彼女たちがそうやり取りをしたところ違う方向から、聞き覚えのある声が入ってくる。

「それは仕方ないよ。」

彼女が呟くと、敵は射撃を加えるのを止めた。もちろん、その聞き覚えのある声に目線を皆は向けた。

「ミカ……。」

先生が落胆する声を上げた。彼女は裏切り者だったのだ、この世界線でも。

——「どうせ、そつちの権限で正義実現委員会を待機にさせる命令でも下したのだろう?？」

フオードはミカ言葉に察し、救援が来ないことに彼の推察を見せつけた。

「あら、先生だけじゃなくてあなたもいたのね。その通りだよ。」

彼女は不敵な笑みをしながら話を続ける。

「……黒幕登場☆つてところかな?というわけで、ナギちゃんの居場所を教えてくださいな。」

「それは無理だ。」

フオードはミカの要求を拒否する。

「どうしてこんなことを……。」

先生はミカにどうしてこのようなことをするのか尋ねる。

「ゲヘナが嫌いだからだよ……。」

彼女はそう呟いた時だった。彼女はどこからか寒気がした、どこかで感じたことがあるような視線、そしてそれは今回の初めてではない。

「どうしてここまで事態を大きくして、第三者の先生や俺たちも巻き込んだのだ？」

フォードが彼女の視線を向けた張本人だった。以前のように眉根を寄せており、表情を僅かに険しく。そして、鋭利な眼光で彼女を正確に射貫いていた。

「それに……ハナコから聞いたただけだがセイアの暗殺を計画したのは君だろうか？ どうして？」

「え、えっと……。」

彼女は焦る。

「なあ、他人を殺めた気持ちはどうだ？」

「……。」

彼女はその言葉に返すことはできなかった。暗殺したのは彼女にとつては事実であつた。しかし、それは本来なら望んでいたものではなかつた。

彼女はちよつとの嫌がらせのつもりみたいな気持ちでいたのであるが、結果として今のような重大な事態へと事は進んでいった。いづから彼女は選択を過つたのだろうか。

彼女はまだ子供であり、幼いという理由からだろうか？ それを知る由は彼はない。

「過去の憎しみ……。その憎しみを向ける矛先を間違えるな。特に大切な人に。」

彼はそう言い残す。体育館は静寂が支配していた。ミカはフォードの言葉を聞いて、考え込んでいるのであるか？ 表情は暗くしており、先ほどもまでのような不敵な笑みはない。

それから数秒。突然、彼女たちの頭上に円筒が二本飛来。そして、強烈な閃光と轟音が体育館に響き渡つた。

「っ!!」

投げ込まれたのは閃光弾。フォードは何回か喰らつたことがあるため平気だが、浴びた回数が少ない彼女たちは混乱に陥つた。

そして――

「行け、行け、行け!!!」

そのような声が聞こえると同時に、サプレッサー越しの発砲音が様々な場所から聞こえた。閃光弾により、まともな抵抗すらできないアリウスの生徒たちはどんどん倒れていき……。最後に残ったのはミカだけとなる。

「どうも、やつと部隊と合流出来ましたよ。」

「い、今のは誰?！」

ミカはその声が聞こえてきた方向に目を向ける。彼女も一度は見たことがある人物だった。

「あなたは――」

「はい、ピアーズ中尉です。今は動かないほうがいいですよ、自分含め20人以上があなたのことを捉えていますから。」

<数時間前>

彼らが合宿所へナギサを運び込む途中にて。

「なあ、ピアーズ。俺は嫌な予感がするんだ。」

「どういう意味です?！」

ピアーズはフォードの顔を見つめながら、尋ねる。

「本当に救援の正義実現委員会が来ると思うか?！」

「うーん……。どうでしょうね……。」

この作戦は正義実現委員会の救援が来るまで、籠城するというものだ。だがしかし、万が一救援が来なかったら彼らは一巻の終わりなのだ。

「俺はこのあと、部屋にある広域用の無線でブラボーチームを呼び

出すつもりだ。お前は部隊の誘導を頼みたい。」

「……了解です。それまで持ち堪えてくださいね。」

彼はすんなりと上官からの命令を受け入れると、部隊の誘導のために彼は学園の外へと向かうのであった――

……

「武器を捨て、地面に跪け。」

フォードはホロサイトの照準をミカに定めて、その言葉を投げる。が、彼女は一向に投降しようとはしない。

そして彼女は彼の顔を見つめて。

「……何を見誤ったのかな。アズサちゃんが裏切ったから？ シャーレの先生を呼び出したから？ それとも……あなたたち兵士がこの学園に来たから？」

彼は依然として照準を定めたまま沈黙する。

「……本当はセイアちゃんのことを殺すつもりなんか……。」

「捕らえろ。」

彼は強引ながら、部隊の隊員に命令すると数人がかりで力づくで押し倒し、彼女の両手首に白いプラスチック製のハンドカフを掛けた。そして。

「……正義実現委員会に引き渡すぞ。」

彼はそう呟くとミカを連れて、部隊は撤収しようとする。しかし、その時ハナコから彼に声が掛かった。

「フォードさん、こちらに来てください。」

彼は呼び出されたのでハナコに近寄る。そうすると彼女は小声で。「どうして、セイアちゃんが生きていると彼女に伝えなかったのですか？」

それに彼はこう返答した。

「彼女はセイアを殺めようとした。報復とは言わないが、少しは痛

い目にあつたほうが彼女自身のためだと思つて、俺はあえて言わなかつただけだ。」

「……。」

「ただ正直に言えば、あのまますつと殺したという罪を背負わせるべきでないと思つている。だから、いつか彼女に知らせてやつてくれ。彼女の罪の意識、心を楽にできるように。彼女のことを忘れないであげてくれ。」

彼はそう言い残すと、部隊と共にミカを連れて去つていくのだつた。彼らが去つた後は体育館は静寂が再び訪れ、妙な雰囲気が残された者に襲われた。

「…… 誰の憎しみなのでしょうね。」

まるで憎むべき敵が苦しまれた過去を語り、敵であるにもかかわらず同情心を抱いてしまうのと同じように。切なく、少し憂鬱で絶妙な気持ちだった。

「…… もうそろそろ試験だから、行こうか。」

先生はその気持ちを振り切るかのように、補習授業部一同に呼びかけるのだつた。ただ彼女のことを忘れないように。

体育館を出ると、既に太陽は昇っていた。

第三次特別学力試験が実施されるまであと2時間しかない。

そして、まだ一週間の真ん中。今日も一日が始まるのだ。

19：再会と決意

<20??年初夏／戦闘から約2時間後>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園／正門前

「ああ、眠い……。」

フォードは空となったマガジンに5.56mm弾を詰めながらそう呟く。校門前には軍用ではない一般の車両が複数台も、止められている。

それらの車両は彼が指揮するブラボーチームの隊員がトリニティへ向かうために使用したものであり、彼はトランクにある弾薬箱から使用した弾薬の補給を行っていた。

先の戦闘で消費した弾薬は約180発ほど。30発入りマガジンで換算すると6個分に相当する。対してフォードがポーチに収めている予備弾倉は10個であった、つまりところ半分以上使われたのだ。

そんな風に大量に消費した弾薬を一発ずつマガジンに詰めるわけであり、かなりの労力が必要なのだ。

「……クリップが欲しい。」

彼は一発ずつマガジンに詰め込みながら愚痴を呟いた。クリップは一度に何発もの銃弾をマガジンに詰めることが可能であり、手で一発ずつ詰めるよりもはるかに効率が良いのだ。

そんな手間がかかる作業は辛いものであるがゆえに、彼は先ほどの出来事を振り返っていた。

——ミカは本当のトリニティの裏切り者だった。その推察自体はピアーズと共に考えたとき、可能性の一つとして出ていたが現実になるとは彼は一切思ってもいなかった。

実際、先の戦闘においてはそれが事実であると彼女からも伝えられたが、彼は少し複雑に感じていたのだ。それに加えて、彼は少し苦悩している。

「——セイアは生きているとミカに伝えるべきだったのか……？」

彼は小声でぽつりとそう呟いた。彼は彼女にセイアが活着している
と教えず、人殺しという罪を着せた。正確には、着せてしまったのだ。冤罪と何も変わりもしない、偽りの罪。

彼なりに彼女自身のためだと思っ
てあえて伝えなかったのだが、それは今になって考えると自責の念を感じる。今、彼女は人を殺したという虚構の事実にどういった思いを抱いているのだろうか？

きっと彼女はセイアを殺そうとしたことに後悔し、反省するだろう。それは反省するべきことであるので何も問題はない。しかし、存在しない殺人については彼女が償うものではない。いや、償う必要がないのだ。

償う必要がない罪を彼は着させてしまった。これは彼の失態であった。これこそなんと彼女に償えばいいのだろうか。彼女にとつてはあまりにも重く、存在しない罪。

あの時、彼が選択した、セイアが活着していることを伝えない”ということは良かったのだろうか？ただ、彼はその選択が正しかったのかと悩むばかりであった。

そんな時だった。

——「あの……すみません。」

彼の後ろから少女がフォードを呼ぶ。それはどこかで聞いたことがあるような声だった。

彼は呼びかけられた方へと振り向くと。

「えっと……あの時、助けてくれた大人の人ですよね？」

「君は確か……。」

呼びかけられた方に目をやると目の間には白髪ロングであり、服装はトリニティ所属の2年生であること示す制服の少女。そして、以前リンチされていた集団から救ったことがある生徒がいるのだった。

「——前、リンチから救った子だったよな？元気にしているか？」

「は、はい！元気ですが、お気になさらず。あの時のお礼をしたくてここに来ました……。」

「お礼？必要ないさ。」

フォードは常に襲い掛かってくる眠気を押し殺して、微笑む。

「でも……。」

「君が今、ここで元気な姿で出会えただけでも嬉しいさ。」

「……そうですか。」

そんな風に返された彼女は何か言いたいことがあるのか、少しもじもじする。しばらくそれが続くと彼女は彼に伝えようと決心したのか、再び話しかけてくる。

「あの……一つお願いしてもいいですか？」

「……できる範囲ならば。」

彼はそう伝えると彼女は深呼吸して。

「——わたしに銃の使い方を教えてほしいです。」

「銃？」

フォードは銃と言われて一瞬困惑するが、彼女は続けて。

「わたし、自分自身を変えたいのです。いつもいじめられるがままにされているのは嫌です、だから……。」

フォードは少し思案する。彼女はおそらく銃を使えないから彼にこうやって頼み込んだのだろう。銃社会を名の通りに体現しているキヴオトスにおいて銃は生活必需品だ。だが、彼女はそれを上手に扱うことが出来ないのだ。

そして彼が今まで見てきた生徒の中で銃をうまく扱えないというのは珍しいものでもあったため、しばらく考え込んでしまう。

それと加えて、彼にはまだ遂行せねばならない任務が課せられている。それらの事情も踏まえて考えたところ、彼は結論を下した。

「わかった。引き受けるでしょう。俺にも都合があるから仕事の合間にしか教えられないが……。それでも？」

「はい！お願いします!!」

彼女の頼みを引き受けてあげると、少し嬉しそうな声色を上げた。

「そういえばまだ名前を聞いていなかったな。俺の名前はフォードだ、よろしく。」

「わたしの名前はツバサです。これからよろしくお願いしますね、フォードさん。」

彼女の名前はツバサ。二人は初めてお互いの名前を知り合ったのであった。

「じゃあ、これから時間とかの調整を……。」

……

<それから2日後>

トリニティ総合学園／屋内射撃場

彼女との再会の日から2日が経った。それまでの間、彼はいまだに学園内の敷地の進入が許可されているため、任務遂行のために何回も出入りしていた。

そのように自由に出入りが出来ることを利用して、トリニティの屋内射撃場で教えようと決めたのだ。

「そういえば質問なのだが、銃を何回撃ったことがある？」

不意に彼はツバサに質問すると、彼女は丁寧に答えてくれた。

「そんなに多くはないです…。多分、10回も満たないと思います。」

「わーお…。」

フォードはあまりの回数の少なさにどこかのお姫様に似たような驚いた声を上げる。いや、きつと回数が少ないからこそ上達しようにも、出来ぬままの状態ではいたのではないのだろうか。

「わたし、本当に銃を扱うのが下手で…。」

「とりあえず銃を見せてもらえるか？」

彼は彼女にそう頼むと、彼女はどこから持ってきたのかアタツシユケースを開く。

「これは…。MCXか。」

フォードは白色の塗装が基調に施された上に所々に黒色のラインが入っており、あまり使われていないのか綺麗な状態で納められているMCXを見つめた。

MCXとは簡単にいえばM4の血の通っていない姉妹みたいなものだ。近年では法執行機関や軍隊での採用もされており、人気徐徐々が増えてきている銃でもあるのだ。

「触っても？」

「いいですよ。」

あつさりと彼女の銃を触っても良いという許可が貰えたため、彼はアタツシユケースからMCXを取り出した。取り出すと彼は、安全装置が掛かっているか真っ先に確認。確認するとどうやらしっかりと掛かっているようだ。

安全装置の確認を終えると、次はマガジンをチェック。どうやら半透明のポリマー製の30連マガジンであり、容易に金色に輝く5・56mm弾を眺めることが出来た。

そして最後に、彼はアイアンサイト越しに射撃場にある人型的に向かって構えた。アイアンサイトはMk.18に取り付けられているホロサイトと比べると捉えにくいだが、絶望的に見えないうけでもない。

こうして一連の確認を終えると彼はアタツシユケース内にMCX

を収めた。

「悪くない。手入れとかは？」

「使う機会がないのであまり……。」

「そうか。」

彼女はやはり銃をあまり使わないようだ。そんな彼女に教えるとなるとまずは基礎が必要かもしれない。

「さっそくだが、教えてもいいか？」

「お願いします。」

彼女がそう返すと遂に銃の使い方を教えることとなった。まず彼は最初に、銃口を向けるべきタイミングや構え方。

そして安全装置などの必要最低限のことから教えるのであった。

——「安全装置は構えてから、撃つ直前までは外さないこと。そして、常にトリガーに指を掛けるのはやめるんだ。」

フォードは自身のMk. 18で実際に、安全装置を解除したり再び掛けたりしているところを見せながら教える。そして次は構え方だ。

「こうやって構える。姿勢は……。」

彼は足は両肩くらいに広げ、的に対して体の向きを真っすぐに向ける。

「どうやって反動を制御したらいいのですか？」

不意にツバサからそのように聞かれたので、彼は丁寧に答える。

「あまり体を強張らせないようにするんだ。まあ練習が必要だが……。」

「自然に構えたほうがいいということですか？」

「その通り。反動を抑えようという意識が強くなりすぎると、あまり当たらなくなってしまうんだ。」

こうして彼女にあれこれ銃を扱う上で必要な知識を叩き込むと、次は実際に射撃をすることとなった。

フォードの教え通りに彼女はしっかりとストックを肩に当て、セクターをセーフティからセミオートに動かす。そして、彼女は引き金

を絞った。

複数回、彼女の肩に慣れない強い衝撃が叩きつけられたが、しつかりと彼女は衝撃を受け止めてマガジンが空になるまで撃ち続ける。

屋内ではイヤーマフをしていないと、耳が痛くなるほどの音が響き渡り続けた。

しばらく彼女は撃ち続けると遂にマガジンは空になる。そして空になったところを彼女は教え通りに安全装置を掛けた。

「わたし、上手くできたかな……。」

ツバサはふとそんなことを呟くと、ハンガーにかけられた的が近づいてくる。数秒後には彼女の目の前に達し、フォードが射撃の成果を確かめるのであった。

「えーと……素人にしてはいい出来だ。」

「それってつまり？」

「良くも悪くもない。」

「そうですね……。」

彼女はそんな風に言われて少し落ち込む。だが、フォードは落ち込ませてしまったことに気付き、フォローしようとする。

「……以前よりはマシになったのじゃないか？」

「……言われてみれば……確かにそうですね。こうやって大人の人に教えてもらえたから……なのでしようか？」

ツバサは不思議そうな顔を見せた。きつと彼女にとって大人に何かを教えるもらうというのはなかなか経験したことがないのだろう。

「君のためになるなら俺は教えるつもりだ。俺は戦い方とちよつとの勉強しか教えられないが、それでもいいのなら。」

「ええ、もつとわたしに教えてくださいね。」

………

〈それから一週間〉

彼女はその日から境に、時間さえあれば射撃場を通うようになっていた。フォードが居ないときでさえ彼女は自分で足を運び、時間が許す限り一生懸命に励んだ。

もちろんフォードはそのことに気付くと、彼女の力になれるように任務の傍らだけではなく、彼女のために時間を合わせて教え込んであげたりするようになった。

そのように懸命に取り組んだのが功をなしたのか、日を重ねるにつれて上手く扱うことが出来るようになり……。

「すごいな、一週間前よりも上手くなっているじゃないか。」

「えへへ、そうですねか?」

ツバサは褒められたのか嬉しそうな表情を見せる。

「光学照準器いるか?もつと命中率が良くなるはずだ。」

フォードは彼女の何もカスタマイズされていないMCXを見つめながら、尋ねた。

「よく分かりませんが、欲しいです!!」

即答。どうやら彼女はかなりの向上心があるようだ。

そんな努力をしようとする彼女にはやはりそれなりに応える必要があるだろうと、フォードは判断し彼はバックパックから彼がMk.18に取り付けている同型のマグニファイアとホロサイトを取り出す。

「俺の私物だ。好きに使ってもらえると嬉しい。」

彼はそう言いながらツバサの手のひらに載せると、彼女は不思議そうな顔をしながら眺めた。

「これ、どうやって使うのですか?」

彼女はこれまでまともに銃を扱ったことすらなかったためか、照準器の扱い方もわからないようであった。

「あー……教えよう。」……………

「なるほど、こうやって…… 取り付ければいいのですね？」

ツバサはフォードの教え通りにMCXのマウントにマグニファイアをぎこちなく取り付ける。

「すでにゼロインは調整済みだから、あとは狙って撃つだけだ。」

彼女にそう伝えるとツバサは30m先にセッティングされた的に向かって、構える。

「とても見やすいです!!」

ツバサはアイアンサイトよりも明らかに視界が良く、狙いを定めやすいホロサイトに感動したようだった。

そして遂に彼女は引き金を絞る。

銃声が一発響いた。

「次はマグニファイアを使ってみるのは？」

フォードはツバサにそう提案すると、彼女は横倒しになっていたマグニファイアを縦に戻す。そして彼女は再び覗いた。

「…… さいっこう。」

彼女は震えながら喜びの声を上げる。彼女にあげたマグニファイアはフォードが使っているのと同じく3倍率のものだ。そのため、等倍であるアイアンサイトやホロサイトと比べればかなり遠くのものが見やすいのだ。

ツバサはそのように感動を噛みしめながら、一弾倉分を撃ち尽くすのだった。

「お気に召したようだな……。そろそろ休憩しないか？」

彼女がちょうど全て撃ち切ったところでフォードは提案する。

「ええ、いいですよ。」

ツバサはセレクターをセミオートからセーフティに戻しながら、答える。

そしてフォードは彼女に一つ聞きたいことがあったので尋ねた。

「どうして俺に銃の扱い方を教えてもらいたかったんだ？」

それは彼にとって最大の疑問であった。なぜ、一度しか出会っていない大人に頼み込んだのか。キヴオトスにいる大人はほぼ最低のクズ野郎だ、とは彼がこの世界にいる中で聞くことは珍しいことではない。

どこかさんの足を舐めたり、どこかの学園の風紀委員長髪の毛を吸ったりする淫行教師。

とある実験の材料にするために、生徒に嘘の契約を持ち込んで騙してしまふ腹どころか体ごと黒い奴^{黒服}。

ある学園が借金を抱えていることを良いことに、自治区を丸々手に入れようとする大規模企業の社長——などがいるのだ。

そのような薄汚いやり方を常套手段としているのがキヴオトスにいる大人であり、彼女たちに忌み嫌われるような存在だ。

そんなことが常識として生徒たちは認識しているはずなのに、ツバサはフォードに銃の扱い方を教えてほしいと直接頼んできた。

そのような事実には彼は疑問を抱かざるを得なかった。

「……わたしは本当に自分自身を変えたいのです。」

「とどうと?」

「話せば長くなりますが……それでも?」

ツバサはちよつと濁した声で確認を求めた。

「話を聞かせてほしい。」

フォードは彼女の力になれるならという思いで、話を聞くことにした。

彼女曰く、トリニティに入学したときから相当成績が優秀な生徒だったようだ。その優秀さゆえにか彼女は良くも悪くも注目を集めることが多かった。

ある時はティーパーティーの者からとある派閥に入るように要求されたり、ある時はシスターフッドから組織に加入するようしつこく勧誘されたり。

そんな風に若干、迷惑なことがしばしば続いたそうだ。しかし、それよりも恐ろしい出来事が彼女に待っていた。——いじめだ。

一部の生徒からは彼女の優秀さに妬むような眼差しを向けられると同時に、嫌がらせが行われるようになった。もちろん、彼女は初めはそんなことは全く気にすることはなかった。

だが、無視を続けた彼女に苛立ちを覚えたのか次第にエスカレートしていった。やがて、嫌がらせはただの暴力に変わった。

あるときは立てなくなるまで蹴りや殴りを入れられたり、授業に出席させないように監禁じみたこともされたそうだ。

「……お願いやめて。」

「——もう嫌だ。」

彼女はそうやって拒絶したり、懇願するも誰一人として聞く耳を持たなかったようだ。

だが、ある日。

ツバサは体育館裏に呼び出されたそうだ。彼女は拒否したい気持ちでいたが、行かなければもっとひどい目に合わせると既に分かっていた。そのため、彼女は仕方なく重い足取りで向かう。

案の定、今までと何も変わりやしない目にあつた。しかし、その日は幸運だった。彼女を取り囲んだ群衆は銃声と共に倒れた。

そして目の間に現れたのは見慣れない少女だった。ツバサと同じく白髪ロングで、同じ二年生であることを示す制服を着用していた。

彼女は大丈夫？などと尋ね、ツバサの様子を気にしてくれた。初めて、誰かに助けってもらったという経験が彼女はした。

「どうしてわたしなんかを……？あと名前は……？」

突然、助けられたことに不思議な気分を味わいながら、目の前の恩人に尋ねた。すると。

「数に物を言わせて虐げられているなんかダメ。しっかりと抵抗しないとダメだ。」

そして続けて。

「私はあのやり方に気に食わなかったただけだ。礼はいらない。」

「あ、あの——。」

ツバサは恩人の名前を聞き出そうとする。

「名前？白洲アズサ。」

白洲アズサ。それはツバサの恩人であり、彼女にとってその名前は忘れられないものとなった。しかし、二人の時間は長く続かなかつた。

彼女に「ありがとう。」と伝えようとしたとき、足早に去って行ってしまった。その後、ツバサは彼女にお礼したいと思い学園を探し回ったそうだ。

しかし、結局のところ彼女は見つからずシスターフッドのマリーに相談。

マリーの相談の後、きつと彼女を通じてアズサにお礼が伝えられたと思うが、ツバサはあまり心地よく思っていなかったようで、直接会ってお礼をしたいらしい。

そして彼女に会って、お礼を言えていない自分。弱いままの自分を変えたいという一心で、ツバサはフードに相談したことで今に至る——らしい。

そしてそのような話を終えて、彼女は辛い過去を思い出したせいから自棄気味に。

「わたしはダメな人間なのです。直接、恩人である彼女に感謝を述べることは出来ず、銃をまともに扱うことすら出来ません。」
さらに付け加えて。

「——そんなわたしが嫌になります。」

見れば彼女は震えていた。口元も、指先も。

そんな痛ましい姿をフードは目にしてしまう。

だから——

「……あまり悲しいことを言わないでくれ。」

慰めになるか分からないが、彼なりにその言葉を投げた。そして。

「君が変わろうと思っっているのなら、何にだってなれるさ。だから……。」

ツバサは今にも泣きそうな顔をしていた。変えられない自分に今まで、嫌気が差していたのだろう。

「……俺は変わろうとする君をちゃんと見ている。」

「……っ。」

彼女の目元から涙が伝わる。そして震えた指先は彼の堅牢な構造をした、ボディアーマーにしがみついていた。

アーマー越しに彼女の温かいはずの体温は伝わらない。だが、彼女の存在は彼に伝わった。

「……もう少しだけ、こうしても……いいいですか？」

震えた声がアーマーから漏れ出た。だから彼は。

「ああ——」

控えめで遠慮がちな嗚咽がやがて涙にまみれた声に変わった。

彼女が落ち着くように彼は背中をさする。

さすっているのはたった一人の小さくて頼りない、女の子の背中だった。

ツバサにはこうしてあげることしか出来なかった。

ただ、変わろうとする彼女のことを手伝うのが大人、それがフォードの役目だと感じさせられた。

彼は決意する。

——変わりたいと思うならツバサを手伝ってあげよう、大人として。

20：後悔と夏の海

<20??年夏>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園／屋内射撃場

「…… いい腕になったものだ。」

フォードは的に命中した弾痕を眺めながらそう呟く。弾痕は人型の胴体部分に対して集中しており、正確な射撃が加えられていることがわかる。

「最初の頃よりはだいぶマシになったな。こんな短期間で上手くなるものか？」

「ちゃんと練習をしているから…… でしょうか？」
彼の問いに対して、的に弾痕を付けた張本人であるツバサが答える。

「どのくらいだ？」

「…… 夏休みが始まってからほぼ一日中です。」

「…… 今なんと？」

フォードは耳を疑い、聞き返すが。

「一日中ですよ。」

「……。」

彼女は気が狂ったとしても言うべきだろうか。ツバサは夏休みに入った日から、丸一日籠って練習に励んでいるのだと言うのだ。やはり彼女の自分自身を変えたいという思いはかなり強いのだろうか。

「銃の扱い以外にもルームクリアリングやら教えているが、ちゃん

と覚えているもんな。よく、頑張っているな。」

「そう言われると……少し嬉しいです。」

彼女は明るい顔を見せる。ツバサはフォードが居ないときですら練習に励んでいるのだ。その努力が実り、そして褒められるということとはさぞかし嬉しいことに違いない。

だが彼は一つあることを気にする。

「……楽しいか？」

「？」

彼女はきよとんとした顔を見せた後に。

「楽しいと思います。こうやって充実した時間が過ごせるわけですし。」

「いや、もつと学生らしいことをしないのか？」

学生らしいこと。夏休みといえば大概、海へ行ったりするものだが彼女がこうやって練習に励んでいる限り、遊び、ということを経験できないはずだ。

単純にフォードはツバサが学生らしいことが出来ていないのでは無いかと心配しているのだ。

「とりあえずだ、実は先生から明後日に海へ行くことを誘われているんだ。」

「そうなのですね、楽しんできて——」

「いや、君も来ないか？せっかくアズサもいるから、以前言っていたことをちゃんと果たせるかもしれないチャンスでもある。」

「!!」

ツバサはフォードの言っている意味が分かったようだ。もちろん、その言葉にすぐ反応し彼女はこう返した。

「私も行きます!!絶対ですよ!」

急に勢いがある発言だったため彼は少し困惑しながら。

「わ、わかった。」

とにかくこうして彼らは海へ行くこととなったのだった——

……

<20??年夏>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

無為ヶ浜

「まったく、どうして不良に襲われるんだ？俺たちは海への戦闘に来たわけじゃないんだぜ？」

「フォードは愚痴を呟きながら、自身のMk. 18のマガジンを交換する。それもそのはず、先ほどビーチを縄張りとしている不良たちの戦闘に巻き込まれたからだ。」

「あはは…… とりあえず追いつきましたし……。」

「次またやってきたら叩きのめす。」

「きひひっ!!」

「ツルギ先輩がいるにも関わらず戦おうとしてくるとは……。」

少女たちはしばらくやり取りをしているがその中にツバサの姿を見当たらない。フォードはそのことに気付いた。

「あれ？ツバサさんはどこに？」

しかしどうやらヒフミも気付いたようで、フォードがそのことを伝える前に彼女が口を開いたのだった。

「さっきの戦闘には参加していたはずなのですが…… どちらに？」

マシロはそう口にしながら周囲を見渡す。周囲には海の家や不良以外の人の姿が見えるが、ツバサらしき姿の人物はいない。

「ヒフミ、あれじゃないか？」

「んー？あれは……。」

アズサがヒフミに呼び掛けながらある方向に指を差した。なおそのことはフォードも気付き、一緒にその方向へと振り向く。

「楽しんでるな。いつの間に遊んでいたんだ？」

「ツルギ先輩があの様子を見て、羨ましがっていませんか？」

そう言われてツルギの様子を見ると、まるでヤクでもキメたかのような物凄い形相をしていた。

ツルギも同じく、あまりこういつた学生らしいことをしたことがないからかツバサの楽しんでる姿を見て、嫉妬心みたいなものを抱いたに違いない。

「きえええええっ!!」

ツルギはそう雄たけびを上げながら、青く透き通った海へと突撃していくのだった。なお彼女は泳げずに、浅瀬でおぼれかけるといふ奇妙な事件が起きたのは内緒だ。

<数時間後>

時折、不良たちが再び戦闘を仕掛けてきたことがあったが全てを払いのけつつ皆で遊んでいるのだった。たった一人の大人を除いて。

「久しぶりの休暇は最高だ。たまにのんびりしたいものだ。」

その男はそう呟きながらパラソールの中で皆が楽しんでる姿を眺めていた。

その男は誰か、それは――

「フォードさんは、遊ばないのですか？」

「……休暇中にナンパはお断りだぜ。」

何を言おうか、フォードである。彼はジョークを交えながら、質問を投げかけてきた少女であるツバサに返す。

「それに……その服装って……水着じゃなくてただの短パンじゃないですか。しかもちゃんと防弾ベストにヘルメットまで……。」

フォードはいつものボディーマーに、GPNVG―18を取り外

したヘルメットを着用。そして一般的なTシャツに短パンといった姿である。

「海は楽しいが、泳ぐと疲れるから泳ぎたくないんだ。」

「そうですか……変わっていますね。」

「ああ。」

海に来たのに疲れるから泳がない。これほど身勝手なことがあるのだろうか？しかし、元々は先生からただ誘われただけでありしかもたった一日の休暇と日程が重なったため、彼は休暇を楽しむという選択をしたのだ。

「そういえば聞きたいことがあるのですが。」

「なんだ？」

彼は質問を投げかけようとするツバサの方へと振り向く。振り向くと学校指定の水着のスクール水着を彼女は着用しているのが見えた。

「以前助けてもらったときに居たもう一人の大人って……。」

「ああ、ピアーズのことか。あいつは今、本国に帰国したんだ。どうやらあいつの奥さんがまた妊娠したそうで、出産やらあるから戻ったんだ。」

「へえ、そうなのですね。」

ツバサはピアーズを見かけない理由について知ることが出来たからか、納得した顔を見せる。

「あともう一つ聞いてもいいですか？」

「ご自由に。」

「どうしてあの日、トリニティに来たのですか？色々と自由に出入りしているから、気になって……。」

突然、そのことを尋ねられて彼は困惑するが出来る限り本当の目的を明かさないように、誤魔化しつつ説明する。

「上の命令で歴史的な資料が欲しかったんだ。それでトリニティの古書館に諜報任務として派遣されたんだ。とてつもないクソツタレな任務だぜ。」

「ふふっ、大変だったのですね。」

「ああ、そうだったさ。でもやっとその任務はほぼ終わりだ。エデン条約の調印式に合わせて、トリニティでの任務を終える予定だ。」

「調印式……あと3週間ほどでしょうか？短いようで長いような……。」

ツバサに銃の扱いやらを教えていないとき、フォードとピアーズたちはシスターフッドに接触し本来の任務の情報を入手しようと活動していたのだ。そしてそれがつい最近になって、目的の情報を文書として入手することが出来たのだ。

これによって彼らの任務は達成された。そのため彼らは撤退する期限が設けられたのだ。

撤退期限を迎えると、今までのように堂々と自由に出入りすることは不可能になってしまう。戦術を教える日々は二度と戻ってくることもないのだ。

「残された時間で私は変われたら……いいな。」

彼の隣でそうやってツバサは小声でつぶやいた。

「既に君は変わることが出来ているさ。最初は的に当てても、バラけていたが最近は同じ所に当てられている。それに、銃の扱い以外にも教えているが出来ているじゃないか。」

フォードがそうやって言葉をツバサに投げると、彼女は少し思案した後後に。

「……それなら良かったです。でも……。」

「アズサに礼を伝えたいのだから？君なら絶対できるよ。」

「……はい！頑張ってみますね。」

ツバサは笑顔を見せる。パラセールの中は光を通さないとはいはずだが、彼女の笑顔は眩しく感じられた。

「じゃあ、私そろそろ戻りますね。」

「わかった、良いバカンスを。」

彼女は立ち上がり、遊びが繰り広げられている皆の元へと駆けていく。そして、彼女をまるで見守るかのようにフォードは眺めるのだった。

「アズサさん、あの言いたいことが……。」

「ツバサ、どうしたんだ？」

「その、改めてお礼を伝えたくて――」

<夕方ごろ>

日は沈みつつある。黄金色の太陽の光が海の波に当たり、乱反射を引き起こす。その乱反射による光は眩しく、そして海を美しく着飾っていた。

「綺麗だ。」

フォードはその景色に感動し、ボディアーマーに取り付けられているポーチから彼のスマホを取り出す。そして取り出すと、その景色にカメラの照準を定めて写真を撮る。

「こっちの世界の景色はどうですか？」

不意に後ろからツバサに声を掛けられる。声を掛けられた彼は振り返り向き、その問いに答える。

「ああ、最高だぜ。」

「良ければ写真を見せてくれませんか？」

「もちろん。」

彼は彼女の頼みに応え、写真を見せる。

「写真で見てもやっぱり綺麗ですね……。忘れられない光景になりそうです。」

「……今日は楽しめたか？」

フォードはツバサに問いかけると彼女は即座に。

「そうですね。こうやって皆と遊ぶのも良かったと思います。」

彼女はそう答えながら海の方へと眺めていた。そしてフォードは一つ、あることについて尋ねたかったので尋ねる。

「どうして自分の口からアズサにお礼を伝えよう？」

「え？」

彼女はその質問が突拍子であったためか、少し唾然とした表情を見せた。少しの沈黙の後、彼女が答えた。

「わたしの言葉をわたしで表さないと駄目な気がするから…です。」

「別にマリーに頼んだのであったのなら、それでいい気がするのだが…。」

フォードにとってツバサ自身の口から告げるといのは正直、そこまでしなくてもいいだろうと思っていた。今になってそれを尋ねたのは、彼女の願いが叶ったからこそだ。

しかし、二人の考えは違うようでツバサは続けて。

「自分から言葉にしないとわたしの気持ちは相手に伝わらないと考えています。どれだけ素敵な言葉で、どれだけ他人に影響を与える言葉でも、わたしのその気持ちを伝える言葉は自ら表さないと伝わらない気がするんです。」

「なるほど。」

だから——と彼女は付けて。

「わたしはアズサさんに直接、その気持ちを伝えました。それが出来て本当に良かったです。」

ツバサはアズサに感謝を伝えられたのか嬉しそうな顔をフォードに見せた。彼女にとって長い間、願っていたことが実現できたのはさぞかし嬉しいに違いない。

そして彼女はフォードの顔を見つめて何か不思議そうに。

「どうかしましたか？」

「いや、何も。」

「何か悩んでいそうな顔をしていましたよね？」

「数週間前の嫌な記憶を思い出しただけだ。」

「どういったものですか？良ければ相談に乗りますよ？」

彼女は親身に尋ねてきたので、彼は説明してあげた。

数週間前の嫌な記憶。彼にとっての一つの後悔でもあるミカとのやり取り。

彼は彼女に最初からそのつもりではなかったが、人殺しの罪を着せてしまった。セイアは生きているにも関わらずにだ。そして、彼女にセイアが活着ていることをまだ伝えていない。

フォードにとつてあの時、本当はどう対処すればいいのか分からなかった。ただ一人の少女、彼女にとつて大切でもある友人。そんな人を殺しかけたという過ちに対して、どう彼女を償わさせるのか。

彼の選択が間違つたものであると考え始めたのは戦闘から数時間経過した時だった。戦闘時に放出されていた興奮を促すアドレナリンが収まり、物事を冷静に考えられるようになったからか時間が経過するごとに自分の選択が正しいとは思えなくなってきた。

そして最終的にそれは間違つたものであると彼は判断した。しかし、その判断を踏まえてその後はどうするべきなのか。大人として、一人の兵士としてどう彼女に何をしてあげたら良いのか。それが思いつくことは今までなかった。

ただ今までは。

——「なるほど。今日までにそんなことが……。うーん何か良い解決策は……。」

「いや、もう解決策は必要ない。」

「え？」

解決策を考えようとするツバサはその言葉にぽかーんとした顔を見せる。

「君のさつきの話があつただろ？あの話を聞いて、どう解決するべきか決心がついた。感謝する。」

「え、ええ……。でも解決できたのなら良かったです。」

彼女は突然、感謝されたことに戸惑つたが彼の悩みの解決策を見いだせたことに安堵する。

自分の気持ち伝えるには自分で表すしかない——。
ミカにセイアが活着ていることも、存在しない罪を着せてしまったことにも。そして、謝罪するには自らの言葉で彼女に伝えてあげないといけないと、彼は感じた。

そう遠くないうちに彼女に会おうと彼は決めるのであった。

「あつ。空が。」

「どうした?」

不意にツバサが空について言及しようとしたので、彼も空について目を向ける。

「綺麗です。」

「ああ。」

黄金色の太陽は完全に水平線よりも下の世界へと沈み込み、僅かな光が暗黒に包まれた海を照らす。空は太陽が沈んだせいで辺りはほぼ暗くなっていた。

しかしその空には大きな音と共に花火が連続的に、広がっていた。向かいの浜辺から打ち上げているのだろうか?

「あと三週間でしっつけ。」

「何が?」

彼はその言葉の意図が分からなかったため、聞き返す。

「撤退期限です。」

「……もつと戦術を叩き込んであげるつもりだ。安心していいぞ。」

彼は冗談交じりに笑いながらそう伝えようと、彼女もまた笑いながら。

「ええ。」

残された時間はそれまで長くはない。

彼女が本当に変われるように、フォードは少しでもあの子が広大な空に飛び立つことができる翼ツバサにでもなれるように。

彼はそう思いながら花火を眺めるのであった。

21：殺人罪

<20??年夏／09：27>

門上ツバサ

トリニティ総合学園

わたしは射撃場へと足を進めます。ここ数週間ほど、わたしは射撃場へと通い続けるのが日課であり今日も向かっている最中です。

そしてあと一週間も経たないうちに私に銃の扱い方を教えてくれる大人——フォードさんはいなくなります。

それ以上、わたしとは会えることはないでしょう。それ以上、わたしに教えてくれることはないでしょう——だから。

だからこそ、わたしは何が何でも教えを身に着けようと時間さえあれば通うようになりました。

さて、彼はどうやら今日は午前中は用事があるらしく、来れないのですがその間にもっと練習に励むために向かっているのです。

そしてその道中、わたしは後ろにいる人からでしょうか。突然声を掛けられます。その声はどこかで聞いたことがあり、それはわたしにとって忌々しく感じるものでした……。

「あれ……まだここにいるんだ……」

「……っ。」

わたしは内心、その声が似ている者から発せられたことを願いながら恐る恐る振り返ります。

しかし振り返ると、そんな願いはあっけなく打ち砕かれました。

「何が用ですか。」

わたしは声を掛けた人物に対し、やや睨みながらそう言います。

「いや、あれほど可愛がってあげたのにまだいるとはね〜？も
しかしてこういうのが好きなのかなあ？」

「……。」

振り返ったわたしの前で仁王立ちする女の子……。その子はわたし
を散々虐めてきたグループの一味。彼女はわたしを嘲笑うかのよう
な目つきでこちらを見つめます。いや、実際嘲笑っているのですが。

「そんなに可愛がられるのが好きなら今度はこっちがいいのかなあ
!？」

彼女は咄嗟に銃を構えて撃とうとします。しかし、わたしはその時
とっさの判断で相手に突進します。

「ちよっ!？」

タツクルを喰らわせると彼女は流石に体重とスピードによる衝撃
でよろけます。よろけると彼女はドスッと大きな音を立てて尻もち
をつきました。そして負け惜しみか。

「あんた重いわね!!」

「……まだ軽い方だとは思いますよ。」

わたしはそんな言葉を吐き捨てながらその場を急いで去ろうとし
ます。その時でした。

「逃がすな!!追え!!」

尻もちをついた彼女はその場で大声で叫ぶと、どこかに隠れていた
のでしょうか茂みから沢山の追手が現れました。

「ふふっ、逃げきれるかしら。」

「大人しくしていたほうがまだ痛い目に合わないのにね……。」
彼女たちはそんなことを言いながら、距離を置こうとしているわた
しの方へと向かおうとしてきます。それだけではありません。

向かってくる彼女たちの後ろには、わたしに向けて銃を構える者す
らいました。どうやら、わたしは思ったより危険な状況にいるので
しょう。

「せっかくなら、ハイローを直接痛み付けることが出来る銃弾を
使ってしましましょうよ！もし当たったらまともに逃げることもで

きないでしょうね!!」

「っ!!」

わたしはその言葉が聞こえた瞬間、MCXを彼女たちに向けて構えました。ハイローを痛み付けることができる銃弾……。わたしは今までそのような銃弾があるとは一度も聞いたことがありませんでしたが、もし本当ならわたしを半殺しにでもするつもりでしょう。

”ピシツ”

銃声と共に一発。銃弾が地面に当たって擦れる音が聞こえます。わざと外しておいた上での脅しのつもりかもしれませんが、ここで屈するわけにはいきません。

もし屈したら、何が起こるか分かったものではありません――

わたしは生きていないかもしれません。

わたしは二度と、フォードさんから教えてもらえないかもしれません。

わたしは二度と、アズサさんともお会いすることが出来ないかもしれません。

わたしの全身が強張ります。死に対する恐怖でしょうか、それとも今たった一人でいる恐怖からによるものでしょうか。

――いいえ、両方とも。

「……来るなら来てください。捻り潰してあげますから。」

「面白いですね……。今ここで痛い目にあってもらうわ。」

わたしたちはそれから銃撃戦を始めます。すぐに正義実現委員会が駆けつけ、わたしのことを助けてくれるのを願うばかりでした。

<約2時間後>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ総合学園／屋内射撃場

「いないのか。」

フォードはそう言いながら室内を見渡す。いつもなら彼が来る前にツバサが射撃をしていたが、今日は珍しくないない。

「モモトークは……？」

彼はキヴオトスの通信規格に合わせられたスマホをズボンのポケットから取り出す。そしてキヴオトスにおけるメッセージアプリであるモモトークを開いた。

モモトークを開くと唯一のやり取りを交わしているツバサのトークを見るが、既読が付いていない。彼はここに来る30分ほど前に用事が終わったため射撃場にいるかの確認をするメッセージを送っていたのだった。

既読がついておらず、ここに来た痕跡もないとなるとそもそもここに来ていないかもしれない。彼はおそらく寝坊か、たまたまそういう日なのだろう。とでも考えつつ、射撃場から出るのだった。

射撃場から出ると何やら騒がしい様子だった。何人もの女子生徒たちがそこら中にいた。そして彼女たちは井戸端会議でもしているのだろうか、会話が耳に入る。

「ねえねえ、知ってる？ 殺人犯を捕まえたって。」

「犯人はどうやら二年生らしい。」

「実は失踪してたって噂の子って殺されたらしいね。」
周囲の話を聞く限り、かなり物騒なことが起きたようだ。

「厄介なことに巻き込まれていないといいが……。」

フォードはそんなことを呟きながらあたりを見渡していると、正義実現委員会の生徒が。彼女はフォードを見つけるとこちらに向かってきた。

そして近付いてきた彼女は口を開いた。

「あの、ツバサさんのことについて色々とお話したいことがあるのですが——」

<数分後>

フオードが呼び出されたのは正義実現委員会の生徒から説明された通りツバサについてのことだった。

彼は現在、正義実現委員会が管理する教室においてトリニティの教員という名の自ら、二足歩行をすることが可能かつ言語を話せるロボットから説明を受けていた。

「——まあ、暴力沙汰があつたからというよりは殺人犯がいたから捕まえたそうですが。」

「……。」

「実際に二週間前から一人の生徒の安否が取れなくてですね、捕まえた子たちによるとネットの掲示板にある犯人の特徴と一致したそうですよ。」

彼は頭の電子版に映し出される表情を変えながら。

「犯人はガスマスクを着けていたようで顔は分かっていないようですが、白髪であるというのが一致していますし。」

「…… たったそれだけか？」

「はい、そうですが。」

犯人であることを示す証拠はたったそれだけ。犯人の身体的特徴の一部と一致したから、という理由はいくらなんでもツバサが殺人犯であることを示す証拠としては弱いように感じた。

しかし、教員はそれにこう付け加える。

「それに複数の目撃者によるとツバサさんにある生徒が声を掛けた

際、どうやら逃げ出したあといきなり暴力を振るったそうです。そのせいで近くにいた静止しようとした、生徒たちにも暴力を振るわれたらしいです。」

そして彼は最後に。

「明日には……退学……いやさらに重い処分が彼女には下されるでしょうね。」

「……。」

フォードはほとんど、無言を貫いていた。彼にとってツバサが殺人やら暴力を他人に振るったというのが信用できなかった。

いつも彼女は真面目に訓練に取り組んでいた、それだけではない。褒められたり嬉しいことがあったら眩しい笑顔を見せる子供だった。

そんな彼女がそのような事態を引き起こしたことにフォードは信じられなかった。信じたくなかったのだ。

そして彼は重い口を再び開いた。

「彼女に会えるか？」

本当に他人を殺したのか、本当に暴力を振るったのかを彼は確かめたい気持ちでいっぱいだったがゆえに、彼は尋ねた。

「面会は色々制限がありますが、それでも？」

「ああ。頼んだ。」

「では、こちらへ。」

教員はそう言いながら、フォードを引き連れて教室を出るのだった。教室を出た先に向かったのは拘留所だった。こちらも正義実現委員会の管轄にあるらしく、拘留中の生徒を逃がさないように厳しい警備が設けられていた。

警備ゾーンを通り抜けいくつもの収容室を目に入れたのちにある部屋に案内された。

「こちらです。私はここに。」

教員はそんなことを言うときつきと去ってしまった。おそらく案内以外のことは全て、ここでは権限が無いのだろう。

「ここに座ってください。」

すぐそばにいる正義実現委員会の生徒に言われるがまま、座る。座

るとアクリル樹脂が何かで出来ているはずの透明な仕切りが目の前にある。

そして数分ほど待つとツバサが入室した。彼女の手には手錠が付いており、そのままフォードと対面するような形で座る。

しばらく二人の間に沈黙が流れた。二人ともどういった言葉を口に出せばいいのか分からなかったのだ。

そんなずっと続くかと思われた沈黙はツバサが破った。

「……わたしは人を殺したりなんかしていません。それに……。」
たった一言だったが、その言葉は重しく感じられた。そして彼女はどこか悲しそうで、それをどうにか堪えようとする顔を浮かべていた。

「わたしを信じてください。わたしはそんなことを絶対に……。」
彼女は最後の言葉を詰まらせながらそう言った。しかし、あまりにも長い沈黙が流れていたせい、どうやら面会の時間は終わりに近づいてきているようだった。

フォードは終わりの時間が近付くと、そのまま部屋から退出させられるを得なかったのだった。そして退出する際に、ツバサの顔を見ると虚ろな目でこちらを見つめていた。

まるで彼女のことを見捨てたのか——でも言うように。

フォードはその後、屋内射撃場へと戻った。それまでの間、彼はとも複雑な気持ちであった。彼女は殺人を犯した拳銃、周囲の生徒にさらに暴力を振るったこと。それがいかに彼にとって受け入れがたい事実であることか。

「はあ……。」

彼はそう嘆息を漏らしたときだった。

「あれ？フォードもここにいたのか。」

この建物の入り口のほうから聞こえる声。そしてそれは聞き覚えがある声であった。彼は入り口の方へ振り向くと。

「アズサじゃないか。」

そう彼に声を掛けたのはアズサであった。

「どうしてここに？」

「そっちこそ。今日はここで射撃の練習をしようと思って来たんだ。」

アズサはフォードに問われると、そう答えた。対して、フォードも。

「俺は…… 射撃の練習というよりかはそれを教えるために来たのだが……。」

「誰に教えるのだ？」

「ああ、ツバサだ。だが実は……。」

それからアズサに伝えてあげた。ツバサが殺人の罪を着せられてしまっていること。そして残された時間はそこまで余裕がないこと。これらのことがアズサに伝えられると、どうやら彼女もそれなりに事態がまずいと感じたのか動揺を示していた。

「嘘だ……。」

「信じられないだろう？俺もだ。」

そんな風に二人は言葉を交わしていたところ。

「アズサちゃん、どこにいつちゃったのですか——？」

「ヒフミ!?!」

「もー、探していたのですよ。って、あれ？フォードさんじゃないですか、どうしてアズサちゃんここに？」

阿慈谷ヒフミ。どうやら彼女はアズサのことを探していたようでした。またまここに来たところ見ることができたようだった。

そしてフォードはヒフミからされた質問に答えた。同様に、ツバサの件についても話してあげた。

そうするとやはり、彼女はアズサと同じ反応を示した。

「そんな…… ツバサさんが……。」

そして彼女はそうやって呟いたのちに何かを知っているようだったのか。

「私さっき、ここに来る途中に聞こえた話なのですが、明日の午前中にその…… 退学者を学園の外に連れて行くみたいなのを聞きまし

た……。」

「つまり…… もうそこまで残された時間はないというのか。」

学園の外に連れて行くそれは一見単縦な行動に見えるが、不可解だ。どうして学園の外にわざわざ連れて行くのか。自らの足で学園の外に歩かせればいいはずだ。

もしかしたら何か裏があるかもしれないと彼は考えたのだった。そうやって思案している中、アズサが。

「私は…… ツバサが殺人犯だとは思えないな。犯人との特徴が一部として一致しているだけだ。こんなのおかしいはずだ。」

そして。

「…… ツバサを助けよう。彼女は無実であると私は…… 信じる。ヒフミは？」

突然、ヒフミに問いかけられたところやや驚いたような顔を見せながら彼女は答えた。

「あうう…… 私も流石に殺人をするようには見えませんし…… アズサちゃんの言う通り…… 信じますよ。」

「ならよかった。」

アズサは微笑みながらヒフミに抱きつく。

「ちよつと！アズサちゃん!？」

突然の出来事に抱きつかれたヒフミは驚く反応を見せるが満更でもなさそうな顔をしていた。

なおこれを見ていたフォードはというと。

「……。」

彼は閉口していた。そして、長くこの状態が続くのも困るため彼は咳払いした。

「……っ!!」

イチャついていた二人は咳払いで察したのか、頬をやや赤く染めながら離れた。

「すまなかった。ところでフォードは…… ツバサのことを信じるのか？」

先ほどまでヒフミと抱き合っていたアズサは冷静になり、フォード

に尋ねる。彼はこれにどう答えてほしいのか少し悩んでしまった。

学園の問題に介入して彼女を助ける必要はあるのか。ただそんなことはもう今更だ。あそこまで色々教えた挙句、見捨てるなんてことは彼には出来ない。

フォードはそれらを踏まえて答えた。

「当たり前だ。」

さらにそれに付け加えて彼は。

「俺の大切な教え子でもあるからな……俺は先生ではないが、あいつとは生徒みたいな関係だ。俺は信じているし、信じ続けるつもりだ。」

「じゃあ、作戦を立てよう。ツバサを助けるために。」

アズサがそう言うのとフォードとヒフミは頷いた。しかし、それにヒフミが待ったの声を掛けるかのように。

「……そういえばさつき、ここまで来る途中に聞こえた話なのですか……。」

「なんだ？」

「学園の外に連れて行った後、ヒーローを破壊する銃弾があるからそれで遊ぼう……。みたいなことを言っているのが聞こえました……。」

ヒーローを破壊することが出来る銃弾。そのような銃弾をここにいる誰もが聞いたことはなかったが、ヒフミが伝えられた内容は嫌な雰囲気は僅かに漂っていると感じた。

「ここにいる学園の生徒は一部どうやら猟奇的な思考を持っているのか？」

フォードはやや呆れつつ、悪態を突く。

「……そいつの顔や名前を教えてください。」

「え？どうしてですか？」

ヒフミは困惑した表情を見せるが、彼はそれに対して。

「わかっているだろう？俺たちはこれから本物の悪者をとっちめるためだろ。」

「臨時ニュースです。昨日、長くの間失踪していた生徒はある犯人によつて殺害されているということが明らかとなりました。でも安心してください。現在、その殺人犯は捕まりました。そして緊急処分として学園から追放しようとしている最中で――」

「ねえ、見てあれが犯人らしいよ。」

「怖いねえ。」

何人かの生徒はスマホから映し出される中継された映像を眺めていた。ある生徒は殺人犯に怯え。ある生徒は殺害された生徒に憐れみを向けていたりと様々な反応を示してるのだった。

「あんな卑劣な犯罪者は死んでしまえばいいのに。」

一部の生徒はそんな風に暴言を吐くものすらもいた。そんな風に混沌とした学園内はまるで歓声のように、交じり合つて聞こえるのだった。

「予定の時間まであと30分か。そっちはどうだ？」

フォードはインカムで連絡を取る。するとアズサが。

「こっちは準備が出来ている。それと…そっちは？」

「俺は今、ちょうど寮の近くだ。今から部屋を掃除してくる。どれくらいの埃が溜まっているのだろうか。」

フォードはそんな風にやり取りをしながら、ホルスターからMP17を取り出す。MP17はサプレッサーにダットサイト、そしてライトが装着されている。

それに加えて寮内はきつと狭く、いくらCQB戦に特化したMK18といえども扱いにくいだろうと彼は判断したのだった。

彼はMP17のスライドを左手で後退させ、初弾が装填されている

ことを確認する。

「さて、始めるとしよう。」

確認を終えたフォードは寮の敷地に堂々と侵入する。そして、彼は外階段を登る。目的の階は3階。

しばらく登ると目的の階に着く。そして、彼は作戦を立てた際に教えてもらった寮の部屋へと向かう。

寮の扉は白色であり、見えやすいように部屋番号が書かれている。彼は書かれている部屋番号が合っていることを確認すると、扉をノックした。

「何か用ですかー?」

扉越しに声が聞こえる。もちろん、彼は見つからないように扉のすぐそばにMP17を構えて、待機している。

カチャリ——と、開錠する音が聞こえた。

「いたずらぁ...?」

そうやって扉を開けて、確認した時だった。すぐさま彼は胴体に9mmパラベラム弾を数発撃ち込んだ。

「うわっ!!」

鈍い声が発せられると共に倒れこんだが、彼はその横たわった体を越えて中に入る。

「え!?!」

「襲撃!?!」

部屋の奥の方から声が聞こえ、こちらに向かってくる足音が聞こえたが彼は部屋にある一直線上の扉のすぐそばに移動。

そしてその扉が開けられ、相手の姿が見えたときだった。

「誰——」

目の前に現れた生徒はそんな言葉を放つ。中にいるのは目の前にいる生徒を含めて、二人。フォードは目の前にいる生徒の頭を左腕でヘッドロックする。

「あいだだだだっ!!!」

左腕から悲鳴を上げる声が聞こえるがそんなことは気にせず、奥にいる生徒に向かって撃つ。

何回か空葉莢が部屋に落ちる音が響く。奥の生徒を倒すと、次はそのまま締め上げている生徒のお腹に向かって至近距離で撃ち込んだ。すると、悲鳴は止んだ。

彼は悲鳴が止んだところ、左腕の力を抜く。フォードの左腕に支えられていた体はバランスをとることが出来なくなり、そのまま倒れこんでしまった。

「本当にこれだけか？」

彼はそう呟くとMP17のマガジンを交換しながら、部屋の中を見渡す。リロードの完了と同時に、ライトを点灯させて残った部屋の中をクリアリングしていく。

そして最後の部屋をクリアリングしようとした際、いきなり扉が開かれた。そして開かれた扉から勢いよく、銃のストックを構えて殴りかかろうと向かってきた。

「っ!!」

フォードはとっさの判断で避けると、突撃してきた生徒はこちらに振り向き。

「流石、キヴオトス派遣隊の兵士って感じ。どうしてこんなところに来たのかなあ!？」

生徒はそう言うと、再び殴りかかろうとしてきたためフォードはMP17をダットサイト越しに構えて、撃ち込む。

「いつつたい!!」

撃ち込まれた彼女はそんな悲痛な声を叫びながら、倒れこんだ。しかし、気絶することはなかった。フォードはこれが好機だと思い、彼女の顔に銃を構えたまま馬乗りになる。

「何をするつもり？」

「黙れ。お前が何をやったのかは知っている。どこでハイローを破壊する銃弾を手に入れた？」

「ちっ。」

彼女は舌打ちしながら、フォードのことを睨みつける。

「それとどうしてツバサにこんなクソツタレなことをしやがった？」

「あなたはあの子が人を殺していないとでも言うの？」
と、彼女は首をかしげる。

「あいつはそんなことをするわけがない。」

「どうせあの子のことを知らないあなたがよくそんなことを言えるわね。」

フォードが知るツバサというのは真面目で一生懸命に努力をしよ
うとするとところだ。それでいて、やや自分に自信がなく辛いときは泣
きついてきた一般的な女の子だ。それでも、彼女は自分自身を変えよ
うと努力を続ける。そんな彼女が一人の生徒を殺したただなんて、あり
えない。

「…… お前は彼女を虐めていたグループの主犯だろ？」

「ええ。」

「それで学園の外に連れ出した後、ヘイローを破壊することが出来
る銃弾で殺すのがお前の計画じゃないか？」

「それで何を言いたいのかしらあ？」

「どっちが本当の殺人犯だ？」

「……。」

流石に彼のその威圧に彼女は負けたのか沈黙する。そして、しばらく
沈黙が続くと再び彼女は口を開き。

「でも…… 私たちの仲間が失踪しているのは本当よ。どこにいる
のかすらもわからない、ただ今回はそれを利用しただけよ。」

「失踪？」

これまで失踪していた生徒は実はツバサに殺されたという話は何
度も聞くことがあったが、改めて疑問点として浮かんだ。

「どうせあなたは知らないでしょう？それでいいわ。」

「…… ヘイローを破壊する銃弾はどこで手に入れた？」

「…… なんかガスマスクを身に着けたよくわからない集団から
貰ったわ。それを使って、好きな事をしろとね。」

ガスマスクを身に着けた集団…… 彼はもしかしたら————と
思ったが、フォードはやるべきことを思い出す。

「お前たちを正義実現委員会に突き出す。大人しくしてろ。」

フォードはそんな風に伝えると、体をうつ伏せにさせ白いプラスチック製のハンドカフを両手首に。そして、倒れこんでいる仲間にも同様のことをした。

それらが終わると彼は。

「こちらフォード、掃除が済んだ。ぼつちり映っていたか？」

「は、はい！ちゃんと映っていましたし、たった今助け出しました！！」

「ナイスだ。例の場所で合流しようじゃないか、ファウスト。」

彼はファウストことヒフミとの通信を終え、寮から撤退するのだった。

<一方>

「俺は今、ちょうど寮の近くだ。今から部屋を掃除してくる。どれくらいの埃が溜まっているのだろうか。」

フォードがそうやって通信を終える一方で、アズサとヒフミによるツバサを連れ出す作戦が行われるのだった。

「アズサちゃん……以前、隠している秘密があると言っていましたよね。」

「うん、そうだけど。」

「私にも人に言えない秘密があるのですよ……。」

ヒフミはそう言ってポケットから紙袋を出し……あろうことかそれを被り。

「実は私は……覆面水着団のリーダー、ファウストなんです!!」

ヒフミの顔は大きく数字の5と掛かれた紙袋を被っており、表情が見えないが目つきを見ると真面目そうに告げているようだった。

「……え？」

もちろん、アズサは目の前の光景に困惑を示すが。

「見てください、この恐ろしさ。アズサちゃんは氷の女王だとか言われていますが、私だって変わらないでしょう!？」

「???」

「あ、アズサちゃん私をそんな目で見ないでくださいい〜い〜。」

それから二人は学園の校門の近くへ移動した。彼女たちが立てた作戦は校門で、ツバサとそれを連れて出てくる生徒を脅して無理やりツバサを助け出すといった強引なものであった。

「ヒフ……じゃなくてファウスト、準備は出来ている？」

「はい！ばっちりです!!」

二人はゲリラ兵のごとく茂みに潜伏。なおアズサはガスマスクを着けており、いつもの戦闘状態だ。

二人はそれからツバサを連れた集団が通るのを待つ。その待ち時間は長いように感じた。しかし、遠くから複数の足音が聞こえてくるのはあつという間だった。

「来た。」

アズサはガスマスク越しにそう呟くと右手に白い筒状の物体を持つ。

「それは何ですか？アズサちゃん。」

ヒフミはその物体について尋ねると。

「逃げるときに使うスモークグレネード。これを使えば視界を奪えるから追われることもないと思う。」

「流石アズサちゃん、逃げる時のことも考えているんですね。」

ヒフミは感心していると、茂み越しに何本かの足が動いているのが見えた。あれが恐らく、ツバサたちを連れた集団なのだろう。

「……ヒフミ、行くよ。」

アズサはそう言うと、ヒフミと一緒に勢いよく茂みから飛び出す。すると茂みからはもちろん音が出るので、後ろを振り返った集団……いや正義実現委員会とツバサ一行が。

「そこを動くな。」

「い、痛い目に合いますよ!!」

二人は警告を飛ばして、それぞれ銃を構える。

「な!?!」

「なんだあいつら!?!」

もちろん突然現れた彼女たちにそういった反応を示すものの冷静さを保っていた。しかし、一部の正義実現委員会の生徒はというと。

「あれは覆面水着団だ!!あの紙袋を着けているのはファウストだ!!!

そして……仲間が増えている!?!」

「覆面水着団ってなんですか?」

一年生の生徒は存在を知らないのか尋ねる。

「し、知らないだど!?!ブラックマーケットで暴れている上、PMCを捻りつぶした奴らだ!!」

「そ、それって……。」

「怖気づけるな……こつちの方が数が多い!!さあ、かかってこ——
——ってあれ?」

隊長格の生徒はそんな風に鼓舞しようとしたとき、残念ながら目の前から消えていた。

「逃げちゃったのですかね?」

「さ、さあ……仕事の続きを……ってあれ?いない……。
かこの煙は……ごほっ!ごほっ!!」

「なんか咳き込んでいたのですがあれって本当にスモークなのですか?」

ヒフミはアズサと共にツバサを連れていく中、質問する。彼女は逃げる最中、後ろを振り返った際に咳き込んでいる様子が見えたからだ。

これに対しアズサは。

「あつ…… あれは催涙ガスだった。」

どうやら彼女が使ったのはただのスモークグレネードではなく、催涙ガスが発生する代物だったようだ。どうりで、彼女たち正義実現委員会は咳き込んでいたのだ。

「あ、あの…… アズサさんとヒフミさん…… その……。」

一緒に連れられているツバサは少し申し訳なさそうな顔をしながら、二人を見つめる。

「もう大丈夫だよ。」

「そうですよ。大丈夫ですから。」

「…… ありがとう。」

<撤退期限の日>

あの騒動の日から一週間が経ち、ついに撤退期限がやってきた。まず最初に、騒動の顛末を話すしよう。

主犯のグループは構成していた全員が捕まり、今は正義実現委員会による捜査が行われている最中だ。そして、ツバサはというと……退学処分を一度課せられたがフードに装着させたボディカメラの映像を通じて無罪であるということに。

晴れて彼女は殺人を犯した———などというのは真つ赤な嘘

であったというのが示された。それだけではない。統合特殊作戦コマンドセンター通称、J S O Cの下では現在新たなに、ヘイローを破壊する銃弾の捜査が行われることになったのだった。

「そして失踪した生徒の調査もだ。」

「そうやって色々とその一週間の間にあったものであり、濃密であったのは事実。そして今日はトリニティから撤退する日。いつの間にか、トリニティにおける活動拠点と化していた合宿所の空き部屋から弾薬やら医療品といったものをM H—60に詰め込む。」

「そういった作業が単調に行われ、いざあとはへりに乗り撤退するのみとなった。」

「もう行ってしまうんですね。」

「ああ。」

「フォードとツバサはへりのランディングポイントからやや離れ、ローターによる風圧の影響を受けないところで話す。」

「俺たちにはまた新しく課せられた任務があるからな。仕方ないさ。それに、トリニティでの任務は達成出来たからな。」

「トリニティの任務。それは『神秘と恐怖』であったり、『色彩』といったまるでカルト宗教が信仰していそうな単語であったがそれに関する、情報がある程度シスターフッドから得ることが出来た。」

「…… ねえ、フォードさん。」

「不意に彼女は彼の名前を呼ぶ。」

「なんだ？」

「本当にここでお別れですか。」

「……。」

「ただツバサはフォードの言葉を待たずに。」

「また会えるかもしれないでしょうから…… それまでのお別れですね。」

「どこか寂しそうに彼女は呟いた。それに対してフォードは。」

「…… そうだな。でも連絡は取れるから…… な。」

「……。」

「……。」

そう応えてから、ほんの数秒だったが長いように感じる沈黙が続いた。少しそよ風が吹き、別れの時間は近づいている。

「本当ならこういう場面はお礼をするのが良かったかもしれませぬね。」

ツバサは恥ずかしそうにくすりと笑った。

「別に大丈夫さ。」

フォードもまた笑う。

「……わたしは今、何も持っていないのでお礼が出来ません。だから——」

そう彼女が呟くといきなりフォードの体に抱き着いてきた。

「え？」

フォードは驚いた声を上げるが、ツバサには聞こえていないのか。

「わたしのことを信じてくれてありがとう。」

彼女は言った。

「ああ。」

「わたしにたくさん教えてくれてありがとう。」

「……ああ。」

「わたしのことを助けてくれてありがとう。」

「……どうも。」

彼女は伝え終わると、強く抱き締めてきた腕を離す。そして距離をやや取ると、真っ赤になった耳が見えた。

「ねえ、フォードさん。またいつか会いましょう。だからそれまで……。」

彼女は震えた声で語り掛ける。

「またいつか俺も会えることを願っている。幸運を。」

彼はそう伝えるとそそくさにMH—60の元へと向かった。

今は9月の上旬。顔が熱くなっているように感じるのはきつと残暑によるものだろう。

きつと二人はまたどこかで会える。そんなことを願いながら、二人は別れていくのだった。

— Bite The Dust —
22：エデン条約編：Called Home
o

怒号と銃声が空に響き渡っている。
そして微かに生臭い鉄の匂いが鼻につく。

<??????>

オード 特殊戦開発グループ 大尉
古聖堂近く 防御中

辺り一面はまさしく戦場と化していた。

上を見上げれば、空はだんだんと灰色に染まっているだけではな
く、至る所から煙が上がっていた。

「クソ!!!こいつら無限に出てきやがる。」

戦闘時では口調が荒くなるフォードは悪態を突きながら、目の前に
いる異形たちに対して銃弾を浴びせる。しかし、不思議なことに異形
が消滅するとそれと入れ替わるかのようにおかわりがやってくる。

「このままだと全滅してしまいます!先生だけでも...。」
ハスミは先生を連れての撤退を進言する。

「ああ、わかっている。君たちは急いで先生を連れて離れる。いい
な?。」

「…… あなたたちはまだ戦うというのですか？」

「当たり前だ。ヘリの墜落現場に向かう。まだ生存者がいるかもしれないからな。」

ヘリの墜落。彼らはトリニティ総合学園からの撤退時、たまたま古聖堂で謎の爆発が起きたため生存者や状況の確認のため向かった。

しかし、現場は完全な戦場へと化していた。もちろん彼らは上空から航空支援を行うが、ほとんどの効果が見られなかったため上の許可すらも得ずに地上に降下。

そしてヘリは再びドアガンによる航空支援に戻ったが…… 地上から発射されたRPGらしきものによって墜落したのだった。

「先生!!今すぐこっちに来て!!!」

ヒナの叫び声が聞こえるとハスミ達に護衛されながら、先生はヒナの元へと向かい現場から遠ざかっていく。

「…… ヒナ、お前は大丈夫なのか？」

彼は彼女の頭から流れ出ている血を見て、尋ねると彼女は。

「私が頑張らないと皆が傷付いてしまうから……。大丈夫。」

そう言いながら彼女は自分が負っている傷を目にもくれず、射撃を加えてくる異形達に撃ち返していた。MG42の射撃音はけたたましく、ヘッドセットをしている彼にもよくその特徴的な音が伝わる。

「俺たちは墜落現場に向かう。それと……。」

「何?」

「もし助けがいるなら叫べ。ちゃんと家に帰してあげるからな。」

彼はそうやって冗談交じりに伝えると、ヒナは笑いながら。

「ええ。」

二人は最後の言葉を交わしたのだった。

道中、MG42のあの独特で、甲高い射撃音は遠くでも聞こえていた。フォードはきつと撤退中にいた少数の敵を蹴散らしているであろうと勝手に推測した。

「にしても、墜落現場に辿り着けないな。」

「全くその通りですよ。」

ピアーズとフォードは共に、目の前にいる異形たちに射撃を加えていた。コンクリートブロックから射撃を加えていたが、それに敵の銃弾が当たると不快な跳弾の音が発生する。

敵が持っている銃はおそらく形状からSVD。SVDは強力な7.62mm×54mmの弾丸を発射でき、それは彼らが着用しているセラミック製のボディアーマーですら防ぎ止めることすら出来ない可能性がある。

「クソ！リロードする!!」

彼はマガジンを投げ捨て、新しい方を取り出そうとするが。

そのリロード時の隙を突いてきたのか、敵が一気に肉薄してきた。彼は、リロードを諦めホルスターからMP17を取り出し9mmパラベラム弾を撃ち込む。ある程度撃つと、異形はまるで砂のように消え去った。

しかし、また別の方向からやってきたので彼はそのままMP17を構えて、放つ。そうすると、これもまた消え去った。

「移動しないと囲まれてしまいますよ!!」

ピアーズがそう言うのと、フォードを先頭にして墜落現場に向かうには遠回りであるものの別の方向に続く道路へと向かう。

遮蔽物から移動する際、低いうめき声が発生した。

「っ!!」

フォードはその音が発生したのは誰かと分かっっておきながら振り向く。

どこからか放たれたドラグノフの一発の銃弾が、ピアーズの顔に命中していた。

顔の原型はある程度留めているものの、茹でたかぼちゃが一気に圧力で潰されたかのように激しい損傷だった。左頬に対して右斜めから小さな穴をあけた弾丸の射出創は、そのまま後頭部に向かって大きな花を咲かせて貫通。

それがアスファルトの舗装がなされている地面に倒れ、ぐちゃぐちゃに掻き混ぜられた脳みその細胞たちは散らばったうえで血が流れ出ていた。

明らかに死んでいたとわかる光景だった。

「ああ——」

彼はキヴオトスに派遣される前にありとあらゆるおぞましい死体を見たことがあった。それでも戦友の突然の死は受け入れがたく、思考は白紙にされてしまう。

彼はこのまま墜落現場に向かうのは危険と判断し、先生たちがいる方向へと向かうことにした。

「すまない。」

敵の射撃は激しくて近寄ることは出来きない。彼は死体どころか彼のドツグタグですら回収できないことに悔やみながら、走り出す。それでもまだ遠くからでもわかるMG42の銃声は聞こえていた。

「どういってる?」

彼はMG42の銃声を頼りに走っていたが、今はもう聞こえない。最後に聞いたのは激しい銃声と終幕デストロイヤーの合唱と共に、一発の爆発音が響き渡って以降聞くことはなかった。

おそらくヒナ達は撤退中にいた敵を全て排除することに成功したか、もう既に戦場から離脱しているのではないかと彼は考えた。

しばらく先ほども聞いていた音を頼りに向かい、角を曲がると一つの見覚えのある車両が目に入った。

「救急医学部のやつが...?どうしてここに?」

道路にあるのは放棄された緊急車両1号だった。前輪は脱輪していた上に、明らかに運転席のフロントガラス部分に目掛けて、何故か対空用途のはずのステインガーマサイルがまるまる突き刺さっており、運転席からは一本の左腕がはみ出していた。

「.....」

彼は周りを警戒してから、生きているかを確認するために近付く。

「酷いな.....」

運転席のドアが変形し、その隙間から見えるのはおそらくセナ。彼女の胴体には、ステインガーマサイルが突き刺さっており背中には彼女の血がべっとり着いた弾頭が貫通していた。

また発射された弾頭は不発であるようだった。

そしてまだ息はあるようだが、ヘイローは薄く輝いており彼女は危険な状態であることを示していた。しかし、彼女を助けるにはこの変形したドアをどうにかしないとイケなく、それには特殊な機材が必要であり今は不可能だ。

緊急対応部隊

それにもしQRFが彼らの救援として出動したとしても、陸路で2時間はかかる距離。では空路はどうなのか。陸路よりも早くここに来れるものの、先ほど撃墜されたヘリのように二の舞いになるのを恐れるため、空路は使われないだろう。

つまるところ、この状況では遅かれ早かれ彼女は死ぬ。最悪だ

次はその車両後部周辺に散乱している物に目が行った。色々な医薬品やはたまたは擲弾までが道路に散らばっている。そしてそのまま後部座席の方を確認すると血がべつとりと担架にくっついていた。色を見るにどす黒く変色しており、時間が経っているようだった。そしてその血は道路に向かって続いていた。

おそらくこの中に運ばれていた人物は生きていたのだろうか、なんらかのことがあって逃げ出したのだろう。

彼は生存者を確かめるためにその血痕の跡を追う。

しばらく警戒しながら進むと三人の横たわっていた体をビルのそばで見つけた。ヘイローを確認することは出来なかった。

「誰がこんなことを…。」

この三人は先生を護衛していたあの子たち…ハスミ、ツルギ、ヒナタだった。どれも頭に一発は確実に銃弾が入れられており、無数の銃創が彼女たちの制服を貫いては赤黒くなった血で染まっていた。そして奇妙なことに見覚えのあるサイズ感の空薬莖…それは5.56mm弾のものが地面に散らばっていた。それだけではなく、三人の死体は綺麗に並べられていた。どれも気絶している間にでも、無理やり引きずり出してからの、殺害…といった具合であった。

きつと彼女たちを殺したのはあの異形ではない何か。正体不明の敵だ。

彼は痛ましい現場から離れて、再び血痕を追い続けた。するとまた一人。横たわっていた。きつと死体だ。

死体に近付くとそれは先生。腹部からは大規模な出血をしており、苦しい喘ぎ声が小さく聞こえた。まだ生きている。

「おい、大丈夫か!？」

彼は生きていることに気付くとすぐにベルトにあるメディカルポーチから包帯を取り出し、止血をしようとする。すると先生は。

「い…れ…。」

あまりの痛さからか擦れた声になっているが、フォードに白いタブレットを差し出してきた。

「お、お願いが……ある……のだけど……。」

「駄目だ。諦めるな。生きて俺たちは家に帰るんだ。」

「きつと……あなた……なら……導ける……だろうから……。」

「やめろ。」

フォードはそう言いながら下腹部に包帯を巻き終えて、次は止血帯で足の出血を止めようとする。しかし、先生は左手でフォードの止血帯を持っていて右手を静止させた。

それは弱々しい力で彼は振り払おうと思えばできたが、振り払おうとはせずに。

「もう……私は……助からない……。」

だから——と、先生は言い。

「……生徒、達のことを……よろしくお、お願いします……。」

彼は先生の左手を振り払い、そしてタブレットを受け取った。そうすると、先生は安堵した顔を見せながら目を閉じた。

その目は二度と、開くことはなかった。

もう二度と体が動くこともなかった。

「最後の最後で、どうして……。」

先生は生徒の足を舐める生粋の変態であり、どこかの風紀委員会の髪の毛を麻薬のごとく吸ったりするので有名だった。そんな先生は目の前で死んだ。

もし少しでも、ここに来るのが早ければ……。

もしヒナたちと一緒に行動していれば……。

フォードはそんな取り返すことが出来ない過去のことを考えた。

しばらく時間が経ち、彼は落ち着きを取り戻すとヒナを探しに向かった。先生と一緒に行動していたはずであり、まだ見つかっていない。

彼女は強い。

これは彼が率直に抱いている印象だ。だからおそらく、あの異形たちに圧倒されるような状況でも優位を保っているはずだろうし、死んでいるはずはなくてたかが軽傷程度で済んでいるはずだ。

と、彼は思った。思いたかった。

しかし、現実とは違った。

「……」

彼は沈黙する。

目の前にあるのは彼女の亡骸。彼女の近くには弾薬を全て使い切ったMG42が。

血の色は今まで見てきたものよりも、黒く。かなり時間が経っている。おそらく、最初に死んだ。

彼女の右脇腹からおびただしい量の血が出ており、彼女はそれを抑えるかのように右手を添えていた。頭部は、死ぬ直前に見た血以外にも口からも微かに出ていた。

彼女の瞳孔は虚ろだった。そしておびただしい量の血は彼女の白い髪の毛に染み、一部を染め上げていた。

原因はおそらく失血死。

「…… 家に帰してやれなくて…… すまない。」

ピアーズと同じく戦友の死。彼にとって受け入れたくないものだった――

「全員死んだ……。」

e
D
u
s
t
|

|
|
B
i
t
e
T
h

23：エデン条約編：Heavy Combat

<20??年秋／14：54>

空崎ヒナ ゲヘナ風紀委員長 風紀委員長

車内

「……。」

私は中から見える外の流れていく景色を眺める。私は今、調印式に向かっている最中だ。

このまま何事もなくトリニティとゲヘナ両者が調印することが出来たら、私はもう引退する。

そうなれば私が風紀委員長だという肩書きを背負うことはもうない。私はただの一般的な生徒になるのだ。

「委員長、あと5分で着きます。」

私の左隣に座っているアコはあわただしく書類やらをチェックしながら告げた。

「……わかった。」

私はあまり素っ気ない返事をする。が、アコはそれについて気にしていないのかせつせと書類仕事に集中していた。

風紀委員会が抱える仕事は多い。問題児の鎮圧はもちろんのこと、書類仕事もありかなり肉体的にも精神的にもハードなものだ。

それにこうやって私たちが調印式に向かっている間でも、学園の方

では美食研や温泉開発部が問題を引き起こしているのは違いない。そして常に多忙な仕事を貯めるのは良くないという持論から、アコはこうやって車内でも仕事に取り組んでいるのだ。

私は再び、景色を眺めようとしたところふと、昨日連絡された内容を思い出した。

昨日。私はフォード大尉から突然、電話がかかってきた。なぜ私の電話番号を知っているのかは不思議だったがけど、何やら重要なことがあると開口一番に伝えられた。

曰く、古聖堂に爆弾を仕掛けられている可能性があるとのこと。いったいどの組織、人物がそのようなことをしたのかは機密だから伝えられないと言われた。ただ彼らの諜報機関……CIAという組織から得た情報らしい。

もちろん私はその情報が本当であるかは分からなかったから、アコたちに調印式に向かう前に調べさせた。だけど調べ終わったところで、爆弾なんて存在しないとされた。

私は流石に彼がこういった嘘を吐くことはないと思っていたから、きつとただ単に偽の情報を掴まされただけだろうと思ったのだった。

——「委員長、着きました。降りましょう。」

アコは調印式の会場である古聖堂に辿り着いたことを知らせると、私は車内から地面に降り立った。

「めんどくさい……。」

私は公の場であるにも関わらず誰にも聞こえないほどの声の大きさにで眩いたときだった。

閃光。熱風。

それらが一瞬にして襲い掛かった。

私は押し倒された。そして何が起こったのか全く理解出来なかった。だけど、ほんの一瞬の出来事が終わると何が起きたのかがわかった。

私は立ち上がった。頭がずきずきと痛みを伴った。でもここには先生がいる。私が守らないといけない……なぜなら私にしかそれは出来ないことなのだから。

周りを見渡せば古聖堂は木端微塵となっっているようだった。様々なサイズの瓦礫が散らばっている。それだけではなく、ティーパーティー所属の生徒や私たち風紀委員会の生徒は横たわっていた。

「アコは……無事。」

もちろんアコも横たわっていたが、重傷を負っている様子でもなかった。それならあとやるべきことはたった一つだ。

私は痛みを伴う体を動かして、やるべきことを遂げるために向かうとした時だった。

「ひ、ヒナさん、まだ立ってますねえ……。あれほどの傷を受けているのにまだ戦うだなんてどうして……。痛いはずなのに、苦しいはずなのに……。」

私に声を掛けた彼女は水色の髪型をしていた。そして、彼女の服を見やると以前どこかで見たことがある紋章……。アリュス分校のものだ。そして後方にはガスマスクを被っては彼女と同様に武器を構えた生徒たちがいた。

きつと彼女たちがこの攻撃を仕掛けた張本人。フォード大尉が言っていた爆弾を仕掛けたのも同じく彼女たちのはず……。

私は愛銃のデストロイヤーを構え、そして引き金を絞る。これから長い戦いが始まるのだろうと覚悟をしたのだった。

<同日14:56>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

MH-60・??? 上空

「ピアーズ、まさかお前が迎えに来てくれるとは。」

「流星にトリニティから撤退する時ぐらいには顔を見せようと思っ
ていたのですよ。」

二人の男はブレードが空気を切り刻みして発生するけたたましい
音が響く中、言葉を交わす。

「それはありがたいな。それで、あつちの様子はどうだった？」

「ああ、たまたまデモ隊が警官隊と衝突していましたがそれ以外は
普通の冬でしたよ。あとうちの女房は相変わらず煙草を吸うなって
言われましたけどね。」

ピアーズは苦笑いした。

「おいおい、中尉さん。うちの機内では喫煙とポルノは禁止だって
離陸前に言っただろ？」

「ウォルコット、黙れ。」

MH-60の副操縦士コパイを務めるウォルコットは軽口を叩くと、機長
のレイに咎められた。彼ら二人は優秀な第160特殊作戦航空連隊ナイツ
に所属する隊員だ。そんな彼らは今、現在MH-60を操っては帰還
先のウトナピシュティム空軍基地へ向かっている最中だ。

そしてウォルコットに先ほど言われたピアーズはこう返した。

「自分はまだ吸っていないしあつちに着いてしまう前に、先にエン
ジンから煙が出てしまうんじゃないか？そして地上でドカーンだ。」

彼に言い返されたウォルコットは数秒前にレイに咎められたこと
を気にせずに軽口を叩く。

「地上で爆発が起きているなんてそれは陸軍のことか？今、怪獣を
殲滅しようとしているらしいぜ。」

「怪獣……？もしかしてだが——」

フォードはウォルコットの放った怪獣という単語に言及しよう
としたところ、遮るかのようにレイが話し始めた。

「ああ、今アビドスでビナーというクソデカ蛇とドンパチやってい
るぞ。それに空軍のAC-130やA-10も参加しているから
な。」

「マジですか……。」

「マジだよ。」

ピアーズはあつけにとられた顔をしながらレイの話聞いたのだった。彼が不在の際に行われることが決定したビナー討伐作戦はまさに行われている最中なのだ。もちろん、彼は知る由もなかったため滅多に見ることは出来ないA―10やAC―130を拝めてみたいと内心で思ったのだった。

そんな風に彼らは言葉を交わしたところ、大きな轟音が右斜め前方から聞こえた。そして数秒後にその衝撃がへりに伝わり、派手に揺らす。

「おっと、何が起きた？」

「ビナーはアビドスじゃなくて市街地にでも来たのさ。」

ウォルコットは状況を把握しようとするレイのそばで冗談を放つと、レイはやや怒り気味に返す。

「いい加減にしろ、あの煙を見ろ。どうやら爆発でも起きたのじゃないか？」

レイがそう言うとは皆は煙が出ている方へと視線を移す。たしかに黒煙は高く空に向かって伸びていた上、火の手が上がっているようにも見えた。

そうして視線を移して眺めていたところ、無線が入る。

「ノーマッド6―1、こちらセクター。エデン条約調印式が行われていた古聖堂と呼ばれる場所にて、大きな爆発が発生した模様。ドローンでは現場の状況が煙によって確認できない。君たちは最も近い場所にいるから、ただちに状況の把握をしてもらいたい。どうぞ。」
J S O C 主導の無人機による監視がほぼ毎日行われている中、どうやら確認が出来ないようだ。もちろん、レイはその無線にあわただしく返答する。

「セクター、こちらノーマッド6―1。了解、これより現場に向かう。終わり。」

彼はそう告げると機体は古聖堂へと向かっていく。高く空に伸びた黒煙は風に揺らいでおり、遠くからでも見るこことができた。

「はあ、はあ。」

私は息をやや荒くしながら瓦礫の山を進んでいく。

「いたぞ!!増援を——」

「っ!!」

私は道中にいたアリウスの生徒をなぎ倒す。周りにはアリウス生か倒れたゲヘナ、トリニテイの生徒だらけだ。

木製の構造物だった瓦礫には火がついているものもあり、そこから煙が上がっては私の視界を妨害していた。しかし、そんな見えない視界の中でも私は進まなければならない。

私が頑張らないと先生が傷付いてしまう。たとえば、私の頑張りが褒められなかったとしても。

私は戦闘中だというのにそんなことを考えながら進んでいる時だった。空から轟音。

煙が私の視界を妨害するが、たまに煙の隙間から見える灰色の空。そんな隙間から目をやると、空で何かが燃え上がっていた。

「あれは……飛行船。」

私は独り言でぽつりとつぶやく。確かに先ほどみたあの特徴的なシルエットは飛行船だ。あれに乗っているのはマコトたちのはず。つまるどころ、彼女たちが乗っている飛行船は墜落してしまう。

私に向かって「キキキ!!地べたで這いつくばっている。」なんて言葉

を行く直前に吐いて、私はいつものように面倒臭いと感じながらあしらった。それでも、流石に墜落してしまうなんて現状に私は動揺を隠せなかった。

今起きているのはただ事ではない。ティーパーティーやゲヘナの主要人物を巻き込んだ立派な大事件だ。

そう考えていながら私は激しく漂う煙を突き抜けた。突き抜けた先には、銃声が鳴り響くうえガスマスクを身に着けた正体不明の者たちとステインガーを持ったアリウス生が取り囲んでいるようだった。そして取り囲んでいるとトリニティの正義実現委員会所属の生徒であることを示す、特徴的な黒を基調とした制服を着た二人の女の子。そしてもう一人はシスターフッドの女の子。三人はけがをしており、制服には所々に穴が開いていた。

また取り囲んでいる何かは明らかにその三人に向かって銃を向け、放っていた。私はそれが敵であると判断し、デストロイヤーを構えて掃射する。

紫色の曳光弾が体に向かって命中。すると砂のように消え去ってしまった。

奴らが消え去ると視界が明瞭になり、その三人以外にも一人の大人がいるのが見えた。私がやるべきことを為すために探していた人物、先生だ。

私は大声で叫ぶ。

「こっち!!!」

傍から見ればただの怒号にしか聞こえないだろう。だけどそんなことは今、戦場と化したここでは怒号なんかは気にする必要はないうでもよかった。

「ゲヘナの風紀委員長!?!」

もちろん彼女^{ハスミ}は驚くが、私は気にもせず。

「正義実現委員会、先生をこっちに!今は時間が無い!!」

「.....」

「.....」

私は彼女と目を合わせ、沈黙が流れた。しかし、その沈黙はすぐに

破られ。

「不快ではありますが……先生の退路を私たちが守ります。」
と彼女が言う。私も。

「急いで!!」

先生はこちららに向かつて走り出した。そして私は先生を連れて瓦礫まみれの古聖堂から遠ざかっていく。

「風紀委員長!!先生のことをよろしくお願いします!!」

背後からはあの正義実現委員会の子の声が聞こえた。私はその言葉で信頼を、先生を私に託された気がした。

走り続けると至るところにあの化物どもがいた。私はそれを見つけるとすぐに射撃し、薙ぎ倒す。

それを複数回繰り返しながら、緊急時の際にセナと合流する予定の場所へと向かおうとする。

「逃がすか。」

突然、低い声が聞こえると同時に銃声。体に痛みが走った。

「つつ!!」

撃たれたと思われる方向へと視線を向けた。たくさんの化物たち。さらにそこには私に向かつて撃つてきた少女と、先ほど私が薙ぎ倒したはずの子たち。

そしてガスマスクを身に着けて、素顔が見えないアリウス生がいた。

「下がって。」

私は先生にそう言い終わる前に、デストロイヤーを放つ。

時々、目に見える紫色の曳光弾が化物たちに襲い掛かる。奴らを倒し終わったらあとは一際違う、彼女たちに向けて放とうとした時だった。

「流石に聖徒会だけじゃダメか。私たちスクワッドからやはり、ヒナを倒す必要があるようだ。」

そう告げられると共に、スクワッドと名乗る彼女たちは私に集中砲火の射撃を加えてきた。

「ああっ!!」

私はあまりの痛さに声を上げる。何発もの銃弾が私に襲い掛かってきた。

「ひ、ヒナさんまだ立ってますねえ。今もこうやって銃弾をくらっているのにまだ生きているだなんて。」

「黙れ!!」

私に向かってそう言い放った彼女を真っ先に狙う。軽くトリガーを引き絞ったが、放たれた無数の弾丸は彼女に当たり倒れこんだ。

「しゅとっ……。」

と、あのステインガーの子は言い放った。彼女を見ると、既にこちらに構えていた。発射されるまで目前だ。

私は再び痛みが襲ってくるのを覚悟する。その時だった。

いきなり空から鋼鉄の羽音とヴーという銃声と共に、赤色の光が降ってきては彼女にたくさん襲い掛かった。

「あ——」

もちろん光を浴びたあの子はまるで事が切れたかのように倒れた。

「っ!!」

私は突然の出来事に驚き、空を見上げた。空を見るとヘリコプターが私の真上を通り過ぎてからビルと激突しないように、再び急上昇していくのが見えた。

そして急上昇を終え、右に旋回したとき。ヘリに乗っている人は見たこと覚えがある人物……フォード大尉とピアーズ中尉だというのに気付いた。

「あのヘリめ……。姫……?」

姫と呼ばれた彼女はスツスツと手話で何かを伝えているようだった。

「なるほど……。あれが例の軍隊か。ならば、また来る前に……。」

何かを察したのか彼女は私のことを睨みつけながら。

「ヒナ。今ここでお前を殺す。そして……先生もだ。」

彼女はそう言い終えると同時に私に向かって射撃を加えてきた。痛みが伝わる。

「くっ!!」

私は咄嗟に遮蔽物に隠れてから、撃ち返す。しかし彼女は身のこなしが軽く、避けてしまう。

そして避け続ける彼女に狙いをさらに定めようとした時。

いつの間にか回り込んだのか、姫と呼ばれる子は私に至近距離で撃ってきた。

「ふっ、いくらゲヘナの風気委員長でも姫と私には勝てないようだな。」

嘲笑。

しかしその言葉によって私は今ここで戦うべきじゃないということに気付いた。私は先生に向かって叫ぶ。

「走って!!!」

私はそう叫んで遮蔽物から体を出しては、先生の背中を守るように彼女たちに弾をぶち撒けた。

「っ!?!迂闊に近寄れないな……。」

彼女はそう言いながら適当にぶち撒けられた弾丸に当たらないように距離を取った。好都合だ。

私も一気に合流地点に向かって走り出す。

「クソ!!!ユスティナ信徒を集めろ!!!絶対に逃すな!!!」

その言葉が遠くから聞こえつつも、私は走り続ける。

「ヒナ!!!」

先生は少し先で待ってくれたようで私の名前を呼ぶ。しかし背後には、あの化け物が何人もいた。

「後ろ!!!」

私が再び叫んだが、あの化け物どもは銃を既に構えており、あとは引き金を引く寸前だった。そして、丸腰である先生が私の言葉の意味を悟ったのか、後ろを振り返った時。

あの化け物どもに空から沢山の赤い光が降ってきた。この射撃は言わずもがなフォード大尉達が乗っているヘリによるものだとわかった。

そして赤い光はアスファルトに当たっては破片が飛び散る上、土埃が激しく舞う。

先生が近くにいるのも気にせず至近距離の射撃。

そしてへりは射撃を終えると急旋回し、私たちより50mほど離れた大通りに着陸。

「ヒナたち!!!早く来い!!!」

大声でフォード大尉は私の名前を呼んだ。彼は機内から、周囲から続々と襲いかかってくる化け物どもに向けて射撃を加えていた。

同時にへりに取り付けられたドアガンも射撃を加える。

私はその援護射撃を受けながら、先生と共に向かう。そしてあと20mほどとなった時。

「1時の方向にステインガー!!!機体を上げろ!!」

ドアガンナーはそう叫ぶと機体は上昇する。そして数秒後に、私たちの目の前に一瞬黒い筒が映り込んで本来自らへりが直撃し、当たらないはずだったビルに向かっては爆発が起こる。

「ツチ、流石に無誘導弾じゃダメか。」
後ろから声。

「ミサキ、あのへりを落とせ。」

「っ!?!」

私はその言葉を聞くと後ろに振り返って、真っ先に倒そうとするが。

「遅い。」

彼女は私が撃とうとするよりも先に射撃を加えてきた。

再び痛みが襲う。ずっと戦い続けているせいか、今までよりも何倍も痛い。

「ヒヨリ、今だ。」

その声と共に私の胴体は重い一撃をくらった。

「があっ!!」

私は苦しい声を上げて、仰向けに倒れ込んでしまった。私はどうにかして、体を動かして立ちあがろうとするが。

「やれ。」

しかしその声と共に私は彼女たちから一斉に射撃を喰らった。何発もの銃弾が私に当たり、意識がだんだんと薄れていく。

徐々に痛み感じていた部分が熱くなってきた。

「ああああああっっっ!!!」

私は痛さと熱さに耐えられず、声をあげる。私はこのまま死んでしまおうのだろう。

先生を守ることはできず。そしてフォード大尉に信頼してもらっておきながら、彼を少し疑ってしまったこと。

ふと色々な後悔が頭に浮かんできた。

視界がだんだん白と黒の世界に変わっていく。鮮やかな色調が薄れていく。

銃声もだんだんと聞こえなくなっていく。

「ま、またヘリが!!!」

「ミサキ!!」

「ロックオンする!!」

微かに声が聞こえてきた。

「当たれ!!」

その声と同時にステインガーを発射する音が聞こえた。私は仰向けになっており、状況を上手く把握することが出来ないがヘリは今、まさにミサイルから狙われているのだろう。

「み、見てください、フレアが……。」

「当たらないか……。」

「うっ、はあっ……。」

私は彼女たちがヘリに集中しているうちに移動しようとする。苦しい喘ぎ声を漏らしながら、無理やり体を動かす。体中が悲鳴を上げたが、そんなことはどうでもよかった。

そして私が立ち上がったところ、猛スピードでまだ先の合流地点にいるはずの……セナの緊急車両11号が私たちの目の前にやってきた。

車両はダイナミックなドリフトをしながら、後部座席を私たちに向

ける。

しかし、その時に彼女たちは気付いてしまった。

「逃がすな!!!あの先生をやれ!!!」

「つ!!!先生行つて!!!」

「こちらへ!」

突然、先生を標的にする声が聞こえたとともに私は咄嗟の判断で、派手に弾を互いにぶちまけた。

「ま、まだそんな力が...。」

ヒヨリと呼ばれる狙撃手はそう言いながら倒れこむ。

そして私は被弾しながらも、車両後部に乗り込む。頑丈な扉を閉めると、車両は急発進した。

「ああつ、ううつ...。」

先生は苦しい声を上げていたため、私は先生の体を見つめる。

被弾していた... 下腹部から激しい出血を伴っていた。

私はその姿を見て、ひどく後悔した。守り切れなかった。

もつと私が頑張つていれば...と。

「つ!!!」

突然の出来事。

いきなり車両は大きな轟音と共に下から激しく揺らされ——
私の視界と意識は暗闇に落ちていくのだった。

「おい見ろ!!彼女たちが乗っている車両は爆発したぞ!!!」

レイは声を上げる。ヒナたちを乗せた緊急車両11号は猛スピードで戦場から離脱していったが……道路で突如爆発した。

幸いにも車両は原型そのまま留めており、炎上している様子でもなかったため、まだ中にいる彼女たちは助かる可能性がある。

「IEDか何かにでもやられたんだ……きつと……。」

右側のM134のドアガンの担当をしているガンナーはぽつりとそう呟く。

「レイ!!!」

不意にフォードがレイの名前を叫ぶ。

「俺たちを降下させてくれ。」

「自分もさつきから言っているように覚悟ができています……だから……。」

「おいおい、中尉と大尉さんそれはダメだぜ?さつきお偉いさんにも咎められただろ?」

と、ウォルコットは返す。

彼らは定期的に急降下してはミニガンの掃射をぶちまけてはヒナの追手たちや、無限に湧き出てくる異形たちに攻撃を加えていた。しかし、その際にフォードとピアーズは地上に降下することを上に要求したが許可を貰うことは出来なかった。

そしてさつきの要請で三回目。三回目の正直なんて言葉があるが、そんな言葉はここでは通用しなさそうな雰囲気だ。

「でも……あれを見てください。今、敵は彼女たちを包囲しています。このままでは……。」

「ああそうだ、彼女たちは死ぬ。降下することは危険なのは分かっている、どうにかできないか?」

「……。」

レイとウォルコットは沈黙を貫く。彼らは個人的な感情でフォードたちの降下を拒んでいるわけではない。降下すれば彼らも死んでしまう状況。あの異形たちは無限の兵力であり、それに包囲されてし

まう可能性。

それらを踏まえると、いくら特殊部隊所属の二人の隊員だとしてもこのまま降下させることはただの自殺行為なのだ。

そんな風に沈黙を保っていた二人だが、レイは無線で誰かと通信する。

「ええ、はい。……先ほどの通り、はい。……二人います。」

レイはそう言って通信を終えると、フォードたちのヘッドセットに突然通信が入る。

「降下を要求しているDEVGRU二名がいると聞いた。私はキヴォトス派遣隊司令官のミリー將軍だ。君たち二人に確認の意思を取りたい。」

<20??年秋／15：29>

ウトナピシユティム空軍基地・通信指令室

「――車両大破繰り返す、車両大破。」

指令室内にいる隊員たちは慌ただしく、無人機から送られた緊急車両1号が爆発に巻き込まれた映像を見て報告する。

「つ!!敵が包囲網を形成しています!」

「もう一度。」

この場の最高指揮官であるミリー將軍は一際目立つ低い声で、先ほど報告した隊員に向けて、そう伝える。

「かなりの数の敵が車両を包囲しようとしています。」

「……。」

無尽蔵に襲い掛かってくる敵が包囲をしようとしていることを伝えられ、沈黙する。

「生存者が居るぞ!!一人這い出して戦っている!!!」

「重傷のはずじゃ……。」

映像にはMG42を持った女の子が車両後部から這い出して、近付いてくる敵に向かって射撃を加えていた。

「……我々にはどんな選択肢が残されている?」

ミリー將軍は隊員たちに尋ねると、一人がそれに答えた。

「三つあります。一つ目は見捨てること、二つ目はQRFを送り込んで、それまで持ち堪えてもらう。三つ目は……現場上空にいるノーマッド6―1に搭乗しているDEVGRU二名に降下させるか——です。」

「DEVGRUの隊員か……彼らは降下する気があるのか？」

「先ほど、統合特殊作戦コマンドの方で二回申請したそうですが、却下されています。」

「そうか、ノーマッド6―1に繋いでくれ。キヴオトス派遣隊司令官として、彼らと話がしたい。」

「了解です。」

隊員はノーマッド6―1に無線を繋げようとする間、彼は再び口を開き。

「QRFを出撃させろ。第24海兵遠征部隊だ。それとビナー討伐作戦は中止しろ、参加している部隊を呼び戻せ。」

彼は通信指令室内にいる隊員にそう伝え、全員は言われた通りにそれぞれのタスクに取り掛かる。

そして、どうやら無線を繋ぐ用意は出来たようで。

「將軍、無線を繋ぎます。」

用意した隊員はそう伝え、無線が繋がった。そしてミリー將軍は口を開いて。

「降下を要求しているDEVGRU二名がいると聞いた。私はキヴオトス派遣隊司令官のミリー將軍だ。君たち二人に確認の意思を取りたい。」

<同時刻>

空崎ヒナ ゲヘナ風紀委員長 風紀委員長

重い瞼を開ける。

銃声は耳元で鳴り響いていた。私はさっきまで気絶していたことに気付いた。

そして車内を見渡すと、ずいぶん酷い状態だった。車内に取り付けられた医療品や輸血パックは散乱し、いくつかのものは使えない状態にまで陥っていた。

「あ——」

私の右隣には先生が横たわっていた。先生は、目を瞑っており動く様子はない。私は一瞬死んでしまったのかと疑いながら首の脈を取った。

…… まだ生きている。鼓動は微かに弱い気がするが、死んではない。

私は次に、重い体を起こして後部座席に取り付けられている頑丈な扉を開いた。すると、周囲にはあの化物どもが私たちがいる車両を包囲しているのが目に映る。

「…… 戦わなきゃ……。」

私は泣き言なんて言つてられない。私が守らないと、戦わないといけない—— という使命感を感じながら、体を動かす。

「あう…… うっ…… ううう……。」

私は車内から出る際に苦しい声を上げながら、デストロイヤーを構えた。腕は震えており、まともに照準は定まらない。

それでも私は無理やり体を酷使して、射撃を加えた。

一人。また二人。と、私が放った銃弾に命中した化物どもは砂のように消え去っていった。しかし、敵の数は多く何度も倒しては続々と、増援の敵がやってくる。

セナは運転席にいるが無事なのかは分からない。今、私はたった一人で戦っているのだ。

ふと空を見上げた。空はただ灰色に染まっており、これから雨でも降りそうな予感がした。フォード大尉達が乗ったヘリは見当たらない。あの鋼鉄の羽音や、ドアガンのけたたましい銃声も聞こえてこない。

彼らはきつとこの戦場から離脱してしまったのだろう。

急に不安が私の頭の中に襲い掛かった。

私はこのまま戦い続けて、最後は弾薬が尽きて一人で死んでしまうのではないかと。そう考えた瞬間、腕がさらに震えた。

恐怖だ。

孤独と死。ヘイローを持っていれば死ぬことなんて滅多にない……。なんて、思っていたことがあったが、今はそんなことはどうでもよかった。

ただ単純な恐怖と孤独感。それ以外でも、なんでもなかった。

突然運転席の方から、足音が聞こえてきた。きつと、敵だ。私は後部座席付近で戦っていたが、運転席の近くにいるであろう敵を排除しようとする足が動かす。

私がそうして何歩か移動した時だった。運転席のドアをバンバンと強く叩く音と共に、声が聞こえてきた。それは聞き慣れた声だった。

「友軍だ!!助けに来た!!!」

と、声が耳に届くと聞き慣れたサプレッサーの音も響いてきた。

<同日15:34>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

車両から100mほどの位置

「こちらノーマッド6―1。DEVGRU二名を降下させました。」
「了解。」

たった今、フォードとピアーズの二人は100mほど離れた位置にへりから降下した。

彼らは走って車両に向かっていく。遠くからはあの独特なMG42の甲高い射撃音が、ヘッドセット越しに聞こえる。

しばらく彼らは走り続けると包囲網を形成している最中の、異形たちを見つけた。そして、ちょうど包囲をしようとしている異形たちの背後に位置した彼らは射撃を加えた。

射撃を加えると地面に倒れることはなく、そのままその場から居なくなってしまう。しかし、フォードはそんなことを気にせずに。

「車両へ移動するぞ。」

フォードはそう伝えると2人は全速力で、運転席の方へと駆け寄る。

そしてフォードは味方であることを示すために、運転席のドアを二回強く叩いて。

「友軍だ!!助けに来たぞ!!!」

そう叫ぶと、彼は車両のボンネットの上にMk. 18を固定させてからマグニファイア越しに撃ち込む。サプレッサーの音が響くと共に、排莖された空薬莖がフロントガラスに叩きつけられる。

「う。。。う。。。。」

彼の右隣、フロントガラス越しから声が漏れ出た。ピアーズはフォードの後方を警戒していたが、その声に気付き運転席をのぞき込む。

「大尉、運転席に生存者が!!」

「!!」

フォードはピアーズからそのように伝えられたところ、運転席の方

に目をやるとセナがいた。

「怪我の具合は？」

彼は尋ねる。

「…… 少し下半身が妙な感覚がします……」

いつもよりやや弱々しい声で彼女は答えた。

「今そこから出してやる。ピアーズ、援護を。」

「了解。」

ピアーズは彼と入れ替わり、射撃を加える。

そして、入れ替わると彼は運転席のドアの前まで移動し、セナの左腕を自らの肩に回させて、運転席から無理やりだが引きずる。

「次は後部に——」

フォードはセナを介抱しながら、先生やヒナがいるであろう後部座席の方へと向かおうとしたとき。

「うっ…… はあ……」

苦しそうな喘ぎ声を漏らすヒナが彼の目の前に現れた。彼女は頭から血を流しているどころか、所々出血しているのが見えた。

「おい！無事か!？」

「…… 先生が怪我しているから…… そっちを優先…… して……」

微かに聞こえる声は弱々しく、ヒナが目の当たりにしたこの激戦の酷さを物語っていた。

「…… わかった。無茶するなよ。」

彼は彼女のことを心配して、そう伝えようと後部座席の方へと向かった。後部座席の方へと足を進めると、中は医療用の器具や薬品などで散らばっていた。

そして、その中には先生が横たわっていた。車内に突っ伏していた。

「……」

彼はその光景を見て、そのまま何も言わずに先生に近付く。近付くと倒れた体から血が滴っているのが分かった。

彼は体を仰向けにした。すると先生の怪我の状況がよく分かった。

下腹部から大規模な出血をしているだけではなく、右足の鼠径部あたりからも出血が起きていた。

「ピアーズ!!こっちにこい!!」

「了解です!!」

フォードは大声でそう叫ぶとピアーズは勢いよく走って、車内に飛び込んできた。それまでの間、走っている彼の足元には狙いを逸れた銃弾がアスファルトに当たり、不快な音を発していた。

「… 負傷者?」

「見ての通りだ。」

車内に飛び込んできた彼は先生の容態を確認し始める。ピアーズはDEVRUに入隊する前、一般の衛生兵として配属されていた経験があった。そのため、先生の状態を詳細に知るには彼の力が最もベストであるのだ。

「… 貫通銃創がない…。これはまずい…。」

ピアーズは先生の背中と下腹部を交互に確認しながら口に漏らす。

「今すぐ摘出しないと… いや… それよりもまずは… 止血…。」

彼はそういうとベルトに取り付けられているメデイカルポーチから包帯やガーゼを取り出し、血が流れ出ている銃創に押し込む。

「… 俺は足を止血する。」

フォードも同様にポーチから止血帯を取り出し、右足の出血箇所を強く締め付けるように止血帯を巻き付けた。

ひとまず失血死は免れることが出来た。次にやるべきことは――

「先生をここから移動させるぞ!ここは危険すぎる!!」

フォードはそう伝えるとピアーズと共に先生の体を運ぶ準備を進める。

そうして担架に先生の体を乗せて、移動しようとした時フォードは外に向かって叫ぶ。

「ヒナ!!聞こえるか!?先生を運んでいる間、俺たちのことを援護してくれ!!」

「……わかった。」

あまり生気のない声で彼女は答える。彼女は怪我のせいで打ちひしがれてしまったのか、それとも激戦による疲労なのか。

フォードにとってはそれはどちらによるものかが分からなかった。

「どこまで運ぶんですか?」

「あそここのビルの中までだ。」

フォードは右手の人差し指で、ここから30mほど離れたビルを指す。

「わかりました……準備は出来ています。」

「ああ、3でいくぞ?3、2、1。」

彼らはカウントに合わせ担架を持ち上げた。先生の体の重みが指に伝わる。そして、勢いよくビルに向かって2人は走り出した。

それと同時にヒナのMG42による援護射撃が始まった。彼らの近くにいる異形どもは、彼女の射撃によって正確に仕留められている。

派手に紫色の曳光弾が飛び交った。

しかし、どこかに隠れていたのか一体の異形は彼らに射撃を加える。

足元に銃弾が擦れて、地面に命中して発生する衝撃波と音は不快なものでありフォードはたまらず。

「クソクソクソクソクソクソクソクソクソクソクソクソクソクソクソク!!!」

文字通りクソツタレな弾避けのおまじない。しかし、そのおまじないが功を成したのか、それを唱えてから数秒後には数発の紫色の曳光弾が射撃を加えてきた異形に命中。

彼らに射撃を加えてくる者はいなくなった。たった30mであったが、300mも走っているように長く感じてしまうものだった。

「下ろそう……。」

息を切らしながらピアーズと共にビルの一階玄関付近で担架を下す。少なくとも、あの破壊された緊急車両よりはマシな場所に先生を移すことができた。

そして再びセナやヒナが残るあの場所へ戻ろうとした時、ヘッド

セットに通信が入る。

「ノーマッド6―1だ。車両が破壊された場所から西に100mほど、離れた位置に着陸した。回収するから早く来てくれ!!」

機長のレイの声だった。西に100m離れた位置にいると彼は伝えたが、ちょうどフォード達たちが向かったビルの方角であり比較的近い。

「こちらフォード、了解した。ただちにそっちに――」

「うおっ、もう集まってきやがった!!!」

フォードの言葉を遮ったレイの声と共に、ドアガンのけたたましい銃声が伝わる。おそらく着陸地点にはたくさんの異形どもに囲まれているのだろう。

「ノーマッド6―1、敵に囲まれているぞ。直ちに離脱しろ。」

「了解、ノーマッド6―1離脱する!!」

そしてレイの声と入れ替わりウォルコットが通信に応答する。

「すまないな大尉さん、着陸して回収は出来なさそうだ。代わりに、空からたくさんの鉛玉をプレゼントするお仕事なら出来そうだが。」

「しようがないさ、空からの支援には期待しておくよ。」

「へへっ、どうも。」

二人はそう言葉を交わして、通信を終わらせる。

「負傷者は三人。そのうち一人は高度な医療処置が必要…そして戦えるのは二人…か…。」

フォードはふと言葉にそう漏らす。ヒナは一応戦っているがあの酷い怪我の様子を見れば、無理に戦っているだけに過ぎない。

そして先生を戦場からどうにか連れ出さなければならぬ。一応、止血はもう既にしてあるが弾丸の摘出、輸血などの戦場では出来ない処置が必要だ。

対して負傷もしておらず、万全な状態で戦えるのは彼ら二人のみ。絶望的な状況だ。

「…最悪ここで籠城するしかないのでしょうかね。」

「ああ、その通りだ。」

「…ひとまずあの二人を連れて来ましょう。」

「俺が行くからピアーズは援護してくれ。」

「了解です。」

フォードはビルから外へ歩を進める。そして、自動ドアが開くとともに彼は勢いよく走っていった。

幸運なことに、担架で先生を運んでいるときよりは銃弾が足元をかすめることはなかった。

「戻ったぞ。ヒナ…?」

「…はあ…はあっ…。」

相変わらずヒナは苦しそうな状態であった。しかし、彼女はこう答える。

「私は…大丈夫…だから…セナを…。」

「…。」

どうして彼女は自分の身を案じないのか。どうしてそこまで無理をしてでも戦おうとするのか。彼の頭には疑問が残った。頭から血を流し、腹部からも血が出ているほどの怪我をしておきながら、彼女は戦い続けている。

あまりにも痛ましい姿だった。

「…わかった。セナを運ぶ…。」

彼はそう言葉を残すと、セナを介抱しながらピアーズがいるビルへと向かう。その間、介抱されているセナはというと。

「ごめんなさい…ごめんなさい…。」

彼女は怪我をしてしまい、こうやって介抱してもらっておきながら未だに何も出来ない無力感によるものなのか。彼女はそう言葉を漏らした。

「…大丈夫さ。」

彼はなんと言葉を掛けてあげいいのか分からなかったが、彼なりに慰めの言葉を伝える。そんな風にやり取りをしているとビルまで到着した。

ビルに到着すると、中から援護射撃をしていたピアーズが代わりに彼女のことを介抱する。

残るはヒナだけ。彼は誰一人として取り残さないように、急いで再

び彼女の元へと戻ろうとするのだった。

<同日15:56>

「まもなく、ミレニアム自治区方面で偵察任務にあたっていたF16二機が航空支援を始めます。」

通信指令室にて作戦上の航空管制を担っている空軍出身の隊員はそう伝える。F16はマルチロール戦闘機であり、空対地から空対空そして空対艦といったありとあらゆる戦闘において参加することが出来る戦闘機だ。

ステルス性能に特化したF35よりは安価であり、それなりの攻撃能力があるためキヴォトスにおいては主力戦闘機として彼らの世界から持ち込まれていたのだ。

「ミレニアム自治区方面の偵察任務？」

「ああ、どうやら衛星写真でも既に自治区から隔離された謎の近未来都市を捉えていたようだが、さらなる調査のために送り込まれたらしいぜ。」

「噂によると、人は誰もいないらしいな。」

「ロボットまみれなんだろうな。」

他の隊員たちはそうやって冗談などを告げていたが、通信指令室にある報告が入る。

「将軍、QRFは編成が完了しましたが出撃不可能です。」

「なぜだ？」

ミリーは尋ねると、報告を行う隊員は答えた。

「……基地の周辺に群衆……いえ、現地のデモ隊が集まっていま

す。そのせいで、陸路による出撃は困難です。」

「なんだと、どうしてデモ隊が？」

「どうやら我々が古聖堂にミサイルを発射したための抗議活動のようです。」

「……情報が錯綜しているな。」

「ええ。」

隊員はそう呟きながら、左手に持っている資料を彼に提示する。

その資料はSNSのとある投稿であった。投稿には「キヴオトス派遣隊が古聖堂に向けて、ミサイルを発射する瞬間。」と綴られており、さらには動画付きであった。

「……この動画は……一か月ほど前に我々が打ち上げた人工衛星のものではないか。」

「その通りです、この投稿は間違いなく古聖堂を襲撃している組織によるものでしょう。」

「……。」

ミリーは沈黙する。当初予定していたQRFは今のところ出撃が出来ず、このままでは降下させた彼らを死なせてしまうことになる。それはキヴオトス派遣隊の最高指揮官としてあってはならないことである。

しかし、残されている手筈はもうほぼない。一時間以内には激しい雷雨が予想されており、新たに航空機を出撃させるのは危険だ。

それに加えて、二機のF16が航空支援を担うが……おそらく火力が足りず、敵を圧倒することは出来ずに帰還するだろう。

彼は最善の選択を考えた。

「デモ隊を排除しろ。催涙弾でもゴム弾でも使え。」

「了解です、ただちに暴動鎮圧のためのMPを出動させます。」

隊員はそういうと通信指令室に備え付けられている無線でMPとの連絡を取り始めるのであった。

「この戦いは思ったよりも酷く、血生臭いものになりそうだ。」

ミリーは無人机から中継される古聖堂付近の激しい戦闘が映し出されているモニター眺めながら、そう呟くのであった。

25：エデン条約編：Down

<20??年秋15：56>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

大破した車両付近

「ヒナ！ビルへ戻るぞ!!」

フォードは甲高い銃声が空に向かって響く中、大きな声で叫ぶ。彼らは今もなお、激しい銃撃戦のなか戦っていた。

「… わかった!」

呼びかけられたヒナは精一杯の大声で答えると同時に、彼と共に走り出す。彼女は怪我の痛みからか、足元が時々おぼつかない様子であった。

その間、フォードは周囲から彼女に向けて銃を放つ異形たちに射撃を加えながら走る。数メートル走っては狙い、また走ってから再び狙う。

無数に押し寄せるクソツタレな異形ユステイナ信徒どもは恐れ知らずの不死身の軍隊だ。だが、ヒナのMG42による射撃はそんな多くの異形たちを薙ぎ倒すことができる貴重な火力の一つであった。

しかし、今彼女は射撃を加えることが出来ない状態だ。だからこそ、無事にビルまで到達できるように援護射撃をするのだ。

たった30m。距離は短いはずだが、敵の射撃に対して応じようとしているからかビルに到達するまでの時間や距離が再び長く感じた。

敵の射撃は凄まじかった。時々、狙いが定まらなかった銃弾が体の近くを通り過ぎると同時に発生する衝撃波が肌を伝わる。

酷く不快だ。

「こちらノーマッド6―1、援護する!!」

ヘッドセット越しにレイの声が聞こえると同時に、鋼鉄の羽音が聞こえてきた。そうすると空から大量の赤色の曳光弾が放たれて、集団で行動していた異形たちに命中して消え去っていく。

「ガンナーいいぞ。グッドキル。」

ウォルコットがガンナーを褒めたたえる声が聞こえたと同時に、彼らはビルに辿り着いた。

「こちらフォード。最高だったぜ。」

彼はヘッドセット越しに射撃のお礼をした。

「ああ、どうも。これで全員か？集めたのならば、このまま街を脱出するぞ。」

「了解。」

彼らは降下する前にある作戦を立てた。フォードたちが地上に降下したら、すぐにヒナたちと合流。そして、合流が済んだのちノーマッド6―1が車両から離れたところに着陸して彼らを回収するといった手筈だった。

しかし、予想以上の敵の数の多さからそれは断念せざるを得なかった。そうして一見彼らの作戦が失敗したかと思えたが、まだ他の方法がある。

それはノーマッド6―1が空から彼らを援護しつつ、現在の戦闘地域から離脱するといったものだ。そして、上手くいけばヘリに乗り込んで基地へ帰投することができるというものだ。

「ピアーズ、先生の容態は？」

フォードは尋ねる。

「呼吸はしっかりしていますが… 出血が多く、1時間以内に病院に送らないと死んでしまいます。」

「セナは？」

「足を骨折している可能性があります… それ以外は無事です。」

「了解。先生を担架で運ぶ準備を。今からこの戦場から脱出するぞ。」

彼はそういうとピアーズと共に準備を進めていく。担架に先生を乗せて運ぶ準備を整え、今すぐにでも脱出が出来るようにする。

そして準備を終えたフォードはヒナの銃創まみれの体を見て。

「ヒナ、傷を見てやるからこっちに。」

「……。」

彼女は何も言わずにフォードの目の前に近付く。彼女は生きているはずだが、表情が険しい。

彼はそれから手当を始めた。今この場では止血程度しか出来ないが、何もしないよりはマシなはずだ。

しばらくヒナの銃創に止血を施していくと彼女は口を開いた。

「以前、同じようなことがあったわね……。でも前はこんな状況じゃ……。」

「この戦いが終わったら何がしたい？ピザパーティーか？」

彼は笑いながら、ヒナの言葉を無視して呟いた。

そして続けて。

「いやピザパーティーよりも、水着パーティーか？おっとそれを望んでいるのは先生だ。俺じゃないぜ。」

「…… どうして話を逸らすの？」

ヒナはフォードに包帯を巻かれながら尋ねる。

「戦場で暗いことは言うべきじゃない。状況はきつと良くなることを信じる。」

「……。」

「これから俺たちは先生を連れて、この戦場から脱出する。そのためにヒナ。君の力が必要だ、援護射撃を頼みたい。」

「…… わかったわ。」

彼女は小さな声でそう答えると同時に止血が終わった。それと同時にフォードのメディカルポーチに入っていた、包帯はもう無くなつてしまった。

「ピアーズ！俺に包帯を分けてくれないか？被弾して、そのまま失血死は御免だ。」

彼はピアーズに向かってそう告げると、彼はパウチに包まれた包帯

を一枚手に出す。

「自分もそんなに残っていませんが……どうぞ。」

「ありがとう。」

彼は礼を言っぴアーズから包帯を受け取ると、メデイカルポーチに収納した。

そして。

「準備は出来たな?…あまり負傷者を動かしたくないが……セナ。先生の担架を持てるか?」

負傷者であるにも関わらず、彼はどうしてセナに先生の運ぶ役目を担ってもらおうとしたのか。それにはフォードなりの考えがあった。少なくとも応戦が出来るのはこの場には3人、ヒナとフォードたちだ。そして、フォードとピアーズがもし担架を運ぶとしたら、応戦が出来るのは一人となってしまう、敵に対しての火力が不足しているように思えた。

そのため、苦肉の策だがセナに運ばせることで少しでも敵に対抗できるようにしようと、彼は考えたのであった。

「やるだけやってみます…。」

セナはそう言うと、ピアーズと共に先生の担架を持ち上げる準備をする。

「俺とヒナの2人で、先生を運んでいるピアーズとセナを援護。とにかく突っ走れ。」

フォードはそう言うとビルの自動ドアの前に立つ。センサーが反応してドアが開くと、同時にセナたちは先生の担架を持ち上げた。

そして、ついに彼らの作戦が始まるのであった。

「行け行け!!!」

フォードはやや怒鳴りながら、運ぶ2人を援護し進んでいく。時々、ビルから狙撃手や進む道に敵が居ないことを確認する。

ヒナも同様に一緒に警戒しながら進んでいった。すると彼女は敵が居たことを発見したのか、射撃を加え始めた。

MG42の銃声が空に向かって響くと同時に、ありとあらゆる場所から銃弾が飛び込んできた。凄まじい射撃だ。

「足を止めるな!!撃たれるぞ!!」

ピアーズたちに向かって注意を飛ばしながら、彼はMk. 18の引き金を絞る。放たれた5.56mm弾はしっかりとマグニファイアの照準通りに飛翔し、正確に異形たちの戦力を削り取っていく。

対してヒナはフォードとは全く違った。

フォードはセミオートによる一発、一発の精密な射撃を加えていたが彼女はそれと相反するフルオートによる射撃だった。

ヒナが持つMG42の火力は凄まじく、素早いスピードで敵を薙ぎ倒していった。デストロイヤーの名は伊達ではないのだ。

彼女に狙われてしまった不運な異形たちは3秒以内にはもうそこから消え去ってしまう。ヒナの圧倒的な火力は最もこの戦場において威力を発揮してた。

そして、それに対抗するかのように空からも射撃が加わった。

ノーマッド6-1に取り付けられた二基のM134こと、ミニガンは5発に1発の割合で装填されている赤色の曳光弾が飛び交った。

M134の発射速度は毎分2000発。フォードのMk. 18をフルオートで撃つと毎分700発、約三倍の差。そんな数の暴力を体現するミニガンが二基取り付けられているため、敵をあっという間に消し去っていく。

そんな風に火力で優位に立つことができた彼らはなんとか、無数の異形たちを排除することに成功していた。

「このまま直進せずに右に曲がれ。真っ直ぐ行くとゲヘナとトリニテイの戦いに巻き込まれるぞ。」

レイは上空から地上の様子を眺めることができたため、そのように報告した。

ヘッドセット越しにその通信が流れていたピアーズはレイの言う通り、右に曲がった。そして、後続で援護射撃を加えていたヒナとフォードも曲がる。

そこから数歩進んだ時だった。

乾いた銃声がどこからか聞こえてくると同時に、フォードの目の間を走っていたヒナに当たるのがわかった。

「があっ!?!」

彼女のうめき声が聞こえるも、ひたすらに撃ち込まれていた。

今までの銃声とは違う。異形たちが持つドラグノフの独特な重低音とも、ヒナのMG42の甲高い銃声とは全くもって違う。そして、どこかで聞き馴染みのある銃声だった。

「クソ!!隠れろ!!」

フォードは道端にあった遮蔽物に隠れて、ヒナに呼び掛ける。だが、遅かった。とつくに彼女は敵の射撃の格好の的となっており、動ける様子ではなかった。

「うっ!!!」

ヒナは被弾するたびに苦しい喘ぎ声を漏らす。フォードはこのコングリートジャングルから射撃を加えてくる忌々しい敵たちを見つけておそうとするが、彼の隠れている遮蔽物に銃弾が当たる音がした。それはたった一発ではなく、数発も連続して聞こえた。そういったさなか、フォードはなんとか撃ち返し始める。

マグニファイア越しに何体もの異形たちがいるのはもちろんのこと、ヘリで見たことがあるヒナを執拗なまでに追い回していたあの四人組の生徒たちもいた。しかも、彼女たちは銃をこちらに向けて射撃していた。

射撃を加えながら、少しずつ周囲の状況が明らかになった。ヒナは車道に放置されたままのヴァルクューレの刻印がなされた、装甲車の近くに倒れこんでいた。

動く様子はなく、彼女はうつ伏せの状態であった。そして、恐ろしいことにヘイローにひびか何かの傷のようなものが入ってるのがわかった。

先に進んでいたピアーズたちはどうなったんだ?——と、彼は考え始めるがそんなことはすぐに思考から消し飛んでしまった。敵の攻撃が激しすぎたのだ。彼が隠れている遮蔽物には何発も銃弾が当たる音がしていたが、さらに追い打ちをかけるかのように。

”バリバリバリバリッ!!!”

「っ?」

彼が隠れている遮蔽物から数メートル先の右側にステインガーが命中した。発射した本人はミサキである。

そして、そのような音が発せられたのと同時に凄まじい爆風でフォードの体は浮き上がり、Mk. 18もろとも反対側に倒れた。

「今だ、あの大人を狙え!!!」

遠くからその声が聞こえると、何が起きているのかを察することが出来た。たった今、あの生徒たちが自分のことを殺そうしているのだ。

そしてすぐに、狙われたままこの場にいるのは危険だとフォードは判断し、どこか隠れることができそうな場所へと移動をし始めた。一歩ずつ後退していくのだが彼はMk. 18の弾を出来る限り、銃口炎が輝くほうに向かって撃ちこむ。

しかし効果があまりないのか、何回も足元に銃弾が掠めた。

「ヒナ!!!」

彼は叫んで返事が返ってくるのか確認するが、返ってくることはなかった。

彼女は敵の射撃に圧倒されて、返事をするほどの余裕がないのか。もしくは……死んでしまったのか——と、彼は不意に考えた。

そうやってあともう3メートルほどで近くのビルの扉に到達するところ、遠くから反射光が見えた。何者かの狙撃用のスコープがフォードを狙っているのだ。

彼はまずいと咄嗟に感じて、ビルの支柱に隠れた。

あの反射光を出した張本人はヒヨリであった。ヒヨリが使用しているスナイパーライフルの口径は20mmであり、フォードが着用しているセラミック製の防弾プレートをも簡単に貫通し、胴体を文字通りただの肉塊にさせてしまうことが出来るほどの凶悪な威力を持つ。

そんな彼女の銃から一発の銃弾が放たれると、彼が隠れている支柱に命中した。貫通はしなかったものの、もたれかかっていた背中にドスンと衝撃が伝わった。

そして、狙撃を凌いだ彼は隠れている間に接近してくる敵を排除し

ようと柱から顔を出した瞬間だった。

どこからかの敵がダブルタツプで放った2発の5.56mm弾。
それは彼のFASTヘルメットに命中し――

一人の兵士は突如として、意識が途切れたのであった。

<20??年秋／16：17>

ウトナピシユティム空軍基地・通信指令室

「現在、暴動鎮圧にMPを120人投入しデモ隊を鎮圧中です。対して、デモ隊は1000人以上の規模でありデモを解散させるのにはそれなりに時間がかかると予想されます。」

「予定は？」

「最低でも一時間以上、長ければ5時間もかかる見込みです。」

「そうか……。」

ミリー將軍は部下の隊員からの報告を受け、落胆する声を漏らした。しかし、隊員は続けた。

「ビナー討伐作戦に参加していた部隊のうち、AC―130及びA―10、EP―3は1時間以内に到着します。陸路の部隊はもう少し時間がかかりますが……。」

「構わん。帰還した航空機は再補給させたのちに、すぐに再出撃させる。それとF16は？」

「既に無誘導弾を出来るだけ投下させましたが……やはり、効果はほぼ見られませんでした。現在、二機は帰投している最中です。」

「……了解。」

彼は閉口した。地上に降下したあの勇敢な二名のDEVG RU隊員たちはどうなっているのだろうか。きっと敵の数は多く、地上は蹂躪されているに違いないのだ。

彼にはDEVG RUの隊員を指揮する権限はない。しかし、最高指揮官としてあの二人を降下させた。これはミリーの責任である。

あまりにも無謀だった。今は彼らがどうなっているのかを知る手筈はない。なぜなら――

――「先ほどから通信がジャミングされていているせいで、ノーマッド6―1と通信が不可能です。それに無人機の映像も……。」

「わかっている。きっと敵の仕業だろう。」

そう、敵のジャミングにより彼らの無線及び映像が途絶えた。そのため、地上では一体何が起きているのかが分からない。

ミリーはこれは敵によるものだと確信している。敵は侮れない。

一か月以上も前から計画的に準備を進められたであろう。デマによる基地に対する抗議活動を引き起こすことで、QRFの出勤の妨害。そして、高度なジャミング攻撃といったことは並大抵の組織では出来ない。そして、古聖堂にミサイルを発射するほどの技術力と襲撃能力。

これらを加味するとキヴオトス派遣隊が戦っているのはそれなりに手強い組織であることが予想される。

「……今から航空機を出しても最悪、イーグル救出機墜落クロー作戦の二の舞か。」

彼はそう悩みつつも、外からは怒号やデモ隊の抗議の声がかくかに聞こえていた。

<同日15:56>

バンダーマン 特殊戦開発グループ 大尉

ゲヘナ自治区・FOS, クランプス,
前方作戦拠点

——バンダーマン大尉はDEVGRUアルファチームを指揮する隊長である。彼らアルファチームが派遣されたのは、ブラボーチームに所属するフォードよりやや遅い時期である。

そして、ここゲヘナ自治区にて秘匿され続けたクランプスで彼らは根城として活動していた。

ブラボーチームはCIAが保有する諜報部隊よりも危険な地域での諜報活動を行うことを主任務として、キヴオトスでは活動していた。対して、アルファチームは違った。

アルファチームはブラボーチームのような後方支援的な役割ではなく、特殊作戦を直接実行する部隊として活動していたのだ。

そのためブラボーチームは市街地での活動を考慮して私服をベースとした装備であったが、アルファチームはマルチカム迷彩が施されたコンバットシャツやパンツをベースとして装備している。

そんな彼が率いるアルファチームは急いで、出撃準備を整えていた。

バンダーマンはサプレッサーや、レーザー装置が取り付けられたHK416を手にとると同時に、準備を行っている他の隊員に呼び掛ける。

「暗視装置も持っていくように。今回の作戦はそれなりに長い戦いであることも予想されるぞ。」

そう伝えると、各隊員はさっさと装備を整えたのちにヘルメットマウントにGNVG18を取り付けていく。これから彼らが参加する救出作戦のための準備である。

<数分前>

「バンダーマン大尉!! テレビにアルファチームの奴らがテレビに映っています!!」

一人の隊員がそう叫ぶと、呼ばれた彼は何かの冗談か? —— などと半信半疑に思いながら、テレビが備え付けられている部屋に向かった。

すると部屋には数名もの隊員らがテレビを囲い込んで、何やら騒いでいるようであった。

「何をしているんだ一体? また例のポルノ男優をからかっているのか? 答えなくていいぞ。きつとお前らは次はどのポルノ男優の髭を枕にしたら、深く眠りにつくことが出来るとかじゃ ——」

彼はそうやって愚痴を言いつつ、呆れた顔をしながら尋ねた。すると、部屋に呼びつけた隊員が答えた。

「いえ、違います。本当にアルファチームの奴らが戦っているんです。」

「?」

バンダーマンはそうやって次は怪訝な表情に変えたが、とりあえずテレビの映像を見てみることにした。

映像は報道ヘリか飛行機から中継でもしているのだろうか、遙か上空から地上を映し出しているようだった。そのせいかやや画質が悪いが、何が起きているのか彼は理解することが出来た。

テレビに目をやると、キヴオトス派遣隊が使用しているであろうMH-60が一瞬映った。そして場面は切り替わるとそこには私服を着こなした、バンダーマンたちの装備と瓜二つの見た目をしているベストやヘルメットを着用していた一人の男がいた。

男は遮蔽物越しにどうやら銃を構えて、射撃を加えていたようだが一瞬画面上に黒い筒状の何かが遮蔽物に向かっていているところを目で捉えたとき、男は銃と共に吹き飛んだ。

そして、吹き飛ばされた男はゆっくり後ずさっていた。

「……つまり?」

バンダーマンは目の前で見た映像を確かめるかのように、確認を求

めた。

「だから何度も言っているでしょう？あそこに映っているのはきつとアルファチーム隊長、フォード大尉です。」

「マジか。一体どうなってるんだ？」

彼はやや驚きつつ、テレビに視線を戻した。

視線を戻すと映し出されているのは先ほどのような地上の様子ではなく、旋回飛行するブラックホークの映像だった。ブラックホークに取り付けられているドアガンのM134は地上に向けて、射撃を加えているようだった。

しかし、飛行するブラックホークの近くで散発的だが何回も爆発が発生していた。なんとか初めの数回はその爆発に巻き込まれることはなかったが、そのうち一発の爆発がコックピット付近で発生した。

「ヘリが墜落します!!」

中継しているアナウンサーはそうやって叫ぶと共に、ヘリはどんどん高度が下がっていく。どの高層ビルよりも高い所に位置していたヘリは、時間が経つごとに機体が回転しながら地上に近付いていった。

そして、もう少しで地面に機体がキスしそうなところだった。しかし、奇跡が起きた。

動力を失いつつ回転していたヘリは幸運なことに、地面とキスをすることはなかった。地上から100mほどぐらいの高さにまで機体は接近したが、なんとか機体を上昇させつつビルにぶつからないように飛行。

そして、そのままカメラが納めている映像外へと行ってしまった。バンダーマンが目にした先ほどの映像はスリル満点のアクション映画でもなく、パニック物のドラマでもなかった。

市街地で行われる恐ろしい現代戦の一場面に過ぎなかったのだ。

「とにかく、あいつらが戦っているんです。このまま見ているだけでいいのですか？」

一人の隊員はバンダーマンにそうやって声を掛ける。

「……。」

しかし、彼は無言を貫こうとした。

「仲間が死んでしまいます。それに映像に流れていたのはフォード大尉だけじゃありません。ピアーズ中尉、シャーレの先生と生徒たち。どうにかしないと……。」

「言いたいことはわかるが…… 出撃命令がない以上、無理だ。」

彼らは正規軍であり、命令がないまま部隊を動かすことは禁物である。もし命令がないまま部隊を動かそうというのなら、軍隊はただの統制がない暴力装置に成り下がる。

「じゃあ、どうするっていうのですか？」

「辛抱強く、待て。それだけだ。」

彼がそう伝えたときだった。

「大尉、電話です。」

もう1人の隊員がテレビを囲っている部屋の出入り口に立ち、そう伝えてきた。

「電話？ 誰だ？」

「ポーステイン大佐からです。」

「わかった、今出る。」

彼はそう伝えると、唯一このクランプスにおいて固定電話があるブリーフィングルームに向かった。

ブリーフィングルームに向かうとそこには電話越しにやりとりをしている隊員と、その周辺で話し合う二人。すなわち、三人組が部屋にいた。

そして三人組のうち、電話に対応していない2人はバンダーマンの姿を見るとすぐに。

「聞いていると思いますが、ポーステイン大佐からです。」

「ああ。変わってくれ。」

彼は固定電話に近づくと、対応している隊員と入れ替わった。

「こちらバンダーマン大尉です。」

「バンダーマン大尉、テレビの中継は見たか？」

ポーステイン大佐。バンダーマンの上司いや、DEVGRUの指揮官に当たる彼が尋ねる。

「はい、もうすで見ました。」
彼は素っ気なく答える。

「アルファチームの2人が戦っているそうじゃないか？そこでだ。
私から君たちの部隊に一つの命令を届けにきた。」

「一体なんでしょうか？」

「――敵地に孤立した味方及び現地住民の救出作戦をD E
VGRU司令官として命じる。以上。」

そう伝えるとすぐさま、電話が切られた。

もちろんその命令を受けたバンダーマンはというと。

「全員ここに集めろ。仲間を迎えに行くぞ。」

仲間は誰1人、取り残さない――

たとえ死体であったとしても――

彼らの内に秘められている信念なのである。

<同日16:18>

「う……うう……。」

市街地にてとある大人の苦しい喘ぎ声が微かに聞こえていた。

男は5・56mm弾を二発ヘルメットに受け、倒れ込んだ兵士で
あった。

幸運にもヘルメットは二発の凶弾を弾いた。

しかし、ヘルメット越しに伝わる5・56mm弾の衝撃はダイレク
トに兵士の脳天に響いた。

男は意識を失い、アスファルトで舗装された地面に倒れた。

視界はぼやけてよく見えない。

頭からキーンという音共に、強烈な痛みが襲った。

その場から彼は動くのは不可能であった。

普通はそのまま倒れ込んだ所を、殺されるはずだ。

しかし、男は殺されなかった。

なぜか。

男にとつては誰か分からないが、ある2人にベストを掴まれて体を引きずられた。

地面と足が擦れる。

それと同時に、ベストの重さと男の体重の重量感に対して嘆く声が耳に聞こえた。

「お……重い……です……。」

「いつそのことこれ脱がそうよ。」

「いやいや、フブキもちゃんと引つ張ってくださいよ。」

「私だつてちゃんと引つ張っているけどさあ……こんなに重いのが悪いのだよ。」

背後から聞こえる2人の少女の声。その2人はしっかりと体を引きずつて、ビルの中に男を移動させた。

「何が……？」

男は小声でそう呟くと、2人は反応を見せた。

「あれ？生きているんだ？目の前で倒れたからついきり死——」

「フブキ、それは死にかけてこの大人に言わない方がいいですよ。」

「それもそうだね。」

やや会話が噛み合っていないかのように思えたが、2人はいつもそんな感じなのである。

「君たちは……？」

引きずられた体をゆつくりと自ら起こし、男は装備を確認しながら尋ねた。

「ほ、本官はヴァルキューレ警察学校の中務キリノと言います!!生活安全局所属です!!」

「私は合歓垣フブキだよ。キリノと所属は同じだよ。それで、あ

なたは？」

男は尋ねられたので、名前を明かした。

「キヴオトス派遣隊所属のフォード大尉だ。」

<同日16:20>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

敵地にて孤立中

「なるほど。あの装甲車たちは警備局のもので……君たちはたままパトロールしてたら、巻き込まれたんだな？」

「そうですね。いきなり、あのよく分からない破廉恥な格好をした奴らが現れて……今の状況に。」

なんとか命を助けられたフォードは彼女たちと、ここに至るまでの経緯や自身のことについて少し話し合っていた。

なお、彼女たちがどうやらKYPD所属ということを知った時フォードが過去に所属していたLAPDについて思い出し、親近感が湧いてきたのは余談である。

「お久しぶりですね、フォード大尉。」

キリノとフブキ達ではない誰かの声。そして、彼にとってはどこかで聞いたことがある声でもあった。

声がする方にフォードは視線を移すと。

「……確か、ゲヘナの行政官。アコ……だったよな？」

「ええ、そうです。」

そうアコである。彼女は頭に包帯を巻き付けていたが、何よりも特徴的な胸部分の露出度によって誰であるのかというのが、フォードは判別できたのだった。

「ところで風紀委員長は見ませんでしたか？少し心配で――

「ヒナは……このビルの外に取り残されている。」

「え——」

アコはより一層表情を険しくした。彼女にとって最愛…と
言う
と妙な感覚がするがとにかく、彼女が未だに外に取り残されているの
だ。

「今すぐ、助けに——」

もちろんそれを聞いたアコは動揺しつつも、ヒナを助けに行こうと
ビルの出入り口に役割を果たしている頑丈な扉へと向かおうとした。
扉はまるで防火扉と言っても過言ではない見た目をしており、外の
様子を確かめるための小窓が一つだけ取り付けられていた。

そして、彼女はその扉にまで近付くと外の様子を確かめることもな
く開けようとした。

これにフォードは。

「おい、馬鹿やめろ。外にはクソツタレな敵どもがいるぞ!!!」

先ほど、彼が体験した出来事から故に汚い口調だが注意した。

そして、フォードは続けて。

「…ヒナのヘイローにはひびみみたいな傷が入っていた。今の状況
がわかるか？敵は俺たちのことを殺そうとするんだぞ。」

明らかな殺意を持った攻撃。それがどれだけ危険なのか、彼なりに
伝えた。

「でも……。」

「分かっている。あいつは必ず助ける。仲間を見捨てない——
それが、俺たち兵士の信念だ。安心しろ。」

フォードは彼なりにだが、アコのことを宥めた。

「そういえば悪いけど……フォード大尉さん。被弾しているよ。」
「っ!？」

フブキに突然そう伝えられた彼は驚きつつも、体のどこに被弾した
のかを確認し始める。

両足、腹部、背中、最後に頭。確認したが、見つからなかった。
そして入れ替わるかのようにキリノが。

「左腕の二の腕ですね……。」

「左腕……?」

フォードは視線を左腕に移す。すると確かに二の腕あたりに、被弾したと分かる小さな傷があった。彼は撃たれても戦闘していたからなのか、気付くことはなかった。

アドレナリンが分泌されて、興奮を引き起こし、自分以外のことだけに集中するようになるからだ。

傷口は、縁が盛り上がっており真ん中かが小さなクレーターみたいに窪んでいた。

被弾した原因はミサキのステインガーが遮蔽物の近くに、命中した時であった。地面に命中したステインガーは、弾子を撒き散らしてそのうち彼の左腕に一発だけ命中したのだ。

そして幸運なことに出血はしていなかった。出血しなかったのはおそらく、ステインガーの弾子が熱く、焼灼されたからだ。

フォードは左腕の状況を確かめる。左腕をばたばた動かし、腕を回して血が下から出てこないことを確かめた。すると、彼の懸念は無くなった。貫通銃創ではない。

「本官が包帯を巻いてあげましょうか？」

キリノはそんなことを伝えたので。

「ああ。この包帯があるから使ってくれ。」

と、フォードは言いながらメデイカルポーチに入っていたパウチに包まれた最後の包帯。それを彼女に渡した。

「じゃあ巻きますね。」

彼女はパウチを破り、包帯を出すと被弾した傷口に巻き付けた。かなりキツく締め付けられた感覚がした。

「感謝する。」

包帯を巻き付けられると彼は感謝を示した。

そして、準備が整ったかのようにフォードは。

「……ヒナを救うために、君たちは協力してくれるよな？」

「もちろん!!」

ビルの中で唯一、前向きな大声が響き渡った瞬間だった。

27：エデン条約編：BRIEFING

<20??年秋／16：25>

バンダーマン 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ自治区・外郭の大橋 移動中

何両にも連なった様々な車両がゲヘナ自治区からトリニティ自治区に向かっている。その車両隊の先頭車両にバンダーマンは乗車していた。

車両隊を構成しているのは、そこらの一般車両と何ら変哲もない黒色の塗装がなされたSUVやオートバイクなどであった。

そもそもキヴオトスにおいて、彼らがこういった一般的な車両を使うのにはいくつもの理由があった。

まず一つ目は、軍用車より小型で目立つことがないという点。軍用車は大抵は装甲化されており、小銃弾程度の銃撃なら防ぐことが出来るがその分機動力が失われる。また、軍用車は明らかに一般的な車両の見た目と違うため比較的に敵味方ともに安易に区別が付き、隠密作戦で使うのには適していない。

もう一つの理由としては、学園都市という特徴。文字通り、キヴオトスは市街地が比較的多く大型の軍用車の走行には適していない道路や重量制限により使用できない道路などがある。それならば、一般的な車両を使うことで重量制限等の制約を避けようという発想に至ったわけである。

なお、それにより小銃弾を防ぐ手立てがないため銃撃戦に巻き込ま

れたらかなり危ういのである……が、特殊部隊の彼らはそもそも正面衝突をするような作戦に投入されることは基本ないため結果的には大丈夫なのだ。

「二号車より、全車へ。この大橋を越えたらもうすぐトリニティ自治区だ。気を付けろ。」

バンダーマンは車内に取り付けられている無線機から、隊員に通信を入れる。バンダーマンは助手席に乗車しており、運転席の右隣である助手席から外の景色を眺めていた。

外の景色を眺めていると次第に、視界が捉えている世界が減速しているように見えた。そして、それと同時に口の中から銅の味を感じ始めた。

これらの現象が彼の身に起きたのは、アドレナリンが分泌されている証拠である。

そうして、車両隊は何事もなく大橋を通過したところだった。しばらく道なりに進んでいると次第に放置された車両が増え、車両隊の通行を妨害するようになってきた。

「大尉、これ以上進めません。」

一号車の運転を担当する隊員がそう伝えるとバンダーマンは即座に。

ファイヤーチーム
「F T エコーとデルタは降りろ、徒歩で行くぞ。」

彼はそう伝えるとHK416と共に、車外に出る。古聖堂までの距離はそこまで遠くはない。徒歩で向かったとしたら、およそ40分少しで着くだろう。

「FTゴルフは車両が違反切符を取られないようにここで待機。ドローンからの偵察でFTエコーとデルタを作战通りに援護しろ。」

バンダーマンはそうやって隊員に適宜命令を伝えていくと、FTゴルフに属する隊員はSUVのトランクからRQ-16と呼ばれるドローンを取り出す。

RQ-16は垂直離陸が可能な無人偵察機だ。また人が携行可能な大きさ、重量であることから今回のような作戦以外にも投入されてきた兵器だ。

バックパックに通信機などを背負っている隊員がドローンの離陸準備を終わらせると、ドローンは離陸していく。

そして灰色の空に向かって、ある程度の高度まで上昇したところでドローンは古聖堂がある方へと向かった。

ドローンを操作する隊員は端末越しに地上の様子を確認する。端末から映し出される映像は白と黒のみだ。しかし、これはレトロチックな白黒映像ではない、モダンな赤外線カメラである。

「状況は？」

バンダーマンはドローンを操作する隊員に尋ねた。

「トリニティとゲヘナの部隊が衝突している。酷い状況だ。」

隊員はそう報告しながら、ドローンを使い索敵を行う。

「……大破した車両を確認。きつとフォード大尉たちはこの周辺だ。」

白色に強調表示された車両はセナの緊急車両11号であった。バンダーマンたちが事前に掴んでいた情報の通りであれば、近くの建物にいるはず。

「もつと探せ。」

バンダーマンがそう伝え、ドローンを操作していた隊員がさらに偵察を行おうとしたときだった。

”NO SIGNAL”

操作する端末に突如、そのように表示された。これが意味することはただ一つ。ドローンが撃墜されたか、はたまたは端末との通信を何かの手段によって妨害されたと考えるのが妥当だろう。

「はあ……最悪だ。正確な状況が掴めないじゃないか。」

バンダーマンは愚痴を吐いた。確かに彼の言う通りで、リアルタイムで敵味方の位置を把握できないのは戦略上不利である。戦闘において情報は戦局を左右するのだ。

今回の作戦は悪天候により、ナイトストーカーズは投入されない。基本的にDEVRUが行う作戦にはナイトストーカーズが投入されるが、今回のように投入されないのはあり得ないことである。

しかし、墜落の危険が高いと予想されるなかで投入しない判断を下

すことは流石に致し方ないことである。ただ彼らはそんな状況のなかでも、この救出作戦を遂行せねばならない。

「FTエコー、デルタはこのまま古聖堂の付近まで一気に前進。極力、発砲は控えておけ。酷い雨が降る前につけるぞ。」

バンダーマンはそう命令しながら、古聖堂の方へ部隊を率いていくのだった。

<20??年秋／16：25>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

ビル内・敵地にて孤立中

「少なくとも、あのクソどもより手強い四人組がいる。一人は狙撃手、もう一人はなぜか対空用のステインガーを対人に使うとんでもない奴。あと二人はいわゆる小銃手だ。」

フォードはそのうち、再び戦うことになるであろうアリウススクワッドの編成を分析していた。そして彼は続けて。

「ヒナはこの建物から10メートル先の装甲車の近くに倒れているはずだ。だが……外の様子の通り……。」

キリノたちはこのビルの唯一の出入り口である、かなり堅牢な構造をした両開きの扉に取り付けられている小窓から外を眺める。

すると、一面には大量の異形たちが包囲しているのが目に映るのであった。

「「……。」」

あまりの多さからか、彼女たちは閉口した。

「……ここで敵は俺たちのことを殺すつもりだろう。」

「あまりにも無茶すぎませんか？命を捨てるようなことをしてま
で……。」

キリノはフォードが言っていることに驚いた表情をしながら尋ね
ると、彼は答える。

「俺は……仲間を救うためなら命を懸けることはできる。嘘じや
ない、本当だ。」

「……英雄気取りってやつ？」
フブキは笑いながら呟いた。

「英雄？俺は少なくとも英雄になるために戦うつもりはない。仲間
のために戦ってきた。今までも。」

「……。」
「それで君たちは結局、ヒナを助けることに協力するのか？……迷
っているのなら、俺一人でやるぞ。」

ただの脅し文句と捉えてもおかしくないフォードの言動。それは
彼がこれから実行するであろう出来事に対する決意であり、覚悟だっ
た。

キリノとフブキたちはそんな状況からか、以前の前向きな雰囲気と
は打って変わって、沈黙していた。

そして彼女たちは二人でひそひそと話し合ってから、結論を下し
た。

「…… 私たちも…… 協力します。…… 今は、市民はいません。で
すが、市民を守る警察官であるからこそ仲間を見捨てるなんてこと
は…… 私たちにも出来ません。」

キリノは続けて。

「仲間のために私たちも戦います。」

「…… あたしはお礼にドーナツツを奢ってくれたら嬉しいな。」

フブキは突拍子にそんなことを呟いた。なお、それにフォードは反
応を示し。

「ああ、奢ってやるさ。無事に誰も死ななかつたらな。」

「意外と冗談が好きだったりする？」

「皮肉なことにな。」

フブキとフォードたちはそうやって言葉を交わした。なお彼にとって、彼女とは気が合いそうな感覚がしたのは言うまでもなかった。

それはさておき。

ヒナを助けるためにキリノ、フブキ、フォードによる作戦を計画する必要がある。その計画においてまず、大量の異形どもを排除することが第一の目標となる。

今ここには圧倒的な火力優位を立てることが出来るMG42や、ミニガンはない。ここにはあとマガジンが6本のMk. 18と、同口径のAC556。そして、火力という点では微妙な、38スペシャルの弾薬を使うS&W M360。

これらの銃器を駆使してどうにかせねばならない。

まずキリノの銃を火力という点では、それよりも優れているフォードのサイドアームであるMP17に持ち替えさせるべきかもしれない。

そんなことを考えたフォードはMP17に持ち替えさせる前に、当の使用者であるキリノに対して射撃の腕前について尋ねようとする。

「キリノ、君の射撃の腕前は？」

「・・・え、えーとですね。」

尋ねられたキリノは慌てふためく。そんな様子をすぐ隣で眺めていたフブキが、フォードの質問に答えた。

「人質ヘッドショット。」

「は？もう一度。」

先ほどの言葉はフォードの鼓膜から鼓膜へと通ったような気がした。きつと聞き間違いに違いない。

「訓練中に人質の的にヘッドショットしていたんだよね。」

「え、ええ・・・。」

あまりにも酷すぎる射撃の腕前に彼はドン引きした。なお、当の本人であるキリノはというと。

「この銃が悪いんですから!!私の腕は悪くありません!!!」

彼女は完全に開き直っていた。これが将来、警察官になるであろう生徒なのだろうか。

フォードはキヴオトスに住んでいる訳ではないが、将来的なキヴオトスの治安について考えると頭が痛くなるものであった。

とにかく、射撃の腕が悪い明確な理由は不明であるが反動制御等が出来ない可能性等も考慮すれば、MP17に持ち替えさせても扱うことが出来ない可能性がある。

結局のところ、キリノのM360を持ち替えさせるといふ考えは無しになった。

次はフブキが使用するAC556。同口径であるMk.18と比べればやや時代遅れではあるものの、5.56mm弾という軍用の小口径高速弾を扱えるため火力はキリノよりもあるはずだ。

それに加えて、同口径であるという点からフォードとフブキの間では弾薬の補給が可能となる。つまるところ、まともな火力を提供することが可能であるのはフブキとフォードぐらいだ。

対して敵の数は多い上、あの四人組と対峙する必要がある。あまりにも火力が不足している。

フォードはこういう状況だからこそ、AC—130やA—10守護天使が恋しくなってきた。しかし、そういった近接航空支援や救援を要請する手筈はもうない。

無線機が使えなくなったからだ。いくら周波数を切り替えてもノイズが流れるのみであり、キリノやフブキたちも同じ状況であった。これが意味することはおそらく、通信が妨害されている。

「周りにいる奴らは全て敵…。」

彼は考えつつも言葉に漏らして、唯一外の状況を確認することが出来る扉の方へと近づいた。すると、外の様子を確認した。

この扉より10メートルほど離れたところにヒナが倒れこんでいる。そして、相変わらず大量の異形たちがいつでも襲ってきやがれという具合に、待ち構えていた。

そんな周囲の状況であったが、彼はある物を発見した。

一丁の汎用機関銃。ヴァルキューレの装甲車に取り付けられてい

たM240らしきシリングエットをした銃のことである。銃座は装甲化されており、キヴオトス派遣隊が使用しているOGPKと同じようであった。

残弾はいくらあるのかは分からないが、使えるのであれば火力は十分。この状況を脱することが出来るに違いない。

「キリノ、フブキ来てくれ。」

フォードは彼女たちを呼び出し、これからヒナを救うための作戦について話した。

まずヴァルキューレの装甲車まで近付いて、倒れているヒナを装甲車に乗せる。そして、彼らのうち一人が銃座を使って敵を排除している間に負傷者のアコを乗せる。

全員を乗せたら装甲車を運転して、トリニティ学園かゲヘナ自治区まで逃げるといったものだ。

「なるほど・・・名案ですね。」

「あたしもいい作戦だと思うよ。」

二人は同意した。なおアコはその様子を眺めているようであった。きつと彼女にも、これから何が起こるのかということが伝わったはずだ。

「準備は出来たな？仲間を助けに行くぞ。」

フォードはそう告げると、頑丈な扉に近付き――

――ついに彼らの反撃と仲間の救出が始まろうとしていた。

<20??年秋／16：29>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉
敵地にて孤立中

ビルから勢いよく飛び出し、近くにある支柱に隠れてから最初に発砲したのはフォードであった。彼はMk. 18のセレクターをよく使うセミオートから、滅多に使うことはないフルオートに切り替えた。

そしてマグニファイア越しに覗いては、彼らを包囲しているユステイナ信徒にぶちまけた。たった30連発分の5. 56mm弾は同口径で、装弾数がさらに倍のM249よりも素早く撃ち尽くしてしまう。

ぶちまけられた5. 56mm弾は正確ではなかったものの、少しでも敵の数を削ることが出来た。それでも、まだ数は多い。

やはり火力が不足している——と、彼は痛感させられた。

「援護するよ!!!」

フブキがそうやってリロードを行おうとするフォードに対して伝えると、三点バーストによる射撃が加えられる。

彼女はフォードとは違って三点バーストによる射撃を活かして、正確に一体ずつ倒していく。その間に、フォードがリロードを済ませると次はフブキがリロードを行う。

こうした相互援護を行うことで、地道に敵の数を減らしていく。そして、ある程度数を減らしたところで彼らは次の行動に映ろうとした。

フォードは腰のベルトから一本のM18スモークグレネードを手に取り、安全ピンを抜く。キリノも同様にスモークグレネードを取り出し、いつでも投擲が出来るように準備をする。

そして、準備が出来た二人は勢いよくヒナが倒れこんでいる周辺に向かつて投げつけた。

投擲されたスモークグレネードはしっかりと白色の煙を発生させて、周囲の射線を一時的に遮ることが出来た。

そして、それは絶好の機会であり待ち望んだ瞬間だった。フォードは装甲車のそばで倒れているヒナに駆け寄っていく。

フォードは彼女に近付く間、周辺のビルの屋上や窓に狙撃手が居ないかどうかを警戒しながら進んでいった。そして、うつ伏せになっている彼女の元に遂に辿り着けた。

「ヒナ、大丈夫か!？」

「……足……首が……。」

呼び掛けられたヒナは震えながら小さな声で答えた。ハイローには小さな傷が入っているが、まだ生きているようだ。

そしてうつ伏せから仰向けに姿勢を変えさせ、彼女の言う通りに足首に視線を移した。すると、片足が足首から切断されかけていた。

ヒナは腹部と足の傷から出た血で、ズタズタに裂けた制服が真っ赤になっており、両足が弾痕やステインガーの弾子だらけだった。かなりの出血をしており、アスファルトには黒く滲んだ血が染みついていました。

フォードは彼女のそばでしゃがみ、手当てを始めた。まず足に止血帯を巻くと、彼女の足にある傷がきつく締め付けられたことで、悶えた。

「ううっ!!痛い!!」

あまりの痛さからか、彼女はしゃがんでいるフォードの右足を拳で何回も叩いた。しかし、止血帯を巻かなければ彼女は失血死してしま

う。悶えている彼女にそうしなければならぬのが、フォードにとって辛い瞬間だった。

「大丈夫だから、絶対に死なせない。」

彼はそう言っ、それから腹の傷にガーゼを押し込んだうえで絆創膏でふさいだ。

最後に、彼のポーチに収められている空のマガジンをちぎれかけている足首に副木として添えた。

応急手当を終えると、投擲されたスモークグレネードの煙の発生量が弱まり始めていた。煙が消えてしまう前に今すぐ、安全な場所である装甲車の中に移さなければならぬ。

フォードは装甲車（ハンツァイ）の助手席側のリアドアを開ける。あとは、ヒナを車内に移すだけ。

再び、彼は倒れているヒナに近付き。

「腕を肩に回して。」

持ち上げるだけであるのなら、彼の腕力だけで十分であった。しかし、ヒナが体の力を抜いてしまうと彼の支えから地面に落ちてしまう可能性がある。ゆえに、そう伝えたのだった。

「無理……ここで死ぬ……。」

しかし、ヒナはそう言っは腕を肩に回そうとしなかった。だから、彼は無理をしてでも持ち上げようとした。

そうするとさらに彼女は痛みからか、苦しい声を出した。

「やめて!!」

これから痛がっている彼女に、無理強いさせるのはとても酷いことだろう。しかし、瀕死状態の彼女にとって最も安全な場所はハンヴィーの車内だ。

「絶対に死なせないから……俺のことを信じてくれ。」

さらにフォードは続けて。

「腕を肩に回せ!!」

「うつつ、うつつうつつ!!」

呻き声を上げつつ、痛みに耐えるヒナは彼の肩に腕を回す。これでなんとか運び込むことが出来る。

「クソスモークめ。」

フォードは彼女を持ち上げた後に周囲の状況を見て、悪態を突いた。

スモークはもう発生しきっており、だんだんと量が少なくなっては敵の射線が通るようになるだけとなっていたのだ。

敵の射撃が加えられる前に、急いでフォードは持ち上げたヒナの体を後部座席に運びこんだ。

「痛い痛い痛い!!!」

ハンヴィーの後部座席にヒナを横にさせたが、少し狭かったようだった。フォードは痛がる彼女のために、後部座席の背もたれを倒す。

すると大人一人分を横にしても大丈夫そうな広さを確保できた。流石にこれなら、ヒナが痛がることはないだろう。

フォードはリアドアを閉じては、次は運転席のドアを開けて乗り込む。作戦通りに銃座を撃つ者が居なかったが、敵の数はフブキたちのおかげで減っておりなんとかなりそうだ。

彼はハンヴィーを運転し始めた。

ハンヴィーはかつて彼らの世界において、使われていた装甲車だ。しかし、採用から数年が経ってからIEDや地雷による待ち伏せ攻撃に対する脆弱性が指摘されたことで、現在採用されているLATVなどの待ち伏せ攻撃に耐性がある車両に、更新が進められたという歴史がある。

それゆえに、フォードはハンヴィーがどういったものかを既に知っていたため、キリノたちが居るビルに向かって車両を動かしながらこう呟いた。

「俺はこの車を世界で、一番嫌っているんだ。」

時々ハンヴィーの装甲板に敵の銃弾が当たり、不快な金属音が至るところから聞こえてきたが、銃弾が装甲板を貫通することはなかった。

そして、なんとかハンヴィーをビルの近くにまで到達させたところリアドアが開かれキリノ、フブキ、アコたちの三人が流れ込んできた。

「風紀委員長!!」

と、叫びながら横たわっているヒナの容態を心配するアコ。

「フブキく、もうちよつと詰めてくださいよ。乗り切れませんよ。」

「ええく、皆が後ろの席に乗りすぎだからキリノが助手席にいけばいいじゃんく。」

「ええい!!!」

「ちよつと!? 痛いってば!! 強引に詰めないでよ!!!」

そして、二人で揉み合いになりそうなキリノとフブキたち。とにかく、全員を回収することが出来た。あとはここから、逃げ切れれば良いだけだ。

「フォードさん、本官が運転をしてあげましょうか?」

キリノはすし詰め状態になっている後ろの席から、フォードに向かって伝えた。

「わかった。俺は銃座をやる。」

と彼は答えると、キリノは後ろの窮屈な席から助手席に移動して、フォードと入れ替わる。

「運転経験は?」

立ち上がりながら彼は尋ねた。

「ぜ、ゼロです。」

「・・・ 実は人質の脳天をぶち抜くよりも簡単だぜ。」

と、彼は戦闘中にも関わらず冗談を飛ばし、銃座に移動するとM240のチャージングハンドルを引いた。そして、フォードはM240に取り付けられているベルトを確かめた。

するとどうやら300発ほどあり、しかも車内にはまだ7.62mm弾が何発も入った弾薬箱があるようであった。

弾薬は十分すぎる。これならなんとかかなりそうだ。

フォードはM240のアイアンサイト越しに狙いを定めた。アイアンサイトはホロサイトや、マグニファイアといった見慣れた光学照準器とは打って変わって見にくい。

それでも彼は引き金を絞った。そして、それと同時にハンヴィーは動き始める。

引き金を絞ったフォードには5. 56mm弾を扱うMk. 18のフルオートよりもきつい反動が肩に叩きつけられた。

しかし、それと引き換えに高威力で貫徹力が高い7. 62mm弾はしっかりと火力を発揮し、異形たちに1、2発でも命中すると消え去っていく。

彼は正確に狙いを定め、撃ち抜いていった。

しっかりと整備がされたM240は理論上950発もの銃弾を一分間に発射することが出来る。だが、多くの射手はそのような撃ち方を避ける。それはフォードも同じであった。

絶え間なく撃ち続けると銃身が摩耗して広がってしまい、使い物にならない状態になってしまうからだ。それに銃身が過熱によって溶けてしまうのもあるだけでなく、給弾不良が発生する割合が多くなる。

彼はそれらを避けるため、正確な三点射撃を加え続けたのだ。

そして出来る限り、ハンヴィーが進む方向に合わせて敵たちを排除していく。時折ビルの移り変わっていく情景から、どうやら先ほどまでフォードとピアーズたちが進んでいた道を引き返しているようだった。

もうすぐ大通りに出る…。すなわち、走行が不可能になってしまった緊急車両11号が見えるはずだ。

「キリノ、どこに向かってるんだ？」

フォードはM240の鋭く貫くような連打が響く中、大声で尋ねた。

「遠回りですが、トリニティ総合学園です。一番近くて、安全でしょうから。」

「わかった、頑張ってくれ。」

あの包囲されたビルからそこまで離れてはいないが、敵の数は少なくなっているようであった。

きつと敵の戦力が集中した地点から、抜け出すことは出来ただろう。

しかし、まだあの手強い四人組は見かけていない。彼女たちはどこ

かで待ち伏せをしており、攻撃の機会を伺っているのかもしれない——と、彼は考えた。

そうやって思考を巡らすなか、遂にハンヴィーは大通りに出た。十字路となっているこの大通りの中央には、あの放棄された車両が位置している。ハンヴィーはそこからさらに、左折しようとする。

それに合わせて左側の警戒をしようと、銃塔をちようど旋回させたフォードはある物を目にし、叫んだ。

「擲弾兵!!左に擲弾——」

MGL—140を構えたアリウス生が複数。ハンヴィーと彼女たちとの距離は20メートルほど離れており、ちようどハンヴィーの死角となっていた。

発見した張本人であるフォードはすぐさまM240の引き金を絞り、7・62mm弾をぶちまけた。

少なくともゲリラ攻撃を仕掛けようとしていた彼女たちは10人近くおり、M240から発射された7・62mm弾を受けた彼女たちは少しずつ倒れていく。

しかし、待ち伏せ攻撃を仕掛けようとしていた彼女たちは反撃を喰らっても後退することはなく、必死に40mmグレネード弾を何発も連射してきた。

グレネードランチャーから発せられる軽快な音が響くと、すぐさま地面で爆発が生じる。最初の数発はハンヴィーから狙いを逸れて、反対側の道路やビルに命中した。

そしてそのうち、ハンヴィーが走行する地面の近くにて爆発が生じた。ハンヴィーに取り付けられた装甲板に、破片が命中して嫌な音を何回も立てた上に、ハンヴィーの左側の窓にも蜘蛛の巣状のひびがいくつか入った。

「失せろ!!」

フォードは悪態を突き、発射される前に倒しきれなかったアリウス生に制圧射撃を加える。教範通りの三点射や五点射でもなく、フルオートによる射撃だった。

そうすると高い威力を誇る7・62mm弾の雨によって、最初の連

射から生き延びたアリウス生は倒された。

なんとかあのゲリラ部隊を排除することができた。しかし、それと同時にM240のベルト一本分を使い切ってしまった。

早く装填しなければならぬ。

フォードは姿勢を低くし、車内にある弾薬箱からベルトリンクで繋がった7.62mm弾を一本分取り出した。それから、彼はM240の再装填を行っていく。この間、彼らは反撃を行うことは出来ない。そうやってM240の装填に取り掛かっている時だった。

「今だ!!!撃ちまくれ!!!」

どこからかその声が聞こえたのと同時に、あらゆる方向から銃声が聞こえた。そして、ハンヴィーの至る所から銃弾が当たる音が聞こえてくる。

「ひゃっ、窓が!!」

キリノがそう叫ぶ声が聞こえると同時に、走行していたハンヴィーが歩道の縁石に乗り上げてしまった。

なぜなら待ち伏せていたアリウス生たちはフロントガラスを集中的に狙い、キリノがまともに運転が出来ないようにさせたからだ。

そして、キリノは乗り上げたハンヴィーをどうにかしようとするが状況は変わらなかった。

「ま、まずいです!!動きません!!」

そう縁石に右前輪が乗り上げたことで、ハンヴィーは動けなくなつてしまったのだ。車外に出ようにも、敵に蜂の巣にされるだろう。最悪な状況だ。

「応戦するしかないぞ?」

「もう〜次から次へと...」

フブキはそう言つては防弾製の小窓をスライドさせ、AC556を撃ち込んだ。

しかし、数秒後には次第に小窓付近に銃弾が当たり始めたので、彼女は再びスライドさせた。

「おっかないねえ...」

フブキがそうやって反撃を行った後、やっとフォードはM240の

再装填が終わったのだった。そして、彼はM240を用いて反撃を始める。

フォードがかつて戦闘訓練の際に、頭に植え付けた重要な注意点は複数の方角から攻撃されるときには、一人もしくは一つの集団のみに集中してはいけないことだった。

しやきようさく視野狭窄は何としても避けなければならない。

その忠告がしつこく頭に残っていた彼はまず左手の歩道上にいる敵、そしてビル内、コンビニとあちこちにいる敵の小集団へ掃射した。

何度かは効果があった。8人からなる小銃チームを二個排除できた。一個は歩道上、もう一個はコンビニの周りにいた。

しかし、掃射するものの新たな増援なのかさらに何十人もの敵が至る所から狙ってきた。

「クソ!!ベルト、ベルト!!!」

二本目のベルトに交換する際は、アコが弾薬箱から取り出してくれた。なおアコはどうやら、ヒナの容態を観察していたのだった。

アコによる見立てではヒナは酷く失血したせいで、そこまで長く持たないとのこと。

あと一時間以内に、輸血しなければいけない——と装填が終わる間際に伝えられた。

急いで、あいつらを排除しないと——と、フォードは使命感に駆られた。

二回目の装填が終わると再び、敵の射撃を沈黙させるために掃射する。しかし、敵の数は多い上に銃塔にも沢山の銃弾が襲い掛かってきた。

そうすると、さらにフォードは激しく射撃を加えた。一連射ごとにもっとターゲットを集中的に撃つようにする。

そうするうちに、彼の頭の中にある忠告をすっかり忘れてしまい一つのターゲットに拘るようになった。

ビル内の窓から、絶えず銃口炎が輝いていた。そのため、全体の状況を見失い——

” ガァン!!! ”

一発の銃弾がM240の給弾受けに命中した。もちろん、M240の破片が射手のフォードの顔にいくつか突き刺さっただけではなく、M240は給弾不良を引き起こして使い物にならなくなってしまった。

「クソツク!!!」

彼は今日一番と言っても過言ではない盛大な悪態を突いて、車内に戻る。そして、彼は口を開いた。

「俺たちは釘付けにされている!!!」

絶望的な状況だった。多くの敵に囲まれている上、一時間以内に輸血しないと死んでしまうヒナがいる。

「風紀委員長…… 死なないで…… ください。」

「…… 私は…… 大丈夫…… だからっ……。」

ヒナの顔には苦痛が刻まれていた。顔の肌がどす黒いグリーンがかかった色になり、両眼はすぎまじい痛みによって泳いでいるようだった。

そんな痛ましい様子を見たフォードは、キリノやフブキたちと共に次の行動を捻り出そうと考えるのだった。

<同日／16:47>

バンダーマン 特殊戦開発グループ 大尉

トリニティ自治区・救出作戦中

唯一、トリニティ自治区において救出作戦を担っているのは彼らDEVGRUアルファチームのみだった。

近接航空支援や情報支援も何もない状況下。それどころか、無線機の通信ですら使うことのできない最悪な状況であった。

しかし、彼らは依然と古聖堂に向かって前進し続けていた。

「FTエコーは目標を車両隊まで後送しろ。」

「隊長、了解です。」

FTエコーを指揮するファイヤーチームリーダーがバンダーマンの指示を受け、目標と称される者たちの後送に当たろうとしていた。

その目標とは一体なにか。それは――

「こちらピアーズ中尉。生徒及び先生含む、複数名の負傷者を引き連れてきました。」

そうDEVGRUブラボーチームに所属するピアーズであった。彼はセナたちと共に一時、フォードたちと分断されたが何とか逃げ切ってバンダーマンたちと合流することが出来た。

「ピアーズ中尉、よくここまで頑張った。褒めてやる。」

「……いいえ、褒められるほどのことではありません。まだ、フォード大尉と生徒が……。」

と、ピアーズがバンダーマンに向かって伝えたとき。バンダーマンは、担架に乗せられている負傷した先生の体を見て。

「……にしても、酷くやられたな。それに……。」

彼はそう言いながら次は先生ではない、生徒たちの方へと目をやる。

「……正義実現委員会とシスターフッドの生徒もひどい状態だな。この戦場は地獄か何か?」

あの時ピアーズとセナは先生を担架に乗せて、そのまま走り続けた。道中、ノーマッド6-1が彼らを空から援護してくれたものの、あわや撃墜されかけた。

それ以降、彼らは援護なしに走り抜ける羽目になりかけたが幸運にも、三人組の生徒たちと合流できた。そうツルギ、ハスミ、ヒナタたちであった。

彼女たちはヒナに先生を引き渡した後、なんとかアリウス生の小部隊を叩きのめすことに成功した。そして、彼女たちは敵を引きつけつつも古聖堂から撤退し……。ピアーズたちと出会った。

原作本来なら起こりえることのない出来事だったのだ。

「ピアーズ中尉、我々はこれからフォードが居る所へと向かう。君たちは帰投してくれ。」

「了解です……。ブラボーの皆を集めて再出撃しますから……。」

「わかったよ。中尉の君の分も残しておくさ。」

二人はそうやって冗談を交えると、後送にあたるFTと共に別れたのだった。

「あと、もう少しだ……。」

バンダーマン率いるFTデルタは更に、前進をし続けるのであった。

29：エデン条約編：Last Stand

<20??年秋／16：47>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉
敵地にて孤立中

数多ものアリウス生たちによって包囲され、ハンヴィーに取り残されたフォード達が居た。彼らは完全に釘付けにされてしまい、身動きが取れなくなっていた。

唯一の有効な反撃手段としてハンヴィーに取り付けられたM240は給弾不良を引き起こしてしまったため、もう二度と使えない。

拳銃の果てにはハンヴィー自身も、走行が不能な状態にまで追い込まれていたのだった。そんな状況のなかでも、ヒナの容態を観察しているアコを除いてキリノやフブキと共に次の行動を考えていた。

——「泳ぐのはどう？」

一番最初にそう提案したのはフブキであった。フブキ曰く、この近くに流れている川があるらしくその川はD・U・にあるウトナピシュティム空軍基地の近くにも沿っているらしい。

そこでその川に入り、流れに乗って何十キロメートルも下流すればそのうち着くだろうとのことだった。しかし、この案には重大な欠陥がいくつもあった。

まず川に入ったところで、ヒナは確実に数分以内に失血死する。続いて、泳げない者は溺れてしまうだろう。

その欠陥について、フォードがフブキに伝えると彼女は答えた。

「え？あたしはそもそも泳げないけど。」

その言葉を聞いたキリノと共に、フォードは顔を見合わせた。

そして、即座にこの案は無し———ということ二人は一致したのだった。

「…… 周囲の防御を固めて、死守するのは？」

次にキリノがそう提案した。さらに彼女は続けて。

「ヒナさんは…… 負傷しているから動かすことは出来ません。だから…… 救援が来るまでここで……。」

これは、唯一重傷を負っている彼女の容態を案じての考えであった。

確かに、この安全な場所を今もなお提供しているハンヴィーですら、対戦車火器などによる攻撃で車内にいる彼らは被害を受けるに違いない。

そのことも考慮すると、ここも安全であるとは絶対に言い切ること出来なくなり、ヒナだけでも脱出させたほうが良いかとも思えた。

しかし、失血しすぎた彼女を動かすのは悲惨なことになるとは予想できた。それらのことをフォードは考えると、彼はキリノの案に対して。

「賛成だ。」

と、言い。

「だが、一番の問題———ビル内にいる奴らをどうにかする必要がある。」

フォードたちにとって一番の厄介な問題は何を言わずとも、あのビル内に籠り続けている敵たちだった。

彼はM240を用いて何回も射撃を加えたものの、ビル内にいる敵に対してはいまいちの効果しかなかったと感じさせられた。

そのため、真つ先にそのビル内にいる奴らを叩きのめしてから周囲の防御を固めるべきだ———と、彼は考えた。

「そして、もう一つの問題点がある。ヒナを救うにはどうする？」

ヒナはこの5人の中で、最も酷い状態であった。足首はちぎれかけ、数多もの弾痕や弾子で体は切り刻まれ、失血しすぎた。

失血死するまでのリミットである一時間以内に救援が来るとはフォードは到底、思えなかった。例え、失血死する前に救援が来たところでも病院へ送るのに、さらに数時間を要するはずだ。

助かる見込みはほぼないと言っても、過言ではないだろう。

そんな状況に追い込まれた場合、多くの人は生き延びることを諦めて、慰めの言葉を掛け合っては息を引き取るまで見守る……という痛ましい選択を取るだろう。

そんな選択？何があってもノーだ――

彼の脳裏に、やり遂げるべきことが浮かんだ。それはここを文字通りに、死守すること。そして、ヒナを救うことの二つ。

――じゃあそれを達成するにはどうすればいい？

まずビル内の敵どもを駆逐する必要がある。そして、ハンヴィーから出来る限り敵を遠ざけること。

ハンヴィーから敵を遠ざけることが出来なければ、航空支援が到着したとして万が一近付かれてしまった場合、攻撃を彼らの真上に要請する羽目になる。

それに加えて、ハンヴィーを破壊出来てしまうような武器をもつ敵はヒナの生存にも関わる。そのため、ハンヴィーの周囲の安全の確保をすることは真つ先に重要なことの一つである。

そして、もう一つのヒナを救うこと。フォードが懸念している点は、彼女が失血死してしまうことだ。幸い、放棄された緊急車両11号がハンヴィーから50メートルも満たない距離にある。

もしかしたら、彼女の血液型に合った輸血パックがあるかもしれない。それで輸血することが出来れば……。

それから彼はしばらく、思考を巡らしたのち。

「やるべきことが思いついた。」

と、彼は言い。キリノの案に対して、彼なりに肉付けした計画を伝えた。

そして、伝え終わったところで。

「ビル内の敵は俺がなんとかする。……輸血パックを探すのと、周囲の敵を制圧する役目をやる者は？」

「本官が輸血パックを探します。」

キリノが素早い反応速度で答えたが、フブキはというと。

「え〜？あたしが制圧するの？無理だつてばあ。……」

フブキがその敵を制圧するという役割に対して、自信がないのかそれとも単なる怠惰なのか分からなかったが、消極的な反応を示した。

「……あたしの武器じゃ制圧だなんて。」

この計画を遂行するには人手も火力も何もかも足りない状態であり、そんな中だからこそフブキの力が必要である。だから、武器に対して不安を持っている彼女に対して。

「最高だぜ。俺は前から、ヴァルキューレのライフルで狙撃をやってみたかった。」

そう伝えると、力づくでフブキが持っている第14号ヴァルキューレ制式ライフルことAC556をマガジンごと奪い取った。

もちろん、そのようなフォードの理解不能な行動に対して彼女は口を開く。

「ちよつと!?!何をっ!?!」

「制圧射撃をするならヒナのMG42を使うべきだ。俺はあのビル内にいる奴らを排除するのに、君の武器を使う。」

フブキが扱っている第14号ヴァルキューレ制式ライフルにはバイポッド、光学照準器が装備されている。バイポッドは射撃の安定性、反動制御に適しており遠くの敵を精密に狙うには必須級の装備である。

対してフォードが必要としていたのはMG42のような弾幕による制圧射撃ではなく、精密な射撃であった。

実際、あのビル内の敵をM240で掃射したものの効果は見られなかった。ならば、安定性に長けたバイポッドによる精密な射撃で敵を

打ちのめそうというのが彼の考えであった。

逆に、フォードが必要としている精密射撃ではなく正反対の弾幕による制圧射撃が、フブキに必要だった。

「俺は今から、ビル内の奴らを倒してくる。それが終わったら、キリノは飛び出してから帰ってくるまでの間はフブキが援護するんだ。」

「了解です！」

「わかったよ。」

キリノ、フブキの2人はそのように返事するとフォードは銃座に移動した。

銃座に移動すると、フォードはバイポッドを展開させ装甲化された銃塔の防盾に固定させた。するとすぐさま、遠くから銃口炎が見えたのち近くの装甲板に命中した。

だが彼は怯むことなく、銃口炎が輝いた方へ何発も撃ち込んだ。フブキの銃に取り付けられている光学照準器はそこまで、倍率が高くないため遠くの敵を捉えずらかった。

それでも微かに人影が見えると、彼はそれを狙って撃ちこんだ。そして、何発も撃ち続けて二本目のマガジンを空にしたときだった。

ビル内から銃口炎が見えることもなければ、装甲板に銃弾が当たる音を聞くこともなかった。きつと、さっきの射撃で倒せたのだろう。

そう判断したフォードはMk. 18に持ち替えて。

「奴はやった。今なら行けるぞ。」

銃座からキリノに向かってそう伝えようと、彼女はすぐに緊急車両1号の元へと走り出す。

それと同時に車内からMG42のけたたましい銃声が、聞こえ始めた。

MG42の銃声はまるで電動のこぎりのようなものであり、銃声がある程度軽減することが出来るヘッドセット越しでもよく聞こえるほどだった。

そしてフォードも銃座からMk. 18を構えて、あちこちにいる敵に向かって射撃を加える。M240やMG42のような圧倒的な連射能力、制圧能力を持って射撃を加えることが出来ないが、正確に撃

ち抜いていく。

そうして何分か経った頃、キリノが再びこちらに戻ってこることが出来た。その間もなお、フォードたちは援護射撃をしていた。

キリノが車内に戻ると、彼女は呼吸を激しくしながら口を開いた。

「……輸血パックは一つも……使えない状態でした。ですが……これが。」

彼女の右手には輸血キットがあった。これが意味することは、言葉を交わす必要がなくフォードにも分かった。

異例だし理想的ではないが、兵士から兵士への直接輸血は戦争で幾度となく行われてきたという事実を彼は知っている。ただ実際にやるとなるのは、彼にとつて未体験であった。

「ヒナの血液型は？」

フォードはアコに尋ねた。アコは彼女の情報なら、ほとんどのことを知っているはずだからだ。

「……A型プラス。」

「ここに同じ血液型は？」

車内にいる彼女たちは、首を横に振った。どうやらここに輸血できそうな者は、一人しか居なさそうさだ。

念のため、彼は自らの首にかけているドッグタグを取り出し、血液型を確認した。

”A POS”

「キリノ、代わりに俺の銃を好きに使っていいから援護頼んだぞ。」とフォードは言い残して、キリノにスリング付きのMk. 18とマガジンをいくつか渡した。これからフォードが輸血を行う間は、代わりに誰かが応戦しなければならぬ。

「分かりました！本官が責任を持って撃ちます!!」

渡されたキリノはそう返事すると、彼女は銃座に向かった。そして、射撃を始める。射撃の腕は不安であるが、撃たないよりはまだマシだ。

その間、フォードは輸血キットを組み立て終わると次は自ら血を二単位採血する。一単位はたった140ミリリットルで、二倍の280

ミリリットルをキリノに持ってきてもらった空のバックに入れる。

二単位分の採血が終わると、らせん形の針をヒナの外側頸動脈に刺した。すると、効果靦面であり血は流れていく。これならしばらくは、どうにかなりそうだ。

「…あとは頼んだ。」

そして、彼女に二単位分の採血を終えたフォードはアコに向かってそう伝え、次はキリノを呼んでマガジン、Mk. 18とAC556を交換する。

「フブキ、状況はどう？」

ずっと敵に向かって射撃を加え続けているフブキに向かって、キリノが尋ねた。

「ん〜、まだ敵はたくさんいるけど少しづつ減っているよ。」

なんとかフブキがなんとか掃射してくれているおかげで、敵の数は減りつつあった。これなら、ハンヴィーから敵を遠ざけることが出来ているから、安全を保てるはずだ。

フォードはさらに安全を確実なものとするため、キリノに対して。

「キリノ、今から一緒に外へ出て戦うぞ。死守しないとイケないんだ。」

「本当ですか？」

「ああ、さもなければ味方の爆弾を俺たちの真上に落とす羽目になる。」

「……わかりました。行きましょう!!」

流石に、自爆必死の航空支援を浴びるわけにはいかないというのが彼女に伝わると、フォードと共に車外に出る。

車外に出ると確かに、敵の数は減っているようであった。その証拠に、アリウス生が様々なところに倒れていた。おそらくフブキが、彼女たちをやったのだろう。

ヒナの持つMG42の火力は凄まじいものであるというのが、彼の脳裏に焼き付いたのだった。

フォードは数十メートルほどハンヴィーから、離れた位置である緊急車両11号を遮蔽物として射撃を加える。残りの弾薬はベストに

収められている2本のマガジンと今、Mk. 18に挿している分しかない。

無駄遣いなどは全くできない。もし、Mk. 18の弾薬が尽きればサイドアームとして装備している一丁のMP17と、4本の9mmパラベラム弾が入ったマガジンで戦わなければならない。

もし、その弾薬さえも全て尽きてしまったら——次に何が起こるのかなんてことは、フォードは考えたくなかった。

敵の構成は変わっていた。あの無尽蔵に襲い掛かってくる異形たちではなく、アリウス生であった。

「くそっ!!増援を——」

「ぐはあッ!?なんであんな少人数が!」

「迫撃砲を要請する!!」

フォードはそうやって射撃を加えていたが、遠くからそのような砲撃を要請する声が聞こえて、数秒経過した時だった。

” ヒュ—— ”

かつてどこかで聞いたことのある音が、上空から響いた。そして—

「「「ぎゃあっつ!?!」」」

アリウス生が何十人かで構成されている中規模な集団のもとで、爆発が発生した。

「おい迫撃砲のバカども!!味方に当たっている!!!」

たまたま生き残ったその集団のリーダー格の人物が、遠くからでも聞こえるほどの声で無線に向かって叫んだ。

どうやら、この攻撃は敵の迫撃砲によるものであったようだ。敵の迫撃砲を担当している部隊は、熟練した者たちではないのか友軍への誤爆を招いたのだった。

しかし、それから10秒後に再び爆発が発生した。爆発はハンヴィーやフォードたちとは離れたところで起きた。

それから10秒ずつの間隔で、迫撃砲による間接攻撃に彼らは晒された。一発ずつの砲撃は彼らに当たることはなかったが、だんだんと狙いが正確になっていた。

「クソつたれ。」

フォードは悪態を突きつつも射撃を加えようと、車両の陰から狙いを付けて引き金を絞ったときだった。

マグニファイア越しに捉えているアリウス生どもに、一発の爆発が発生した。

「なんだ!?!」

彼はてつきりMk. 18にM203でも装着されているのか疑い、アンダーバレルを確認した。もちろん、装着されているのはM203ではなくグリップである。

「またもや敵の誤爆か?————と、彼は思うさなか。」

「おい迫撃砲班!?! 応答しろ、どうして黙るんだ!?!」

「きつとやられた!!」

その分かりやすい声が聞こえると、再び味方への誤爆が起きるようになった。

「ちよつと!?! どうなって————」

「なんで味方を狙う————」

断末魔がビル街に響く中、聞こえるはずのない彼のヘッドセットから声が漏れた。

「ブラボー6—1、こちらアルファ6—1。 救援部隊だ、どこにいるか教えてくれ。どうぞ。」

それはフォードの戦友、DEVGRUアルファチームを務めるバンダーマン大尉の声が聞こえたのだった。

<同日／17:06>

バンダーマン 特殊戦開発グループ 大尉

古聖堂の近く・救出作戦中

バンダーマンたちは更に前進をし続け、なんとか孤立している味方たちを救出しようと奔走していた。

そうしているうちに幸運にも彼らは、敵の背後に位置することが出来た。

「あそこにいる奴らは敵だ。排除するぞ。」

バンダーマンはそうやって仲間呼びかけると、彼らは気付かれないうちにゆっくりと近づく。

迫撃砲を担当している彼女たちは、撃つことに必死になっており20メートルほど離れた位置にいる彼らについて、全くもって気にすることはなかった。

それに加えて派手に何回もの発射音が響くため、近付いている足音が気付かれることはなかった。

そうして迫撃砲班である彼女たちの背後を取り、思いつきり彼らの銃のストックで頭に目掛けて勢いよく殴った。

「うっ!?!」

「え? 後ろに――」

アリウス生たちはそんな風に、気絶する直前で各々に言葉を漏らした。

そして、全員倒しきったところで彼女たちが扱っていた迫撃砲について調べた。どうやら、迫撃砲の口径は60ミリのようだった。

また親切なことに敵の無線機がそのまま置かれているほか、何発分かの弾薬、砲撃するのに必要な座標が示された地図が残されていた。

「迫撃砲班、支援を再要請する!! 我々から1ブロック離れて、座標は

――

敵の支援要請が、座標付きで無線機越しに伝えられた。おそらく、その座標はフォード達のことを狙っているのだろう。

それならば、要請している彼女たちのことを狙えば良い。

「敵を叩け!!」

バンダーマンのこの単純な命令はすぐに伝わった。そして、送信された情報を逆手にとって彼女たちのことを狙う準備をする。

地図に書かれてある座標に合わせて、そこからさらに敵に当たるように距離を逆算して仰角を調整する。

「大尉、準備が出来ました。」

「好きなだけ撃て!!」

「了解です。」

そのやり取りがなされると、迫撃砲に一発の砲弾が装填されて、ついに攻撃が始まった。

そして、数秒後。

「ぎゃあっ!?!」

無線機越しに、断末魔が聞こえた。どうやら攻撃は成功したようだ。それからは、彼らは弾薬が無くなるまで何発も再装填して徹底的に撃ち込んでいく。

発射されたのちに聞こえる断末魔や混乱している様子から、かなり効果があるようだった。そうして、しばらく撃ち込んだのち彼のヘッドセットから声が聞こえた。

「アルファ6―1、こちらシエラ2―1。敵の電子妨害は無効化させた、無線機はもう使えるはずだ。終わり。」

シエラ2―1はEP―3のことである。EP―3は電子妨害が可能な能力を備えており、今回は敵による電子妨害を阻止するために現場に送り込まれたのだった。

そして、バンダーマンは無線が使えるとわかるとすぐに周波数を切り替えて、こう送信した。

「ブラボー6―1、こちらアルファ6―1。救援部隊だ、どこにいるか教えてくれ。どうぞ。」

30：エデン条約編：Launch Account
erattack

<20??年秋／17：21>

ウトナピシユタイム空軍基地・通信指令室

「シエラ2ー1が敵の電子妨害を阻止することに成功。」

と、男はミリー將軍に報告する。彼は、空軍の航空管制を担う一隊員であった。

「わかった。」

報告された彼はそう返事をする、次は航空管制の隊員ではなく、違う隊員に向けて。

「QRFはビナー討伐作戦の部隊が到着するまで、待機させろ。」

このときミリーはQRFを今から送り込んだとしても到着までかなりの時間を要する上、QRFの大部分を担っている海兵隊以外にもさらなる戦力が必要だと判断した。

そのため、彼は出撃を見送ったのだった。そして次に、航空管制担当の隊員が。

「現場上空にはまもなく数機のA-10、AC-130が到着します。あと先ほどペンタゴンからB-1爆撃機の出撃が許可されたため、出撃準備中です。」

B-1爆撃機はかつてではあったが、戦略核兵器などを搭載することが出来た超音速戦略爆撃機のことである。

キヴォトスではビナーの脅威を感じた彼らがA-10、AC-130や原潜の追加配備を行った時に、密かに配備されたという経緯が

あつた。

ボーンと呼ばれるB―1爆撃機は、空軍の装備にあるすべての誘導・無誘導爆弾を大量に搭載することが可能であり、ほかに類を見ないほどの多種多様な攻撃が可能であつた。

しかしB―1爆撃機による攻撃以外にも、AC―130やA―10による航空支援が始まるため航空機の調整はAWACSが行う必要がある。

その航空機の調整が失敗すれば、友軍機同士の衝突や地上にいる味方への誤爆を招きかねない重大な事態に繋がる。そういった神経質にしなければならぬ役割を、上空で旋回中のAWACSが担う。

気に掛ける必要がある問題として、一ポンドあたりの爆弾につき90センチ以上、爆発点から友軍の隊員を遠ざけなければならない。

もし、その半径内にいた上でそこに遮蔽物等が無かつた場合には、衝撃波や弾子を喰らってしまう。そうなってしまったら、生き延びるのは無理に等しい。

また、敵であるアリュウスの戦力を出来る限り削ぎ落すには沢山の攻撃をする必要がある。その分、爆発地点やB―1の進入経路を計画しなければならぬ。

航空管制を担う隊員はそれらのことをもちろん理解しており、現場での指示を出すAWACSに向けてやり取りをする。

「B―1爆撃機が30分以内には到着するから、それを視野に入れて調整してくれ。」

「了解です。それとA―10、AC―130の交戦許可を。」

「……交戦を許可する。死の雨を降らせてやれ。」

……

コールサイン、”ウォーハンマー3-1”・AC-130J　ゴーストライダー

戦闘地域上空

「ウォーハンマー3-1、こちらレッドアイ1-1。交戦を許可するただし、こちらから許可がない限り建造物に危害を加えるな。終わり。」

瓦礫と化した古聖堂の高度4000メートル上空には、たった一機の輸送機と思われてもおかしくない見た目をした機体であるAC-130Jが左旋回していた。

そして、AC-130Jは近接航空支援の指揮を担っている真つ最中であるAWACSのコールサイン、”レッドアイ”から、先ほど交戦許可を得られたばかりであった。

AC-130Jは、AC-130シリーズの最新型の機体であり30ミリ機関砲、105ミリ榴弾砲、ヘルファイヤ等の各種誘導ミサイルが搭載されている。

また、それらの武装のほとんどが機体の左側面に集中しているため、AC-130Jは左旋回する必要があるのだった。

「攻撃を許可する。車両が放棄されている十字路の西側にいる敵を殲滅せよ。」

火器管制を担当する隊員は、武装を操ることが可能なTVオペレーターに向けてそう告げた。

「了解、30ミリ発射。」

TVオペレーターはそういうと、武装を30ミリ機関砲に選択して引き金を絞る。高度4000メートルからによる攻撃は、アリウス生たちが気付くはずもない。

そのため、白色に強調表示されている彼女たちの体は30ミリに

よってあつという間に吹き飛ばされる。

「グッドキル、グッドキル。」

火器管制官はその様子をもろろん見ていたため、実際には彼女たちを殺害してはいないがTVオペレーターをそう褒め称えた。そして、次に。

「次は西側の… あー、方位2―3―0だ。車道上にいる重機関銃チームを排除しろ。」

そう命令されたTVオペレーターは、再び30ミリを発射する。高度4000メートルから発射されると、地上に届くまで数秒ほどの時間差が発生する。

もし、走行している車両や歩兵となるならばそれらの進行速度や方向に注意して、予測して発射する必要がある。しかし、重機関銃チームのような後方から射撃を加える部隊はその場に待機することになる。

したがって、それらの予測位置等のことを考慮する必要もないのでしつかりと狙った暁として、アリウス生の体に30ミリが直撃した。

「わーお、直撃だ。やるな。」

「…体が千切れないのはいいな。」

機内に映し出される映像は、白と黒を基調とした赤外線映像である。しかし、決して高解像度の映像ではない。その理由は、TVオペレーターが文字通り爆殺した敵の死体を見ってしまうことで、PTSDを患わせてしまう可能性が十分にあるからだ。

ガンシップやヘリに搭載されている兵器は強力であり、ヘイローを持たない普通の人間であるならば直撃や至近弾を受けてしまえば、五体満足なんてことは決してない。

それらの理由から、低解像度の映像が今になっても採用されている。それゆえに技術が進歩したとしても、決して高解像度の映像が実装されることは、未来永劫無いことなのだ。

「そんなことを言うのはよせ。」

TVオペレーターが心配そうに述べていたので、そのやり取りを聞いていた機長はそう伝えた。

そして。

「新たな熱源を感知。方位1―3―5の地下鉄近くにて、車道上に重戦車が複数で進行中。」

赤外線検出担当士が、新たな敵を発見したため報告する。もちろんその報告を受けた火器管制官は、命令を下した。

「敵重戦車をすべて破壊しろ。105ミリを使え。」

「了解、105ミリ発射。」

TVオペレーターは武装を30ミリ機関砲から、M102こと105ミリ榴弾砲に切り替える。それから、何両にも連なっている重戦車たちの先頭を狙うように予測した上での照準を合わせると、引き金を絞った。

機内が105ミリ榴弾砲の発射と共に、派手に揺れた。しばらくすると、105ミリ榴弾が戦車の天板に命中した。天板に命中した105ミリ榴弾はそのまま貫通し、砲塔内部で爆発。

そのまま砲塔内部の弾薬にも誘爆を引き起こすことが出来たため、戦車の砲塔を吹き飛ばした。吹き飛んだ戦車の車体には、炎の柱が勢いよく伸びているのが空からも捉えることが出来た。

「105ミリ、装填完了!!」

機内の装填手がそう叫ぶと、再び引き金を絞る。TVオペレーターが次に狙ったのは、最後尾の戦車であった。発射された105ミリ榴弾は照準通りに飛翔し、車体の後ろにあるエンジンに命中した。

エンジンに命中すると、そこから火の手が上がった。そして、火の手が上がった戦車は停止せざるを得なくなり重戦車の列は、完全に停止した。

市街地における車道は、重戦車が走行するには狭い。彼らはそれを利用したのであった。完全に停止させることが出来ると、TVオペレーターは武装を30ミリ機関砲に切り替えて徹底的に戦車の天板にしこたま撃ち込んだ。

そうやって撃ち込まれた戦車は、無残にもスクラップと化している。そして、最後の1両に30ミリを撃ち込もうとしたときだった。

火器管制官が赤外線カメラに映っているまだ破壊されていない戦

車から、4人のアリウス生が外に逃げ出したのを捉えた。

「乗員が逃げているぞ。やっちなまえ。」

と、TVオペレーターに向かつて伝えると逃げようとする彼女たちに向けて30ミ리를叩き込む。最初のうちは偏差が掴めなかったため、彼女たちに命中することはなかった。

「逃れると思うなよ。」

TVオペレーターは先ほどまでのように弱々しい姿を見せていたのと一変して、語気を強めた。そして、改めて彼女たちに当たるように引き金を絞る。すると遂に、命中した。

「ドカーン、^m良い腕だ。この仕事は好きか？」

火器管制官はそのようなTVオペレーターの態度が豹変してしまふ様子を終始見ていたため、冗談を交わした。

「ええ、良い仕事だと思いますよ。ただ爆散する死体を見れない状況のみですがね。」

もちろん火器管制官の言葉に、TVオペレーターも冗談を交えて答える。

「ハハッ、君たちは面白いな。」

笑い声の主は機長であった。機長は彼らの会話をヘッドセット越しに聞いていたのだった。そうやって、彼らはしばしの談笑に浸ったところで。

「熱源を感知、方位1―5―5の瓦礫と化した古聖堂より30人以上の敵小隊を発見。」

と、赤外線検出担当士は報告をした。その報告を受けると、談笑していた彼らは真面目に各々の仕事に戻った。

「あー、了解。攻撃を許可する。」

火器管制官は、冷静な口調でTVオペレーターに攻撃を許可。そして、TVオペレーターは武装を105ミリに選択して攻撃を加えた。そうして着弾するまでの数十秒後には赤外線カメラ越しに、狙いの先である彼女たちの足元にて、派手に白い色の爆発が起きたのがわかった。

「うひゃー、一網打尽だ。」

カメラに捉えられているのは、着弾地点から大きく離れたところで横たわる彼女たちの体であった。105ミリ榴弾の爆発は凄まじく、きつと吹き飛ばされたのだろう。

「レットドアイー1より報告、敵の大規模部隊を方位1―5―5の湖近くに確認したそうだ。直ちに攻撃せよ。」

機長がヘッドセット越しに、火器管制官に告げた。

「あーそれは、飛行船の残骸が湖にあるところか？この残骸は敵のものか？」

「待ってくれ、確認する。」

火器管制官が、湖に墜落している正体不明の飛行船を発見した。飛行船は真つ二つに割れており、それなりに大きい破片などが湖に漂流していた。

それはゲヘナ学園に所属するマコトたちのものであるが、彼らはそのことを知らなかった。そしてちょうど、湖に墜落した彼女たちを確実に殺害するために、アリュス生たちが包囲をしている最中であった。

そして、墜落した飛行船から見える彼女たちに攻撃をしても良い対象なのか、彼らには分からなかった。

下手に攻撃をしようとする戦争犯罪となってしまう、誰もが望んでもない展開である軍法会議行きとなってしまう。

そして、20秒ほど沈黙が流れたところで機長から。

「飛行船の残骸には、生存者と思われるゲヘナ学園の生徒が何人かいる模様。彼女たちには危害を加えるな。」

「了解。」

そのように火器管制官が返事をしたところで、次にTVオペレーターに向けて命令を下す。

「装甲車を破壊する、ヘルファイアだ。発射準備。」

「了解、ヘルファイア発射準備。」

AC―130Jに搭載されているのはAGM―114Lこと、ロングボウ・ヘルファイアである。

ロングボウ・ヘルファイアは、いわゆるホーミング機能である、

撃 Fire and Forget, 能力を備えている。

この機能はTOWのように目標に命中するまで照準を狙い続ける必要がなく、一度ロックオンしてしまえばミサイルが自動的に追尾を続けるものだ。

火器管制官はまず、一台の装甲車をロックオンした。ロックオンをし終わると、TVオペレーターが。

「ヘルファイア発射。」

と告げて、ヘルファイアを発射する。そして次に、火器管制官が新たなターゲットにロックオンをしている間に武装を切り替えて、30ミリや105ミリによる砲弾の雨を敵に降らせた。

「戦車ロックオン。」

「発射。」

火器管制官の声が聞こえると、再びヘルファイアを発射する。そして、また火器管制官がロックオンしている間に——と、何度も繰り返していく。

そうやって何回もAC—130Jによる激しい攻撃を加えているうちに、敵の数はみるみるうちに減っていく。しかし、それでもまだ数が多い。

「方位3—0—8より、2機のA—10が空爆を行うようだ。攻撃を中止せよ。」

機長が、射撃の指揮を行っている火器管制官に向けてそう伝える。

「了解した。射撃中止、射撃中止。」

報告を受けた火器管制官は、TVオペレーターに命令する。それから、10秒ほど待機したところだった。

突然、赤外線映像越しに捉えている密集している歩兵に向かって、縦に長く伸びた小さな白い爆発炎が連なって発生。

それが2回ほど続いたところで、2機のA—10が大量に横たわっている生徒の上空を通過していく。

「もう一度、来るぞ。」

機長がそう伝えると、彼らは再び待機する。次は、戦車や装甲車などの各種敵車両が密集しているところに向かって、同じように爆発炎

が炸裂した。

これによつて、敵装甲車の部隊はほとんど壊滅してしまふ。ところが、A―10によるGAU―8の30ミリ徹甲弾、劣化ウラン弾を喰らつてもまだ健全としている戦車たちがいた。

だが、そんな戦車たちをA―10は逃すわけもなく、複数のAGM―65, マーベリック, を放つた。

マーベリックは敵戦車部隊に達すると、激しい爆発を引き起こして、一瞬にして戦車たちをスクラップと化させた。

その圧倒的な火力によつて、殲滅させてしまふA―10による迫力のある攻撃を、見てしまった彼らの興奮は最高潮に達させた。

「「うおおおおお、最高だ!!!」」

と、機長を含め地上の様子を見ていたものは盛り上がる。だが、たった一人を除いては。

「新たな熱源を感知。方位1―6―8より、複数の装甲車……？いや、走行中の一般車を確認した。」

赤外線検出担当士はもちろん、A―10の凄まじい攻撃を見たが何とか興奮を収めて、自制していた。

「あー、方位1―6―8のどこにいる？」

「車両はガスステーションに沿っていて、たった今過ぎたところだ。」

「了解、捉えた。」

「敵なのか確認するから、待ってくれ。」

火器管制官とやり取りを終えたところで、機長が上空にて待機しているAWACSのレッドアイ1―1と交信する。そして、しばらく待つと。

「味方、ゲヘナ学園の救急医学部の車両だそうだ。」

「彼女たちはどこへ？」

「正確には分からないが……おそらく古聖堂周辺にいるトリニティ、ゲヘナの学生を救助しに来たんだろう。」

機長は推測であるが、そう答えた。

「じゃあ、地上の救助を必要としている部隊には行けるのか？」

「ネガティブだ。彼らに到達する経路にはバリケードが築かれているから、車両は通れない。外郭の大橋から、歩いて行かないと無理だ。」

火器管制官の質問に、次は赤外線検出担当士が答える。地上の救助を必要としている部隊は、フォードたちのことである。

彼らは完全に孤立しており、なんとか近接航空支援によって助かったがそれは一時的である。今はなんとか悪天候となっておらず、航空支援を十分に受けられる状態。

もし、悪天候となってしまうと上空に待機している航空機はそこから退避をしなければ、墜落してしまう危険性がある。そうなるまえに、彼らを助け出す必要があるのだ。

「近くにいる地上部隊は？」

火器管制官が尋ねると、機長が答える。

「DEVG RUアルファチームだ。彼らなら、きっと……。」

AC-130Jは誰にも気付かれることもなく、上空で旋回を続けている。

<同日／17:48>

「ベアトリーチェ、貴下の用意した重戦車隊とチームIが壊滅したらしい。どうするっ？」

——なんですって？あの小癩なシャーレの先生は、負傷させたとスクワッドから聞いた。じゃあ一体、誰が？

「それだけではない。他のチームもかなりの損害を被ったそうだし、きつと奴らで間違いない。」

——奴ら、ですか。あの異世界の軍隊が？

煩わしいものだ。私の計画を邪魔されるわけにはいかない。今回のために、わざわざ黒服の外部の技術を利用して強力な重戦車をも用意した。トリニティやゲヘナが使っている戦車よりも、数十倍強力な。

——計画はこのまま進めますよ、マエストロ。

「ああ。あと、ゴルコンダから聞いたが貴下は、どうやら黒服の技術から、ヘイローを破壊する銃弾なるものを手に入れたらしいな。」

ヘイローを破壊する銃弾は、生憎にもヘイローを破壊するにはやや威力が不足している上にコストが高すぎた。だから、大量生産させて装備させることはできなかった。

もし、あの弾薬さえ今ここにあれば私の計画は一つも、支障をきたすことは無かつただろうに……。

いや、あの弾薬があつても奴らがいることは忘れてはいけない。

奴らの力はキヴォトスを壊滅させようと思えば、簡単に実行できるほどのレベルを持っている。そして先生と同じく、予測不可能な変数もしくはそれ以上の何かがある。

同じ大人、同じ外部の存在。それにもかかわらず、私たちゲマトリアとは根本的に違っている。

嫌いだ。消えてしまえばいいのに。

「それとだ。電子妨害さえも無効化されて、拳句の果てには報復として同じく電子妨害を食らうとは予想外だ。」

——あの黒服の技術は頼りになりませんね。マエストロ、
貴方の技術には感謝しますよ。

「どうも。」

まだ戦略兵器がある。それに、太古の威厳が確保されている。きつ
と、それなら——

「確実に、私の計画を達成することが出来るでしょう。」

31：エデン条約編： B | 1（ボーン）

<20??年秋／17：48>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉
戦闘中

AC-130やA-10が行った近接航空支援によって、敵の部隊のほとんどが潰走しつつあった。そんなさなか、戦友であるバンダーマンから伝えられたAWACSが上空にいるという情報を受けて、フォードは周囲の状況を正確に把握するためにAWACSと通信する。

「レッドアイ1-1、こちらブラボー6-1。周囲の状況を教えてください。どうぞ。」

「ブラボー6-1、こちらレッドアイ1-1。そちらの半径200メートル以内に敵はもう殆どいない、負傷者が居ると聞いたが君たちで運べるか？どうぞ。」

「空爆さえあれば。」

フォードがそう答えた。

「了解、負傷者を運ぶ準備をしてくれ。ドカンという音が聞こえたら、東にあるコンビニを目指して左折しろ。そのあと、しばらく真つすぐ行けばアルファチームと合流が出来る。」

「わかった、準備する。」

フォードとAWACSの通信はそうして終了すると、次はヒナを運ぶ準備をすることにした。なんとかヒナの体を乗せて運べるように

するために、緊急車両11号の車内から一つの折り畳み式を見つけ出した。

次に、その担架を広げてはヒナの体を乗せようとする。ハンヴィーのリアドアを開き、横たわっている体を輸血中のパックと共に外へ移動させた。その際、ヒナがフォードに尋ねた。

「… ねえ、どうしてそこまで… 私のことを？」

擦れた声だった。そして、彼を見つめる目はやや虚ろであるから彼女の状態はそこまで良いとは、言い難いものだった。

「仕事に過ぎない。」

「… 前もそう言ってた。本当は？」

尋ねられた彼は、少し戸惑った上で答えた。

「… 兵士としての信念。」

フォードはDEVGRUに所属する世間一般から見れば、やや特殊な兵士だ。しかし、そのような部隊の所属の違いによって仲間を救うかの有無は一切関係ない。

高校を卒業してすぐに入隊した青年や、金の為に軍に入隊した者だろうが、彼ら兵士は必ず信条として胸に刻むことになる。

軍に入隊して間もなく、彼ら兵士はまず兄弟愛というものについて学ぶ。ここでいう兄弟愛は家族関係についてのことではなく、仲間のことを指す。

苦楽を共にした兵士たちはそこで、仲間との間に信頼や友情が育まれることになる。いわゆる絆だ。

そして、その絆はさらに訓練である言葉を信条として叩き込まれることで強まる。

『None Left behind』

これは彼ら兵士が必ず学ぶ言葉であり、彼らの信条だ。

仲間の大切さというのを学んだ彼らが実際の戦場に送り込まれた時に、この言葉は真価を発揮することとなる。

仲間が負傷しているなら、もちろん助ける。もし、仲間が既に死体

であるならばちゃんと回収する。

そう例えば、今回のような戦いでもだ。

ヒナのようなキヴォトスにいる生徒たちはきつと、これらのような信条を知る機会がないだろうし、知る必要もないことだろう。

しかし、それらの信念から、フォードのような一人の兵士が彼女を救おうとした動機であるというのは確固たる事実だ。

——「キリノ、フブキ、アコ!!話を聞いてくれ!!!」

フォードは彼女たちに向かって、大声で叫んだ。

「これから、空爆が始まる。大きな爆発音が聞こえたら、担架を運ぶ。それで各々の役目は……。」

彼はそう言いながら、彼女たちに役割を与えていくのだった——

.....

<同時刻>

ウトナピシユティム空軍基地・通信指令室

通信指令室内では空軍機の航空管制を担う隊員がAWACSによる情報を頼りにB—1爆撃機に直接、攻撃指示を出している最中であった。

本格的な嵐が始まる前に、B—1による攻撃が行うことが出来なければ、もう二度と地上にいる彼らを救うことは出来ない。

なぜなら、嵐によつて上空から地表は見えなくなり、上空にいる航空機は墜落の危険性が増すだけではなく、地上の観測員が伝える座標をもとにGPS誘導のスマート爆弾による攻撃しか出来なくなってしまう。

そのような困難な状況を避けるために、投下するのに必要な情報を

素早く伝えていく。

「南の大通りにスマート爆弾を落とす座標は……。」

「それが終わったら、次は古聖堂の北側の道路を……。」

「カイザーインダストリーの駐車場沿いを……。」

隊員は一気に、多くの要請を行う。確かに、敵はほとんど潰走しているのだがそれでも、残存している敵がいるとAWACSから伝えられたための要請であった。

そして、隊員が一通りの要請を終えたところでB-1に搭乗しているパイロットから返答が来た。

「了解。一分後にそれらの座標に対して一斉に空爆を行う。それまで待機してくれ。」

爆撃が始まるまで、あと一分。

カップラーメンや袋麺を茹でる時間とは一般的に短い時間であるが、ここは厨房でもなければ家庭でもなく戦場であるということ忘れてはいけない。

一般的に戦場では時間の素早さが求められており、特に屋内での近接戦闘となればコンマ単位でのスピードが求められるほどだ。

そして、そのような素早さは死にも直結する。たった一分。

これが戦場で意味することは、非常に長いということだ。

爆撃はまだなのか？———と思いつつ待っていたところだった。広域用の無線機から、B-1爆撃機に搭乗しているパイロットの声が漏れ出た。

———「爆撃まであと10秒。」

その報告が耳に入ると、彼は素早く地上にいる彼らと繋がっている無線機でこう伝えた。

「空爆が10秒後に始まるぞ。」

そう伝えてからさらに10秒待ったとき、再びパイロットからの声が耳に入る。

「爆装投下。」

そう告げられたのと同時に、B-1爆撃機は指示された座標通りに6発のスマート爆弾をはじめに投下したのだった。

「空爆が10秒後に始まるぞ。」

ヘッドセットから聞き覚えの無い声が漏れ出る。フォードたちは既にハンヴィーの車外に出ており、爆発音が聞こえればすぐさま持ち上げられるように担架の前の持ち手を握っていた。

担架を持ち運ぶのはフォードとキリノだった。そして、アコはヒナに輸血をしている血液パックを手にもって、フブキはMG42でもし近くに敵がいれば反撃を行う役目を担っていた。

数分前にAWACSから伝えられた場所へ、今から向かう。距離は大体300メートル以上。今から二時間ほど前に、脱出しようと向かっていた道とほぼ同じだ。

そして、遂に盛大な爆発音を聞いた。

爆発音が聞こえた方向へ、視線を向けると空に向かって街路樹であったはずの数多の木や道路の破片が舞っているのが見えた。そしてどす黒い煙は、高層ビルよりも高く伸びていた。

「いくぞ!!」

フォードはそう言うと、キリノと共にふたりで担架を持ち上げた。そして、バンダーマンたちがいる場所に向かって走っていく。

その間も、盛大な爆発音が耳を塞ぎたくなるほど響き渡っていた。

「うっわ、よくこんな兵器を持っているものだねえ。」

フブキは、そうやってB-1爆撃機が爆装を投下したことによる爆発音に、驚きの声を漏らした。彼女にとって、この迫力のある空爆は人生で初めてのことであったからだ。

” ガラガラガラ——ズズーン

ガラガラガラ——ズズーン ”

” ガラガラガラ——ズズーン

ガラガラガラ——ズズーン ”

” ガラガラガラ——ズズーン

ガラガラガラ——ズズーン ”

一回の爆撃につき、6発分の爆装投下から爆発するまで耳に聞こえる連続的な攻撃は、彼女たちが経験したこともないようなものであり、そして恐ろしい瞬間であった。

「わっ、物凄い振動ですね…。」

殆どのことは風紀委員長を除いて、動じることはない冷静なアコが珍しく驚いてもいる瞬間でもあった。

対して、ヒナのことを担架で運び込んでいるキリノとフォードはそのようなことを気に掛ける必要もないぐらい、肉体の酷使をしていた。

ふたりは渾身の力を振り絞りながら、疾走していく。まずは、東にあるコンビニを指したところで左折。そこからは二時間ほど前に、見たことがある光景であった。

ヒナが集中的に銃撃を受けて、黒く滲んだアスファルト。

ステインガーマサイルで吹き飛ばされた遮蔽物——

それらを通り過ぎて、しばらく走り続けたところだった。

遠くに迫撃砲と共に、何人も待機しているマルチカム迷彩を施した軍人たちが見えた。そう、バンダーマンたちであった。

「こっちだ!!」

大きな叫ぶバンダーマンの声が、遠くから聞こえた。

あと50メートル。

あと30メートル。

あと10メートル。

担架を抱えながら足を動かしていた彼らは、やっとバンダーマン達に合流することが出来た。

「担架を下ろしてくれ。」

一人のバンダーマンのチームに属する衛生兵が二人にそう告げると、二人は地面にへたり込んだ。

キリノはすぐ後ろの持ち手を離れたが、フォードはすぐに前の持ち手から両手を離れようとはしなかった。

「フォード大尉、やめてください。」

「おい、やめろ。」

衛生兵とバンダーマンがそう呼び掛けるも、中々手を離すことはなかった。そのためバンダーマンと衛生兵の二人係で、力づく引き離すしかなかった。

無理やり引き離れたところで、フォードは息を切らし続けながら呟いた。

「二時間半……。彼女は……。一時間半も失血し続けている……。」
そして、地面を見つめながら続けて。

「二単位分輸血をしているが……。早くしないと……。死んでしまう。」

「…………… 大尉、よく頑張ったな。ほら立て、急いで帰還するぞ。」

バンダーマンはフォードに右手を差し伸べた。すると、彼はそれに気づき、右手を力強く握りしめて立ち上がった。

彼は立ち上がると、ヒナの方へと目を向けた。

彼女の体は、他の隊員に担架を持ち上げてもらい移動しつつも、衛生兵による治療を受けていた。

それでも未だに、B-1爆撃機による激しい攻撃は止むことは無かった。バンダーマンは爆発の振動で左右に揺れ動く、ビルを見かねてからか無線機を通じて。

「レッドアイー1、こちらアルファ6-1。俺は建築士じゃないが、ここにあるビル群が衝撃にどれくらい耐えられるか分からない。どうぞ。」

「アルファ6―1、こちらレッドアイ1―1。あー、つまるところ爆撃をやめてほしいのか？どうぞ。」

バンダーマンはその応答に対して、思案した後に応えた。

「いや、続けてくれ。ビルが倒壊して生き埋めになっても、自力で脱出するつもりだから大丈夫だ。」

「分かった。引き続き負傷者の後送を頑張ってくれ、終わり。」

そうやって無線機を通じてバンダーマンのジョークが混じった報告を終えたところで、彼は通信を終了させた。

そして。

「さあ、帰還しよう。」

バンダーマンがそう呼び掛けると、彼らは部隊に護送されながらやっと帰還するのであった。

<同日18:07>

コールサイン、ウオーハンマー3―1、・AC―130J ゴーストライダー

戦闘地域外上空

「ウオーハンマー3―1、こちらレッドアイ1―1。B―1爆撃機による空爆は終了したから、もう戦域に戻っても大丈夫だ。どうぞ。」
「レッドアイ1―1、こちらウオーハンマー3―1。了解した、戦域に戻る。終わり。」

機長はAWACSに対して、そう返答すると機体は航路を変更して古聖堂がある方へと向けて飛行していく。

そして、次に機内に対して報告する。

「総員、戦域に戻るぞ。」

そもそも彼らが戦闘地域上空から、離脱したのには理由があった。それはB―1がA―10やAC―130Jが位置する高度よりもさらに高い高度からによる爆撃を行うため、誤爆をしてしまう恐れがあった。

それだけではなく、爆弾による衝撃波や爆炎によって上空にいる彼らに対しても危害を加える可能性もあった。それらの理由から、彼らは戦闘地域上空から離脱したのであった。

そうして、再び地上にいるアリウス分校の生徒たちを殲滅するため、彼らは向かったところだった。

不意に、地上の様子を監視している赤外線検出担当士が報告する。

「方位1―5―5にある古聖堂にて、複数の熱源を感知。どうやら地下に通じる入り口から、敵が出てきているようだ。」

地下に通じる入り口……それはカタコンベのことだった。

「攻撃してもいいか？」

「ネガティブだ。またそこからゴキブリのように、敵がやってくるだけだ。キリがない。」

彼女たちを上空から攻撃したいという気持ちを抑えられない火器管制官の言葉は、機長によって却下された。

機長がここでそういった判断を下したのには、確かに彼に伝えた言葉通りでもあった。

敵の数は、かなり多いということとは今回の戦闘を通じて分かったこと。

そのためこの入り口にいる彼女たちを攻撃するというよりは、巣穴のような役割を果たしているカタコンベ諸共、木っ端微塵にする必要があるというのが機長の持論だった。

それにはAC―130Jが搭載している105ミリ榴弾や、ヘルファイアでは全くもって火力が不足している。恐らく、A―10ですらカタコンベの入り口を封鎖するということができないだろう。

地中貫通爆弾や、MOABそして巡航ミサイルといった途轍もない

威力を誇る攻撃でなければ厳しい――。

彼はそれらの考えに至ると、AWACSに報告を行う。

「レッドアイ1-1、こちらウォーハンマー3-1。敵の巣穴を発見、そいつを破壊しないと敵の戦力を抑えられなさそうだ。巡航ミサイルか、バンカーバスターでもいいから寄越してくれ。どうぞ。」

切実な火力支援を求めると機長の声が、無線で伝えられる。それから、数十秒ほど待機したところで遂に返答が来た。

「ウォーハンマー3-1、こちらレッドアイ1-1。ちょうどB-1爆撃機が、巡航ミサイルを搭載しているようだ。それで破壊しようだが、それには座標が必要だ。教えてくれ、どうぞ。」

そう伝えられた機長は、すぐさま座標を伝える。目標は、古聖堂地下ことカタコンベの入り口。

B-1爆撃機はGPS誘導が不可能いくつものスマート爆弾を搭載しているだけではなく、掩蔽壕破壊用の弾頭えんぺいこうを搭載した仕様であるAGM-154Cを運良く搭載していた。

AGM-154Cまたの名をJSOW-Cと呼ばれているこの巡航ミサイルは、装甲やコンクリート、そして土などを貫通することが可能だ。

そのため、これまでの戦争で彼らは敵の洞窟や地下施設を破壊するために使われてきた。

これを使えば、敵の増援や撤退する方法は断たれる。残骸と化している古聖堂跡地に対しては、死体蹴りと言われてもおかしくはない仕打ちであるが致し方のないことだ。

「発射の準備が出来たら、石器時代に戻してやろう。」

「了解した。期待している、終わり。」

AWACSとそうやって物騒な言葉を交えて、通信を終了させたところだった。間も無くして、2度目の報告として赤外線検出担当士が行う。

「方位1-5-5の湖から、救助を終えたゲヘナ学園の車両の列が離脱中。」

赤外線を放つ物体に対して白色の強調表示を行うモニター越しに、

彼はきちんと移動する車両たちを捉えていた。

車両の列は連なつては、無残にも飛行船の大きな残骸が水面に向かって突き刺さっている湖を通り、彼女たちがやって来たルートを通っていた。

しかし、それなりに大きな商業施設が聳え立つT字路にて、彼女たちの先頭の車両が何かの爆発に巻き込まれたことで突如として列は停止した。

きっと、彼女たちはゲリラ攻撃に遭遇したのだろう。

「方位1―5―9のT字路にて、車列が停止。攻撃を受けている模様。」

「射撃許可を。」

火器管制官はその言葉を受けて否や、機長に対し承諾を求めた。

なお機長は火器管制官の言葉が意味することが、ただの許可願ではないことは気付いていた。きっと、彼女たちを助けるつもりなのだろう。

「ちよつと待つてくれ。」

機長は、そう伝えて一人の空軍所属のパイロットとして考えた。彼女たちを、見捨てるべきか助けるべきか。

しばらく熟考すると、ついに答えが出た。

そして、機長はその答えを伝える。

「…… 交戦を許可する。本当の雨が降る前に、死の雨を降らせようじゃないか。」

「射撃を許可する。」

「了解。30ミリ、地獄に墮ちろファイアー！」

上空を旋回している死の天使から、圧倒的な火力制圧が再び始まるうとしていた。

32：エデン条約編：Love from Above
e

<20??年秋／18：15>

フォード 特殊戦開発グループ 大尉

帰路の途中

負傷したヒナヤキリノ、フブキを含んだフォードたちはDEVGR
Uアルファチームに所属するバンダーマンらの部隊によって救出さ
れ、帰還している最中であつた。

「おっと……動かないで。あと、もう数ミリで外頸動脈に破片が突
き刺さつているところだつたよ。」

衛生兵は車内の後部座席にフォードと共に座り、彼の首から僅かに
出血している箇所止血を施す。彼らは、ゲヘナ自治区にある秘匿さ
れた活動拠点であるF.O.S.、クランプス、へと、帰還しようとしてい
るのだ。

「今の気分はどうだ?」

助手席に座っているバンダーマンは、フォードに尋ねる。

「クソ喰らえだ。」

「相変わらず元気なようだ。」

フォードは汚い返事であつたが、彼の戦友であるバンダーマンに
とっては安心するものでもあつた。そして、彼は続けて本題に入る。

「明日の早朝……5時に再出撃の命令が下された。お前はもちろん来るよな?」

バンダーマン率いるアルファチームはフォードと生徒たちの救出を遂行した次に、そのようにポーター大佐からそう命令が課されたのであった。

なぜ、明日朝5時に再出撃するかのよう命令されたのか。それは、QRFとビナー討伐部隊の混成部隊がああ戰場に到着する前に、重大な脅威があればその排除を担うこととなったからだ。

なおこの命令が課されたのはアルファチームだけであり、ブラボーチームに至っては部隊指揮官であるフォードやピアーズがちょうど居なかったため、まだ下されてすらいなかったのだ。そして、フォードは部隊指揮官かつ一人の兵士として答えた。

「もちろんだ。」

と、彼は続けて。

「二か月前にあの徽章を見たからな、これはつまり戦うしかないだろう?」

「……だろうな。あの事件からもう10か月近くか。」

彼らがここへ派遣されたのはとある理由であった。

——国家に多大な損害を与えた9・11以来のロサンゼルスでのテロ攻撃。これは彼らの国民にとつても記憶に新しい出来事であった。

あの日、突如として現れた忌々しい侵略者たちは天使の輪が頭上に浮かんでおり、所属を表す徽章はまさにアリウス分校だとわかる骸骨を主体としたものを、ボディーアーマーに身に付けていた。

誰もあの徽章を忘れるわけがなかった。そして、彼女たちは米国から怒りを買った。こうしてキヴォトスに首謀者を捕縛するために、DEVRUが派遣され更にはアメリカ軍そのものが派遣されることとなったのだ。

未だにアリウス分校の首謀者を、彼らは捉えることすら出来ていない。しかし、再びこうして直接的に対峙出来るのは絶好の機会であるのには違いはなかった。

——「この戦争はいつ終わるのだろうか。」
バンダーマンは未だに捉えることが出来ていない大虐殺の首謀者
に対し、呆れと怒りを表すのだった。

<同日／18：43>

戦闘地域上空

「敵の全滅を確認した。地上にはこれ以上、動く熱源は無い。」

赤外線検出担当士は、白色に強調表示される観測用のカメラ越しに
報告する。彼らは、先ほどゲヘナ学園の救急医学部の車列を襲撃した
残党兵であるアリウスの生徒たちを、完膚なきまで叩きのめすことに
成功した。

赤外線カメラに映るのはただの屍——ではなく、ヘイローが消
えて一時的に無力化されたアリウス生たちであった。

「つたく、敵は一体どうやってこんなにも沢山の兵士を準備したん
だ？」

火器管制官は敵の数の多さに困惑し、愚痴を漏らしたのだった。

「今更だろ？子供を兵士として用意するような奴らだ。きつとヤク
でも売り裁くようなロクでなしさ。」

「総員、まもなくB-1爆撃機が巡航ミサイルを発射するぞ。」

機長は隊員がジョークを飛ばし合う中に加わることはなく、冷静に
報告する。B-1爆撃機は既にカタコンベの入り口に対して、AGM

—154Cを発射する準備は出来ており間もなく攻撃する時間であつた。

AGM—154Cは地下施設の破壊に特化したミサイルだ。そして、唯一古聖堂にある地下通路に攻撃を加えることが可能である貴重な武装は、AWACSの誘導のもと行われようとしていた。

AWACSは発射するミサイルが無駄にならないように、AC—130Jの機長から伝えられた座標への誘導準備も完了しており、本当にあとは発射するだけで済む状態であつた。

———「シジャン、こちらレッドアイ—1。管制官より攻撃の許可がなされた、繰り返し攻撃の許可がなされた。どうぞ。」

B—1爆撃機に与えられたコールサイン、シジャン、はその報告を受けると、機体の胴体下部にあるウエポンベイが開放される。ウエポンベイには小型の数発のJDAMや、無誘導の大型爆弾なども格納されているがそれらには用は無い。

彼らが発射しようとしているのは、ずんぐりむっくりでそれなりに大きい巡航ミサイルであるからだ。

そして、ついに待っていた時が訪れる。

「AGM—154C、ファイア。」

B—1爆撃機のパイロットはそう告げると、一発のスタンドオフミサイルがB—1爆撃機から解放された。ある程度、重力に従い落下したところで姿勢制御用の安定翼が展開。滑空しながら、入力された座標へと勢いよく向かつていった。

やがて古聖堂に向かつて市街地上空を滑空し続けると、座標上空に達したところでミサイルは獲物を狙う獰猛な獣のように急降下。落下し始めると重力により、次第に地面に近付くのが加速していく。そして、遂に———

一発のミサイルは古聖堂の瓦礫の山に激突。しかし、爆発はせずにさらに瓦礫の山よりも下にあるカタコンベに向けて突き進む。

そうしてミサイルは設計された通りに地下に貫通すると、遂に爆発を引き起こした。爆圧は地下内部であつたという間に広がり、そしてキヴオトス派遣隊では誰も気付くことがなかった人工天使ヒエロニムスに直撃。

マエストロが作り上げた崇高なる作品、ヒエロニムスは誰にも直接的に相手にされることはなく、空からの圧倒的な火力投射により消滅するのだった。

そして空はすっかり暗くなつており、夜間でも飛行できるようにと持ってきた暗視装置であるAN／AVS—6越しに爆発を捉えていたのはAC—130Jの機長であつた。

暗視装置は微量な光を増幅させることで、夜間において捉えにくい視界を明瞭に確保することができる代物である。そのため、爆発時には熱である赤外線のほか様々な可視光が発生し、もちろん暗視装置はそれらの光を増幅することが出来る。

空から眺めていた機長は爆発時に、一際目立つ発光であるミサイルの爆発を目にした後、こう告げた。

——「上空より愛を込めて。」

古聖堂の地下にあるカタコンベはAGM—154Cの爆発により崩落を起こしたため、作戦目標を達成した彼らは帰還するのであつた。

<同日／19：00>

「ベアトリーチェ、報告がある。」

タキシードを着こなし、まるで子供が人形遊びとして使うために落

書きを施したピーナッツが二つ生えた、B級のホラー映画にでも出演してそうな異形がベアトリーチェと呼ばれる彼女に声を掛ける。

彼の名前はマエストロ。このキヴォトスの神秘及び崇高といった類を研究するために、キヴォトスに来訪した研究者でもあり、芸術家でもあった。

彼の作品はヒエロニムスと呼ばれる人工の天使であった。古聖堂の地下に現在いや、今頃はヒエロニムスは待機している予定であった。

「一体、何か御用でも？」

長身で、赤い肌が特徴的であり純白のドレスを身に纏う彼女はマエストロに呼応する。彼女の名前はベアトリーチェ。配下であるアリュス分校に対してエデン条約調印式を襲撃し、地上を侵攻にさせたのは彼女の命令によるものであった。

なお当人は数か月以上も前に、外部の世界であるアメリカのロサンゼルスに侵攻したが、圧倒的な敗北を受けてしまった。そして、その命を狙われていることにも全く頭には及ぶがなかった。

そして、マエストロはそんな無知暴虐の彼女に報告する。

「……残念な知らせだ。地上の部隊は8割壊滅してしまった。」

彼はとてもでも申し訳なさそうに小声で、さらに続けた。

「……そしてつい先ほど、私の作ヒエロニムス品が失われて——」

——「なんですってッ!？」

ベアトリーチェはマエストロの報告を終える前に声を荒げてしまった。それはもちろんのほほ、いくら制空権が取られたと言えどもまず倒すにしても古聖堂の地下に侵入する必要がある。

そして、侵入したとしても人工天使ヒエロニムスの力は強大であり、並大抵の攻撃では倒すことは出来ないと考えていいはずだ。一体、どうやってあの広大な地下通路を破壊することが出来てしまったのかはゲマトリア陣営には理解が及ばなかった。

「一体どうしたらこんなことを……」

ベアトリーチェはどうか考えを捻り出そうとしたところで、マエストロからこう告げられた。

「奴らは古聖堂の地下……カタコンベを丸ごとミサイルで吹き飛ばしたようだ。理解できぬ。」

「ミサイルで？そんなことはあり得ない……。」

黒服から供与されたあの巡航ミサイルは地中を貫通する能力は一切ない。古聖堂に発射されたあのミサイルは高速で飛翔し、レーダーを掻い潜れるようにあるレーダー波の反射面積を出来る限り小さくした程度であった。

そしてベアトリーチェや彼女に供与した本人である黒服ですら、キヴォトス外部の世界で開発され既に運用されている地中を貫通することが可能なミサイルや爆弾といった兵器群は想像外であったのだ。

「……スクワッドは？」

彼女は怒りを抑えながら尋ねた。なお皮肉なことに、尋ねた本人であるベアトリーチェの形相はまさに『怒り』と表現したほうが適切なものであった。

「地上で待機中の筈だ。ただ、敵の空爆に怯えて外には出れないと思うが。」

「……通信が使えるようになったら、私に教えてください。私から彼女たちには伝えるべきことがあるようです。」

「把握した。」——……………

33：エデン条約編：Get Ready

<20??年秋／4：10>

ウトナピシユティム空軍基地・通信指令室

——「將軍、QRF…：… もとい陸軍及び海兵隊の混成部隊が2時間後に古聖堂周辺に到着します。」

ミリーよりも20歳ほど年が離れたそれなりの年齢である隊員は、そう報告した。これから、古聖堂周辺に残っているアリウスの戦力を殲滅するための戦いが始まろうとしているのだ。

「了解した。空の方はどうなっている？」

ミリーは報告を受けると、次は航空管制を担当する空軍出身の隊員に尋ねた。

「40分前から既に、AWACS及びEP-3は上空にて待機中。近接航空支援も準備が完了しています。対空火器は一切見られませんが。」

「了解、作戦開始時刻まで指示を待て。」

「了解です。」

空軍出身の彼は、そう告げると次はAWACSと通信することが可能な回線に繋いでミリー將軍から受けた命令を的確に伝達しようとする。着々と時が進むとともに、準備も並行して行われているのだ。

今回のQRFはかつてないほどの規模である。ビナー討伐作戦に参加していた機甲部隊を中心に、海兵隊を中核とした歩兵部隊。そして、空軍の強力な近接航空支援も完備している。

これほどの戦力があれば、いくらトリニティとゲヘナ学園の両方を混乱に陥れることが出来たアリウスでも太刀打ち出来ないだろう。しかし、一つ問題がある。

それは彼女らの戦力は出処不明の地下通路を通じて送り込まれていること。アフガニスタンでも確かに地下道や洞窟を基に、強固な拠点を築いたりしていた武装勢力が存在していたことは確かである。

それどころか、かつては忌々しき南ベトナム解放戦線が実際に地下道を用いてゲリラ攻撃を仕掛けていたことは周知の事実でもあった。そのため、その地下通路を真っ先に調査したいところだが――

――残念ながら昨夜、B―1爆撃機が発射した掩蔽壕破壊用弾頭を搭載した巡航ミサイルであるAGM―154Cによる攻撃によつて、その地下通路が崩落を起こしたことは確認済みだ。

これからの戦いでこれ以上増援の部隊が送られることは無いという点では良いことだが、最終目的である彼女らの首謀者を捕らえることも出来ないのだ。

そんな風に頭を抱える問題が存在していたが、ある報告が空軍出身の隊員から告げられた。

「EP―3が電子妨害を既に昨夜からしています……別の周波数にて敵の無線を傍受しました。」

「とくうん。」

「アリウスには……おそらく別の活動拠点が――」

……………

<同日／4：20>

バンダーマン 特殊戦開発グループ 大尉

ゲヘナ自治区・FOS前方作戦拠点 クランプス

「負傷者の収容状況はどうなっている？」

電話越しにポーステイン大佐の声が聞こえると、バンダーマンは報告する。

「重傷者2名と軽傷者3名を6時間以上も前に収容しました。ですが大佐、状況はそこまで良くありません。」

「・・・続けてくれ。」

「2名の重傷者は残念ながら、我々の拠点の医療設備では最善な治療を施すことは不可能です。このままだと死——」

バンダーマンが伝えたいことは現実だった。確かに先生とヒナを救出することは出来た。しかし、この拠点はあくまで特殊作戦仕様であるがゆえに戦闘時の救護に関しては最低限度のものであり、重傷者が居た場合は各自治区が運営している病院に移送する必要がある。た。

「よせよせ、わかったぞ。こちらから、どうにかできないか各学園に収容出来ないか働きを掛ける。ご苦労だ。」

「・・・感謝します。」

彼は大佐に向けて感謝を述べたところで、向こうから電話を切られる。大佐は所属している部下から要請されたことにはしつかりと向き合う人物だ。だからこそ、バンダーマンは大佐のことを信頼しているし大佐からも信頼されているのだ。

バンダーマンは彼自身で考えたやるべきことを遂行すると、次に時刻が迫ってきている特殊作戦に向けての準備を始める。太陽が昇っているであろう時間帯での作戦のため、まずFASTヘルメットのヘルメットマウントに取り付けられているGPNVG-18を取り外す。

そして次に、彼が着用しているプレートキャリアのマガジンポーチに各弾倉に5・56ミリ弾が装填されていることを確かめると準備が完了した。

そうして準備を整えた彼は、基地の建物から外に出た。

外に出ると、私服を着こなしさらにバンダーマンと同じくプレートキャリアを着用しているブラボーチームの隊員が数名と、マルチカム迷彩が施された装備を纏うアルファチームの隊員も数名待機していた。

また既に何名かはSUVに乗車しており、彼らもいつでも出撃できる様子だった。

「バンダーマン、俺たちはお前のことを待っていたんだぞ。」

バンダーマンの名を呼んだのは、フォードであった。勿論、呼び掛けられた彼はそれに反応した。

「すまない、少し手間取ったものだから遅れてしまった。」

彼はさらに続けて。

「……あの子^{ヒナ}と先生は助かると思う。どうか、病院に搬送できるように手配することができた。」

「感謝する。」

フォードはそうして彼に向けて感謝の言葉を述べると、SUVに乗り込んだ。それに続けて、バンダーマンも乗り込んだのだった。

<同日／5：30>

古聖堂周辺・交差点上

「オールクリア。」

フォードたちは車両から下車し、しばらく進んだところである交差点上のクリアリングをMk. 18に取り付けられたマグニファイア越しに行うと、そう報告したのだった。

「……バリケードを撤去しろ。」

「了解。」

そして、彼は次に車道上に設置されているバリケードを撤去するよう命じたのだった。これは彼らの任務であった。アリウスの残党戦力を殲滅する際に、送られる部隊は主に装甲車で構成されているため、装甲車両の通行を止めさせることが可能なバリケードはまさに障害であるからだ。

そうして、命令を受けたブラボーチームの数名の隊員が撤去を開始。撤去を行う際は、周辺のビルの窓や屋上などに彼らを狙う狙撃兵がいないかを警戒する数名の隊員に分かれた。

フォードも警戒にあたっているのと同時に、ヘッドセットから報告が聞こえてきた。

「ブラボー6-1、こちらレッドアイ1-1。現在地の交差点から、北東100メートルの位置に敵小隊10人を路上に確認。注意されたい、どうぞ。」

彼はそれに応じた。

「レッドアイ1-1、こちらブラボー6-1。了解した引き続き警戒する、終わり。」

彼に報告を行ったAWACSは恐らく、上空にて旋回中であるAC-130JかEP-3による赤外線映像から発見されたものだろう。

本来なら、AC-130JやA-10といった近接航空支援を担う航空機がそれらを発見した際は真っ先に攻撃を行うが、こうして報告のみされたのは理由がある。

それは上空にいる彼らの攻撃の頻度が増す度に、敵は建物に潜伏してしまいそこからゲリラ攻撃される可能性が高まるからだ。そのため、わざと上空からの攻撃を控えることで敵の警戒を避けたまま、地上の特殊部隊による作戦が立案されたのであった。

「ブラボー6-1、こちらアルファ6-1。報告のあった方位に向かい、敵部隊を排除する。どうぞ。」

フォードがAWACSに対して応答してから、数分後だった。彼が装着しているヘッドセット越しに聞き慣れた声が漏れた。もちろん、彼はそれにも返答する。

「アルファ6―1、こちらブラボー6―1。アリスの排除はそちらに任せるぞ、どうぞぞ。」

「了解。さて、狩りの時間だ。」

バンダーマンがヘッドセット越しにそう呟いたところで、彼どのやりとりをフォードは終えるのだった。

<同日／5：42>

バンダーマン 特殊戦開発グループ 大尉
古聖堂周辺・一般道路

「コンタク^接ト^敵！」

バンダーマンはそう告げると、初めに無警戒なアリス生にセミオートで射撃を加えた。すると、あつという間に照準に定まっていた彼女は倒れこんだ。もちろん、それと同時にアルファチームの隊員が射撃を加えていく。

彼らは全員サプレッサーを標準装備として銃に取り付けているためほとんどの場合、撃たれた者がどこから攻撃を受けたのかを銃声で特定することは困難を極める。

そのようにして一方的に攻撃を加えていったため、10人ほどで構成されていた彼女らはあつという間に全滅するのだった。そこで、バンダーマンはさらに敵戦力を殲滅するためにAWACSと通信を行う。

「レッドアイ1―1、こちらアルファ6―1。敵一個小隊を片付けた、残党兵の位置を教えてくださいどうぞぞ。」

「アルファ6―1、こちらレッドアイ1―1。そちらから北北東の

公園にて、偽装された重火器陣地を確認。どうぞ。」

A W A C S が確認した敵陣地は迫撃砲や、対戦車砲及び重機関銃を配置しておりしかもカモフラージュが施されていたのだった。そのため本来なら上空の偵察からは見つけることは出来ないはずだったが……米軍の索敵能力を舐めてはいけない。

彼らは偵察衛星をキヴオトスにも打ち上げていたのだ。偵察衛星は数基も打ち上げてさえいれば、地球だろうが異世界であるキヴオトスであろうがほとんどの場合24時間の監視体制を築くことができる。

それゆえに、数時間のうちで地上において僅かな動きがあれば偵察衛星の画像によって、すぐに察知して彼らはあらゆる行動を選択することが可能なのだ。

「了解、アルファは敵陣地を強襲する。終わり。」

バンダーマンはA W A C S に対してそう伝えると、彼らの部隊は急いで敵陣地がある公園に向かう。幸いにしても直線距離で200メートルほどしか離れていないため、走れば数十分以内に着くだろう。

そうして彼らは公園へと急いで向かう。

時折、路上には昨夜からの空爆を受けて気絶していたが、ちょうど今になって目を覚ましてしまった哀れなアリウス生たちを彼らは見かけたため、再び弾丸を撃ち込んで差し上げていく。

そんな風にはアリウスの支配下である古聖堂周辺を侵攻していくと、ついに公園に辿り着いた。公園には偽装網で覆われた複数の60ミリ迫撃砲に、8・8センチ自走砲が配置されていた。またどうやら、さらなる隠密性を維持するためか外周のフェンスにも偽装網が施されていた。

「目標を確認。」

バンダーマンはHK416に取り付けてあるLPVOSコープで、公園の入り口を遠くから捉えるとそう告げた。そして、彼は公園内を巡回していたり、定点監視を行っているアリウス生を捉えるとどのよう公園を制圧するのか考える。

敵の数はそこまで多くはなさそうであった。少なくとも、ここにいる25名の特殊部隊員の数よりは少ないことには違いはない。そのため、閃光弾を投擲してからの制圧を行っても良さそうだと、彼は考えた。

「オールチーム、閃光弾バンを投げて制圧するぞ。」

何名かはベストのポーチからM82閃光手榴弾を取り出して、安全ピンを引き抜いた。そして、偽装網が施されたフェンス越しに投げつけた。すると、短い時間で起爆するように設計されている閃光手榴弾は強烈な光と音を発した。

「行け行け!!」

バンダーマンはそう言いながら、公園に真っ先に突入。後方からも隊員が続く。

「ぐああっ!!目が——」

「待つて!!たくさんてきが入ってきて——」

バンダーマンたちは一気に公園内にいるアリウス生たちに向かって、弾丸を撃ち込んで制圧していく。制圧時間は10秒ほどだった。あつという間に、公園を彼らは掌握するのであった。

「レッドアイ111、こちらアルファ611。公園を確保した、周辺にも脅威は見られない。どうぞ。」

彼がそう報告すると、直ぐに返答が来た。

「アルファ611、こちらレッドアイ111。了解、まもなく地上部隊が到着する。このまま君の部隊も古聖堂に向かってくれ、どうぞ。」

「了解、アルファは直ちに向かう。終わり。」

地上部隊のために安全な進路を確保したバンダーマンはそう告げると、古聖堂に向かうのであった。

34：エデン条約編：Time to Decide
ve Battle

<20??年秋／6：00>

アレックス 第一武装偵察隊・レッド分隊 中尉

古聖堂周辺・制圧作戦中

——「ブラボー2、こちらレッド1-1。作戦地域に到着した、これより古聖堂周辺を制圧する。どうぞ。」

「レッド1-1、こちらブラボー2。了解、貴下の部隊には上空にて待機中のAWACSとの通信を許可する。コールサインはレッドアイ1-1、どうぞ。」

「了解した。終わり。」

アレックスはM-ATVの車内に取り付けられた広域通信用の無線機で、通信を行うと次はM4A1を持って車外に出た。車外に出ると、M4A1に初弾が装填されているかを確認してから安全装置を解除する。

そして、彼はやや懐かしむような感じで、高く聳え立つビル群を視界に収めたところで彼は呟いた。

「俺はもう砂まみれの世界に飽きたところなんだ。」

アレックスがキヴォトスで派遣されていた地域はアビドスであった。彼はビナーと初遭遇したその後は、部隊に管理休暇を与えられたのだった。そして、数日後に彼らはまたキヴォトスに戻り……さら

にとある任務を与えられた上でアビドスに再び派遣されたことがあった。

それ以来、アレックスはアビドス以外の地域に訪れたことがないのだった。しかし、今回のアリュウス制圧作戦にあたりビナー討伐作戦に参加していた部隊が呼び戻されてから数時間後に、彼らにも再配置命令が下されたのだった。

そして、その再配置命令の際に彼らと共に――

「うへ〜テレビで見えていたけど、こんなに街が酷い状況だったなんてね〜?」

「ん、ファウ……じゃなくてヒフミからの連絡が無ければここにも来ることもなかった。」

「まったくもー。カタカタヘルメット団とカイザーの次は一体何なのよ?この有様。」

アビドス一同はそのように戦闘によって破損した道路や建物群を眺めると、各々コメントした。そもそも、なぜ彼女たちが砂まみれのアビドスではなくコンクリート製の建物が多くある古聖堂まで来たのか。

それは彼女たちはヒフミから連絡を受けて、アレックスと共にここまで来ることとなったからなのである。もちろん、アレックスは彼女たちを連れていくことは拒否しようとしたが……彼女たちの熱心な勢いに押されてしまったのである。

「全員傾注。レッド分隊及びアビドスは先導する海兵隊の装甲車両と共に、古聖堂周辺を確保する。」

「……建物を壊しても大丈夫でしょうか?」

アヤネは尋ねる。

ネガティブ

「否。我々に建造物の破壊の許可は一切出ていない。破壊したら借金額がその分増えると思った方が良いだろう。」

アレックスは冗談交じりに応えようと、レッド分隊の数名は苦笑する。そして、彼は続けて尋ね返す。

「ほかに質問は?」――……………

「こちらイオタ3—1。カイザーインダストリー
周辺を制圧、周囲には銃を持った亡霊もどきがいるから注意——
」

「こちらイオタ3—5。激しい銃撃に巻き込まれ
て負傷者が7人。そのうち2人は重傷のため直ちに医療へりを——
」

制圧作戦が開始されてから40分近くは経過した。キヴオトス派
遣隊の無線では様々な要請が飛び交う。エリアの制圧報告から、重傷
者の搬送要請までと多種多様であった。

なお、レッド分隊が担当している古聖堂周辺では激しい銃撃戦が続
いていた。

「コプス、あの左前方のビル窓から射撃を加えている重機関銃陣地
を吹き飛ばせ。」

「了解。」

アレックスは擲弾兵であるコプスに命令すると、M27 IARに
よる制圧射撃が陣地に加えられる中、ぐさま彼はM203の引き金
をリーフサイト越しに絞った。

” ポンツ ”

一発の40ミリグレネード弾が発射される銃声が聞こえると、その
うち狙いを付けていた先である敵の重機関銃陣地の近くにある土囊
に命中。爆発音と共に土煙が激しく生じた。

しかし、陣地を破壊することは出来ずオレンジ色の曳光弾がこちら
に向かって飛び交ってくる。

「まずいな……。」

アレックスがそう呟いたところで、シロコがこう言った。

「ん、私に任せて。」

彼女はそう告げると、ドローンをどこからか取り出して起動させ
る。そして、ドローンはすぐさま上昇し圧倒的な量のミサイルを放

つ。一発のミサイルのサイズはそこまで大きくはなく、500ミリペットボトル一本分と同じような感じであった。

ただ、それがいくつも飛翔していく。そして、一発一発の爆発はコプスが放つ40ミリ高性能炸薬弾とは違い、小さいものであるが数は多いためクラスター弾が子弹をぶち撒けるが如く、何度も小規模な爆発が広範囲に生じる。

「うわあああつ!?!」

「逃げられな——」

重機関銃を担当しているアリウス生たちは、そのように断末魔を上げると数秒後には陣地が沈黙した。いくらなんでも、あの爆撃から逃れることは流石に難しいだろう。

「よくやった、だがまだ進めないな。」

アレックスはそう褒めたたえたところで、次にある問題に直面する。それは、彼らが敵の圧倒的な防衛陣地により前にこれ以上進むことが出来ないことだった。

レッド分隊よりも前方にはLAV-25が数台先導しており、事前に見つけることが出来た脅威は彼らが排除している。

しかしそれでも彼らのような重装甲目標はアリウス生の標的にはされにくいようで、積極的に歩兵を中心に待ち伏せ攻撃しているようであった。また、それだけではなく敵は強固な防衛陣地を築いており、あちこちのあるビル内から何人ものアリウス生がこちらに射撃を加えてくる。

「いくらなんでも多すぎるよ。これじゃあ、おじさんの盾とノノミちゃんの制圧射撃だけだと無理そうだよ。」

ホシノは敵の攻撃を惹きつけながらそう述べた。確かに、敵の数はあまりにも多く部隊の全滅は時間の問題である。そのため、アレックスはAWACSを通して近接航空支援を要請することにした。

「レッドアイー1、こちらレッド1。近接航空支援が必要だ、どうぞ。」

「レッド1ー1、こちらレッドアイー1。了解、目標にマーキング

又は座標を教えてください。どうぞ。」

「了解、目標周辺に発煙弾を展開させる。」

次にアレックスは近接航空支援を呼ぶために、コプスに命じる。

「コプス、射撃を加えてくるビルにスモークを炊いてやれ!!」

「隊長、了解です。」

コプスはそう返事するとM4A1のアンダーバレルに取り付けられているM203のバレルを前方にスライドさせ、40ミリ高性能炸裂弾を取り出して発煙弾をリロード。そして、彼は銃口炎が見える範囲でありとあらゆる建造物の近くに発煙弾を撃ち込んでいく。

発煙弾が撃ち込まれると徐々に緑色の煙が発生していき、そのうち徐々に煙が上昇していった。

「目標に緑色のスモークを炊いた！見えるか!？」

アレックスはAWACSに尋ねる。

「目標を確認。少し待ってくれ。」———

<同時刻>

AC—130J コールサイン “ウォーハンマー3—1”

古聖堂周辺・上空

古聖堂周辺、高度4000メートルにも及ぶいわゆる高高度ではAC—130Jと言われる大型の対地攻撃機が左旋回していた。そしてこの機体に搭乗している機長は、先ほどアレックスから要請を受けたAWACSに搭乗している隊員と交信をしていた。

「ウォーハンマー3—1、こちらレッドアイ1—1。地上部隊より近接航空支援の要請。目標座標は———」

AWACSに搭乗している隊員は、アレックスたちが放った緑色の

スモークにあたる地図座標を的確に伝えていく。そうして、彼が伝え終わったところで機長は冷静に尋ねた。

「待ってくれ。これだと多くの建造物を破壊するのじゃないか？」

彼らには建造物に破壊は一切認められておらず、機長はこれは命令違反なのではないかと考えたのだ。もちろん、昨夜行われた空爆に關しては破壊対象であるカタコンベは建造物ではなく自然によつて形成された地下空間だという解釈だった故に出来たことだ。

「……今すぐ確認するから、すまないが少し時間をくれ。」

A W A C S に搭乗する隊員はそう告げたところで、1分後ほど経つた頃に隊員から再び連絡が入った。

「建造物の破壊を許可が下りた。繰り返す、建造物の破壊が許可が下りた。」

その報告に機長はすぐさま反応する。

「了解。火器管制官へ、交戦を許可する。石器時代に戻してやれ。」

機長は F C O こと火器管制官に攻撃の指示を許可すると、さらに許可された彼は武装を操作する T V オペレーターにも許可を出す。

「方位 2—2—3 のビルを吹き飛ばしてやれ。」

「了解！ 30 ミリ、ファイア!!」

30 ミリが何発も連続で発射されて、狙いの先であるビル屋上に飛翔。ビルの屋上には何人もの狙撃手らしきアリュウス生が、赤外線カメラ越しに映っており必死に地上部隊に射撃を加えていた。

しかし、突如として高度 4000 メートルからの贈り物である 105 ミリ榴弾が着弾。あつという間に、屋上に群がっていた彼女たちは設置されていた貯水タンクやらと共に吹き飛ばされたのだった。

「グッドキル、グッドキル。次はあの電化製品の広告塔があるビルだ。」

火器管制官がそう伝えると、T V オペレーターはその建物屋上に敵がないかを確認する。赤外線カメラは基本、熱である赤外線を放出する物体に対して白色で強調表示する索敵に優れたものである。そのため、一目で敵がいるのかどうかを判別することが可能である。

そんな赤外線カメラを通してビルを見てみると、攻撃目標である建

物の屋上には敵が見られなかった。つまるところ、建物内部にいるのだろう。

「105ミリ、発射。」

TVオペレーターは武装を105ミリ榴弾に選択すると、照準を屋上にある広告塔から何枚もの窓ガラスが見られる方へと狙う。赤外線カメラは残念ながらガラス越しに熱源を感知することは出来ない。そのため、正確に内部にいるアリウス生を狙うのではなく建物を文字通り破壊する方針に彼は切り替えた。

105ミリ榴弾が発射されると数秒後に、命中。完全に一部分を吹き飛ばした。しかし、まだ敵がこのビルにいる可能性があるため彼は30ミリに切り替えて、攻撃を続けた。そうして、そのビルを蜂の巣状態にしてやると一部分が倒壊し始める。

倒壊し始めるともう誰もそれを止めることは出来ない。程なくして、道路上にビルの瓦礫やらまるごと一部分が降り注ぐのだった。

「わーお、やっちゃまったな。」

火器管制官は人生で初めてAC-130Jによる攻撃で倒壊するビルを目撃した彼は、そのようにややふぎけた調子で呟く。

「方位1-5-4の屋外駐車場に10門の迫撃砲を確認。」

それに対して赤外線検出担当士は冷静に報告。すぐに、火器管制官はその報告が伝えられるとTVオペレーターに続けて命令をした。

「方位1-5-4にある屋外駐車場に攻撃をせよ。」

「了解、射撃する。」

TVオペレーターは赤外線カメラで何門もの迫撃砲を操作している少数のアリウス生を捉えると、正確に30ミリを叩き込んでいった。そこで、30ミリ砲弾が迫撃砲の砲弾を備蓄している弾薬箱に命中すると大規模な爆発が発生。派手にその屋上にある車両たちも綺麗に吹き飛ばされた。

「方位0-9-0よりA-10が二機進入。誤射に注意せよ。」

突然であったが機長がそのように報告を行うと、火器管制官はTVオペレーターに向けて適切な指示を行う。

「射撃中止、射撃中止。」

「了解、射撃を中止する。」

誤射を避けるために彼らは一度、攻撃を止める。そして、A―10がどこに対して攻撃を行うのかを伺う。

「A―10は方位2―5―5の路上にある大型の陣地を破壊するようだ。それが終わり次第、射撃せよ。」

機長はそんな風に、射撃を止めた彼らに対して空爆の位置を伝えると彼らは赤外線カメラ越しであるがA―10の攻撃がそれらの陣地に始まるのを待機していた。そうすると、ほどなくして遂に攻撃が始まった。

初めにA―10はGAU―8通称『アヴェンジャー』と呼ばれるアメリカ空軍において、史上最大の攻撃力を持つ30ミリガトリング砲が放たれた。

GAU―8は焼夷徹甲弾^{劣化}PGU―14^弾Bと焼夷榴弾PGU―13Bが4：1の割合で装填されている。焼夷徹甲弾は対戦車戦においても威力を発揮し、焼夷榴弾は軽装甲目標や対人目標に効力を発するのだ。

そのため陣地内には複数ものアリウス生や、重火器等がみられたが二機のA―10が鉄の雨を降らせたことよって、焼夷榴弾により連続的な小規模の爆発が生じ一気に陣地内は壊滅的な被害を負った。

しかし、彼らは彼女たちがもう戦える能力や士気を一瞬で失ってしまったことも気に留めず、一度目の射撃を加えた後に再び攻撃態勢に移る。

そして、二回目の射撃で完全に陣地は崩壊どころか更地にしてしまった。道路は空からでも分かるほどスタボロであり、かつアリウス生やら様々な兵器の破片が路上に無様に散乱していた。

「機長より、射撃を許可する。繰り返し、射撃を許可する。」

どうやらこれでA―10による近接航空支援が終了したようであった。機長が再び射撃を許可する声が聞こえると、同じようにして火器管制官が復唱し、次に攻撃をする目標の指示をする。

「射撃を許可する。次はあのムカつく顔をしたロボットの広告塔があるビルを吹き飛ばせ。」

「了解、105ミリ発射！」……

<20??年秋／6：40>

古聖堂周辺・制圧作戦中

空からの強力な近接航空支援によって、アリウス生が築いた防衛陣地は崩壊しつつあった。もちろんこれらの絶好の機会を逃すことなく、彼らよりも数十倍も頑丈なホシノ達は徹底的に破壊された陣地に侵入し接近戦を仕掛けていた。

——「あくら、よっと。」

ホシノはベネリM4のトリガーを引き、物陰から顔を出してきたアリウス生に向かって射撃。命中すると、断末魔を上げたりすることは無く静かに地面に倒れる。

「この——」

もちろん、後続にいたもう一人のアリウス生は銃を構えて射撃をしようとする。対して、ホシノはコツキングすることなくそのまま盾をすぐさま展開。盾が展開されると同時に相手が発砲するが、銃弾は盾に防がれる。そして、そのままお互いに近距離であったためホシノは盾を使って思いつきりの力で殴った。

「ぐへッ!?!」

「盾って殴られると意外と痛いんだよね。どう?」

ホシノは相変わらず余裕そうに振る舞っている中、大して最も情けない声を出してアリウス生は地面に倒れ込んでしまっており、彼女は

まだ気絶はしていなかった。ホシノは倒れている彼女を逃すつもりは一切ない。そのため、盾を構えたままコツキング。そして、引き金を絞って確実に気絶させた。

「ん、私も一人片づけた。」

「こつちも!!」

「私もです〜♠?」

セリカとシロコはそのように報告を交わして、彼女たちは陣地内にまだ無力化されていないアリウス生を見つけようとする。

「古聖堂跡地の近くに…… どうやら強力な存在がいるようです。」自身のドローンから正体不明の何かを確認したアヤネは警告を発した。確かに、これまでの道中にアリウス以外の敵対勢力ユステイナ信徒と遭遇した。ただし、どれも彼女たちが攻撃を加えようとする前にレッド分隊やLAV-25による攻撃ですぐに排除されていたのだった。

「アビドス、片付けたか?」

アレックスが無線越しに確認を要求した。これにアヤネが応答する。

「たった今片付けましたが…… この先には手強い敵がいるようです。」

「了解、我々はそちらの後方から近付く。皆が我々のことを先導しても構わないが、どうする?」

アヤネは悩んだ。確かに、アレックスや先生のようにキヴォトスの外部の存在である彼らはたった一発の銃弾ですら致命的であるのは事実だった。そのため、彼らにこれ以上の被害や危険を冒す必要はないように先導するという点は良いことだと脳裏に浮かんだからだ。

実際、先生は数時間前の銃撃戦で重傷を負ってしまったのだから――

彼女は数時間前に発生した悲劇を伝聞であるが認知しているがゆえに、最善の手を尽くすことにした。

「私たちが先導します!!」

無線越しであるが彼女は声をはっきりと出して、伝えると彼からその返事が来た。

「了解、幸運を祈る。」

通信が終わると、彼女たちは更に先を進んだ。道路上の殆どは崩壊したビルの瓦礫やら、数時間前に古聖堂を破壊したミサイルの爆圧によって吹き飛ばされた車たちが重なっており、凄まじい光景だった。あの破壊された古聖堂に近づく度に、道路や標識には火山灰のように黒い煤がこびり付いていた。

「ほんっと、酷い様子……。」

街の朽ち果てている様子を見て、セリカが顔を顰めたところだった。

——「っ!!セリカちゃん危ない!!」

ホシノが急に語気を荒めたかと思いきや、彼女はセリカを守るように盾をしっかりと構える。そして、何処からか大量に放たれた弾丸を盾で受け止めた。

「あいつをやらないと!!」

シロコはすぐに射撃音から攻撃を加えている彼女バルバラを捉えると、彼女はF1グレネードを取り出して安全ピンを抜く。そして、勢いよくバルバラの近くで爆発するように自慢の腕力で投げつけた。そうすると、ターミネーター如くミニガンを両腕で射撃を行っている彼女の足元に転がった。そのまま、一秒ほど経過したのちに遂にグレネードは爆発。

もちろんそれだけでは倒しきれないとわかっているが、バルバラの射撃を一時的であるが止めさせることができた。この隙に、ノノミが反撃と言わんばかりにありったけの7・62ミリ弾を何発もぶちまけた。そのようにして通常のアリウス生よりは少なくとも手強かったバルバラは消滅したのだった。

「ホ、ホシノ先輩ありがとう。」

「いいのよ、別に。」

セリカとホシノはそのように会話をしてから程なくしてだった。古聖堂近くの瓦礫から轟音が響いてきた。

「つてもー、今度はなんなのよ!?!」

「ん、戦う準備は出来ている。」

「はい〜♠」

皆はそう言いながら轟音の方へ、注目する。瓦礫の中から黒く、時々禍々しい翡翠色の模様をした巨大な何かが起き上がる。今まで彼女は目にしたことすらないものであった。

「アビドス、何が起きた？ 凄いい音が聞こえるぞ。」

アレックスたちは彼女たちとはやや離れているが、その音を遠くからでもしっかりと聞きとっていたようで尋ねてきた。

「ん、アヤネが言っていた強敵が姿を現した。」

「了解した。もう少しで着くから待ってくれ。」

彼女たちはアレックスとの通信を終えると戦闘を再び始めるのであった。

まずノノミによるM134の弾幕が、アンブロジウスに襲いかかった。しかしいくら命中しても相手は怯む様子すら見せないようで、全く効果がないようだ。それがわかると次は、シロコがドローンを展開した。

展開されたドローンには既に十分な量のミサイルが装填されているので、すぐさま上昇し爆撃が行われた。小規模な爆発を何度も繰り返すあの攻撃は、一見あの怪物にも有効そうに思われたがその浅はかな期待は外れた。

アンブロジウスは展開したドローンを飛び回る蠅を叩くが如く、撃墜したのだ。無念にもドローンはミサイルを一発も発射していない。

「そんな……。」

アヤネは驚いた。アンブロジウスはあの巨体であるにも関わらず、攻撃に対する反撃や対応速度が速いのだ。そんな風にやや戦闘が停滞し始めたところで、何発もの小規模な爆発が怪物に襲いかかる。

爆発を発生させた本人は、シロコではなく。アメリカ海兵隊に所属するLAV-25による25ミリ高性能炸裂弾であった。LAV-25に搭載されているM242は最大200発もの砲弾を1分間で発射することが可能である。そのため先導している3両のLAV-25から、アンブロジウスは集中攻撃を受けた。しかし、なんとか動きを封じることが出来ても倒せそうにない。

そのためアレックスは無線で近接航空支援を要請することにした。「レットドアイ111、こちらレットド111。近接航空支援を要請する。座標は——」

アレックスは座標が付された地図を頼りに、的確な攻撃座標を伝達した。そうすると、返答が来た。

「了解、至近距離弾に注意せよ。」

AWACSがそう返答してから10秒ほど経った頃だった。いきなり、アンブロジウスの頭付近で大きな爆発が発生したかと思いきや、何回もの中規模の爆発がアンブロジウスを包み込む。それに遅れて空から、AC1130が搭載している40ミリ機関砲の連射音が聞こえてきた。

もちろんそれだけで近接航空支援は終わらず、更にA110しか搭載していないアヴェンジャーの着弾音と共に、連続した爆発が瓦礫周辺に発生。土煙が空に舞うのと同時に、一連の爆発こと空爆は止んだ。更にそこから遅れて、アヴェンジャーの独特な空を切り裂くような発射音がやって来た。

「うっわああ... やばいわよ...。」

セリカは一連の激しい攻撃に腰を抜かしたのか、尻もちをつく。もちろん他の生徒は唾然としているようであった。そうして土煙が晴れると、綺麗にアンブロジウスは消滅していた。

そうして大方の戦闘が終了したところでアレックスの無線から、声が漏れ出た。無線にはノイズが走るが、今回は一層酷かった。通信相手はどうやら航空機にでも乗っているのだろう。

「近接航空支援はこれで終わりだ。 Have a Nice Day 良い一日を。」

そう伝えられると同時に二機のA110が彼らの頭上を通過。彼らはそれに気づくと、空を見上げた。空は既に青く透き通っており、A110の勇姿を見届けたのであった。

<20??年／7：30>

アレックス 第一武装偵察隊・レッド分隊 中尉

古聖堂

二機のA―10による近接航空支援によって、完全に古聖堂を確保することが出来た彼らは引き続き周囲を警戒しつつあった。LAV―25は巡回し、さらに海兵隊と陸軍の歩兵部隊が警戒配置に付いていた。

「ブラボー2、こちらゴールドクロ―。古聖堂を確保し、捕虜も既に何人が確保しています。どうぞ。」

「ゴールドクロ―、こちらブラボー2。よくやった、暫くは占領し続ける。」

上層部と部隊指揮官の会話が無線を通じて聞こえるなか、アレックスたちは古聖堂の瓦礫の上を歩く。数十時間ほど前に巡航ミサイルによって建物が破壊され、かなり小さくなってしまった建物の一部だったものや彩るステンドグラスの破片らが彼らのブーツの足音を奏でる。

「…君たちはこういう光景には慣れているのか？」

アレックスはふと共に歩いているアビドスの面子に声を掛けた。彼女たちは暗い顔を見せないどころか、平然としていたからだ。アレックスよりも10歳ほど年下であるはずの彼女たちはまだ子供で

あり、こういった光景には慣れていないかもしれないと思っていた。しかし、それは違った。

彼女たちはしつかりと現実を背けることなく、向き合っているのだ。その異様さを彼は感じた。

「うーん、一応ね？」

ホシノはいつものように気怠そうな顔をしながら答えた。

「やはり……借金を背負っているからか？」

アレックスは場違いと言われても過言ではないブラックジョークを飛ばす。

「あはは……それもありますけど……。」

アヤネはそれに反応し、無線越しであるが苦笑した。彼らはそんな風にやり取りをしつつ、瓦礫の山を探索していると一つ大穴を見つけた。大穴といっても既にそれも瓦礫で埋まっており、その奥には何かあるのかは分からない。

「全く気味が悪いな。」

大穴の瓦礫片から僅かに何かが埋まっていたのが見えた。金色の金属製の何かだ。これを見てから、彼は突拍子に変な考えに至った。

「なあ、借金を効率よく返す方法は何かあると思う？」

「バイトをするとかじゃない？」

セリカは一人のアルバイトとして答えた。しかし、アレックスが求めている答えは違った。

「それもいいが……正解は埋もれている埋蔵金やら宝を掘り出すのさ。」

「は？一体どういう——」

冷ややかな目線をアレックスに彼女は送ったところで、彼は埋もれている瓦礫片から撤去しやすそうなサイズのを両手で掴む。そして勢いよく彼は瓦礫を取り出した。すると埋もれていた瓦礫たちはバランスを崩し落下する。そして本来なら失ったはずの古聖堂の地下があらわになった。

「きゃっ!?!」

「危ないな……」

「隊長、危なすぎます」

アレックスは何とか古聖堂地下に落ちなくて済んだが、見る限り10メートル近くの深さがありそうだ。もし落ちてしまえば彼は骨折を負うか、当たり所によつては死んでいたかもしれない。

「これは・・・怪物？」

コプスは大穴から崩れ落ちた瓦礫と共に、横たわっている赤く染まった大きな亡骸らしきものを発見した。普通の人間よりも数倍も巨体である亡骸らしき体は損傷が激しく、まるで爆殺されたかのような状態であつた。そして幾つかの装飾品らしき、売ればそれなりに儲けることができそうな金色の金属製の物体が見られた。

「わゝこれ売って、借金を返すのでしようか？」

「ん、それよりも銀行強盗の方が早いし利益が——」

「だから先輩それはダメだつて——」

彼女たちはそうやって騒いでいるうちに、彼はこの気味の悪いヒエロニムスエイリアンをどうしようかと迷つたが、まず報告することにした。

「ゴールドクロウ、こちらレッド11。古聖堂の瓦礫の中から、エイリアン・・・いや既に死亡しているのが出てきた。どうぞ。」

「レッド11、こちらゴールドクロウ。本気か・・・？確認に向かうから待機してくれ。終わり。」

無線でのやり取りを終えると、次に彼は彼女たちに今後どうするかを尋ねる。

「ところで君たちは、アビドスからここまで来たわけだが・・・どうす——」

彼がそう言い終えるよりも先に、どこからか爆発音がこちらまで聞こえてきた。

「っ!!警戒しろ。」

もちろん、まだ残存のアリウス生がいるかもしれないため彼らは直ちに戦闘態勢に移つた。そして、現在の状況を知らせるためにAWA CSからの無線が飛び交う。

「通信可能な全ユニットへ、こちらレッドアイ11。敵部隊の動きは一切見られない。だが油断するな、警戒し続けるんだ。終わり。」

<同時刻>

バンダーマン 特殊戦開発グループ 大尉
 廃墟ビル

A W A C Sからの情報を頼りに彼らは廃墟ビルに向かった。事前に知らされた情報によればどうやらこのビルにアリウススクワッドと呼ばれる敵一個分隊がいるようだ。

その敵分隊は彼らよりも数は少なく、たった4人であるのは勿論知っている。そして空爆から逃れるためか、まだこの建物に立て籠っているということだった。

「骨が折れるな...。」

彼は廃墟ビルの高さに絶句した。少なくとも10階以上の高さがあり、クリアリングを行うのは幾らなんでも25人の部隊でも、厳しそうだと感じたからだ。

「アルファチームはこれより、廃墟ビルを制圧する。」

バンダーマンは通信相手を呼ばずに、そう無線で伝えると遂にビルの制圧が始まった。勿論、この廃墟したビルにはエレベーターなんて便利な移動手段はないので、階段を登る必要がある。むしろそれ以外の方法がない。

ひとまず彼はFTごとに別れさせて、建物の探索を行う。バンダーマンが属するFTデルタは3階から、それ以外のFTは1、2階を担当する。

廃墟と化したビルは、恐らく巡航ミサイルによる爆発のせいで窓ガラスが全て割れており、冷たい風が突き抜けてくる。そしておまけに電力も失っているため、明るさは微塵もなく太陽光が唯一の光源だ。

そんな風に暗すぎるため、各隊員は銃に取り付けてあるフラッシュライトを点灯し索敵する。

「FTエコー、1階クリア。」

「FTゴルフ、2階クリア。」

「FTデルタ、3階クリア。」

各チームがクリアリングを終えるとそのように報告し、まだクリアリングが出来ていない階を再び行うのを繰り返していく。

そうしてもう一回繰り返したときだった。バンダーマンたちは6回よりも上の階層から、乾いた銃声が連続して聞こえた気がした。

「オールチーム、7階から敵がいるかもしれない。気をつけろ。」

彼がそう報告している間にも、銃声は止まないどころか激しさを増していった。彼らは直ちに制圧をしようと、一気に7階に駆け上がっていく。

「アルファ6-1、こちらブラボー6-1。君たちがいるであろうビルに到着した。このまま銃声が聞こえる階に向かってても、宜しいか？どうぞ。」

7階に続く階段をちょうど登り終えたところで、ふフォードからそのような連絡が来た。

「ブラボー6-1、こちらアルファ6-1。今、その階にいるからお前らも来い。まだ戦っていないが、激しくなりそうな予感がする。どうぞ。」

「了解、直ちに向かう。終わり。」

フォードと一連のやり取りをバンダーマンは終えると、7階から響く銃声の方へと向かう。銃声は一度に激しくなったと思いきや、単発での射撃。時折、銃声では無いことが分かるあからさまな爆発音がヘッドセット越しに伝わった。

「こっちだ。」

彼はそう呟きながら、長い廊下に出るとそこから先では戦闘が起きていた。トリニティの制服を着用し、M4A1を装備している子と例のアリウススクワッドが熾烈な戦いを繰り返していた。

彼らの目標はアリウススクワッドの無力化と捕縛である。勿論、彼らも戦闘に参加した。

まずバンダーマンはHK416に装着してあるLVP0の倍率を

拡大し、引き金を数発絞った。そうすると、狙いの先である脅威が最も高いであろうステインガーミサイルを携行している生徒に命中。彼女は一瞬、怯んだが倒し損ねた。

「うっ!? リーダー!! 例の軍隊が来てる!!!」

「……」

「何?」

アリウススクワッドである彼女たちはそう発すると、すぐさまこちらに射撃を加えてきた。

「撃つて来たぞ!!」

「ステインガー持ちをやっちなえ!!」

バンダーマンたちはビル内に落ちているそれぞれのブロック片やらを盾にし、反撃する。まずは最も脅威度が高く、しかも手負いであるミサキを無力化することに成功する。

「ミサキ!!」

アリウススクワッドのリーダーであるサオリは無力化されてしまった彼女の名をそう叫ぶ。そうしている間に彼女のオフアングルから、アズサのM4A1のストックで殴られそうだったが――

「甘いな!!」

彼女は先に人間離れした反応速度で、ストックの攻撃を回避する。そしてお返しと言わんばかりに彼女からダブルタップで反撃をされてしまう。しかし、その更なるお返しとして彼らから5・56ミリ弾の嵐が襲いかかる。

「卑怯じゃないか!?!」

彼女は射撃を加えてくる数多の大人に対して不満の声を漏らした。しかし、彼らには命が掛かっている。ヘイローを持つ彼女たちのように撃たれて数時間気絶するだけ――なんて甘ったるい現実は彼らには存在しないのだ。

だからこそ彼らは攻撃の手を一切、緩めることなく射撃を加えている。数多のサプレッサーでの射撃音が、壁に反響することで増幅されてビル内に響き渡った。そうしてDEVRUのアルファチームとアリウススクワッドの激しい銃撃戦が行われた。

「マガジンを変える!!」

HK416に挿していた窓付きのPMAGを交換するために、マガジンリリースボタンを押してそのまま空となつているマガジンを捨てる。そうしている間に彼は、ベストのポーチ内に収められていた新しいマガジンを左手で取り出し素早く装填。マガジンキャッチボタンを叩くと、初弾が装填されて撃てる状態になった。

この一連の動作を素早く彼は行ったが、激しい銃撃戦の展開はそれに反して遅い。

「あの子を狙うんだ!!」

バンダーマンは大声で仲間にもそう呼び掛けるものの、まったく彼女に命中する様子はなかった。彼女は誰よりも素早くこちらの狙いを回避し、射線から逸れる。そうして隠れたかと思いきや、突然こちらに向かつて9ミリパラベラム弾をぶちまけてくるので厄介な存在だった。

そしてそんな風に攻撃を加える彼女を援護しているのが、サオリとヒヨリであった。彼女らは互いにリロードする際に、交互に精密な制圧射撃を加えてくる。そのような完璧な連携で為された攻撃は、彼らを苦戦させていた。

「うっ!?被弾した!!」

そのうち一人がアツコの銃撃を受けて被弾した。彼らが着用しているセラミック製のアーマープレートを貫通することが不可能な9ミリパラベラム弾と言えども、あたまや動脈に命中すれば致命傷となり得る。そのため、彼らは被弾した隊員を一直線の長い通路から射線が遮るような小部屋に連れていく。

「いってえ...。」

「大丈夫だ、俺が付いているからな。」

そんな隊員らの会話を彼は耳にすると、あの子を真っ先に倒すことに決めた。

「破片に隠れている二人に制圧射撃をしろ!!俺が前に出る!!」

そう叫ぶと、まずは顔を出すことが出来ないように制圧射撃をしながら距離を詰める。HK416のトリガーを素早い指切りで絞り、隠

れた遮蔽物から顔を出せないようにする。

そうしている間に彼はだんだんと距離を詰めていく。そうして装填されている弾薬が尽きる前に彼は、彼女との距離を2〜3メートルまで縮ませることに成功した。流石にこれほど距離を詰めてしまえば、彼女が隠れられるような破片はその役目を果たしていなかった。

そのため彼は、マガジン内に僅かに残っている全ての弾丸を素早く狙撃手に撃ち込んだ。そして次に腰のベルトに収めてあるサプレッサーと光学照準器付きのFNX-45に切り替え、小柄でガスマスクをしている彼女に一マガジン分撃ち込んだ。

「アツコ、ヒヨリ!!」

彼女らが撃たれた際、もう一人の生徒は制圧射撃が加えられる中そう叫んだ。彼女はもう一人だ。あとは彼女を無力化さえしてしまえば、あとは捕縛しクランプスに連れて帰るだけだ。

「アメリカ海軍だ!!降伏するんだ!!」

バンダーマンは大声でそう叫ぶと彼女は制圧射撃が加えられる中、遮蔽物から飛び出して逃げた。彼女の逃げる速さは異常で、彼らが確保している射線ではない方向へと逃げ込んだ。逃げている方向は明らかに、屋上であった。

「二人逃げたぞ。屋上に向かっている!!」

彼はブラボーチームとの通信が可能なマイクに向かって、そう伝えたと彼らは追った。そうして屋上まで向かうと、彼女は銃を捨てて突っ立っていた。しかし、両手を挙げていない。

「両手を見せて、跪け。」

バンダーマンは警告し、他の隊員は銃をしっかりと彼女に向けていた。そうしている状況に、フォード達も到着したようだった。

「なんだ警察ごっこか？俺の方が上手いぞ。」

フォードは開口一番にバンダーマンに向かって冷やかした。なぜなら彼は元警察官であり、この状況を幾度も見たことがあるからだ。

「うるやい。」

バンダーマンはそう告げるも、彼女はしっかりと命令に従っている

ように両手を見せた上で地面にひれ伏してくれた。いくらなんでもこの多数の兵士と戦うという愚かな選択は避けたのは、賢明だろう。

「俺が縛りにいく。」

フォードはそう言うのと、彼女にMk. 18を向けながら近付く。

「余計なことはするなよ?」

「……」

紫色の小さな花が咲いているそばにある彼女の体に接近して、完全に手足を縛ろうとしたときだった。遠くから、少女の声が聞こえた。

「やめて、リーダーを放して……」

「降伏しろ。」

バンダーマンが鋭い声で、HK416の銃口を向けながらアツコに對して言い放った。何がなんでも、今ここで彼らは彼女達を生け捕りにする必要がある。彼女らを支配している大人かつ、彼らの国家を侵略したテロリストの居場所を聞き出すには彼女らが必要だからだ。

「ッ!? 姫喋ったら駄目——」

「何の音だ……?」

何か、嫌な羽音のようなものが近くから聞こえた気がした。きつと虫なのだろうとフォードは思ったが、その期待は裏切られた。

「爆弾だ!! 伏せ——」

バンダーマンが気づき、危険を知らせようとしたところで突如爆発した。

爆発した原因は、どこからか飛来した自爆ドローンだった。もちろん、近くにいたフォードたちはその爆発に巻き込まれた挙句、他の隊員らもその爆発の際の衝撃で吹き飛ばされてしまう。

そして自爆ドローンに搭載されていたのは、ヘイローを破壊する爆弾だった。本来なら、アズサがペロロ人形に仕込んでいたことによりアツコが致命傷を負うはず——だが違った。それ故に存在することがない自爆ドローンによる爆発に巻き込まれた理由は彼、彼女らは一切知らない。

爆風に吹き飛ばされ、状況を先ず把握したのはバンダーマンだった。比較的、遠くにいた彼は爆風に押されたおかげで背中を地面に強

打することになってしまったが、特に異常はない。

次に爆発の中心部にいた彼女達の様子を見て、彼はコールサインを名乗らずに無線で要求を伝えた。

「今すぐ、医療へりを超越しやがれ。」

爆風と共に儂く散った紫色の花弁と、地面に滴る紅色の血は一向に止まるはずがなかった。

36：エデン条約編：Are you Ready？

——「弾薬を確認しなさい。」

私は仲間にそう命令する。

「ひひ、今日のために良い装備を持ってきたんだ……。」

「あのスクワッドを処分することになるとはねえ……。」

ところで、私達はアリウス分校の督戦隊であるアリウスパニツシャーだ。私達はアリウススクワッドと同じように特別に選抜された部隊であり、逃亡者の処分をマダムから任されている。またその部隊の特性上、私達は彼女達を楽に処分するために新型の弾薬であるヘイローを破壊する弾薬が支給されている。

そして今回は1週間ほど前に、逃亡したアリウススクワッドメンバーを処分とロイヤルブラッドの奪還を目的とした聖戦である。どうやら敵はトリニティ自治区にある聖マリア病院に彼女達を搬送したらしく、そこが今回の標的となっている。

『アリウススクワッドを処分し、ロイヤルブラッドの奪還をしなさい。そして今回の事件で負傷している生徒達を楽にして差し上げましょう。』

マダムからはこう命令された。

そしてこの作戦を行うのに、いくつかの理由がある。

一つ目は、マダムの潜伏先の秘匿のため。マダムの潜伏先であるアリウス自治区は迷路であるカタコンベを突破しなければならぬ。しかしそのカタコンベの道筋を知っているのはサオリと私達ぐらいだ。

そのため未だに意識不明の重体であるサオリがキヴオトス派遣隊

などに教えようとする前に、処分する必要があった。

二つ目の理由は、マダムが執り行おうとしている儀式のために必要な材料の確保。マダム曰く、その儀式に必要な材料はロイヤルブラツドの血であり、そのためにアツコを生け捕りにして連れ戻して欲しいとのこと。

随分とやる事が多いが、私達にとってこれぐらいは何とも無い。

「もうすぐ着くよ。」

私は運転をしている子にそう伝えられると、ガスマスクを被る。そして、いくつものヘイローを破壊する爆弾が付けられている特製の自爆ベストを確認すると、起爆用のリモコンを右手に取った。

「あれを見て。沢山生徒がいるじゃ無いかあ…？」

「ひひ、楽しみだなあ。」

他の仲間たちはそう言いながら、武器の確認を終えた時ちょうど私達は目標の病院に辿り着いた。私達は後部ドアを開き、降車する。久しぶりに、トリニティ自治区に足を踏み入れた。

「行け行け!!」

「お楽しみの時間だあ!!」

仲間達が鼓舞する中、私達の目の前にいる群衆に目を付けた。

「ねえ、先生の見舞いのためにプリンを持ってきたんだけど——」

「早く退院して——」

そこで楽しそうに会話をしている彼女達の醜い笑顔を、消すことから私達の任務は始まった。

ve : Task Force

Blue Archi

on Neptune Spear——

——Operati

37：エデン条約編：Waterboarding

<調印式まで30日前>

ソフィア 中央情報局 CIA分析官

アメリカ合衆国・秘密施設

「はあっ、はあっ!!」
苦しい少女の喘ぎ声がコンクリート製の壁に反響して、施設内に響く。

「俺たちの国を襲った張本人……ベアトリーチェの居場所を教えろ。」

屈強な筋肉の上にタンクトップを着用している元陸軍所属の彼は、冷酷に彼女に向けてそう告げる。しかしながら、先程まで水責めを受けていた彼女は新鮮な空気を取り入れるために、呼吸を試みようとした。

「……息を吸う暇があったら教えろって言ってるだろ!？」

一向に答える様子がない彼女に対して、彼は怒鳴りつけると再び彼女の口に濡れた布を被せ、そこからちよつとずつ水を垂らした。これはCIAで考案された尋問方法だ。

この尋問は至って単純で、対象者が呼吸できないようにするものだ。濡れた布を口と耳元に被せられるだけで、随分呼吸がしにくくなる。そこで更に水を与えてやることで、全くもって息が出来なくなってしまう。この尋問を耐えた人間は私が知る限り誰もいない。念のために言及しておくが、これは立派な尋問であり拷問ではないということをおぼろげに欲しい。

そして尋問を行っている彼はそれを既に彼女達に対して、数十回も行っている。側から見れば、子供に対して拷問を行う凶悪な犯罪者に

違いない。

「ん」——「!!ん”ん”」——「!!」

数ヶ月前に、ニューヨークに現れたテロリストと同じ格好をしていた彼女らはキヴオトスで捕縛され、尋問の為に現在はアメリカに輸送された。どうやらキヴオトスでトリニティという学校に襲撃をしたらしく、その際の部隊から引き抜かれた数人が捕虜として扱われている。

そしてその捕虜数人を尋問に掛けた結果として、『ベアトリーチェ』という人物がアリウスという組織の司令官であるという情報まで掴めていた。

しかしそれでも彼女たちとのテロ戦争を終戦させることが出来ないため、捕虜解放の見通しは全く立っていない。

「し、死んじや——うから!!」

「吐く気にはなったか？最後にベアトリーチェを見たのはどこで、いつだ？」

彼は水を垂らすのを止める。それから伺ったが、望む返事は一切来る様子はない。しかし、それが彼の堪忍袋の緒を切らせてしまった。

「ふざけるな!!」

「し?」

彼は彼女の顔に右手で強い平手打ちを喰らわせた。もちろんその様子を遠くから見ていた私は、驚いたのと同時に流石に止めに入る。

「やめなさい、マイク。」

「…すまない。」

「どうやらあなたは一旦冷静になるべきようだね。ほら彼女の顔を見なさい。」

彼女の右頬には赤く染まっている平手打ちの跡が残っていた。流石、退役軍人といったところであろうか。力は一切衰えてなさそうだ。しかし、平手打ちが招いたことは彼女を気絶させてしまったことだ。

これでは尋問にならない。

「…目を覚ましたら… 私に伝えて。方法を変える。」

私はそう言い伝えると、コンクリートに覆われている薄暗い部屋から退出した。

<調印式まで28日前>

ソフィア 中央情報局 CIA分析官

アメリカ合衆国 某州・CIA秘密基地

CIAが保有する秘密基地の屋外では、私とマイクの二人が捕虜である彼女に食事と共にある試みをしていた。

「それで君は——俺たちに情報を教えてくれたんだ。そのおかげで沢山の命を救ったんだ。」

「……。」

「さあ、もっと食べたらどうだ？」

マイクは尋問を掛けている際の姿とは裏腹に、今度は優しく接していた。実はこの対応も予め決めておいたものであり、芝居だ。もちろん尋問を受けていた可哀そうな彼女は意識を失っていたため、先日のごとは覚えていないはずだ。

私たちはそれを利用して、彼女を騙すことを試みていた。ストーリーは単純明快。彼女が私達に対してテロ攻撃の詳細な計画を知らせてくれたことで、多くの人々の命を救ったこと。そのお礼に、御馳走を与えてあげる——という流れだ。

「先日はすまない…… だけど君のおかげで沢山の命を救えたんだ。これ以上の感謝はない。」

「…… はい。」

少女は顔を俯きながら、目の前にあるハンバーガーとフライドポテトの皿からハンバーガーを手に取り、大きな口を開いて咀嚼した。彼

女自身、この状況に困惑している中で、この食事は中々進まないだろう。しかしこれは私達にとつては、重要な機会である。

「俺はそのバーガーが好きでな…… 本当のお気に入りなんだ。キヴオトスから来た君も、きつと気に入ると思うぜ。」

「……。」

彼女は食べながらコクコクと頷いてくれたところで、彼は本題に入ることにした。

「さて、本当に申し訳ないのだが…… もっと俺達に情報を教えてくれないか？ そう…… 例えば君の組織について、とか……。」

「…… ベアトリーチェ。」

彼女は本来ならばアリウスの生徒会長ではないはずの名前をボソツと俯きながら呟いた。このまま上手くいけば潜伏先まで聞き出せそうな雰囲気だ。

「続けてくれ。」

「…… ティーパーティーのナギサに襲撃するように命令されたのはマダムで間違いありません。そしてこのアメリカ合衆国に襲撃をしたのも彼女の命令です……。」

「なるほど。そのマダムの居場所について教えてくれないか？」

マイクが彼女にそう質問すると、彼女は両手で持っていたハンバーガーを皿に置いて冷静に伝え始める。

「…… マダムはアリウス自治区にいます。実はトリニティ自治区の地下に——」

アリウス自治区という言葉はこの場にいた誰もが知らない地名であり、私たちの興味を強く引き付けたのだった。

< 調印式まで 21 日前 >

ソフィア 中央情報局 CIA 分析官

キヴオトス ウトナピシユティム空軍基地

トリニティを襲撃した小隊長である彼女から入手した情報を得て、私たちCIA職員もキヴオトスに入った。ニューヨーク製の核攻撃にも耐えうる分厚い防護壁に守られた転送装置の向こう側は、今まではアメリカ軍関係者のみしか立ち入りが許されていなかった。

しかしCIA主導による今回のベアトリーチエの潜伏先を割り出す作戦にあたり、私たちCIA職員も許可が下りたのだった。そして私たちがキヴオトスに来る前に、ブリーフィングがあった。

そのブリーフィングではキヴオトスは数多くの女子高校生がおり、ロボットや獣人が言葉を交わすことが可能な世界であるという説明を受けている。もちろん私たちの母国よりも、銃社会が形成されているということも知っている。

そんな風に対テロ戦争が盛んに行われていた2000年代の米軍兵士が真っ青になるであろう紛争地帯がキヴオトスである。さて、私たちは唯一の安全地帯であるウトナピシユティム空軍基地の敷地内でまず同施設を警備してもらっている彼らに案内してもらおう。

「どうも空軍警備隊の者です。これより指定の施設まで案内いたします。」

USAFと刻まれた腕章を左腕に、M4A1をスリング付きで携帯している彼が私たちCIA職員に向けてそう伝えると、私たちはついていく。移動の間、私は基地の外周に設置されている様々なオブジェクトを目に留めた。

長く連なる鉄条網に、高く積み重ねられたヘスコ防壁。そして複数の米軍兵士によって保護されている入場ゲートが存在していた。

「ここも、海外にある基地と同じ防備だな。」

元陸軍兵士でありイラク戦争などで派兵されたことがあるマイクはそう言った。そして彼は続けて。

「他の基地では自爆攻撃があったりしたが……ここでは流石に無いといいが……。」

基地に対しての自爆攻撃はアメリカ国外で発生することは少なくはない。しかし、いくらなんでも女子高生が多くいるこの世界で自爆攻撃をする物騒な子供なんていないだろうし、実行する気にもならないだろう。

私自身にそう言い聞かせているうちに、一つの施設に集められていた。その施設は、唯一キヴオトスに存在する米軍によって拘束された人々を収容するパルワン拘留所である。

パルワン拘留所では現在、アリウス分校に所属する生徒たちが集められている。そして囚人はティーパーティーを襲撃した部隊に構成されていた者たちである。

私たちCIAがここに来た理由は単純である。そう、情報収集だ。

「さあ、仕事を始めましょう。」

私の上司であるアビゲイル主任は、独房棟に繋がっている鉄製の扉の前で私たちCIA職人、数十人にそう伝えた。アビゲイル主任は三児の母親でありながら現場で働いている。そして彼女は来月に結婚5周年を迎えるそうで、私はそのパーティーに招待されることも分かっている。

「はい。奴の居場所を突き止めてやります。」

私は心に留めてあるテロ攻撃の首謀者に対する執念を抱きながら、尋問の準備に移った。

なぜなら私にだって、家族が居たのだったからあの日に起きたテロを忘れるはずがない。

「ソフィア、あなたはあのトリニティの生徒の尋問よ。」

アビゲイル主任がそう言いながら、尋問対象の個人情報や経歴を纏めたファイルを私に渡す。私の尋問対象の経歴はどうやら学園の生徒会に位置する役職であるティーパーティーに就いていたようだが、そのティーパーティー襲撃事件に加担していた生徒である。

私はそれらの情報を頭に叩き込みながら一人で、その生徒が収容されている独房へと向かった。

「……あれ〜？こんな所に看守以外の人があるんだ〜？」

独房に到着すると、彼女はやや陽気な雰囲気で言葉を交わす。もち

ろん私はCIA分析官として話を始めることにした。

「ええ、私の名前はソフィア。あなたとお話をしに来たのよ。」

「…。」

彼女は、黙ってこちらに鋭い目つきを浴びせてきたものの口元は笑っていた。